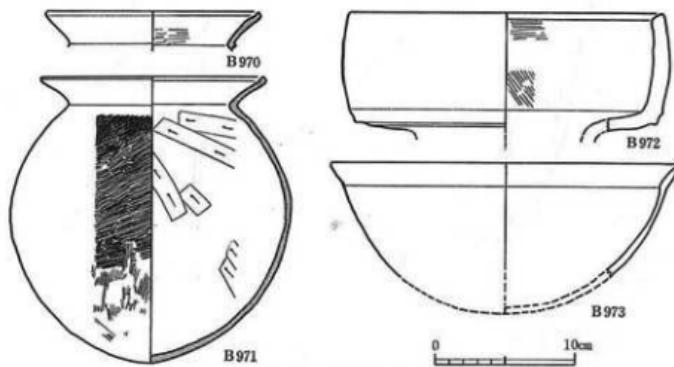


第193図 BS D 303遺物出土状態図



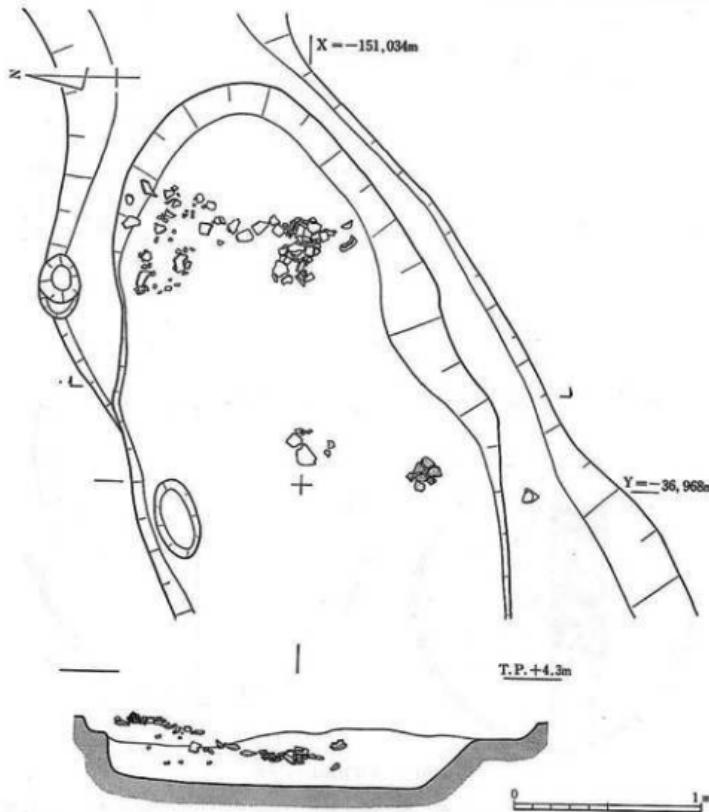
第194図 BS D 303出土土器

叩目を施し、肩部にはさらにその上から刷毛目を施す。体部下位は刷毛目のみを施し、体部内面は鋸削りを施す。

B972は二重口縁部の壺である。口縁部の2段目は内轉ぎみに立ち上り、端部は内傾して面をもつ。口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛目を施し調整する。B973は鉢である。口縁部は内側に肥厚し、端部は尖りぎみに丸くおさめる。内外面とも範磨き調整を施す。

B S D 304（付図13） Bトレンチ中央部北よりで検出した東西方向の溝である。東側はB S D 303に切られ、西側は調査区外に続く。幅0.3m、深さ0.1mを測り、黒灰色粘質土が堆積する。遺物は出土しない。

B S D 305（第195図） Bトレンチ中央部北よりで検出した東西方向溝であるが、土坑に近い形態を示す。東側は袋状に終り、西側は調査区外に続く。南北幅2.0m、深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘質土で、庄内式の新しい段階と考えられる土器が出土した。埋土の状況から2回の掘削が考えられる。なお、本溝は出土遺物から上層のB S K 304の下層部分でさった可能性がある。



第195図 B S D 305遺物出土状態図

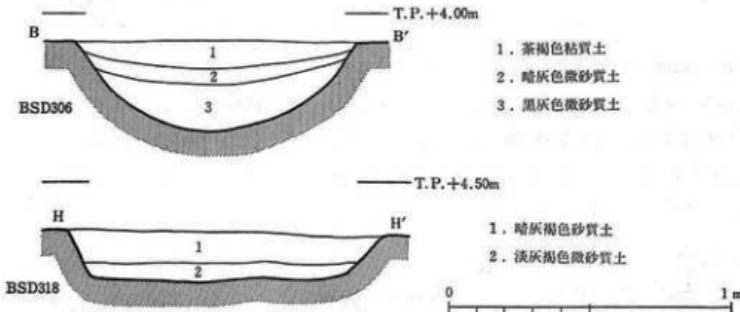
出土遺物

〔土器〕(第199図・B 974~977)

出土した土器の大半は壺である。B 974は口縁部が外上方に開き、端部がわずかに立ち上がる壺である。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は叩目、内面は鉢削りを施す。胎土より生駒西麓産と思われる。B 975はやや胴張りの壺で、口縁部は内轉ぎみに外上方に開き、端部は面をもつ。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は刷毛目、内面は鉢削りを施す。

B 976は尖底ぎみの丸底の小形の鉢である。底部から体部にかけてゆるやかにカーブを呈し、口縁部がわずかに外方に屈折する。口縁端部は丸くおさめ、鉢磨き及び鉢削り調整を施す。B 977はラッパ状に開く小形器台の脚部と思われる。4方向に外上方から内下方に円孔を穿つ。外面は鉢磨き調整を施す。

B S D 306 (第196図) 6 Bトレンチで検出した南東方向から北西方向に延びる溝である。北西側は調査区外に続くが、南東側は袋状に終る。上幅0.9m、下幅0.4m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は3層に分層でき、上から茶褐色粘質土、暗灰色微砂質土、黒灰色微砂質土が堆積している。遺物は、ほとんど出土しないが、下層の黒灰色微砂質土内から石製玉が出士している。



第196図 B S D 306・318土層断面図 (実測地点は付図13参照)

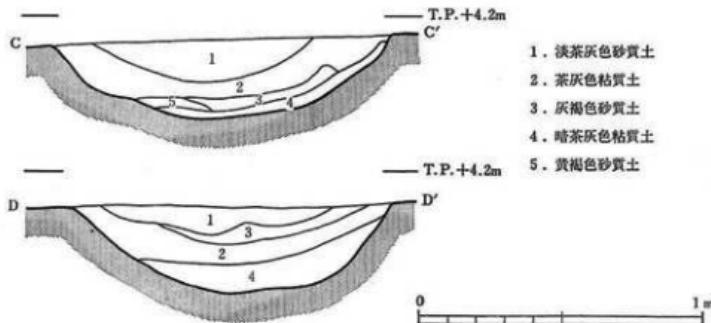
出土遺物

〔石器〕(第297図・B 1071)

卵形を呈する。長さ4.4cm、最大径3.5cmを測る。中央部に径0.6cmの貫通孔が施されている。全体によく研磨され、白色を呈する。材質は結晶質の石灰岩(大理石)で、吉野川上流で産出するものと考えられている。

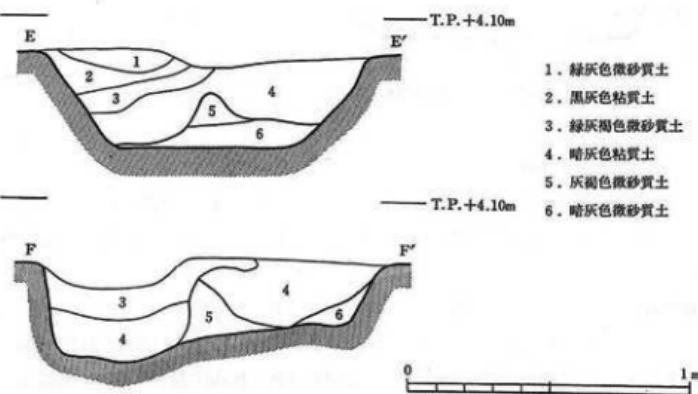
B S D 307・308 (付図13) 6 Bトレンチ南西側からBトレンチ中央部西よりで検出した南東方向から北西方向に伸びる溝である。その方向及び埋土の状況からB S D 307とB S D 308は一連の溝と考えられる。北西側は調査区外に延び、南東側はB S D 310に接続する。幅0.25m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は出土しない。

B S D309・310 (第197図) 7 B レンチ南東側から B レンチ中央部で検出した、ほぼ東西方向の溝である。埋土の状況及びその方向から B S D309と B S D310は一連の溝と思われる。上幅1.2~1.5m前後、下幅0.5~1.1m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は地点によって異なるが、4~5層に分層できる。遺物は土器の細片が少量出土している。西側でB S D308とB S D311が枝分れするが、B S D311はその3m南側で袋状に終る。なお西側調査区外でB S D312と合流する可能性がある。

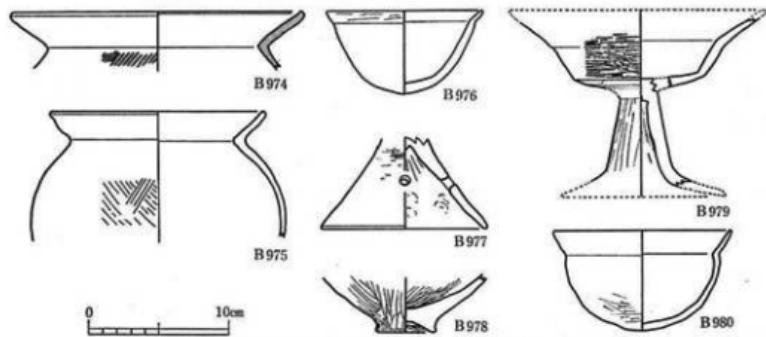


第197図 B S D310土層断面図（実測地点は付図13参照）

B S D312 (第198図) B レンチ中央部南より検出した南東方向から北西方向に延びる溝である。両端は調査区外に続くが、北西側は調査区外で B S D310と合流するかもしれない。上幅1.0~1.5m、下幅0.5~1.0m、深さ0.3mを測り、断面逆台形を呈する。溝の南側はテラス状に2段に掘られている部分がある。埋土は6層に分層でき、この状況より、二度の掘削が行なわれたようである。出土遺物は上層より土器と土錐が出土した。



第198図 B S D312土層断面図（実測地点は付図13参照）



第199図 B S D 305・312、B P 301出土土器

出土遺物

〔土器〕(第199図・B979・980)

出土遺物はあまり多くないが、2点を抽出する。B979は高杯である。杯部は2段に屈曲し、内外面笠磨き調整を施す。脚部は脚脛部が一度屈曲して開くものと思われるが端部を欠く。外面に笠削を施し、内面にはしづり目が認められる。なお、杯部外面に黒斑が認められる。

B980は鉢である。口径12.6cm、器高7.0cmを測る。体部は半球形を呈し、口縁部は内轉ぎみに外上方に開き、端部を尖りぎみにおさめる。口縁部の内外面は横ナデ、体部外面は笠削りを施す。

〔土製品〕(第297図・B1072)

棒状土錐が1点出土した(B1072)。長さ6.3cm、幅1.5cm、厚さ1.3cmを測り、両端に貫通孔を穿つ。

B S D 313 (付図13) Bトレンチの中央部南よりで検出した南東方向から北西方向に延びる溝である。B S D 312の南側をほぼ平行に走り、両端は調査区外に延びる。幅0.2~0.4m、深さ0.25m、断面V字形を呈する。埋土は黒灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

B S D 314 (付図13) Bトレンチの中央部南より、B S D 313の南側で検出した溝であるが、大半が上層遺構によって切られている。幅0.3m前後、深さ0.2mを測り、黒灰色粘質土が堆積する。遺物は全く出土しない。

B P 301・302 (付図13) B P 301はBトレンチ中央部で検出した。径0.15mの小ピットである。深さは0.2mで黒紫褐色粘質土が堆積し、第199図・B978の製塙土器の底部かと思われる土器片が出土している。また、B P 302は6Bトレンチ北側で検出した径0.3m前後の柱穴と思われるピットである。埋土は3層に分層でき、底部から礎板が出土した。(岡木)

(3) C地区

包含層

弥生時代中期後半遺構面の0.1~0.15m上方で庄内式の遺構面が検出された。遺構が密集する範囲は前時期と重複しており、C N R 202が形成した微高地上に立地する。包含層は暗黄褐色細

砂層及び暗黄灰色シルト層で構成されていた。この時期の遺構は出土遺物（生駒西麓産庄内式甕の有無及び型式学的な分析）と遺構覆土の状況（調査区中央部に砂で埋没する遺構があり、これらは層位的に古い）及び切り合い関係から大きく二時期に分けられるが、包含層は層位的に分離することが難しい。

出土遺物

〔土器〕(第200～203図、付図34、第4表、図版159～164・175)

ここでは比較的残りの良いものを中心に、各期の器種について任意に抽出した。またCトレンチについては竪穴住居跡が検出されているにも拘らず、竪穴住居跡覆土中から出土した遺物が少なかった。そこで竪穴住居跡及びその周辺遺構について時期を決定する際の判断材料として、包含層中出土の実測可能な土器を提示した。

各器種の分類（以下、器種分類は第Ⅳ章第5節の分類に従う）と出土地区については、以下のとおりである。

壺B₁類 C108 (Cトレンチ35区)、C109 (7Cトレンチ)、C141 (4Cトレンチ)、C145 (4Cトレンチ)。

壺F₁類 C138 (4Cトレンチ)、C139 (4Cトレンチ)、C140 (4Cトレンチ)。

瓶 C111 (7Cトレンチ)。

甕A₁類 C112 (Cトレンチ22区)、C123 (Cトレンチ27・29区)、C124 (Cトレンチ27・29区)、C125 (Cトレンチ31区)、C127 (Cトレンチ19区)、C128 (Cトレンチ28区)、C129 (Cトレンチ34区)、C130 (Cトレンチ27・29区)。

甕A₂類 C126 (Cトレンチ27・29区)。

甕D類 C144 (4Cトレンチ)。

甕E類 C131 (7Cトレンチ)。

甕G₁類 C115 (Cトレンチ31区)、C116 (4Cトレンチ)、C117 (4Cトレンチ)、C118 (4Cトレンチ)、C119 (4Cトレンチ)、C120 (Cトレンチ35区)、C122 (Cトレンチ44区)、C143 (4Cトレンチ)。

甕G₂類 C121 (Cトレンチ2区)。

鉢A類 C085 (5Cトレンチ)、C086 (Cトレンチ26区)、C087 (Cトレンチ41区)。

台付鉢 C089 ⁽¹⁾ (Cトレンチ45区)、C090 ⁽²⁾ (7Cトレンチ)。

大形片口付鉢 C107 (Cトレンチ27・29区)。

器台A類 C092 (Cトレンチ43区)、C093 (Cトレンチ44区)、C094 (Cトレンチ24区)、C095 (Cトレンチ24区)、C096 (Cトレンチ27・29区)、C097 (Cトレンチ34区)、C098 (Cトレンチ24区)、C132 (4Cトレンチ)、C135 (4Cトレンチ)。

器台D類 C091 (Cトレンチ24区)。

高杯A類 C099 (Cトレンチ44区)、C101 (Cトレンチ22区)、C102 (Cトレンチ39区)。

高杯B類 C100 (7Cトレンチ)、C103 (5Cトレンチ)。

高杯A・B類脚柱部 C136 (4Cトレンチ)、C137 (4Cトレンチ)。

高杯D類 C104 (Cトレンチ35区)、C105 (Cトレンチ31区)、C106 (Cトレンチ47区)、C134 (4Cトレンチ)。

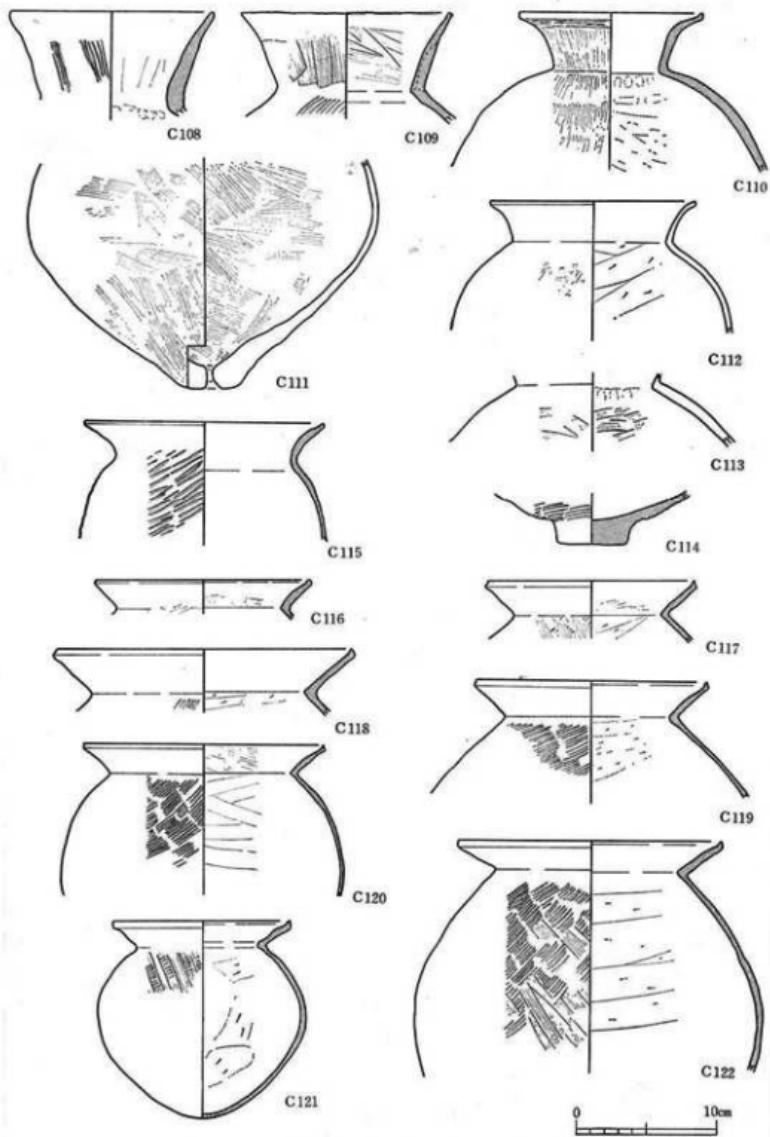
各土器の時期については、出土地区周辺から検出された遺構等との関係を考慮し、本書第Ⅳ章第5節で展開する土器の一括関係を重視した型式学的検討の結果に基づいている。但しここに提示する時期区分はあくまでも試案であり、今後本報告書作成に伴う整理作業の中で検討を深めて行く必要があろう。第4表にまとめて記載した。また包含層出土土器の中で特に注目すべきものとして、C091 (Ⅳ期の器台D類)がある。この器台はやや小形であるが、形態的には山陰地方等に多く分布する所謂鼓形器台と呼べるものであろう。胎土から見て生駒西麓で模倣され、本遺跡にもたらされたと思われる。(渡辺)

註(1) 台付壺の脚台部になる可能性もある。

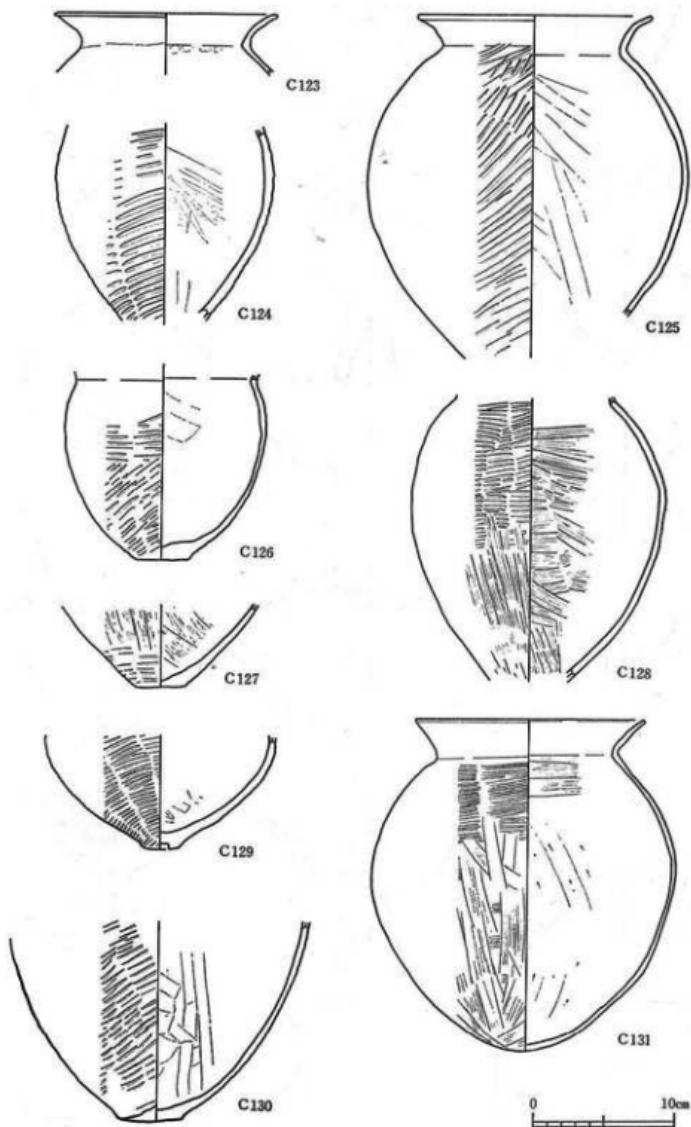
(2) 手捏の小形高杯と呼べるものかもしれない。

器種 時期	壺			甕						鉢A	台付 鉢	大形 片口 鉢	器台		高 杯		
	B ₁	F ₁	G	A ₁	A ₂	D	E	G ₁	G ₂				A	D	A	B	D
	C108	C109		C124				C115									
I				C125													
				C127													
				C128													
II				C123													
				C129	C126												
				C130													
III			C110	C111				C111			C085	C086	C092				
											C087	C090	C093				
IV	C141	C145	C142							C116							
										C117							
										C118	C121						
										C119			C104	C095	C099	C105	
										C120			C096	C091	C101	C106	
										C122			C107	C105	C102	C108	C134
V		C138	C139	C140				C144		C143							

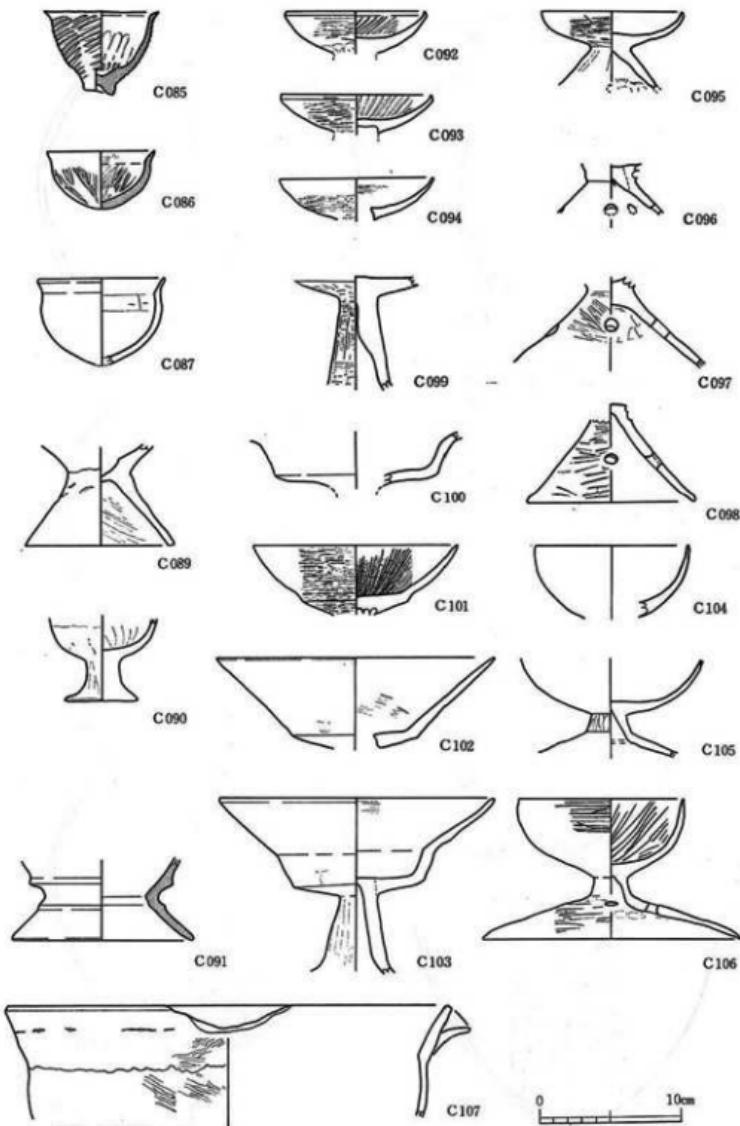
第4表 C地区包含層出土土器の器種別時期分類表



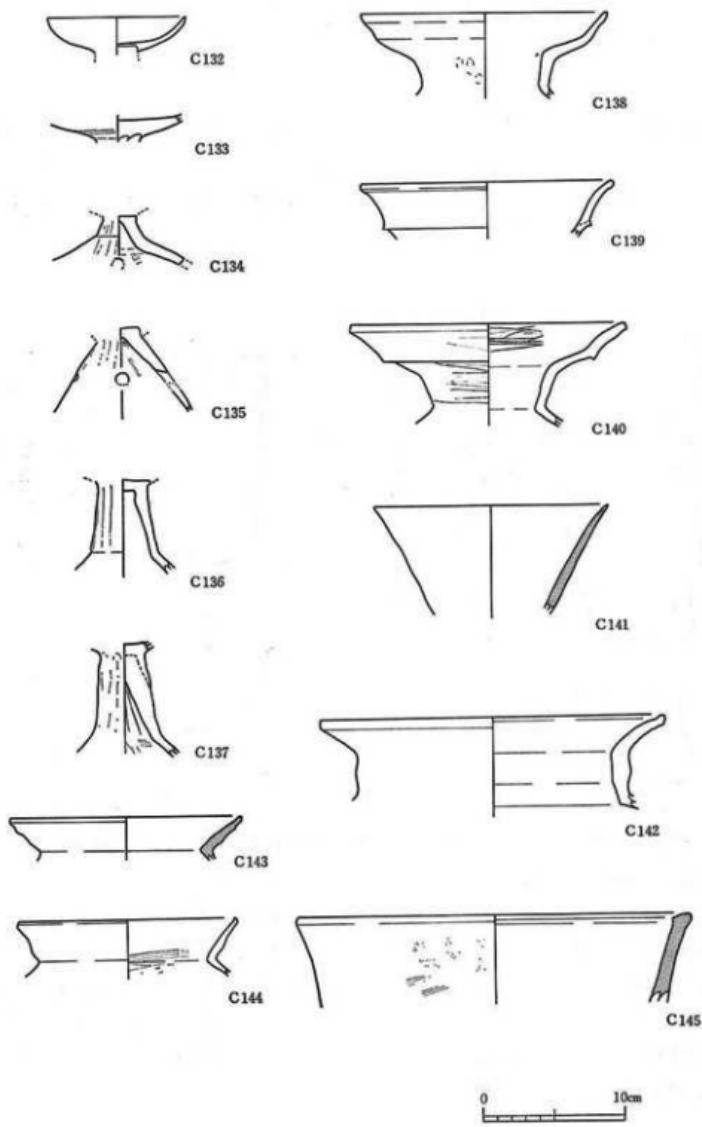
第200図 C地区古墳時代前期(庄内式)包含層出土土器(1)



第201図 C地区古墳時代前期(庄内式)包含層出土土器(2)



第202図 C地区古墳時代前期(庄内式)包含出土土器(3)

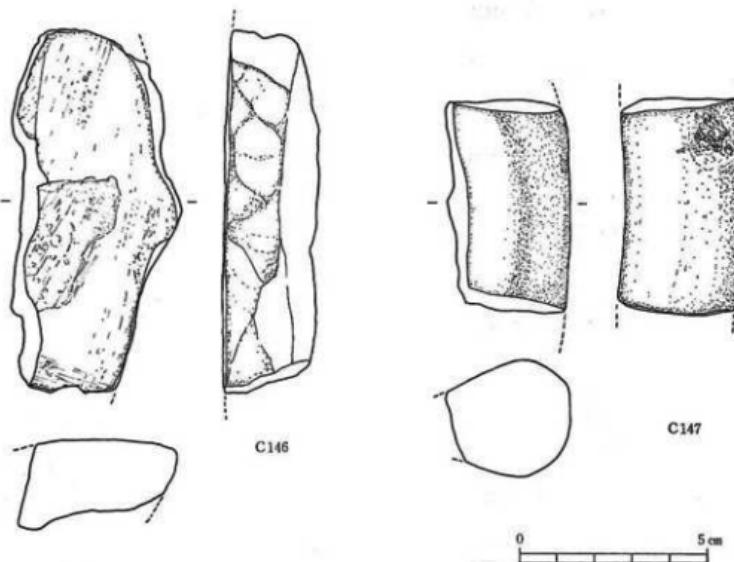


第203図 4 Cトレーン古墳時代前期(庄内式)包含層出土土器

〔石器〕(第204図、図版246)

砥石 (C146) 大きく折損しており、一面にのみ研磨された面を有している。中央部には敲打痕が認められ、後に台石として転用されたものであろう。比較的硬質で、石理も細かい。現存長9.87cm、現存幅4.60cm、厚さ2.50cm、重さ154.1g。

磨石 (C147) 原形は定かでないものの、全体に内轉する傾向が認められる扁平な磨石である。形状を敢えて推定すれば、大形の梢円もしくは円形と考えられ、中央部全体に凹面を有していたと思われる。石材には硬砂岩を用いており、現存長5.83cm、現存幅3.33cm、厚さ3.17cm、重さ109.6gをはかる。(進藤)

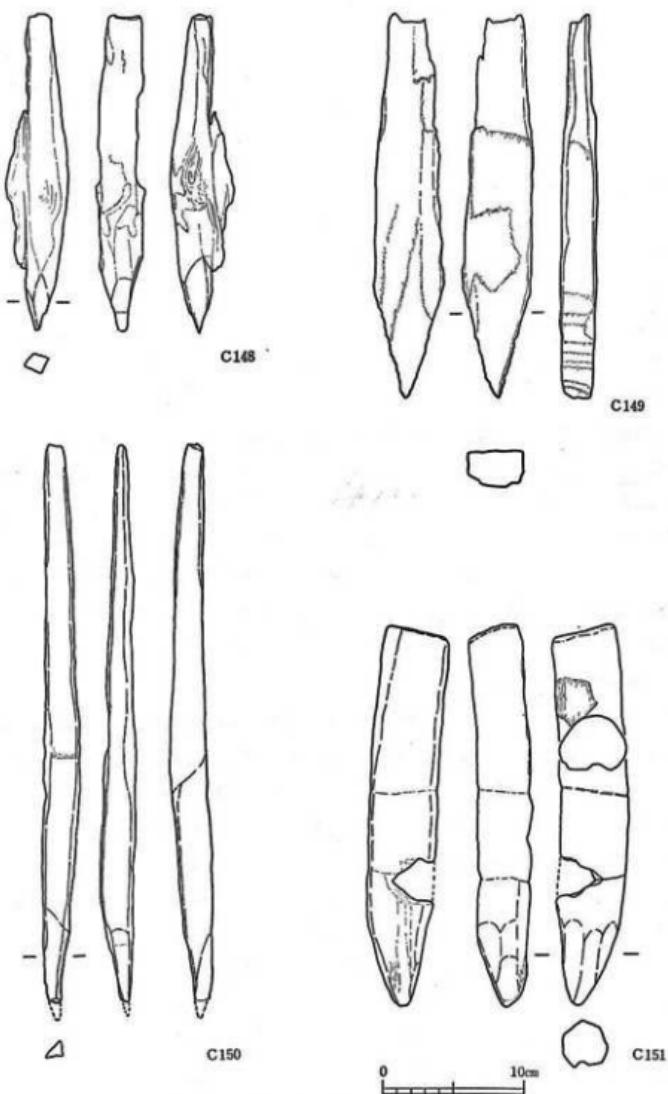


第204図 C地区古墳時代前期(庄内式)石器(C146・包含層出土、C147・CSD320出土)

〔木器〕(第205図、図版254)

包含層中からは数本の杭が検出された。ここでは代表的な4点を抽出して説明したい。

C148～C150はCトレンチ29区から近接して出土しており、溝に伴って使用されていた可能性がある。C148の樹種はモミで、やや彎曲した細めの枝部分を使用していた。C149はスギの縦木取り柵目材を使用している。厚みがある板状の杭で、先端部は木端をカットして作り出していた。C150の樹種はスギであり、やや細めの材を使用している。C151はCトレンチ32区から出土している。やや太めの杭で、樹種はムクロジであった。



第205図 C地区古墳時代前期(庄内式)包含層出土木器

遺構

包含層部分すでに述べたように、C地区の遺構は埋没状況と切り合い関係及び出土遺物によって大きく二時期に分けることが可能である。但し層位的に面として捉えることはできなかった。仮に古い方を庄内式第1期新しい方を庄内式第2期と呼ぶことにする。庄内式第1期は土器の時期区分（以下時期区分は本書第V章第5節で述べる時期に従う。）で言えばI～II期までであり、庄内式第2期はIII～IV期までに相当する。

庄内式第1期の遺構（付図18）

この時期に含まれる代表的な遺構には、溝が8条と土坑が1基ある。調査区中央部から南側にかけて遺構が検出されており、北側では遺構が認められなかった。北側部分は畦畔等が検出されていないために断言できないが、花粉分析結果に鑑れば水田等の耕作地が存在する可能性がある。

C S D 301（第206図、図版63） 調査区ほぼ中央部で検出された南東から北西方向へ走る溝である。溝の幅は約0.6m、検出面から溝の底まで約0.2mあり、淡黄灰色微砂によって埋まっていた。洪水等によって一時に埋没したように思われる。覆土中からは遺物は検出されなかった。

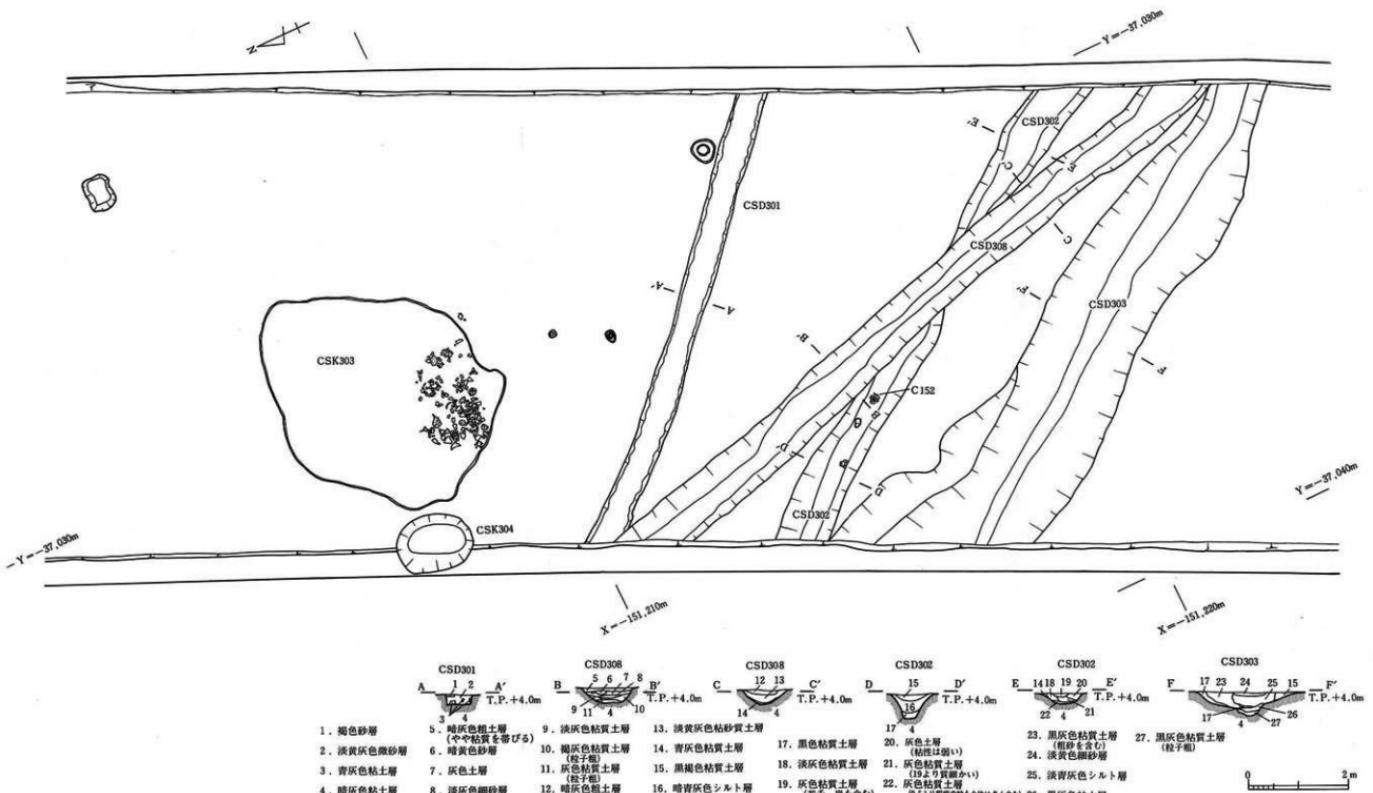
C S D 302（第206図、図版63） C S D 301の西側約3.0mで検出された。南東から北西方向へ走る溝で、C S D 301よりやや東側に向いている。溝の幅は約1.0mあり、検出面から底面まで約0.45mあった。溝底面のレベルから見て、水は南東から北西へ流れたと考えられる。溝の断面はU字形をしており、覆土は粘土とシルトによって構成されていた。C S D 301で見られた、微砂の堆積は認められない。溝の北東部で底面に近い所から遺物がまとまって出土しているが、出土量は少ない方であった。出土遺物から判断して、畿内第V様式末に相当する溝と思われる。

出土遺物

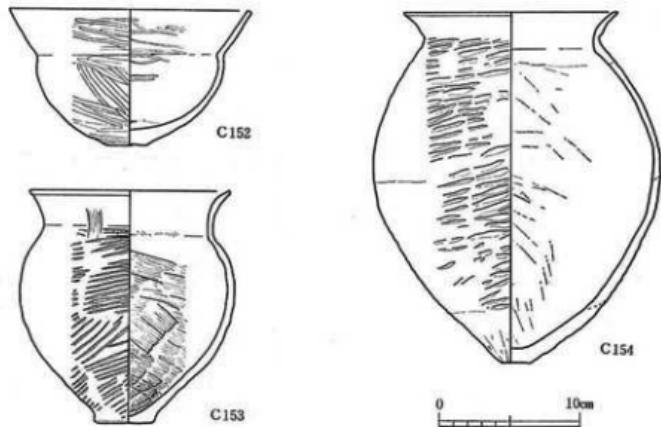
〔土器〕（第207図、図版165）

鉢及び壺類が出土しており、ここでは残りの良い3点について説明したい。先述の分類に従えば鉢A類（C152）、壺A₂類（C153）、壺B類（C154）に含まれるものである。いずれも胎土は類似しており、色調も明褐色ないし明赤褐色を呈す。在地で製作された可能性が大きい。C152はやや大きめの鉢であり、内外面とも窓磨きが全体に施されていた。C153は体部内面に刷毛目調整を施しており、体部外面には荒い叩き目が観察される。全体のプロポーション及び調整の面から見れば古い要素を持った小形壺である。C154は体部外面に荒い叩きを施す点でC153と共にしているが、底部は窓削りを加えており、やや尖りぎみの小さな平底を作り出していた。内面の調整は、体部から底部にかけて窓ナデが施されている。C153に較べてやや新しい特徴をもっているが、出土状態から判断して共伴するものであった。遺構が溝である点を考慮すれば時間的な幅を想定する必要もあるが、調査時の所見からは比較的短時期に使用された溝という印象を受けた。壺G類（生駒西麓庄内式壺）は検出されておらず、その点からも畿内第V様式末期に位置付けた方が良いものであろう。土器による時期区分のI期に相当する。

C S D 303（第206・208図、図版63～65） C S D 302の西側に近接してほぼ並行に走る溝であ



第206図 Cトレンチ中央部古墳時代前期(庄内式)遺構平面図及び土層断面図



第207図 C S D302出土土器

り、5Cトレンチ北東部にかけて検出される。溝の幅は1.2~3.0mあり、検出面から溝底面まで約0.45mあった。水は底面の勾配から見て南東から北西方向に流れていると考えられる。溝の断面は緩やかなU字形を呈し、下層にはCS D302の覆土とはほぼ類似する黒色粘土層が堆積していた。また上層では、CS D301覆土と同様な淡黄色細砂層が認められる。このことからCS D301と同時期に埋没することが明らかであり、CS D302と一時期併存していた可能性もある。しかし覆土からはほとんど遺物が検出されておらず、CS D302との併存を証明することは難しい。

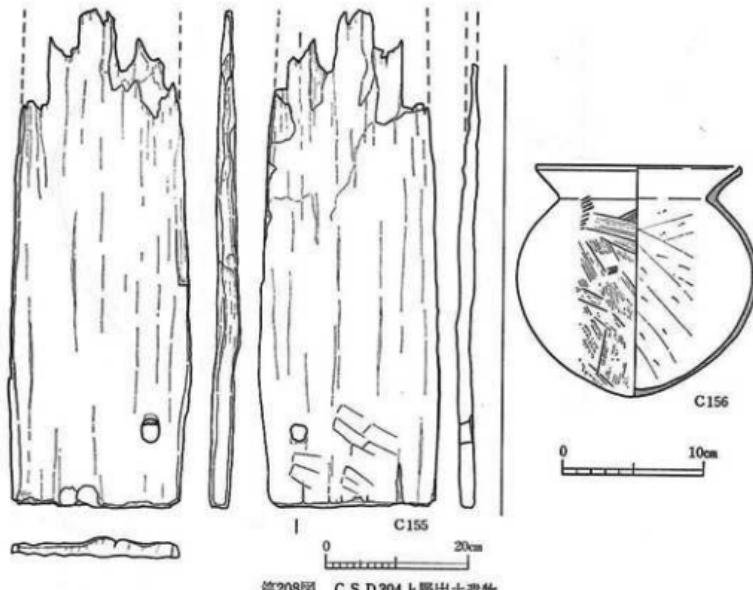
C S D304 (第209図、図版64) 5Cトレンチ北東部で検出された、CS D303の東側に連結する溝である。ほぼ東西方向に走っており、東側部分がやや広がっていた。幅は0.8~1.5mあり、検出面から溝底面までの深さは約0.8mある。断面U字形の溝で、水は底面の勾配から判断して東から西へ流れてCS D303に合流していたようである。この溝もCS D303と同様に、細砂層によって埋まっていた。遺物は上層の最終堆積と思われる部分から出土しており、下層にはほとんど含まれていない。

出土遺物

板状の木製品とほぼ完形になる甕が検出された。いずれも最終堆積と思われる土層からの出土であり、溝の埋没する過程で流入したものであろう。

〔土器〕(第208図、図版167)

C156はⅣ期の甕G₂類に相当すると思われる。生駒西麓産の土器であり、表面の残りが非常に良好であった。外面の調整は口縁部から頸部にかけて横方向のナデが加えられており、先に口縁部、次に頸部の順で施している。そのため口縁部中程に稜が観察される。また、口縁端部は、やや上方に拡張して端面をもつ。体部から底部にかけては細い叩き目を施し、その上から刷毛目を



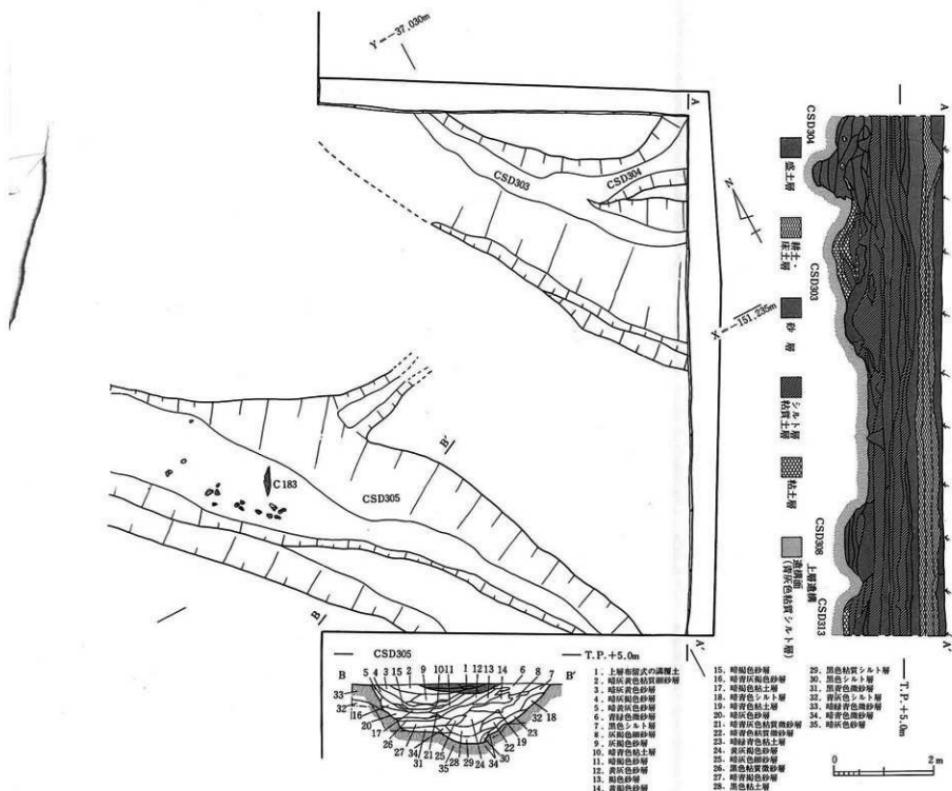
第208図 C S D304上層出土遺物

かけていた。内面は口縁部横方向のナデ、頭部から底部にかけて箝削りが施してある。溝の營まれた時期と比較すれば、新しいものであった。

〔板状木製品〕(第208図、図版255)

欠損している方を上に向かって状態で、板状の木製品が検出された。樹種はヒノキの縦木取り柵目材である。幅約29cm、現存する長さ約71cm、厚さ約3cmであった。比較的厚手であり、片面には工具による削り痕が観察される。節穴が1箇所で認められた。

C S D305 (第209・227図、付図18、図版64~66) C S D303の東側約4mで検出された。南東から北西方向へ走る溝である。幅は3~4m前後を測り、検出面から溝底面までは0.8~1.2mであった。断面は逆台形を呈し、覆土はC S D301・303・304と類似する砂層と、シルト層によって構成されている。このことから、常時水が流れている溝と思われ埋没する時期も前述の溝とはほぼ同じと言えよう。溝底面のレベルから見て、水は北西から南東方向へ流れていたと考えられる。5Cトレンチと6Cトレンチ部分でC S D305に連結する溝が確認された。5Cトレンチ側では、C S D305の東肩からほぼ東方向へ延びる幅約0.9mの溝が存在する。残念ながらC S D308及びC S D313によって切られており一部分しか検出できなかった。この溝は底面の勾配から見て、水が東側からC S D305に流れ込んでいたようである。また6Cトレンチ側では、C S D306がC S D305の西肩に接続していた。詳細はC S D306の部分で触ることにするが、この溝の場合も同様に西側からC S D305に水が流れ込んでいる。



第209図 CSD303・304・305・308・313平面図及び土層断面図

C S D 305は、地形の傾斜（北側が低くなっている）に逆行する流れをもち、幅、深さの点でも他の溝に比較して規模が大きい。また連結する溝から集水機能を有する点等を考慮すれば、幹線水路と呼べるものであろう。覆土中の遺物から判断して、土器による時期区分のⅠ期～Ⅲ期にかけて営まれた溝である。

出土遺物

〔土器〕（第210・211・240図、図版167～170）

溝の北西部から多く検出されており、ここでは現存状態の良好な資料を任意に抽出して提示した。鉢、壺、甕、器台、高杯等の器種があり、土器による時期区分のⅠ期～Ⅲ期にかけてのもののが認められる。また溝の北西部から、溝底にⅢ期の土器が並んだような状態で検出された。

各器種の分類と時期については、以下のとおりである。

鉢A類Ⅱ期（C158）、鉢B類Ⅱ期（C157）、鉢C類Ⅱ期（C165、C166、C167）、台付鉢Ⅱ期（C164）・Ⅲ期（C269）、大形鉢Ⅲ期（C181）、器台A類Ⅱ期（C162）、高杯D類Ⅱ期（C159、C161、C182）・Ⅲ期（C160）、壺B類Ⅱ期（C170）・Ⅲ期（C171）、壺B₂類Ⅱ期（C174）、壺G類Ⅰ期（C172）、台付甕Ⅰ期（C163）、甕A類Ⅰ期（C178）、甕A₂類Ⅰ期（C176）、甕G₁類Ⅰ期（C180）・Ⅲ期（C168、C177）、甕G₂類Ⅲ期（C179）。

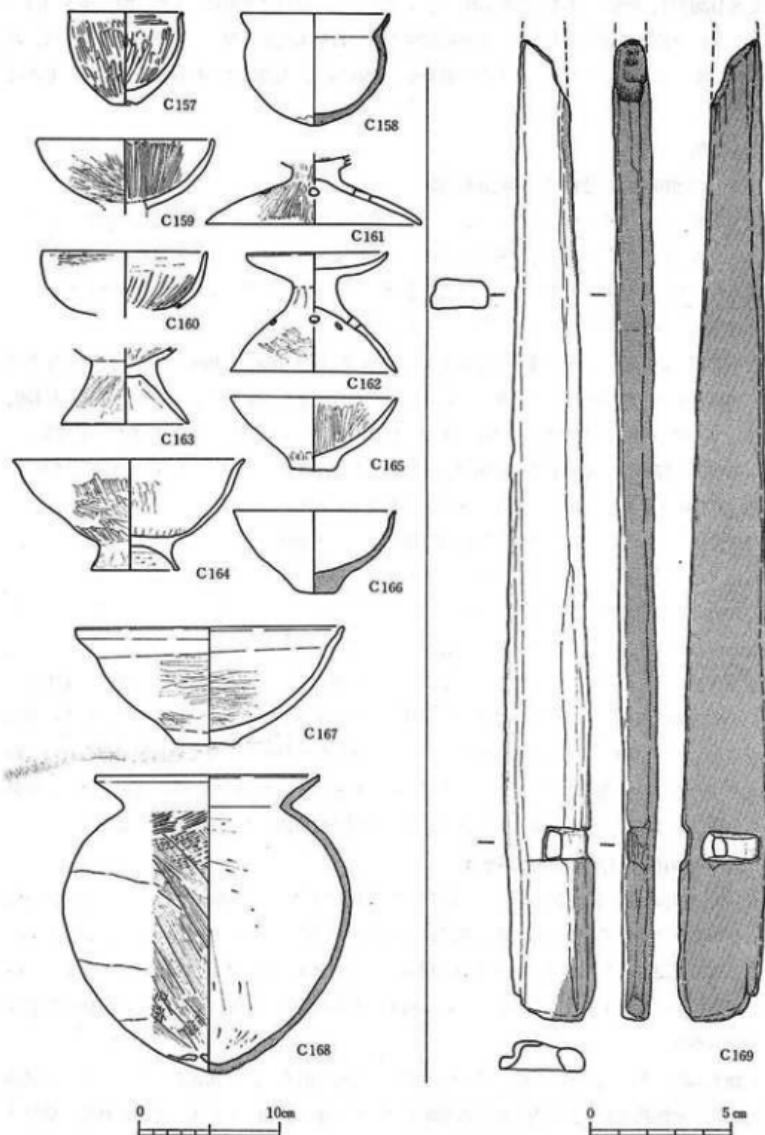
特に注目すべき土器としては、C163とC172がある。C163はⅠ期の台付甕脚台部になると思われる。C地区では台付甕の出土は極めて少なく、その面から見ても貴重な資料と言えよう。外側の調整は縦方向の刷毛目であり、内面は横方向の刷毛目を施していた。また脚台部端部は内外面とも横方向のナデを加えている。体部底面には「クモの巣」状の刷毛目が施されていた。胎土は明褐色を呈し、含まれている粒子の特徴から見て在地で作られたものようである。C172はⅠ期の広口壺口縁部破片であり、C地区におけるこの時期の貴重な資料と言えよう。胎土は赤褐色を呈し、「くさり磯」と長石粒が観察される。このような特徴から見て他地域で作られたものようである。口縁端部には鋸齒状の刻み目が施されており、外面は口縁部横方向のナデ、頭部から体部にかけて縦方向の範磨きを加えていた。内面は横方向のナデ調整を施している。

〔木器〕（第210・211図、図版253・254）

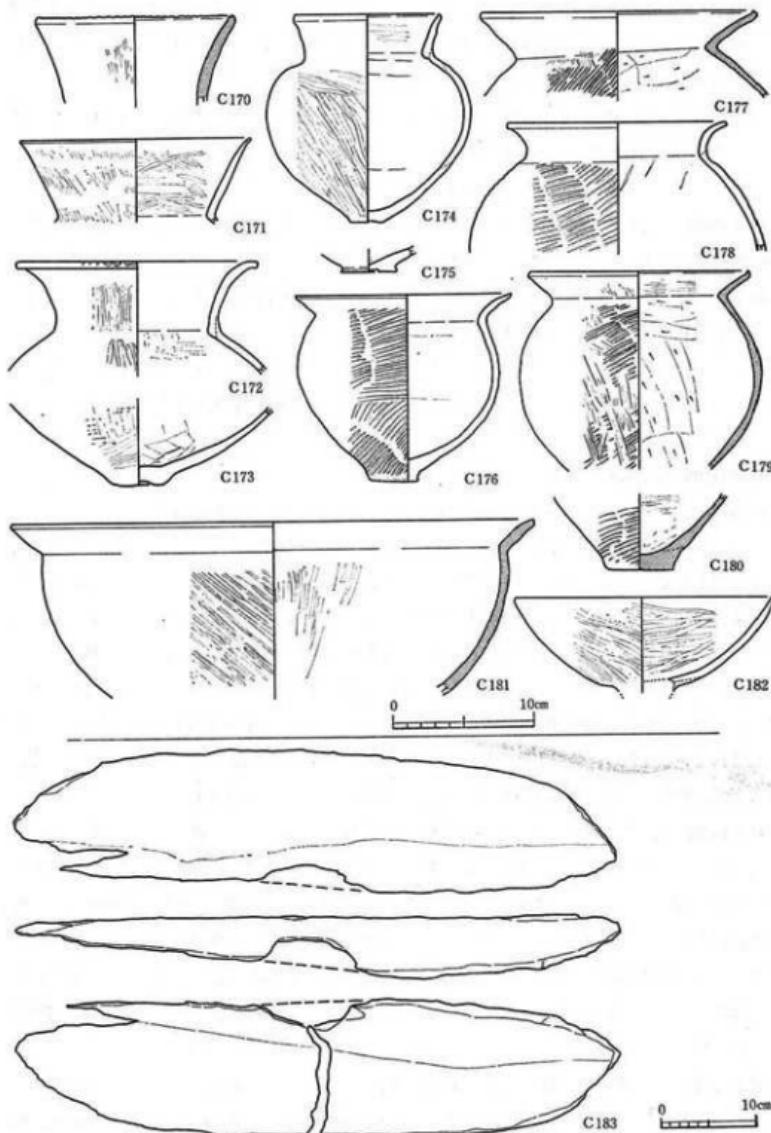
C169は細身の板状木製品で、片面に焼け焦げが観察された。一方の幅がやや狭くなってしまっており、その先端部は欠損している。幅の広い方には両面から彫り込んで穿たれた孔があり、紐状のもので括る際に使用された孔ではなかろうか。樹種はコウヤマキで、縦木取りの柵目材を使っている。用途については不明であるが、おそらく同種のものがいくつか集まって一つの機能を有するものであろう。

C183は溝に対して、ほぼ直角に置かれたような状態で出土した。断面が「く」の字状に屈曲した板状の木製品であり、出土状態から判断して一種の堰に使用されたものと思われる。樹種はモミであり、周縁部は欠損していた。

C S D 306（第227図、図版66） 6 CトレンチでC S D 305の西脇に接続する。ほぼ東西方向の



第210圖 C S D 305出土遺物(1)



第211図 CS D 305出土遺物(2)

溝を検出した。幅は0.8~1.3mであり、検出面から溝底面までの深さは平均約0.4mを測る。断面はU字形を呈し、溝底面の勾配から見て水は西から C S D305の方へ流れ込んでいたと思われる。C S D305と接する部分では、深くなつておらず底面の勾配も急であった。覆土はシルト層と砂層の互層によって構成されており、當時水が流れていたようである。この溝からは、あまり遺物が出土していない。幹線水路（C S D305）に水を流すための溝と思われ、排水溝のような機能が想定できよう。時期的には、C S D305と同時期である。

C S D307 (第227図、図版66) 6Cトレント西端で検出された溝である。C S D306及びC S D314・315等によって切られており、それらに比べて先行する時期の溝である。北側で大きく西に曲ってはいるが、ほぼ南北方向に走る溝であった。幅は1~1.5mであり、検出面から溝底面までは平均0.2mを測る。断面はU字形を呈するが北側で浅くなり、痕跡程度しか確認できなかつた。このため水は北から南へ流れたと思われる。覆土は黒色粘土及びシルト層によって構成されており、中から土器の細片等が若干出土している。溝の性格については不明であるが、他の溝に比較してかなり浅めであった。

C S D308 (第206・222図、付図18、図版63~65) 調査区中央部で検出された、ほぼ南北方向に走る溝である。C S D301・302・303を切って作られており、これらの溝と比較して後出のものと言える。またC S D313がこの溝の西側に接してほぼ重なるように、後で作られていた。幅は平均約1.5mであり、検出面から溝底面までは平均約0.6mを測る。溝底面の勾配から判断して、水は南から北へ向って流れていると思われる。溝断面はU字形を呈し、東肩の部分では垂直に掘り込まれる箇所が観察された。覆土は暗青灰色の微砂、シルト、粘土によって構成されており、自然木片及び土器片等が若干出土している。遺物の出土量は少なかった。覆土の状態から見て、緩やかながらも水が當時流れている溝と思われる。この後C S D313がほぼ同じ部分に掘り込まれている点から、幹線水路的な機能を想定したい。出土遺物及び遺構の切り合い関係等から考えて、土器による時期区分のⅡ期~Ⅲ期にかけての溝ではなかろうか。

C S D309 (付図18、図版68) C S D305の西側約11mで検出された溝である。西側でやや北方向に曲っているが、ほぼ東西方向に走る溝であった。東側部分は、後世の遺構によって壊乱を受けしており不明である。幅約3mであり、検出面から溝底面までの深さは0.1~0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、やや浅めの溝であった。溝底面の勾配から見て、水は西から東へ流れていると思われる。C S D305同様地形に逆った流れをもつ。覆土はシルト層と微砂の互層であり、中からはあまり遺物の検出はされなかつた。遺構検出面の状態及び層位的な関係から、C S D317に先行する時期の溝である。

C S D310 (付図18、図版68) C S D309の西側約2mで検出された溝である。北西から南東方向に走る断面逆台形を呈する溝で、北西部はC S D317によって切られていた。幅約2m、検出面から溝底面までは平均0.2mであり、底面のレベルから見て水は南東から北西方向に流れているようである。覆土はシルトと粘土の互層で構成されており、土器片が若干出土している。覆

土の状況から判断して、水の流れはかなり緩やかであったと思われる。遺構の切り合ひ関係から見て、明らかに C S D317 に先行する時期の溝である。

C S K301 (第212図、付図18、図版67) C S D310 の西側に接して検出された土坑であり、C S D310 を切って掘り込まれている。北西から南東方向に長軸をもつ梢円形を呈し、長軸約2.55m、短軸約1.9m あった。検出面から土坑底面までは約0.1m あり、浅めの土坑と言える。実際の土坑掘り込み面はもっと上層にあった可能性が大きい。土坑内からは土器がまとまって出土しているが、土坑底面から浮いた状態で検出された。土坑内から検出された土器は復原するとは完形になるものが多く、出土状態から見て土坑内に置かれていたと思われる。近接する C S D309 等の溝と関係して、水の祭祀に使用された土坑ではなかろうか。土器の時期から見てⅠ期に属する土坑である。

出土遺物

〔土器〕(第213図、図版171)

この土坑からは、個体判別可能な土器が30 個体分出土した。器種別の内訳は、壺6点、甕16点、高杯4点、片口鉢3点、手焙形土器1点である。甕の点数が他の器種と比較して多い。また生駒西麓産の庄内式甕を1点も含んでおらず、ほとんどの土器が胎土から見て在地産のようであった。ここでは代表的な8点を選んで提示した。各器種の分類は以下のとおりである。

大形片口鉢 (C191)、高杯A類 (C189・C190)、手焙形土器 (C188)、壺B₁類 (C184)、甕A₁類 (C185・C186・C187)。

出土状態から判断して、極めて同時性の強い一括資料であると考えられる。先述したように生駒西麓産の庄内式甕を伴なっていない点を考慮すれば、時期的には畿内第Ⅶ様式末に位置付けられよう。本遺跡におけるⅠ期土器の型式学的な検討を加える際の基準資料と言える。

C S K308 (付図18) 7 C トレンチ西側のC S D320下層から検出された土坑である。南北側は調査区外にあたり、全体の形状を描むことができなかった。梢円形を呈すると推定され、検出面から土坑底面までは約0.35m ある。覆土は黒褐色粘土によって構成されており、内から甕類を中心とした多量の土器が検出された。但し上層はC S D320下層部分と重複するため、C S D320 に属する遺物の混入が考えられる。出土した遺物から判断して、土器による時期区分のⅡ期に相当する土坑であろう。性格については、全体が検出されていないため推測の域を出るものではないが、おそらく廃棄用の土坑と思われる。

出土遺物

〔土器〕(第214図、図版182)

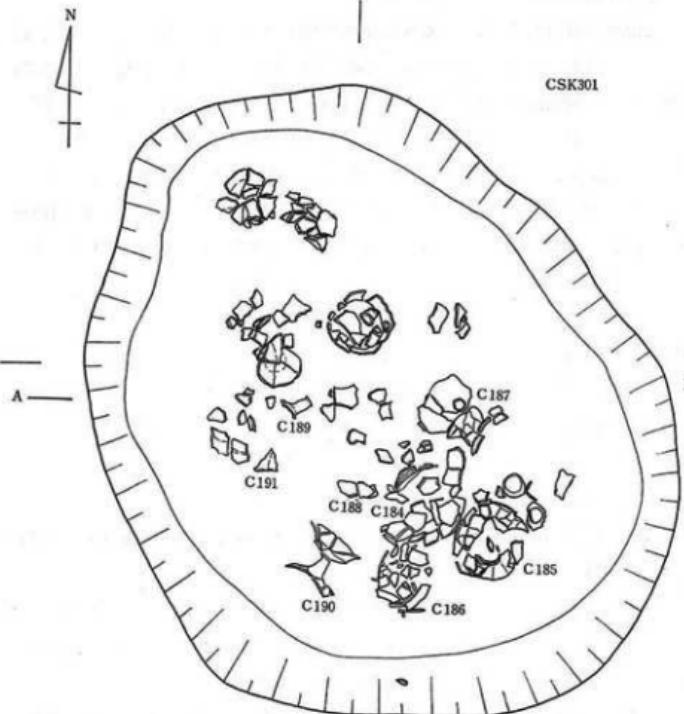
ここでは比較的完形に近い甕5点を任意に抽出して提示した。器種分類から言えれば、甕A₁類 (C281・C283・C285・C286) と甕A₂類 (C280) である。甕A₁類で口縁部から底部まで残存しているC283について特徴を述べておきたい。外面の調整は、口縁部横方向のナデ、体部には粗い右上がりの叩き目を施している。底部は鋤状の工具で削り取るようにして、窪みを作り出

N

CSK301

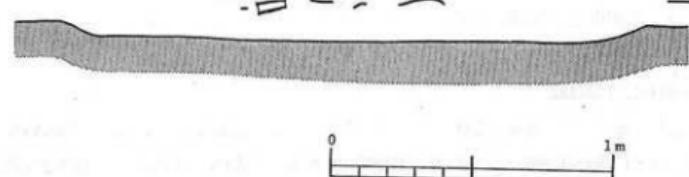
X = -151, 252m

— A'

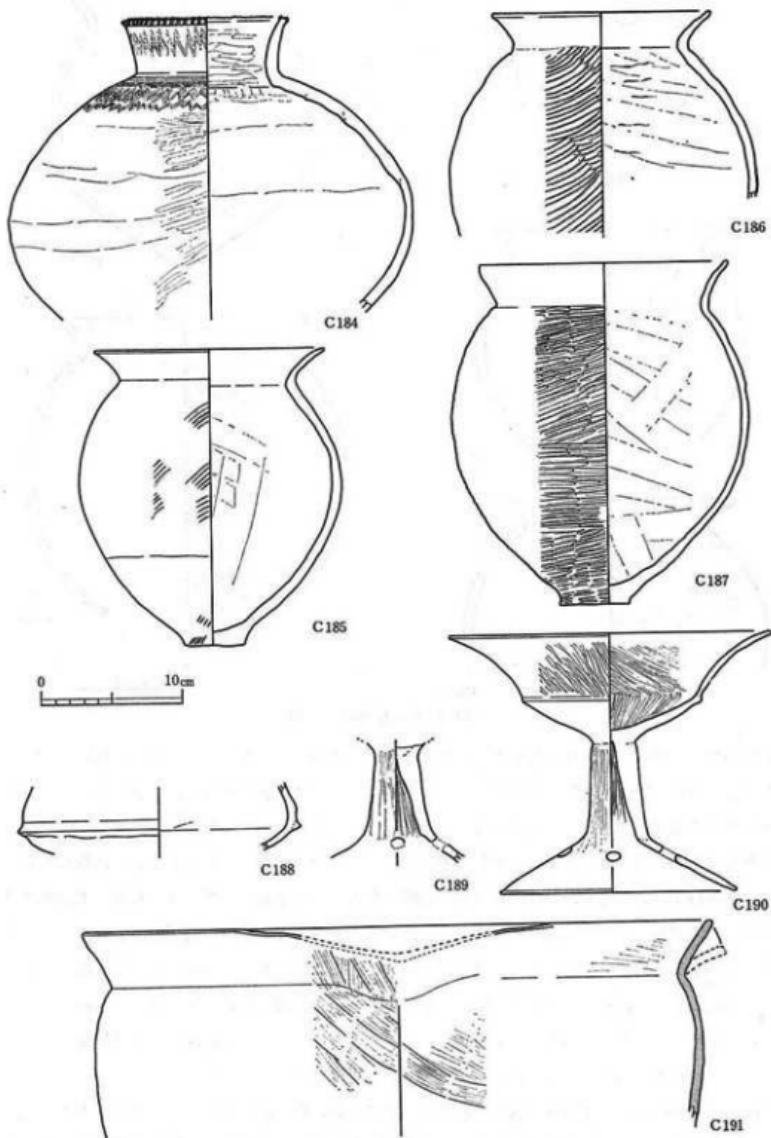


Y = -37, 049m

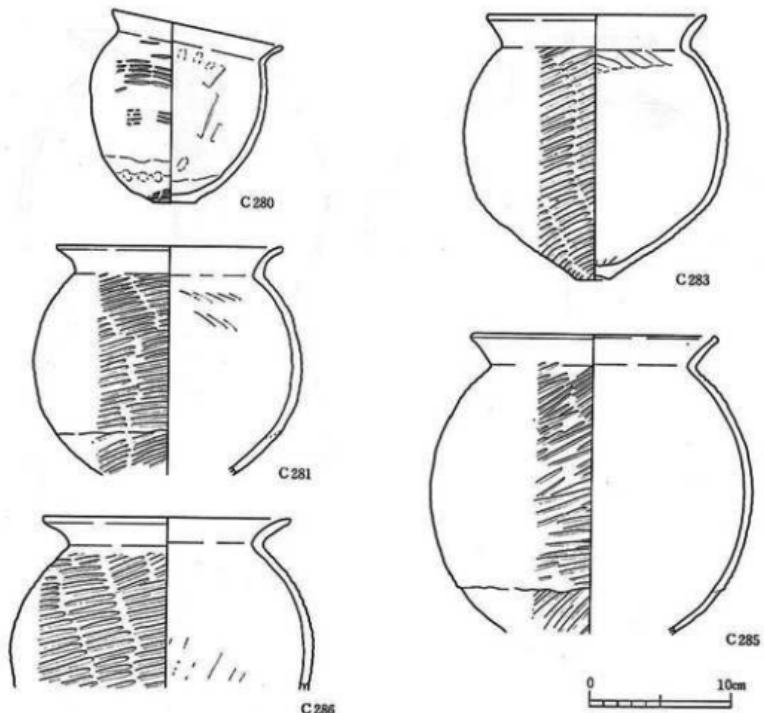
— A' — T.P.+4.5m



第212図 CSK301平面図及び断面図



第213図 C S K 301出土土器



第214図 C S K308出土土器

していた。内面は口縁部横方向のナデ、体部から底部にかけては板状の幅をもつ工具によってナデが加えられている。器形の特徴としては、体部がかなり珠形化しており、体部下半から急にすぼむように底部へ向う。底径は小さく、不安定な土器である。胎土は暗赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含んでいた。他の甕類は明褐色の胎土で、粒子も緻密であり、在地産と思われるものが多い。外面の体部から底部にかけて、煮炊きの際に付着したと思われる煤が見られる。C280は口縁部が一部欠損しているだけの、ほぼ完形に近い土器であった。胎土は明褐色を呈し、粒子の状態から判断して在地産と思われる。全体にやや歪んだ土器であり、甕A1類の土器に比べて作り方が粗雑であった。外面の調整は、口縁部横方向のナデ、体部は口縁とほぼ並行する粗い叩き目が施されている。底部は叩き目を加えた後に範削りを行なっていた。内面は、口縁部横方向のナデ、体部は板状の幅をもつ工具によってナデが施されている。

出土状態から見ればC283に代表される甕類が多く認められ、生駒西麓産の庄内式甕は少量しか検出されなかった。土器による時期区分のⅡ期に相当すると思われる。但しC280は全体の調整が粗雑であり、C283より後出の所産ではなかろうか。D地区の所見から、C283に代表され

る甕類と生駒西麓産の庄内式甕が共伴する可能性もあるが、生駒西麓産庄内式甕の美國遺跡における出現は C 280 の段階であろう。C S D 320 から検出された土器のあり方が、それを証明している。C 280 は上層の C S D 320 からの混入である可能性が大きい。

まとめ

この時期の C 地区においては、溝と土坑が認められ、特に調査区中央部で検出される数条の溝が顕著な存在であった。これらの溝は言うまでもなく時間的累積の結果として多数認められるもので、一時期には 1、2 本のみ機能している。しかしながらほぼ同様な部分に溝が作られており、その点が溝の機能と関係して重要になってくる。

これについては次に述べる 3 つの理由が考えられる。

1. 地形的な影響——前時期に自然河川（C N R 203）が流れている部分であり、地形的にも低くなっている。そのため排水溝的な機能が想定できる。
2. 耕作地へ送水するための灌漑用水路。
3. 集落の縁辺部を画するための機能。

C S D 305 を除いて、溝からはあまり遺物が出土しておらず、集落中心部分からは若干離れた位置に存在する溝のようである。その点も含めて考えれば先述した 1、2 の理由が有力であり、なかでも灌漑用水路としての機能が中心であったと思われる。溝の集中する部分から北東側については、水田等の耕作地を想定することが可能であり、そこへ送水を目的として設けられた溝ではなかろうか。生業（水稻耕作）と密接な関係にある溝だからこそ、埋没してもまた同様な場所に作り直すと考えられる。

出土遺物、遺構の切り合い関係、覆土の状態から判断した各遺構の時期については、第 5 表のとおりである。（渡辺）

- 註(1) この中には戦後第 V 様式末から庄内式古相までを含めている。庄内式の概念は、田中琢氏の提唱した庄内様式に立脚しており、生駒西麓産庄内式甕の共伴を 1 つのメルクマールとして捉えている。田中琢「布留式以前」「考古学研究」第 12 卷第 2 号 1965 年。
- (2) 本書第 VI 章第 3 節を参照。
- (3) 本書第 V 章第 5 節でも述べるが、ここでは北鳥池下層式併行を指す。
- (4) 2 D レンチ南側の溝から検出されている。本書第 V 章第 2 節第 3 項 1-4 参照。
- (5) C S D 320 下層からは、生駒西麓産庄内式甕の初期に属する資料（C 284）と C 280 に類似する在地産の甕が共伴している。

土器による 時期区分 遺構	I 期	II 期	III 期
C S D 301	—	—	—
C S D 302	—	—	—
C S D 303	—	—	—
C S D 304	—	—	—
C S D 305	----	—	—
C S D 306	—	—	—
C S D 307	—	—	—
C S D 308	—	—	—
C S D 309	—	—	—
C S D 310	—	—	—
C S K 301	—	—	—

第 5 表 C 地区庄内式第 1 期遺構存続期間

庄内式第2期の遺構（付図19）

この時期の主要遺構には、竪穴住居、井戸、土坑、溝、高まり状遺構等があった。また調査区北側は一段低くなってしまっており、足跡以外に遺構は認められない。畦畔等が検出されていないため断言することはできないが、花粉分析の結果を考慮すれば水田を想定できる一帯である。庄内式第1期と比較して遺構の数も増加し、竪穴住居及び井戸等の存在から集落の中心部分を構成する。

C S D311（第217・218図、付図19、図版62） 4Cトレンチ中央で検出された溝であり、南北方向から東西方向へ大きく蛇行していた。Cトレンチ及び3Cトレンチでは、段状の遺構となり溝の東肩が検出されていない。幅は0.9～2.2mであり、東側の検出面から溝底面までは平均0.1mを測る。溝の西肩は東肩に較べて約0.2mほど高くなってしまっており、溝を境として段状の落ちが観察された。断面は緩やかなU字形を呈し、底面の勾配から見て水は北の方へ流れていると思われる。覆土は黒色粘土及び黒青色粘土によって構成され、遺物がほとんど含まれていない。時期的には、すぐ西側で検出された竪穴住居（C S I301）とはほぼ同時期と考えられる。竪穴住居の壁溝から延びる排水用と思われる溝がC S D311の西肩に取り付いていた。おそらく水田と集落を画する溝ではなかろうか。

C S D312（第215図、図版61） 3Cトレンチ南側で検出された東西方向に延びる溝状の遺構である。しかしCトレンチ側では検出されておらず、部分的な落ち込みになる可能性もある。土層の堆積状況からは溝の可能性が考えられるが、南肩が調査区外にあたるため断言できない。東側部分に土器が集中して検出された。出土状態から見れば、廃棄されたと言うより置かれたような状態である。器種構成にも片寄りがあり、何らかの祭祀に使用されたものではなかろうか。北側の肩から底面までは深い所で約0.2mであり、覆土は粘土層であった。また一部に炭、灰等が認められる。検出された土器から見て、土器による時期区分のⅡ期に相当する。

出土遺物

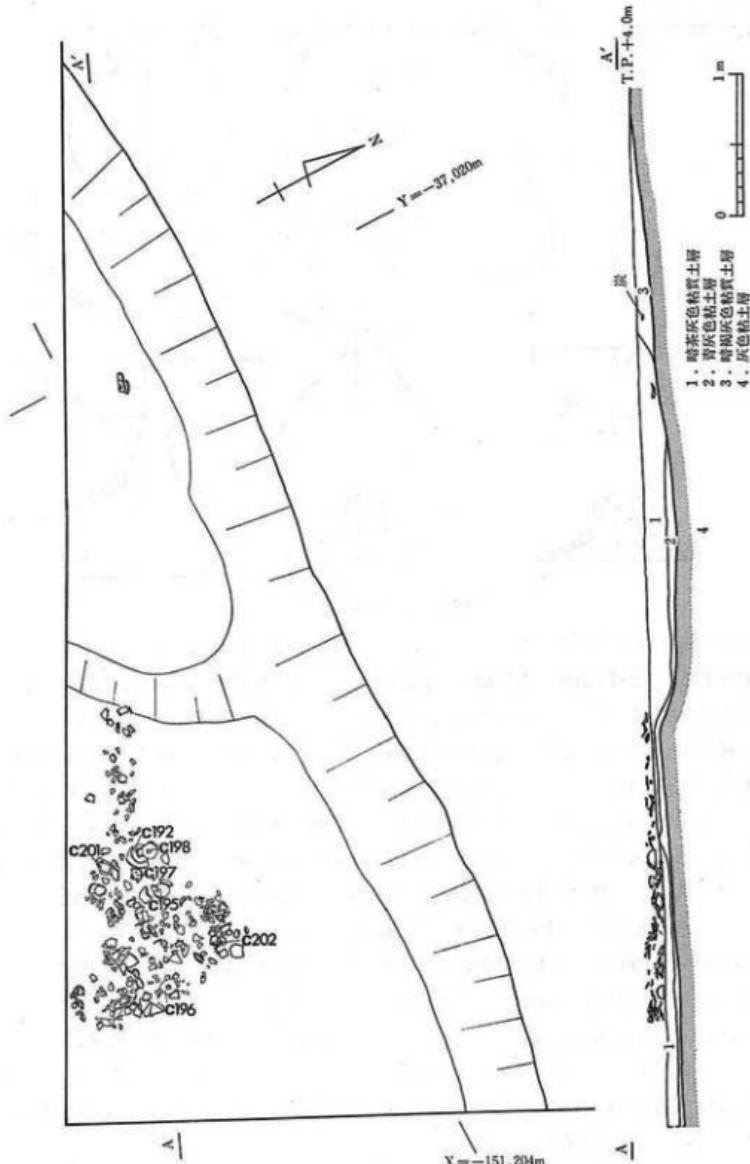
〔土器〕（第216図、図版173・174）

個体判別可能な土器が19点出土した。その内訳は鉢4点、壺台3点、高杯5点、壺7点であり、甕が認められない。ここでは残存状態が良好な資料を器種別に11点選び出して提示する。器種の分類は、壺台A類（C198・C199）、高杯A類（C197・C200・C201・C202）、高杯D類（C196）、壺B1類（C193）、壺C類（C194）、壺F1類（C192）、壺F2類（C195）であった。

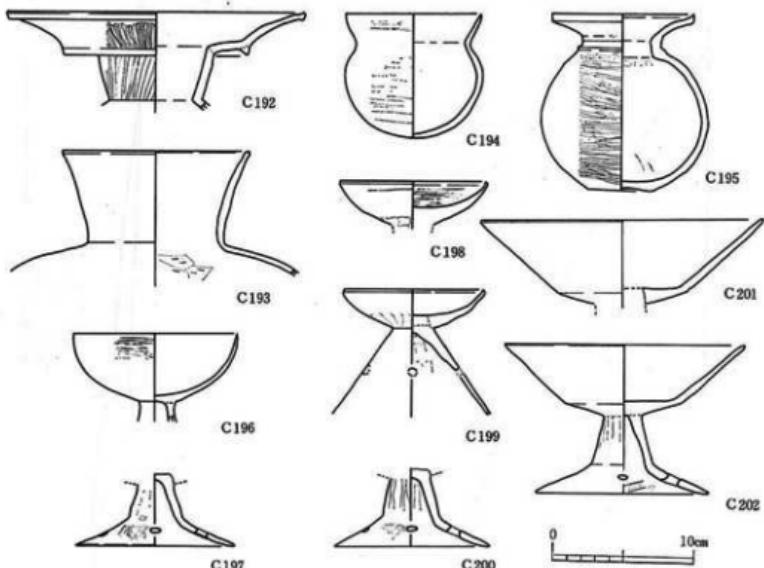
特に顕著な特徴として、次に述べる3点が挙げられる。

1. 生駒西麓産の土器が認められず、在地産のものが多い。
2. 高杯A類の脚部がやや脛くなり、脚柱部の膨みが目立つ。
3. 壺F₂類（二重口縁広口壺）が、「磐墓古墳」から出土している壺の1つと類似している。⁽²⁾

以上の点と周辺遺構との関係を合わせて考えれば、土器による時期区分のⅡ期新段階に属すると思われる。甕が出土していないため、時期を比較する上で若干の問題は残るが、高杯A類及び壺F₂類の特徴からこのように判断した。器種構成から見ても、供獻等に使用された可能性が高い。



第215図 3 C トレンチ C S D312平面図及び土層断面図



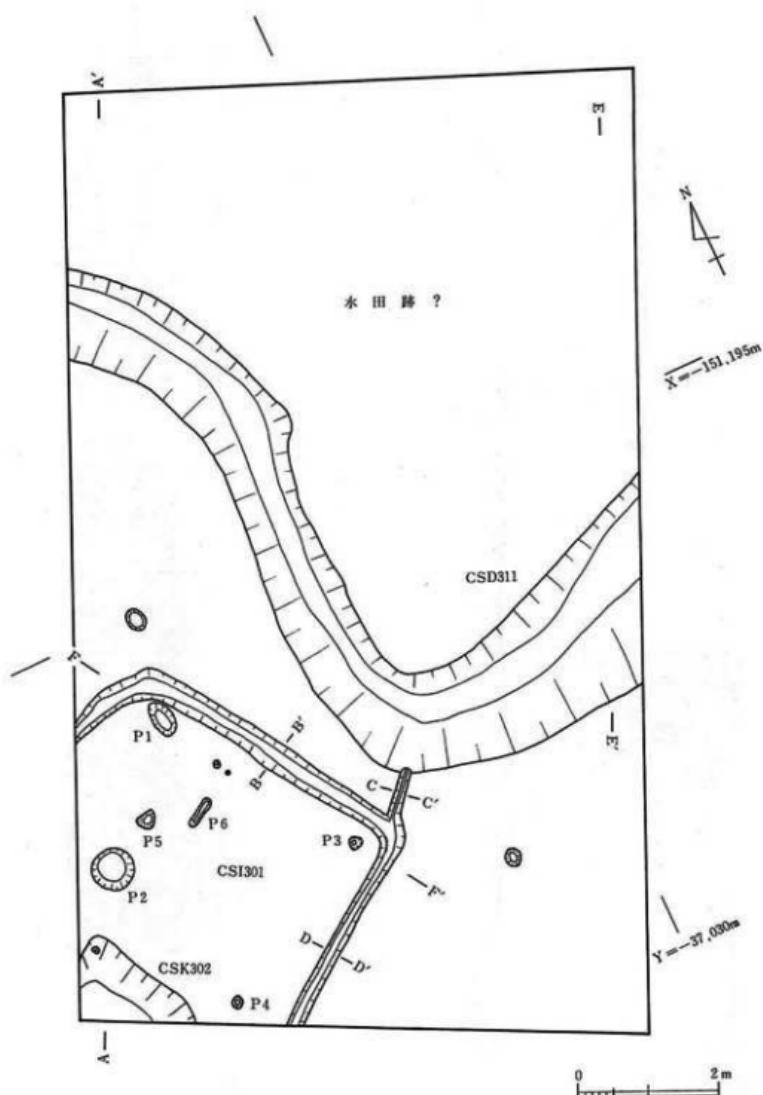
第216図 CS D312出土土器

あくまで推測の域を出るものではないが、水田の祭祀等に使用されたものであろう。

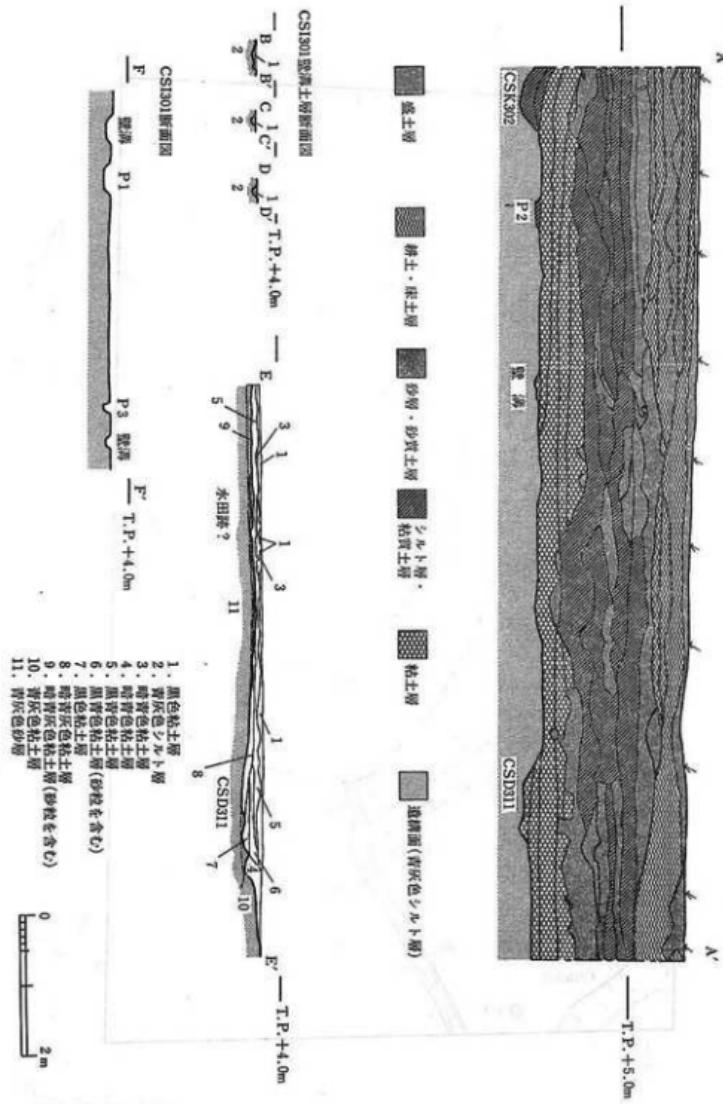
C S I 301 (第217・218図、図版62) 4Cトレンチ西端で検出された堅穴住居である。西側が調査区外となるため、全貌を捉えることができなかった。北辺がやや膨みをもっているが、完全に検出された東辺から推測して、1辺約4.5mの方形プランになると思われる。縁辺に幅0.2~0.4m、深さ約0.1mの壁溝が巡り、壁溝の幅は東辺でやや広がっていた。また南東隅部分で壁溝から幅約0.18mの小溝が外側へ向って延びている。この溝はC S D311に接続しており、排水溝としての機能を考えられる。堅穴住居の立ち上がりはほとんど確認できなかったが、土層断面(第218図A-A')で壁溝の外側に幅0.4m、高さ0.1mの堤状高まりを観察できた。柱穴と断定できるものは認められず、P₁、P₃がその可能性をもっている。炉跡は検出されなかったが、南西隅に深さ約0.3mの土坑(C S K302)を1基確認した。堅穴住居のやや端に寄った位置に土坑が設けられている例は、この時期前後に類例がいくつかある。⁽³⁾土坑内からは若干の土器とモモの核が出土しており、土壤中に含まれている種子には畠で生育するものがあった。⁽⁴⁾食糧等を蓄えた貯蔵穴ではなかろうか。堅穴住居の覆土は黒青色粘土であり、あまり遺物が含まれていない。C S K302から検出された土器及び包含層中の土器等から判断して、土器による時期区分の初期に相当する堅穴住居と考えられる。

出土遺物

〔土器〕(第219図、図版175)

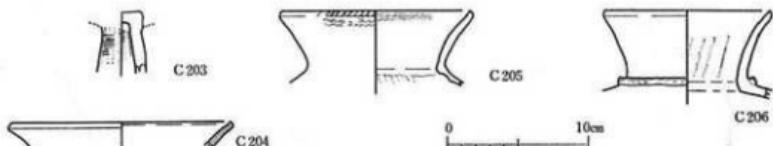


第217図 4Cトレンチ古墳時代前期(庄内式)遺構平面図



第218図 4Cトレンチ古墳時代前期（庄内式）各造橋の土層断面図

堅穴住居覆土からの出土は少なく、ほとんどが細片であった。一部包含層として取り上げているものもあり、第203図の方に掲載してある。ここでは C S K 302 から出土した比較的大形の破片 4 点を提示する。器種の分類で言えば、高杯 A 類 (C203)、壺 B₁ 類 (C205)、壺 E 類 (C206)、甕 G₁ 類 (C204) であった。C205 及び C206 は時期的に若干古いが、C204 は土器による時期区分のⅢ期に属すると思われる。C203 もⅢ～Ⅳに位置付けられよう。



第219図 C S I 301内 C S K 302出土土器

C S K 303 (第220図、図版63・67) 検査区中央部 (Cトレンチ24区) より、北東から南西方向に最大長をもつ不整形土坑が検出された。北東から南西方向で約 5 m、北西から南東方向で約 4 m の大きさがある。検出面から土坑底面までは約 0.05m と非常に浅く、おそらくは掘り込み面がもっと上層にあったと思われる。土坑覆土は暗青灰色砂質土であり、南西部から土器が集中して出土した。ほとんどの土器類は土坑底面から浮いた状態で検出され、出土状態から判断して廃棄されたものである。土坑の南西隅に片寄った出土を示している点から、あるいは土坑の埋没過程で生じた窪みに、廃棄されたとも考えられる。性格としては廃棄用土坑と思われるが、不定形である点が気になる。地形的な窪みを利用しているのかもしれない。出土した土器から見て、土器による時期区分のⅣ期に属する土坑である。

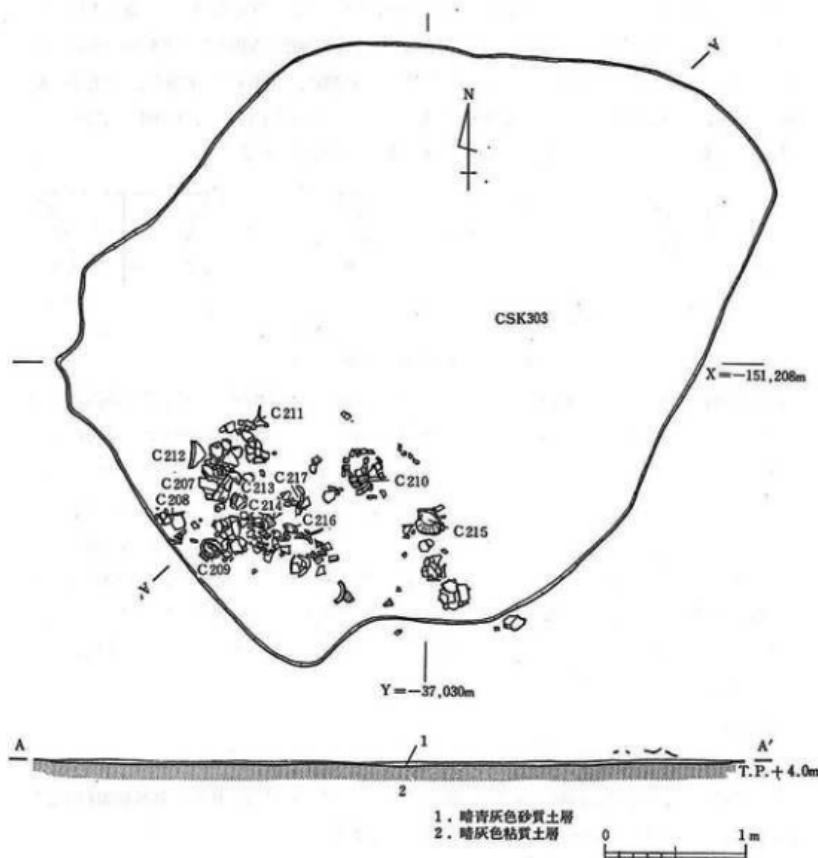
出土遺物

〔土器〕(第221図、図版172・173)

出土状態から判断して、同時性の強い一括資料であると考えられる。B地区 B S K 304 出土土器と共に、この時期の本遺跡における基準資料と言えよう。

土坑から出土した個体判別可能な土器は30点であった。その内訳は、鉢 4 点、器台 1 点、高杯 5 点、壺 4 点、甕 16 点である。ここでは比較的残りの良い土器を中心に、器種別の代表的な 11 点を提示する。器種の分類は、大形鉢 (C217)、高杯 A 類 (C215・C216)、高杯 D 類 (C214)、壺底部 (C213)、甕 C 類 (C212)、甕 G₁ 類 (C207・C210・C211)、甕 G₂ 類 (C208・C209) であった。

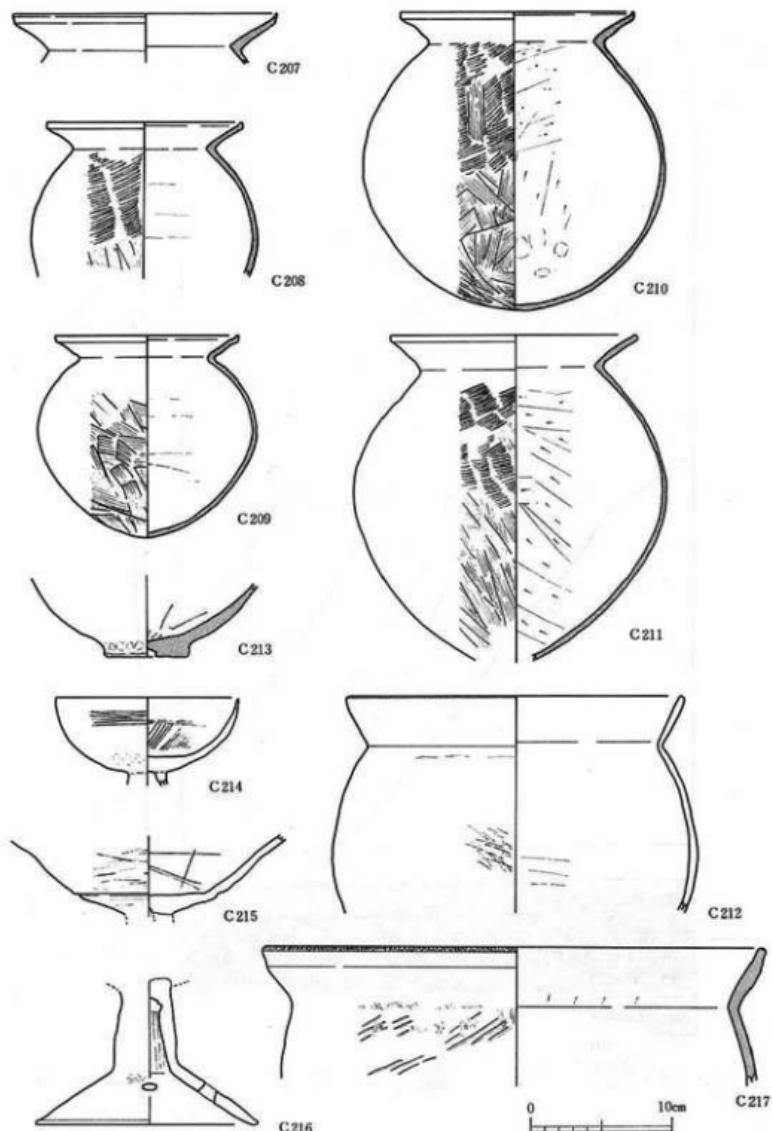
高杯 A 類と甕 G₁・G₂ 類に顕著な特徴が観察される。高杯 A 類は、C215 の場合外面杯部下方に沈線状の段が見られる。また C216 の方は、脚柱部がやや膨らんでいた。C216 は C S D 312 出土の高杯 A 類に較べて脚柱部が長いが、その膨らみの点で共通している。甕 G₁ 類は、C210 に代表される体部の球形化が顕著であり、C210 の場合でも胴中央部に最大径を持っていた。また C207、C210 のように口縁端部が上方へつまみ出され、端面を作り出している。甕 G₂ の場合も体



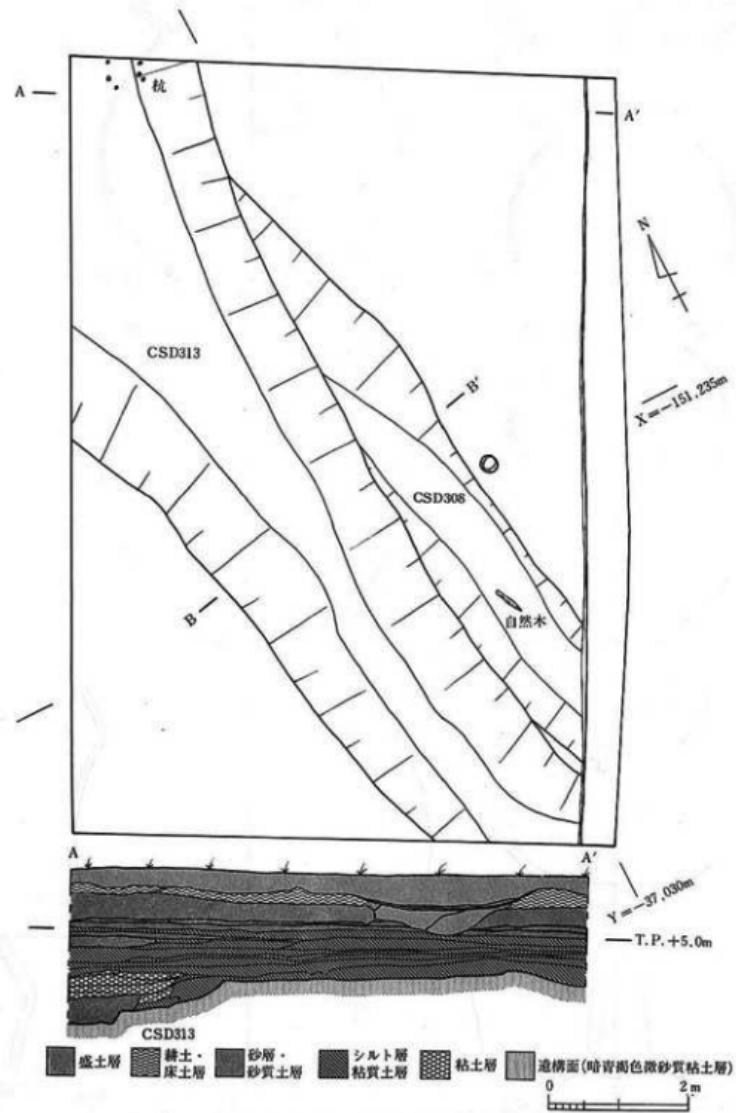
第220図 CS K303平面図及び土層断面図

部の球形化が観察され、体部中央に最大径を有していた。また外面の刷毛目調整も緻密であり、叩き目を完全に消している。口縁部の特徴についても、斐G類（C210）と共通する。以上の点から判断して、土器による時期区分のⅣ期を代表する資料と言えよう。

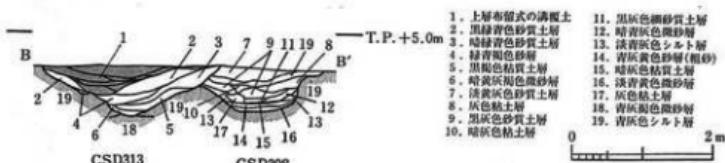
C S K304（第206図、付図19、図版63） C S K303のすぐ西側で検出された、南北方向に長軸をもつ梢円形の土坑である。長軸約1.5m、短軸約1.1mあり、検出面から土坑底面までは約0.6mであった。覆土は灰色粘質土で、中から器台脚部を含む若干の土器片が出土している。土坑の性格については不明であるが、堅穴住居（C S I 301）及びC S K303と近接している点から見て、集落内の施設と考えられる。土器による時期区分のⅣ期に属する土坑であった。



第221図 CS K 303出土土器



第222図 5CトレーナーCSD308、CSD313平面図及び土層断面図



第223図 C S D 313及びC S D 308土層断面図

C S D 313 (第222・223図、付図19、図版64・65) 5 Cトレンチから調査区中央やや西側にかけて、ほぼ南北方向に走る溝を検出した。この溝は先述した C S D 308 が埋没した後で、その部分とはば重なるようにして設けられたものである。幅1.3~3.0mあり、検出面から溝底面までは平均0.7mを測る。断面は逆台形を呈し、底面の勾配から見て水は南から北へ流れていると思われる。覆土は微砂、シルト、粘土の互層から構成され、5 Cトレンチ側で多くの遺物が検出された。また C S D 314 と合流しており、合流部南側の東肩部分で杭が數本直立した状態で認められた。この杭は出土状態から推定して、護岸のためというより堰等の水を調整する施設に使用された可能性が高い。C S D 308の部分ですでに述べたとおり、C S D 314と共に水田等に送水することを目的に設けられた灌漑用幹線水路としての機能を想定しておきたい。出土した土器類から判断して、土器による時期区分のⅣ期～Ⅶ期にかけて営まれた溝である。

出土遺物

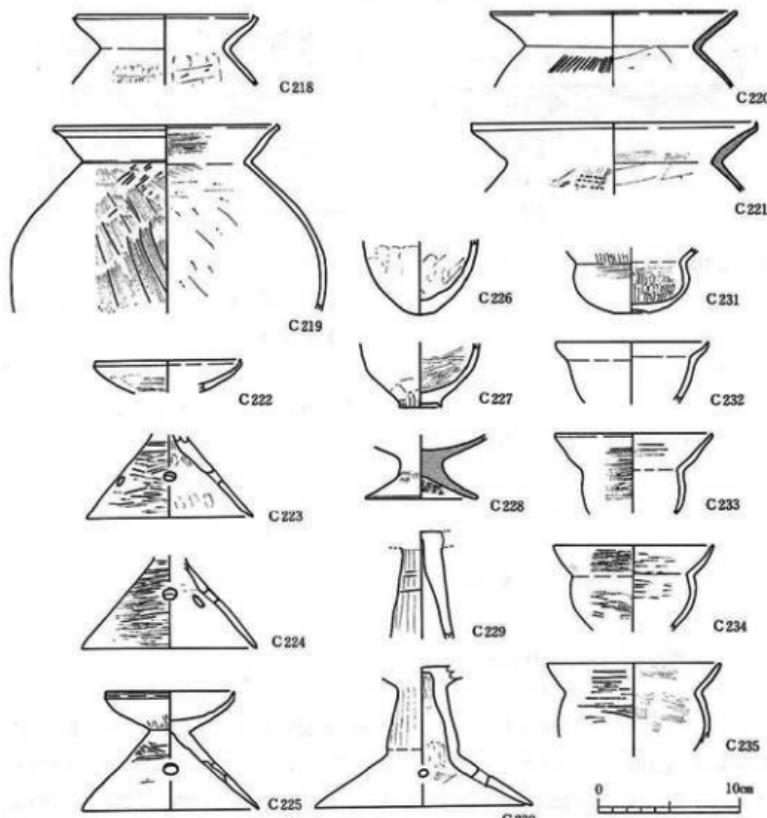
〔土器〕(第224・225図、図版176~178)

ここでは残存状態の良好な25点を任意に抽出して提示する。各器種の分類と時期は以下のとおりである。鉢A類Ⅱ期(C231)・Ⅲ期(C232・C234・C235)・Ⅳ期(C233)、鉢B類Ⅲ期(C227)・Ⅳ期(C226)、台付鉢Ⅳ期(C228)、器台A類Ⅲ期(C222・C225)、器台脚部(C223・C224)、高杯A類Ⅳ期(C229・C230)、壺B類Ⅲ期(C238)・Ⅳ期(C236・C239)、壺B₂類Ⅲ期(C240)・Ⅳ期(C241)、壺E類Ⅲ期(C242)、壺底部(C237)、壺D類Ⅳ期(C219)・Ⅴ期(C218)、壺G₁類Ⅳ期(C220・C221)。Ⅲ期からⅣ期までの土器が認められるが、量的にはⅣ期のものが多かった。Ⅳ期を中心として、Ⅴ期まで継続した溝と思われる。

特に興味深い資料として、C218、C219、C233があげられる。C218、C219は胎土の特徴から見て在地産と思われ、布留式壺への移行する過渡期の好資料であった。口縁端部の状態から判断して、C218の方が後出であろうと思われる。C233は口縁部が長くなり、強く外反する小形の鉢である。小形丸底壺への移行を示す資料と言えよう。

〔C S D 313上層出土の土器〕(第226・343図、図版179)

Cトレンチ31区で C S D 313 の最終堆積と思われる部分より土器がまとまって出土した。個体判別可能な土器は全部で8点出土している。内訳は鉢2点、壺4点、壺2点であり、ここではほぼ完形に近い5点を抽出して図化した。器種分類は、鉢A類(C344)、大形鉢(C346)、壺B₂

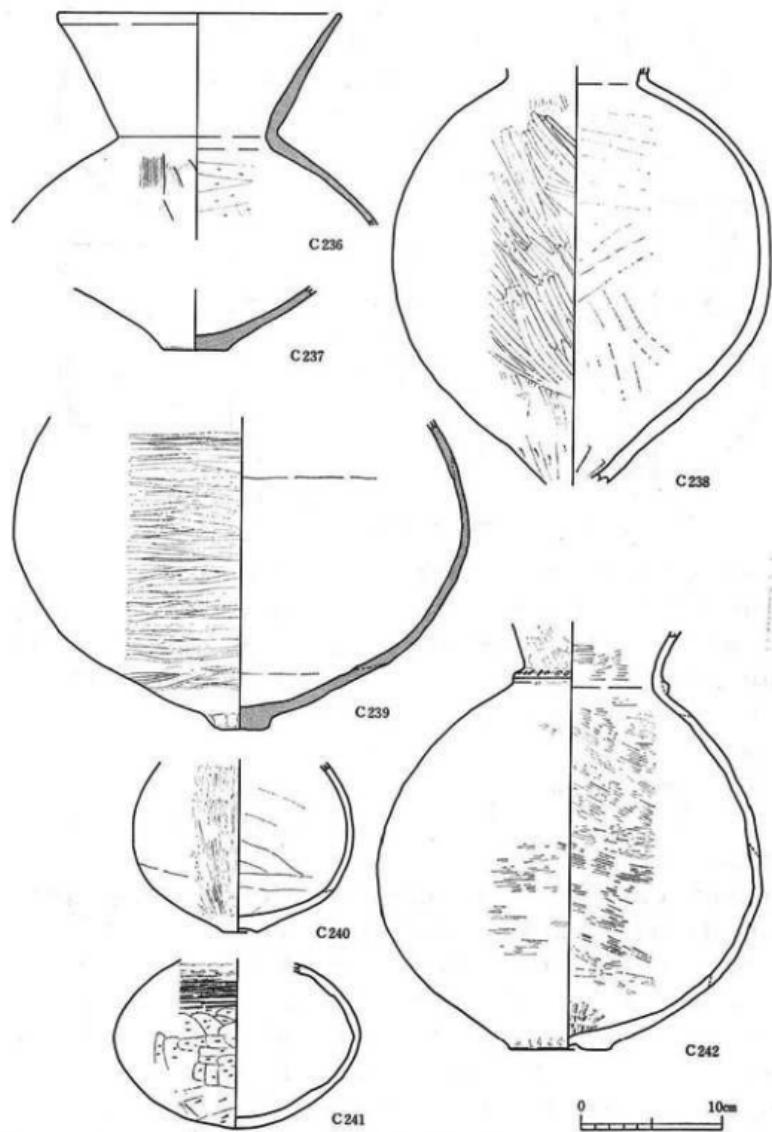


第224図 C S D313出土土器(1)

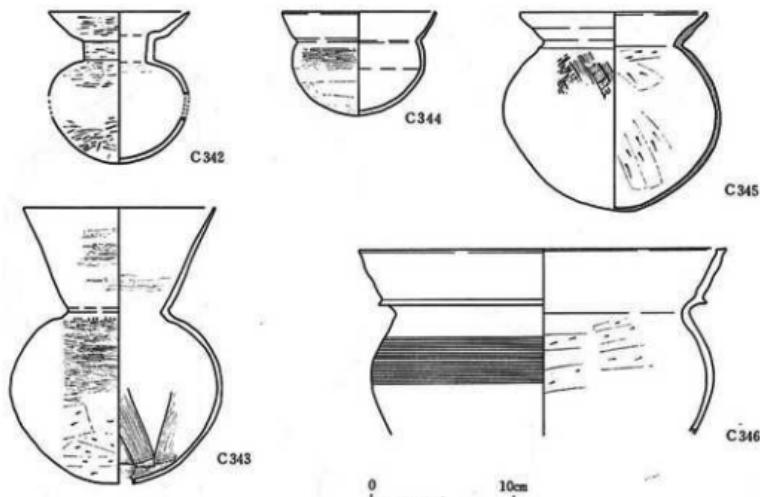
類(C343)、壺F₂類(C342)、甌G₂類(C345)である。

溝覆土から出土した資料ではあるが、最終堆積部分に固まって検出された。出土状態から判断して、同時性の強い一括資料と思われる。本書第Ⅶ章第5節で詳説するが、ここからは布留式の認定基準の一つである小形精製土器三種(小形丸底壺、杯、小形器台)⁽⁵⁾が検出されなかった。その点を重視して、庄内式最終末期に位置づけたい。本遺跡の土器による時期区分のⅢ期として分類できるものであり、この時期の基準資料と言える。

C S D314(第227・228図、付図19、図版66) 6Cトレンチ南側からCトレンチ中央部にかけて検出された、ほぼ東西方向に走る溝である。幅は2~2.5mあり、検出面から溝底面までの深さは平均0.4mであった。断面逆台形を呈する溝で、底面のレベルから見て水は西から東へ流れていたと思われる。覆土はシルトで構成されており、土層断面の観察から水は常時緩やかに流れ



第225図 C S D313出土土器(2)



第226図 C S D313上層出土土器

ていたようである。溝の東側部分で、比較的多くの遺物が検出された。この溝は、前述したCS D313と東側で接続しており、その部分には流れに対して直交する板が認められた。水量を調整する堰としての機能が想定される。CS D313と一体化した灌漑用の幹線水路と考えられ、CS D313に交差し、さらに東へ延びる可能性が高い。出土遺物等から見て、両者はほぼ同時期と思われる。

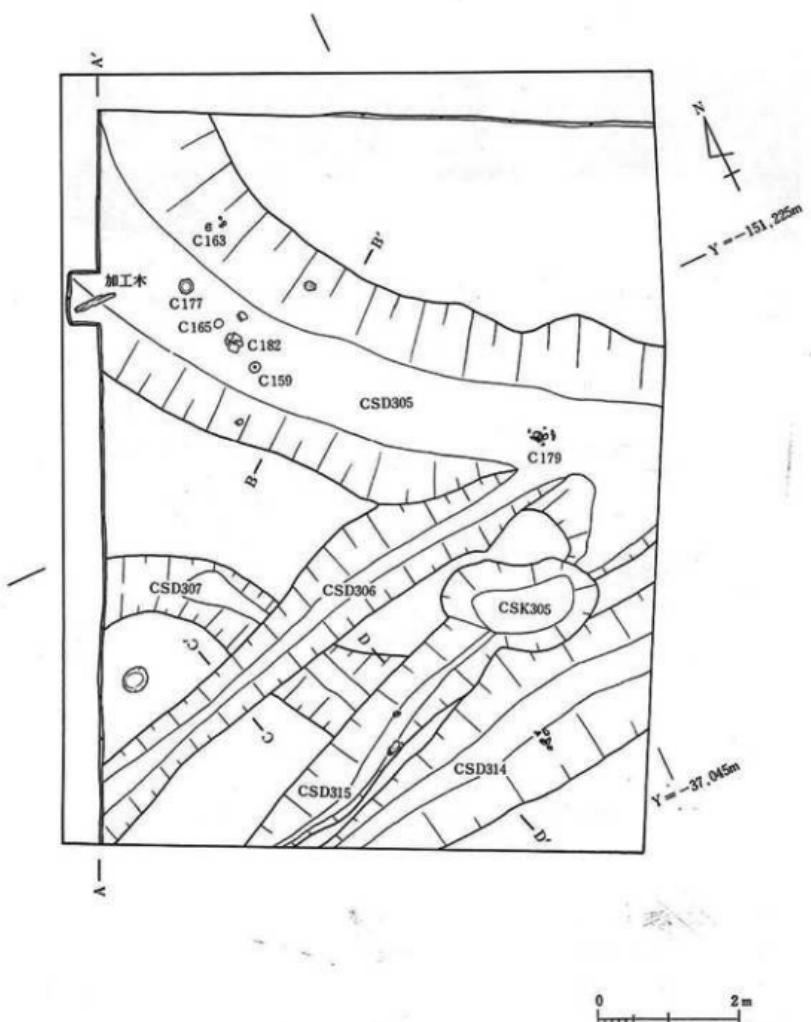
出土遺物

〔土器〕(第229図、図版180)

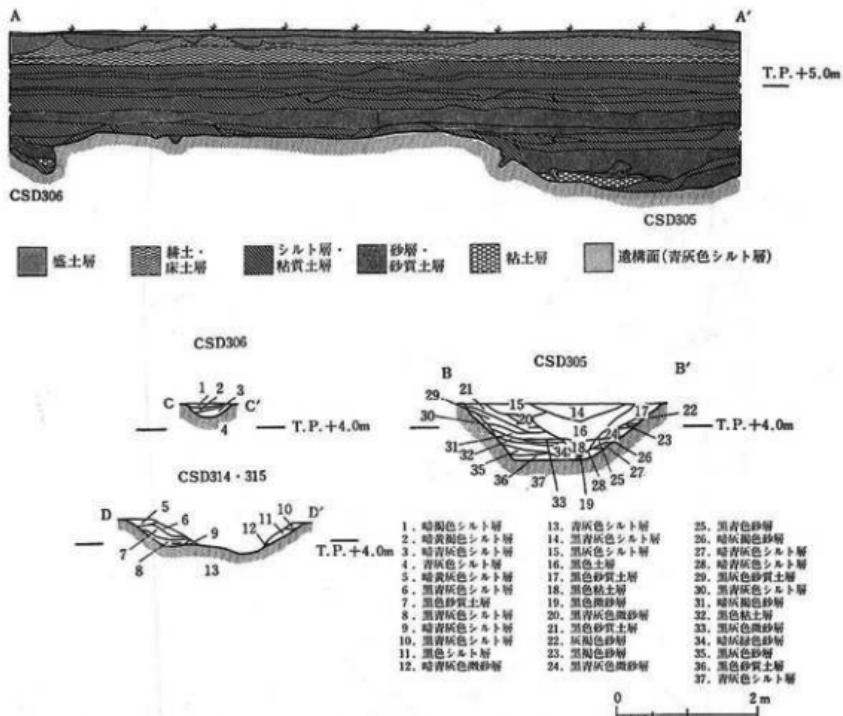
ここでは残存状態の良好な大型破片を任意に7点抽出した。器種分類と時期については、以下のとおりである。

鉢A類Ⅶ期(C245)、大形片口付鉢Ⅶ期(C249)、器台A類(C248)、高杯脚部Ⅶ期(C247)、壺B₂類Ⅶ期(C243)、壺E類Ⅶ期(C244)、甕G₂類Ⅶ期(C246)。

興味深い資料としては、C246とC247がある。C247の胎土は明褐色を呈し、「くさり磧」と思われる赤褐色の粒子を含んでいた。他地域で製作されたものようである。表面の磨滅が激しいが、脚柱部外面に縦方向の笠磨きが観察された。C246は胎土の特徴から見て、生駒西麓産の土器である。しかしながら全体の成形は粗雑であり、全体に厚手であった。外面の調整は口縁部から頸部にかけて横方向のナデ、体部は指おさえが観察され、その上に細い縦方向の刷毛目を施している。内面は口縁部に横方向の細い刷毛目を加え、体部には板状の幅をもった工具による横方向のナデを施していた。体部が球形化しており、プロポーションの面では新しい特徴を示す。



第227図 6C トレンチ古墳時代前期（庄内式）遺構平面図

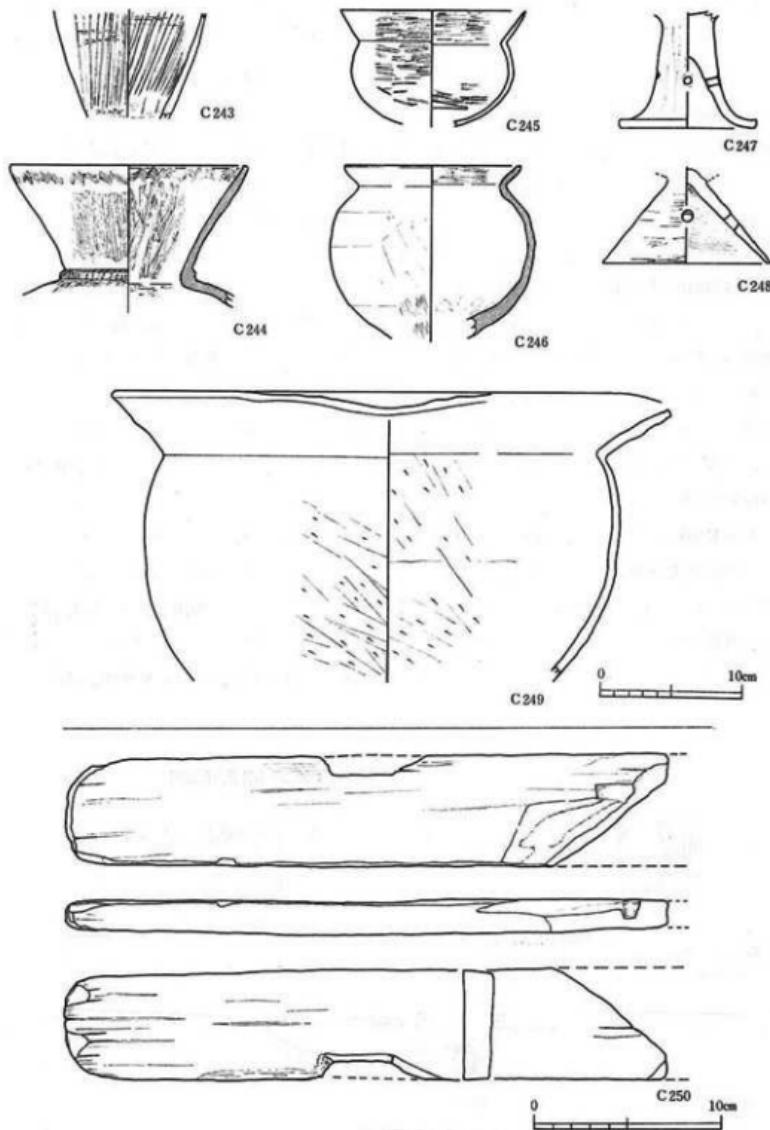


第228図 6Cトレンチ古墳時代前期(庄内式)溝の土層断面図

〔木器〕(第229図、図版253)

厚めの板状木製品(C250)である。一方は切断されていたが、片方は角を削り落して丸味をつけている。樹種はスギであり、縦木取りの柵目材を使用していた。用途は不明であるが、幅をもった厚みのある形態から推測して、矢板に使用されたものではなかろうか。

C S D 315(第227・228図、図版66) 6Cトレンチで検出された、C S D 314の北側をほぼ並行に走る溝である。溝の東端はC S K 305に接続していた。土層の堆積状況から判断してC S D 314より先行する溝のようである。現存する幅は0.6~1.0mあり、検出面から溝底面までは平均



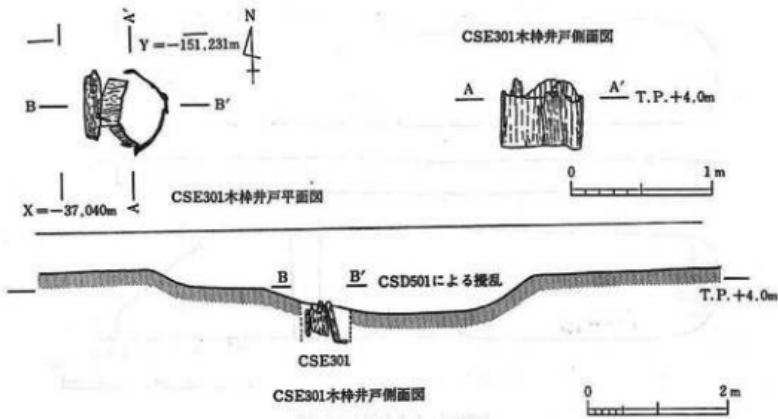
第229図 C S D 314出土遺物

約0.4mであった。断面V字形を呈し、底面の勾配から見て水は西から東へ流れていたと思われる。覆土は下層で微砂、上層でシルトによって構成され、土器の細片が若干出土した。C S K305へ送水する目的で設けられた溝であろう。土器による時期区分のⅡ期に相当すると思われる。

C S K305 (第227図、図版66) 6 Cトレーンチ南側で検出された土坑である。北西から南東方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸約2.2m、短軸約1.2mであった。西側でC S D315とつながっている。北側の検出面から土坑底面までは約0.75mあり、深めの土坑であった。土坑の性格については不明な点も多いが、何らかの目的で水を蓄えるためのものであろう。遺物があまり出土しておらず正確な時期を決め難いが、C S D315とは同時期である可能性が高い。

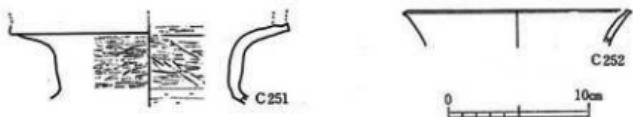
C S D316 (付図19) C S D314の西側で、その南肩へ取り付くほぼ南北方向に走る溝である。幅は約1.0m前後を測り、検出面から溝底面までは平均約0.3mあった。断面U字形を呈し、底面の勾配から見て、水は北から南へ流れていたと思われる。覆土は暗褐色シルトによって構成されており、遺物はあまり検出されなかった。また南側は後世の邊縁 (C S D501) によって削平され、途中で終わっている。幹線水路 (C S D314) からの送水をうけるために設けられた溝であろう。土器は細片が若干出土しているだけであり、時期を決め難い。おそらくC S D314とほぼ同時期になるのではなかろうか。

C S E301 (第230図、付図19) C S D314の南側約1.5mで検出された木枠使用の井戸である。上部はC S D501によって削平を受けており、下方のみ残存していた。掘り方の輪郭は不明瞭であったが、ほぼ南北方向に長軸をもつ楕円形を呈していた。長軸約0.9m、短軸約0.8mであり、6枚の彎曲した板を縦に差し込んで枠にしている。板の彎曲は人為的な加工によって作り出されており、推定で1.0m以上の長さがあったと思われる。またこの井戸はC N R202が堆積させ



第230図 C S E301木枠井戸平面図及び側面図

た砂層まで掘り込まれており、CNR 202の河床面が不透水層になっている。井戸の底から土器が若干出土しており、それらから判断して土器による時期区分のⅢ期に属するものと考えられる。



第231図 CS E 301出土土器

出土遺物

〔土器〕(第231図、図版167)

井戸の底から壺、甕の破片が若干検出された。ここでは比較的大形の破片2点を抽出する。器種の分類に従えば、壺F₁類(C251)、甕E類(C252)であった。時期的にはいずれもⅢ期に相当する。

C252について説明を加えれば、この土器は褐色を呈し胎土に赤色粒子及び細かい砂粒を多量に含んだ甕の口縁部破片であった。包含層出土のC131、後述するCS D319出土のC299と胎土の面で類似している。北摂地域で製作された土器ではなかろうか。

CS D317 (第232図、図版68) Cトレンチ41~42区にかけて検出された、北西から南東方向へ走る溝である。幅約3.0m前後を測り、検出面から溝底面までは平均0.5mあった。断面は逆台形を呈し、底面の勾配から判断して水は南東から北西方向へ流れていたと考えられる。覆土は上層で粘土、下層でシルトと細砂によって構成されていた。南東側はCS D501によって削平を部分的に受けており、そのため遺物があまり認められない。北西側からまとまって多くの遺物が検出されている。また覆土中から弥生時代中期の磨製石斧(C055、C056)が出土した。下層の弥生時代中期包含層を掘り込んで溝が作られている点から見て、その際の混入と思われる。出土遺物から判断すれば、土器による時期区分のⅢ期からⅣ期にかけて營まれた溝であろう。比較的幅も広く、水が常時流れていたと思われる点等から考えて灌漑用の幹線水路としての機能が想定される。

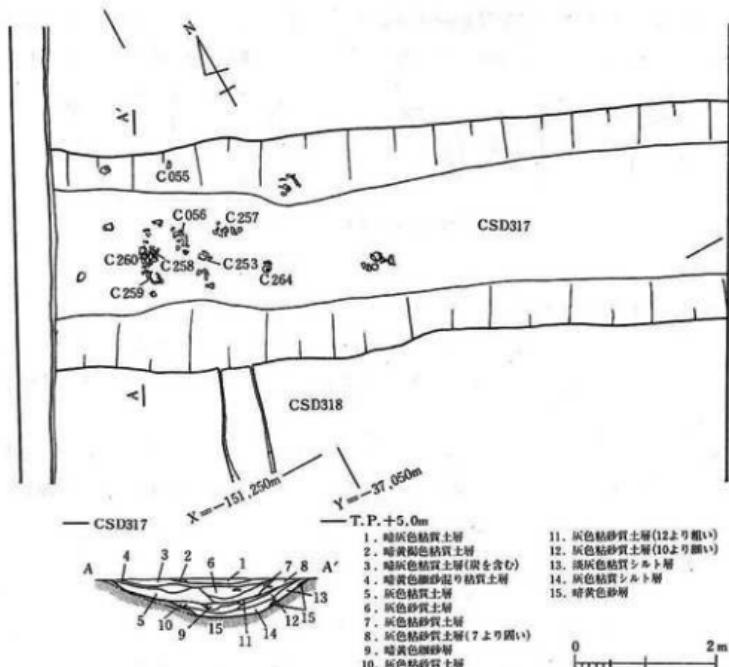
出土遺物

〔土器〕(第233図、図版165・166)

ここでは残存状態の良好な大形破片類を中心に、任意に14点抽出した。器種分類については以下のとおりである。

鉢B類(C264)、杯(C262)、瓶(C261・C265)、高杯D類(C267)、壺B₂類(C256)、壺F₁類(C253・C254)、壺G類(C255)、甕A₂類(C266)、甕G₁類(C258・C259・C260)、甕G₂類(C257)。

時期的には、ほとんどのものが土器による時期区分のⅣ期に相当するようである。但しC261とC264は若干古くなる可能性もあり、逆にC253はもっと新しい時期に属するかもしれない。C



第232図 CSD317平面図及び土層断面図

253は明赤褐色を呈し、胎土に長石、石英の粗い粒子を多く含んでいた。外面の調整は口縁部横方向のナデ、頸部に縦方向の刷毛目を施している。内面は縦方向の刷毛目調整の後で、横方向のナデを加えていた。全体の調整は粗雑である。C254は明褐色を呈し、胎土の特徴から在地産である可能性が大きい。またC255とC265・C266は胎土が極めて類似していた。色調は明赤褐色を呈し、粒子は非常に緻密である。

〔土錐〕(第233図、図版165)

管状の土錐(C263)が1点出土した。両端面がやや外側に拡張しているものの、断面はほぼ円形に近い円柱状を呈する。表面には横方向のナデ調整が見られるが、部分的に施されていない所がある。指紋が観察されるところから見て、指によるナデではなかろうか。中心の孔はシャープに開けられており、棒状のものを芯にして作った後で、引き抜いたものようである。胎土の特徴から言えば、在地産であろう。重さは約60gあり、河川等の漁撈に使用されたと思われる。共伴された土器類から判断すれば、土器による時期区分のⅤ期に相当する可能性が高い。

〔木器〕(第233図、図版253)

一端が欠損した板状の木製品(C268)である。残存する端部には、丸味をもつ切り込みが入

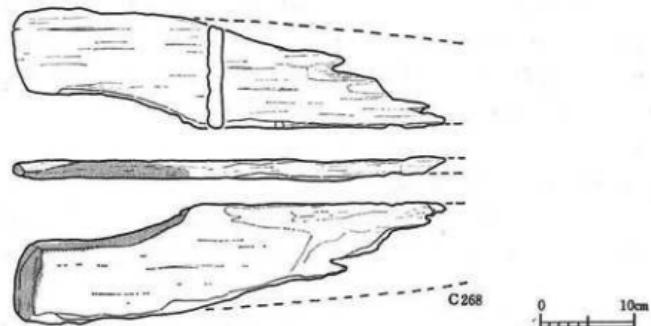
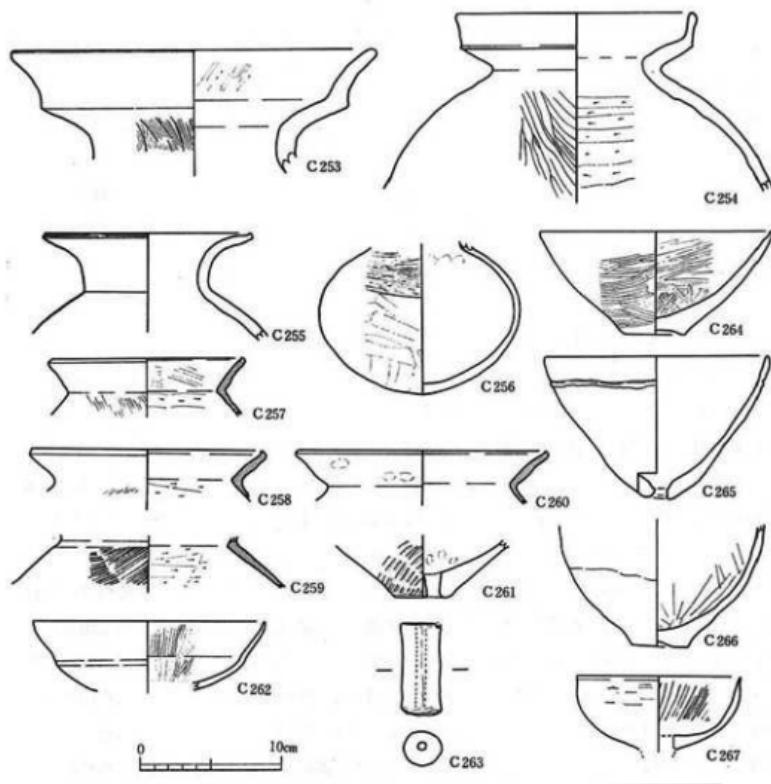


図233 C S D3T7出土遺物

れられていた。用途については不明であるが、形態から類推して建築部材の一部分になるのではなかろうか。

C S D318 (第232・234図、付図19、図版68) C S D317の南側に接続する、ほぼ南北方向に走る溝である。幅は0.6~1.2mあり、検出面から溝底面までの深さは平均約0.15mであった。断面逆台形を呈し、底面の勾配から見て水は北から南へ流れているようである。覆土は上層が砂質土層、下層で粘質土層から構成されており、遺物はあまり検出されなかった。C S D317から水を引くための、文線的な水路になると思われる。出土遺物から判断して、土器による時期区分のⅢ期に機能していたものであろう。

出土遺物

〔土器〕(第240図、図版167)

この溝から検出された土器は、1点を除きほとんどが細片である。C 270はⅢ期の壺G₁類であり、底部を欠損しているものの、かなり残りの良い資料であった。

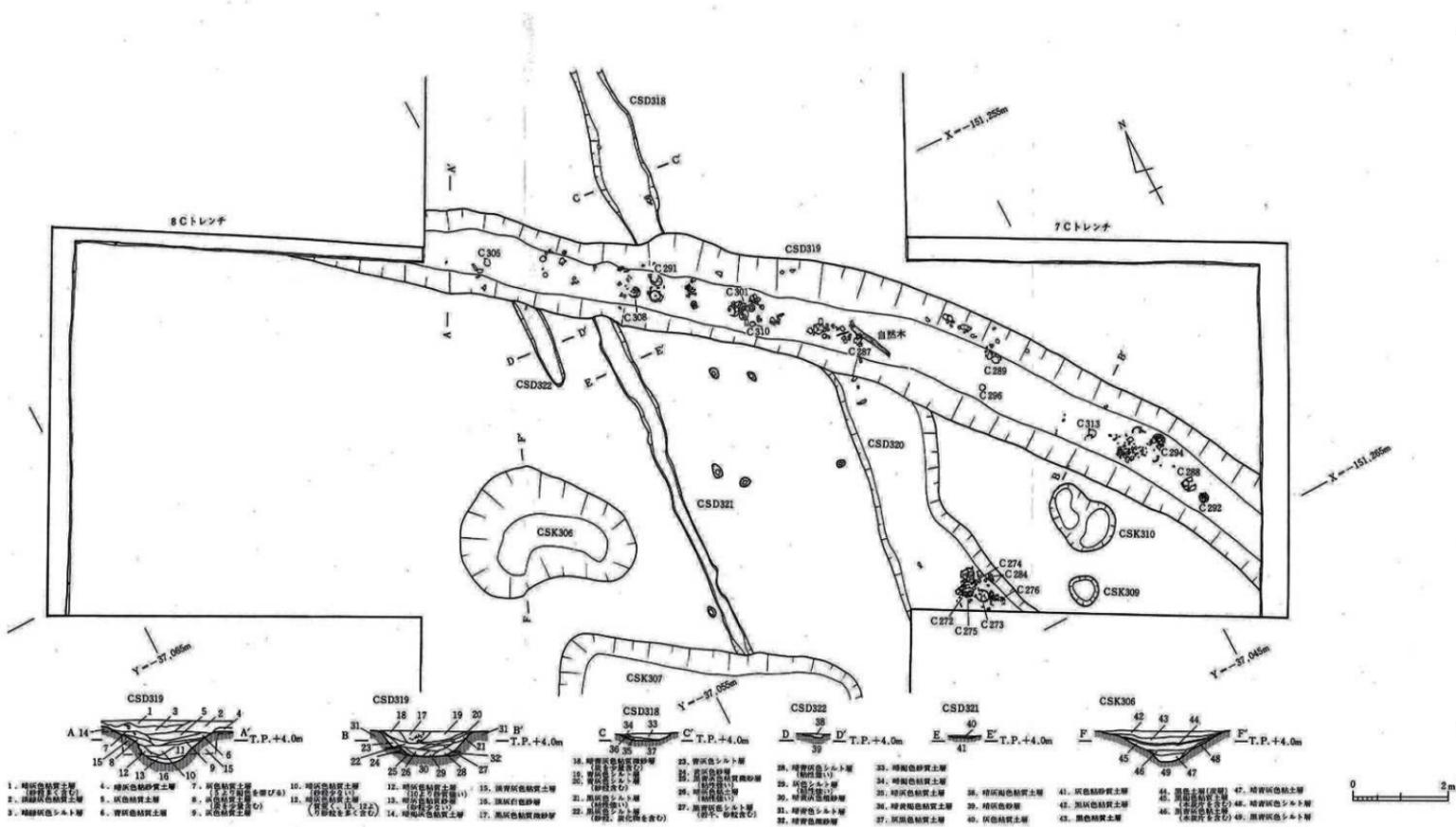
C S D319 (第234図、図版68・69) 調査区南側で検出された北西から南東方向へやや曲りながら走る溝である。先述したC S D318の南端は、この溝の東肩と接続していた。溝の幅は1.6~2.1mあり、検出面から溝底面までの深さは平均約0.5mである。断面は逆台形を呈し、底面の勾配から見て水は南東から北西方向へ流れていると思われる。覆土は粘土とシルトによって形成され、緩やかな流れがあったことを窺わせる。溝の中からは、自然木片類と共にある程度の間隔をもって多量の土器が固った状態で検出された。層位的には溝底よりやや浮いた状態で出土しており、溝が一定程度機能した後に施棄されたものである。出土した土器は比較的完形に近いものが多く、一部穿孔されたものや意識的に口縁部を打ち欠いたと思われるものも検出された。出土土器のあり方及び出土状態等から判断し、溝に関する祭祀を行なった痕跡ではなかろうか。あくまで想像の域を出るものではないが、溝を廃絶する際にこのような祭祀が行なわれたとも考えられる。いずれにしろ多量の土器が検出される点から見て、集落中心部に近接する溝のようである。覆土を見るかぎりにおいては、水の流れはかなり緩やかであったと思われ、灌漑用の幹線水路としての機能を想定するには難点が残る。集落内を走る、排水溝としての機能を想定したい。出土した土器から判断すれば、土器による時期区分のⅢ期に相当する。

出土遺物

〔土器〕(第235~237図、図版183~188)

先述したように、出土状態から見れば極めて同時性の高い資料であろう。ここでは残存状態の良好な資料を、任意に38点抽出した。ここに提示した土器は、全体の約7割に相当する。器種の分類は以下のとおりであった。

壺B₁類(C 287・C 288)、壺B₂類(C 297)、壺C類(C 306)、壺D類(C 298)、壺F₁類(C 291・C 293)、壺F₂類(C 296)、壺G類(C 289・C 295)、壺底部(C 290)、壺体部(C 292・C 294)、壺A₂類(C 305)、壺D類(C 301)、壺E類(C 299)、壺G₁類(C 300・C 303)、壺G₂類



第234図 C地区南端部古墳時代前期(庄内式) 造構平面及び土層断面図

(C302・C304)、鉢A類(C308)、鉢B類(C307)、台付鉢(C314)、壺(C309)、器台A類(C322～C324)、器台B類(C318)、器台脚部(C319～C321)、高杯A類(C311・C312・C315)、高杯B類(C313)、高杯D類(C316・C317)、手焙形土器(C310)。

溝から検出された資料であるが、前述したとおりほぼ同一時間幅で捉えられる一括資料の可能性が高い。その点から判断して、C地区の土器による時期区分Ⅱ期の基準資料と考えられる。C301及びC315に新しい特徴が観察されるが、その他の資料は型式学的観点から見てもほぼ同様な時期であった。

祭祀に使用されたと思われる土器は、C294、C296、C310である。C294は口縁部を欠損する壺の体部であり、外側からの打撃による焼成後穿孔が、体部中央に一箇所認められた。C296は小形の二重口縁広口壺になると思われる。C294同様口縁部を欠損している。出土状態は、比較的溝底に近い部分で口縁を下に向けて検出された。兼のようなもので焼成後穿孔された小孔が、体部下方に2個認められる。両者とも口縁部が欠損しており、意識的に打ち欠いた可能性が大きい。穿孔のある土器は、馬場川遺跡の井戸からも出土している。⁽⁶⁾馬場川遺跡の場合、壺の体部中央に穿孔が見られた。C310は手焙形土器であり、本書第Ⅶ章第7節で詳説するが、祭祀に使用されたものであろう。

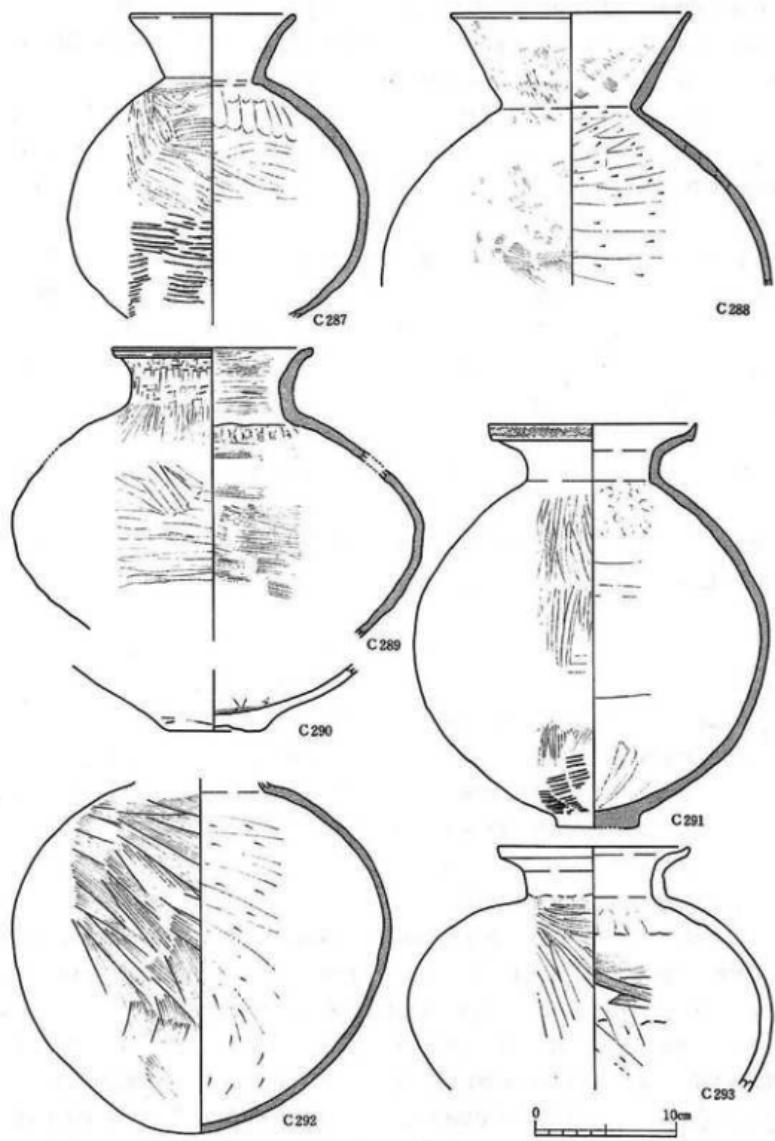
C S D320 (第234図、図版68・69) C S D319の西肩に取り付く、ほぼ南北方向の溝である。幅1.4～2.2mあり、検出面から溝底面までは平均0.1mであった。浅めの溝であるが、遺物の出土状態から考えて掘り込み面はもっと上にあった可能性が強い。断面逆台形を呈し、底面の勾配からみて水は南から北へ流れていたと思われる。覆土は粘土とシルトによって構成されており、南側部分で土器が多量に出土した。またこの部分は、暗青灰色粘土の間層を挟んで下層に土坑(C S K308)が存在する。覆土の堆積状況から判断すれば、水の流れはかなり緩やかであったと思われる。C S D319と接続しており、両者が一体となって集落内の排水溝としての機能をもつものではなかろうか。時期はC S D319とはほぼ同時期であるが、下層出土の土器に若干古いものがあった。土器による時期区分のⅡ期後半からⅢ期にかけて營まれた溝であろう。

出土遺物

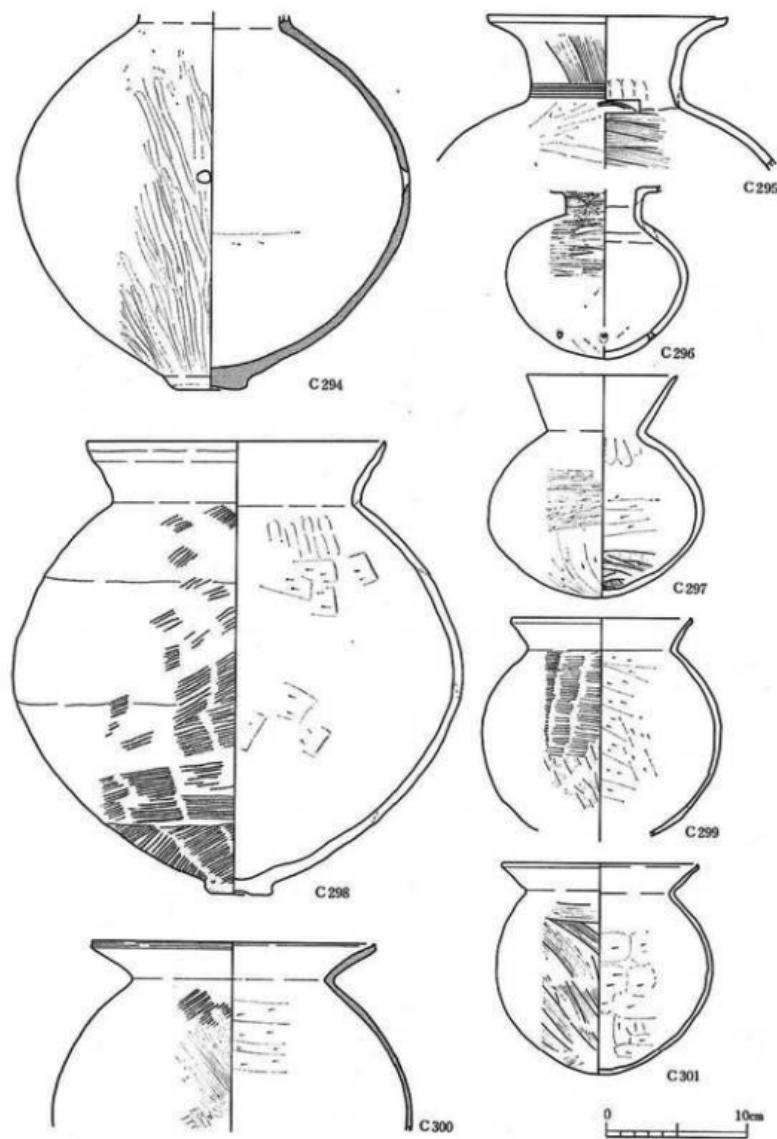
〔土器〕(第238・239図、図版181～183)

ここでは我の良好な10点を、任意に抽出した。器種の分類は、壺B₁類(C275)、壺D類(C272)、壺E類(C273・C274)、大形片口付鉢(C279)、器台C類(C277)、高杯D類(C276)、製塙土器脚台部(C278)、壺G₁類(C284)、壺G₂類(C282)である。

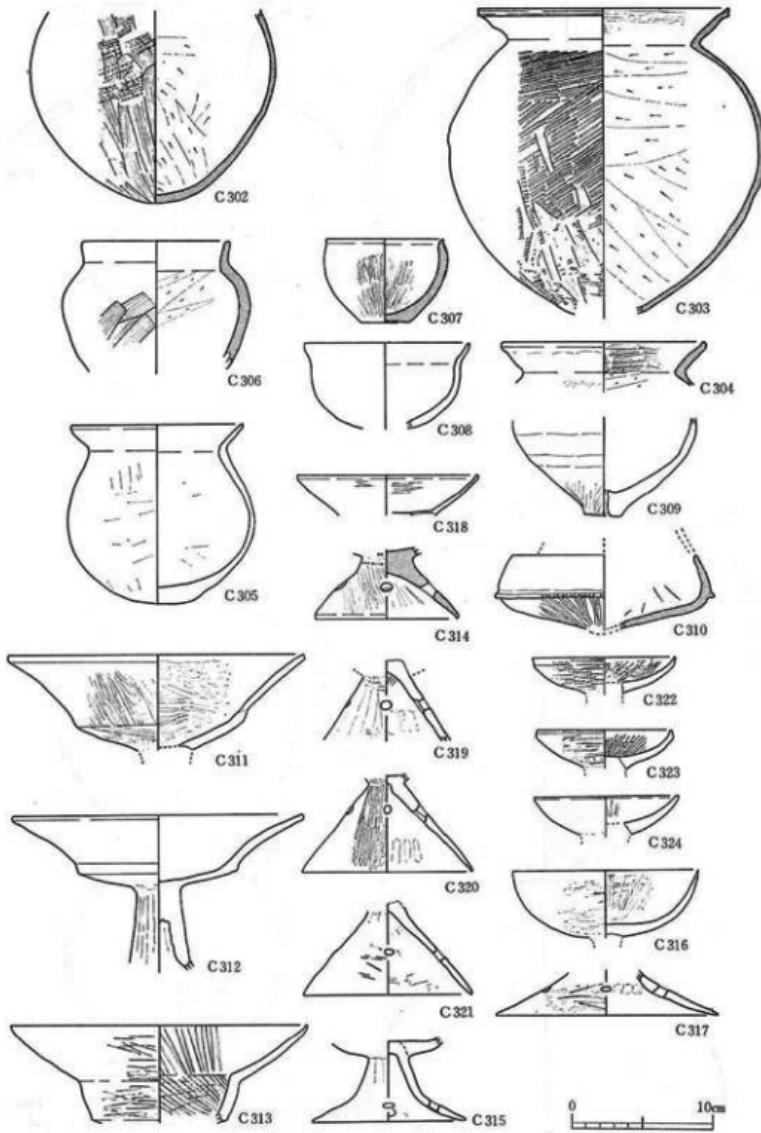
これらの土器はほとんど溝の南端から検出され、レベル的に見て上下2層に分けられる。C272～C277は上層から検出され、C284は下層出土であった。C278、C279、C282は下層に近い部分から出土している。時期的にはC284が土器による時期区分のⅡ期後半、それ以外はほぼⅢ期に相当すると考えられる。C284の特徴は、体部外面に細い叩き目を施した後、粗い刷毛目を肩部から体部下間にかけて加えている点にある。またプロボーションの面でも、口縁部が「く」



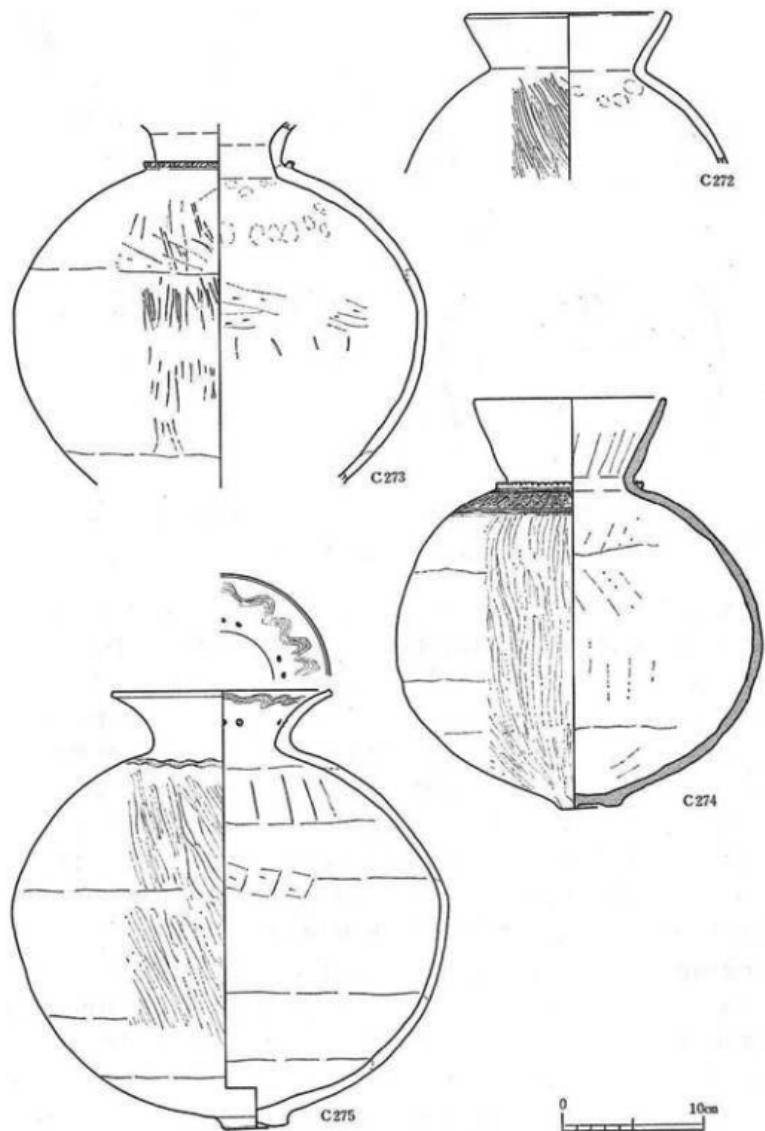
第235图 C S D319出土土器(1)



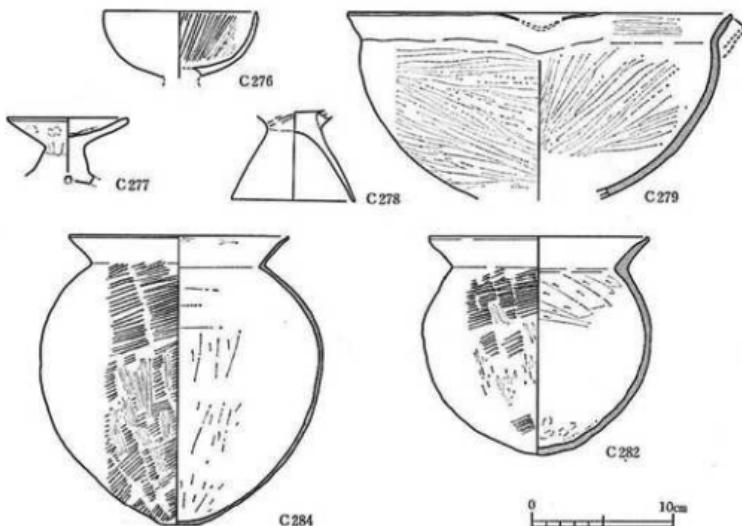
第236図 CS D319出土土器(2)



第237図 C S D319出土土器(3)



第238図 C S D 320出土土器(1)



第239図 C S D320出土土器(2)

の字状に強く外反し、底部に小さな平底状の面をもっていた。生駒西麓産庄内式壺の初期に属する資料である。C 278は製塙土器の脚台部破片である。赤褐色を呈し、胎土には長石及び「くさり礫」と思われる赤色粒を多量に含んでいた。胎土の特徴から見て、和泉地域で作られたものようである。成形の面では脚台部をまず作ってから体部を纏いでおり、体部と脚台部の間に接合痕が観察された。表面の磨滅が激しいため調整の特徴を捉え難いが、叩き目は体部と脚台部の上方にのみ施されていたようである。体部を接合した後で叩き目を加えている。二次的に火を受けた痕跡があり、共伴資料から見て土器による時期区分のⅡ期後半からⅢ期までの間に属するものであろう。最近の調査において、この時期以降の製塙土器が内陸部遺跡から検出される例が増えている。⁽⁸⁾ 本遺跡の南側約1kmに位置する久宝寺遺跡においても、C 278よりやや新しい製塙土器が検出された。以上の点から、内陸部における製塙土器出土例の初期に属する貴重な資料と言える。

C S D321 (第234図、図版68) C S D320の西側で検出された、C S D319に接続するほぼ南北方向の溝である。南端でC S K307と接しており、底面の勾配から見て水はC S D319側からC S K307の方へ流れていると思われる。幅は0.2~0.5mあり、検出面から溝底面までは平均0.1mであった。断面逆台形を呈し、覆土は灰色粘質土である。遺物は土器の細片が若干認められた。溝の機能としては、C S D319からC S K307への送水を主とするようである。以上の点から溝の営まれた時期は、C S D319とは同時期であろう。

C S D322 (第234図、図版68) C S D321の西側には並行に列んで検出された。北端はC

S D319と接続しているが、南端は途中で終わっている。幅約0.5m、検出面から溝底面までは約0.1mの断面逆台形を呈する溝であった。覆土は暗灰褐色粘質土であり、遺物はあまり認められない。底面のレベルに従えば、水は北から南へ流れていると思われる。南端が途中で切れているが、C S K306とつながっていた可能性もあり、時期及び機能の面でC S D321と類似するのではないかろうか。

C S X301（第241・242図、付図19、図版70） 8 Cトレンチで検出された、高まり状の遺構である。8 Cトレンチの中央から北側にかけて高くなり、東側から南側にかけては低くなっていた。そのレベル差は約0.35mである。北端は、調査区外にあたると思われる。当初方形周溝墓の可能性を想定して精査を行なったが、主体部らしい遺構は検出できなかった。高まりの部分は黒褐色土層によって構成されており、人為的な盛土の可能性が大きい。また高まりの北側部分から、完形の甕（C271）が、口縁を上に向けて置かれたような状態で一個体出土した。

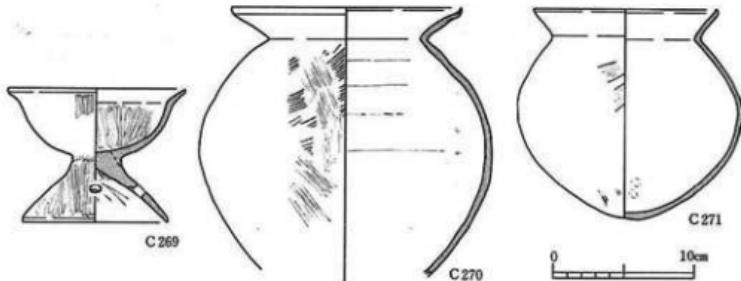
盛土と思われる黒褐色土層を取り除くと、上の高まりとほぼ重なるような形で弧状に巡る小溝（C S D329）が検出された。この溝は幅0.4～0.6mあり、検出面から約0.1mの深さがある。西側が途中で終わっており、断面逆台形を呈する。覆土は暗褐色粘質土であり、土器の細片を若干含んでいた。C S X301を作る際に、先行してC S D329を掘り込んだ可能性が考えられる。

遺構の性格については不明であるが、C S D329を先行して設けているとすれば、かなり企画性の強いものと言えよう。方形周溝墓の可能性については、周溝が確認されておらず、形状にもやや不定形な点から見て難しい。C S D319が埋没してから作られている点や、出土した甕（C 271）の特徴から見て、土器による時期区分のⅢ期に相当するものであろう。

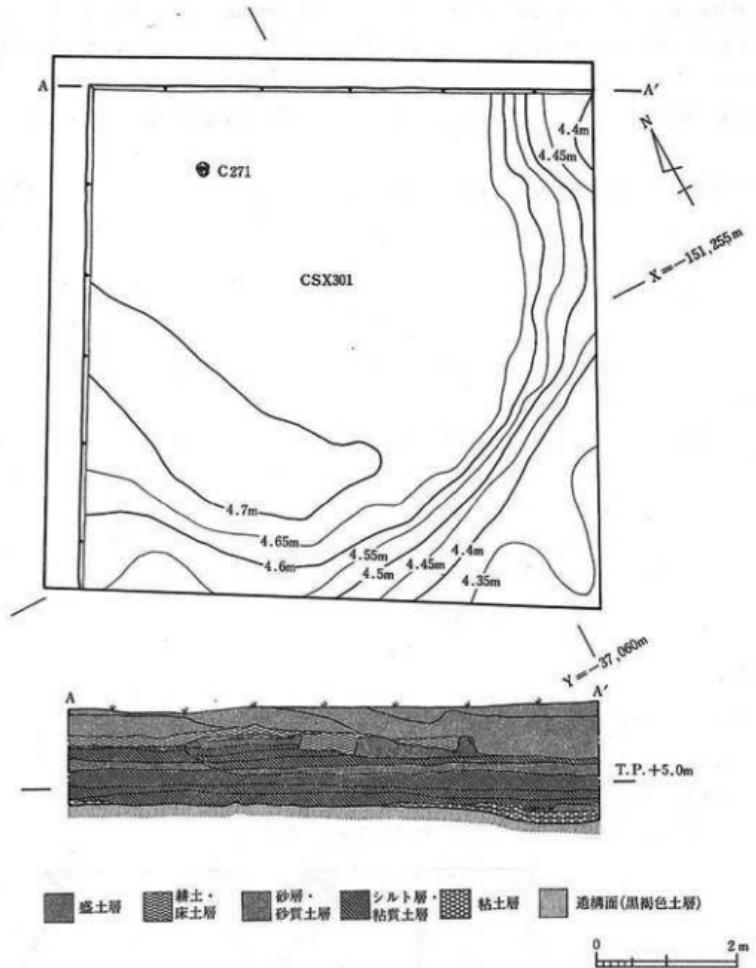
出土遺物

〔土器〕（第240図、図版167）

検出された土器類は、前述したC271を除いてほとんどが細片であった。C271はその特徴から見て、Ⅲ期の甕G₂類になると思われる。完形品であり、穿孔等は施されていない。出土状態から判断すれば、本来正位置で据えられていたものようである。

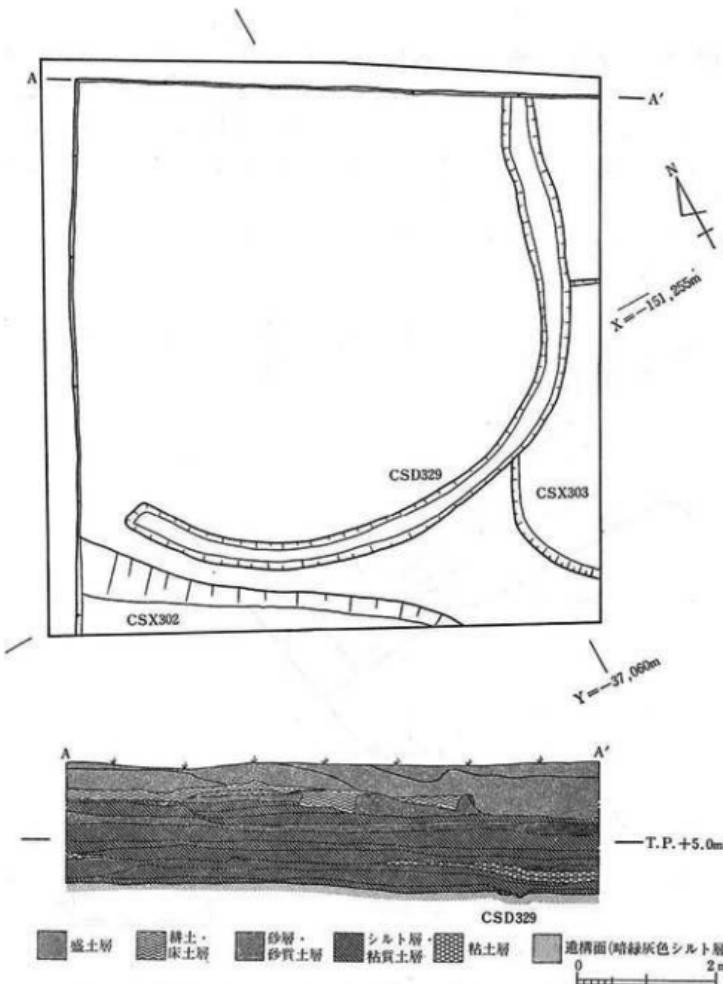


第240図 C地区各遺構出土土器（C269・C S D305出土、C270・C S D318出土、C271・C S X301出土）



第241図 8CトレンチCSX301平面図及び土層断面図

CSX302 (第242図、図版70) 8Cトレンチ西端で検出された落ち込みである。南西側が調査区外にあたるため、全貌を捉えることができなかった。土層の堆積状況から見て、溝になる可能性が大きい。検出面から底面までの深さは、約0.9mであった。覆土は黒灰色粘質土であり、土器片が若干出土している。出土遺物から判断して、土器による時期区分のⅡ期ないしそれ以前になると思われる。

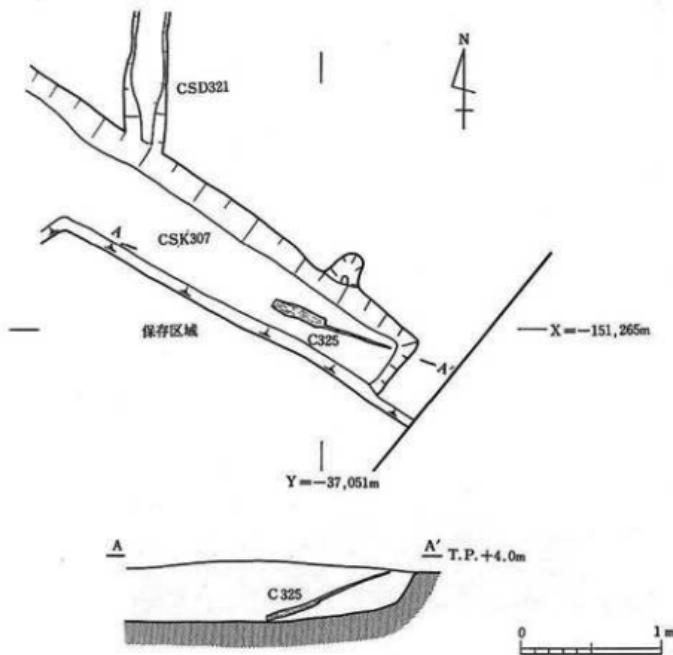


第242図 8CトレンチCSX301下層遺構平面図及び土層断面図

C S X 303 (第242図、図版70) 8Cトレンチ南端で検出された落ち込みであり、切り合い関係から見てCS D329に先行する。Cトレンチ側では明確に捉えることができなかった。覆土は暗褐色粘土であり、検出面から底面までは約0.2mある。埋設過程で流入したと思われる土器の細片が若干検出された。土坑になると思われるが、Cトレンチ側で不明瞭なため断定できない。土器による時期区分の初期以前に相当すると考えられるが、出土遺物が少ないので確定できなか

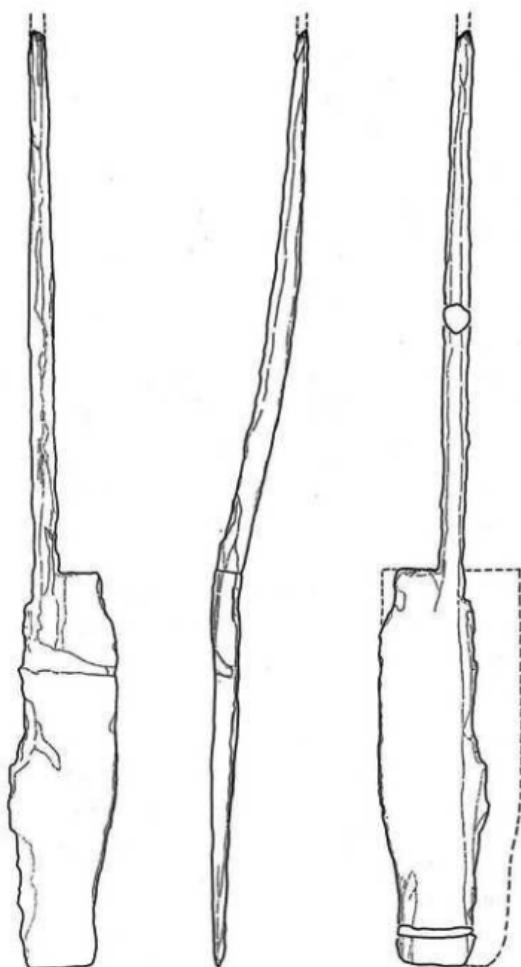
った。

C S K306 (第234図、図版68) C S D322の南側で検出された土坑である。東西に長軸をもつ不整椭円形を呈し、長軸約3.7m、短軸約2.5mを測る。検出面から土坑底面までは約0.65mあり、覆土は粘質土及び粘土によって構成され、中程に炭の層が観察された。遺物が少量しか出土しておらず、ほとんどは埋没過程で流入したものである。C S D322が接続していた可能性もあり、何らかの目的で水を蓄えるために設けられた土坑ではなかろうか。覆土中の遺物と周辺遺構との関係を考えて、土器による時期区分のⅢ期以降に属すると思われる。



第243図 C S K307木製鋤出土状態平面図及び側面図

C S K307 (第234・243図、付図19、図版67・68) Cトレンチ南端で検出された、大きめの土坑になると思われる。南側が美園古墳保存区域に相当するため、全体を検出することができなかった。検出された北東側一辺から見て、隅丸方形になるのではなかろうか。長さ約6.3mあり、覆土は暗褐色粘土によって構成されている。土坑内からは東端で鋤が1本検出され(第243図)、それ以外では土器の細片が若干認められた。C S D321が接している点から、C S K306と同様に水を蓄えるための土坑とも考えられるが、全貌が明らかでないため推測の域を出ない。検出された土器類から見て、土器による時期区分のⅢ期に相当するようである。



0 10cm

第244図 C S K 307出土木製器

出土遺物

〔木器〕(第244図、図版255)

東端隅部から、把手を欠損した鋤(C325)が検出された。刃先を下に向けて、斜めになった状態で出土している。土坑が埋まる過程で、施棄されたものであろう。樹種はカシであり、身と柄は一本作りであった。身は長方形を呈し、先端部の幅がやや狭くなっている。刃先の部分はやや薄く作られており、身の上面が若干窪んでいた。また柄には緩やかな反りがついている。庄内式前半に属する貴重な資料と言えよう。

C SK309 (第234図、図版69) 7Cトレンチ南側で検出された、円形に近い土坑である。径約0.6mあり、検出面から土坑底面までは約0.15mであった。覆土は暗褐色粘質土層であり、土器の細片が若干出土している。出土した土器が細片であり明確な時期を決め難いが、CSD319及びCSD320とほぼ同様な時期になるのではないかろうか。

C SK310 (第234図、図版69) 7CトレンチCSD319のすぐ西側から検出された、不整椭円形を呈する土坑である。南北に長軸をもち、長軸約1.5m、短軸約1.0mを測る。検出面から土坑底面までの深さは約0.15mあり、覆土は暗灰色粘土を主にしていた。覆土中からは土器の細片が若干出土しているが、時期決定できる資料は少なかった。CSD319と同時期になる可能性が大きい。やや浅めの土坑であり、性格については確定できない。

まとめ

検出された遺構の数から判断して、C地区における庄内式の中心的な時期と言える。北東側に水田が想定され、その西側縁辺に集落が営まれたようである。庄内式第1期に溝が集中した部分には、この時期も引き続き溝が設けられており、この溝のもつ重要性（灌漑用水路の可能性が大きい）を表わしている。

土器による時期区分のⅢ期ごろの遺構は、調査区南西側に集中する傾向を示す。Ⅳ期以降は北東側に集中するようであり、時期が新しくなるにつれ集落が拡大ないし移動するのではないかろうか。別の視点に立てば、灌漑水路を挟んで複数の集落が同時に存在した可能性もある。出土遺物、遺構の切り合い関係等から判断した各遺構の時期は、第6表のとおりである。(波辺)

註(1) 本書第Ⅱ章第3節参照。

(2) 中村一郎・笠野敏「大市墓の出土品『書陵部紀要』第27号 1976年。

(3) 砂井道・佐藤正則「府中遺跡発掘調査概要Ⅱ」和泉市教育委員会 1978年。

石神治他「和氣」和氣遺跡調査会 1979年。

(4) 本書第Ⅱ章第35表50参照。

(5) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究」第20巻第4号 1974年参照。

(6) 下村晴文・福永信雄・芋本隆裕「馬場川遺跡発掘調査報告」東大阪市教育委員会 1977年。

(7) 才原金弘「東大阪市内出土の製埴土器」「東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度」東大阪市遺跡保護調査会 1980年。

(8) 尾谷雅彦氏の御教示による。

土器により 時期区分 遺標	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期
C S D 311		---	
C S D 312	---	---	
C S I 301	---	---	
C S K 303	---	---	
C S K 304	---	---	
C S D 313	---	---	
C S D 314	---	---	
C S D 315	---	---	
C S K 305	---	---	
C S D 316	---	-----	
C S E 301	---		
C S D 317	-----		
C S D 318	-----	---	
C S D 319	---		
C S D 320	---		
C S D 321	---		
C S D 322	---		
C S X 301		---	
C S X 302	---		
C S X 303	---		
C S K 306	---		
C S K 307	---		
C S K 309	---		
C S K 310	---		

第6表 C地区庄内式第2期遺構存続期間

(4) D・E地区

古墳時代前期（庄内式期）の面は3面を検出した。下層より第Ⅰ面、第Ⅱ面、第Ⅲ面とする。第Ⅰ面は弥生時代後期と推測されるが、一応古墳時代前期の項で記述する。遺構は弥生時代の遺構番号を使用し、記述した。遺構は第Ⅰ面、第Ⅱ面、第Ⅲ面ともにD地区に集中し、遺物も北半部にかけて多く出土する。地形的には、D地区X = -151,300より北側が低く傾斜し、南へ行くに従って徐々に高くなっている。層位は複雑で下層遺構の状況により場所によって異なり、D地区の北半部は粘土層とシルト層が基層となるが、地区中央部では下層に溝等の遺構があり、シルト層中に礫が多く混入している層である。

包含層

D地区を全体に黒色のシルト層が覆う。厚さは約0.2mを測り、特に地区中央部では下層の影響により粘質砂質土的である。

出土遺物

〔土器〕(第266・271・283・284・253・254図、図版204・207・210・213・217・222)

壺 D088は、口縁部に鋸齒文を施し、にぶい橙色を呈する。胎土はやや粗い。内面に範磨を外面に刷毛目調整を施す。

壺 D086はにぶい黄橙色、D089は赤褐色を呈する。胎土はいずれも粗い。D089は口縁部まで叩き目が見られ、端部付近はナデで消されている。

鉢 いずれにもにぶい黄橙色を呈する。D090の胎土はやや粗く、底部は指圧によって成形し、端部をつまみ出している。外面は範ナデで、内面は範磨を施す。D098は緻密な胎土である。底部に範削りが見られ、全体的にナデを施す。

高杯 D087は小型であり、煤が付着している。胎土はやや粗い。裾部外面には範磨を施す。また内面には刷毛目調整が見られる。

手焙形土器 D132は開口部の破片である。D135は体部の破片で刻目が施された突帯が貼付けられる。D136は覆部から体部にかけての破片である。体部下半には刻目の施されていない突帯が貼り付けられる。

壺 D147、D148はにぶい橙色を呈し、やや粗い胎土である。D147の口縁端部には沈線が入る。外面は範ナデが施される。D148の口縁部には「双頭渦文」の浮文が見られ、浮文の構成はD235と同一である。内外面は範ナデが施される。D149は生胸西麓の胎土であり、にぶい黄橙色を呈する。内外面にはナデが施される。

鉢 D141は灰黄褐色を呈し、やや粗い胎土である。範ナデが体部外面に施されている。

脚部 D142はにぶい橙色を呈し、胎土は緻密である。範ナデが外面に施される。D145は橙色を呈し、胎土は緻密である。外面に範ナデで、内面には刷毛目が見られる。裾端部は横ナデにより薄く仕上げられている。

鉢 D179はにぶい黄橙色を呈し、やや緻密な胎土を持つ。全体にナデで調整を施し、内面に

は範ナデを認める。

壺 D191は口縁端部及び頸部に竹管押圧凹形浮文を貼り付け、刷毛目調整を施す。D187は体部外面に丁寧な範磨を施す台付壺である。体部内面にはナデを施し、胎土は緻密である。

壺 D189は球形化した体部に粗い叩目調整を施す。体部内面はナデを施す。

高杯 D188はD185に脚部を接合した形態を呈する。杯部外面に範磨、脚部外面には範ナデを施す。

鉢 D185は内外面全体に範磨を施し、底部を凹ませている。D190は体部外面に範削りを施す。

D184は口径5.4cm、器高3.1cmを測り、全体にナデを施し、胎土は緻密で手づくねである。

手培形土器 D186はD136と形態等が似かよっているが、D186の体部はD136よりも丸味が強く、外面はナデで、内面は刷毛目調整を施し、胎土は石英、長石粒が目立つ。

壺 D240は灰白色を呈し、粗い胎土である。口縁端部にはD237と同一構成の「双頭渦文」の浮文を施す。

鉢 D238はにぶい黄色を呈し、粗い胎土である。底部は指圧により、端部をつまみ上げて成形している。体部中位には黒斑が認められる。また、口縁端部には粘土を貼り付けて端部としている。

脚部 D234はにぶい赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。叩目は指圧により一部消されている。内面には粗い刷毛目、範ナデが施されている。

第Ⅰ面

D・E地区

庄内式期第Ⅰ面の層は、庄内式期第Ⅱ面・第Ⅲ面又は弥生時代中期の層と同様複雑になっており、弥生時代中期の遺構面と重複している。遺構としては、2Dトレンチで井戸を、D・3D・6Dトレンチで溝を検出した。また、DS D216内では甌を確認した。他に落ち込み等も確認している。

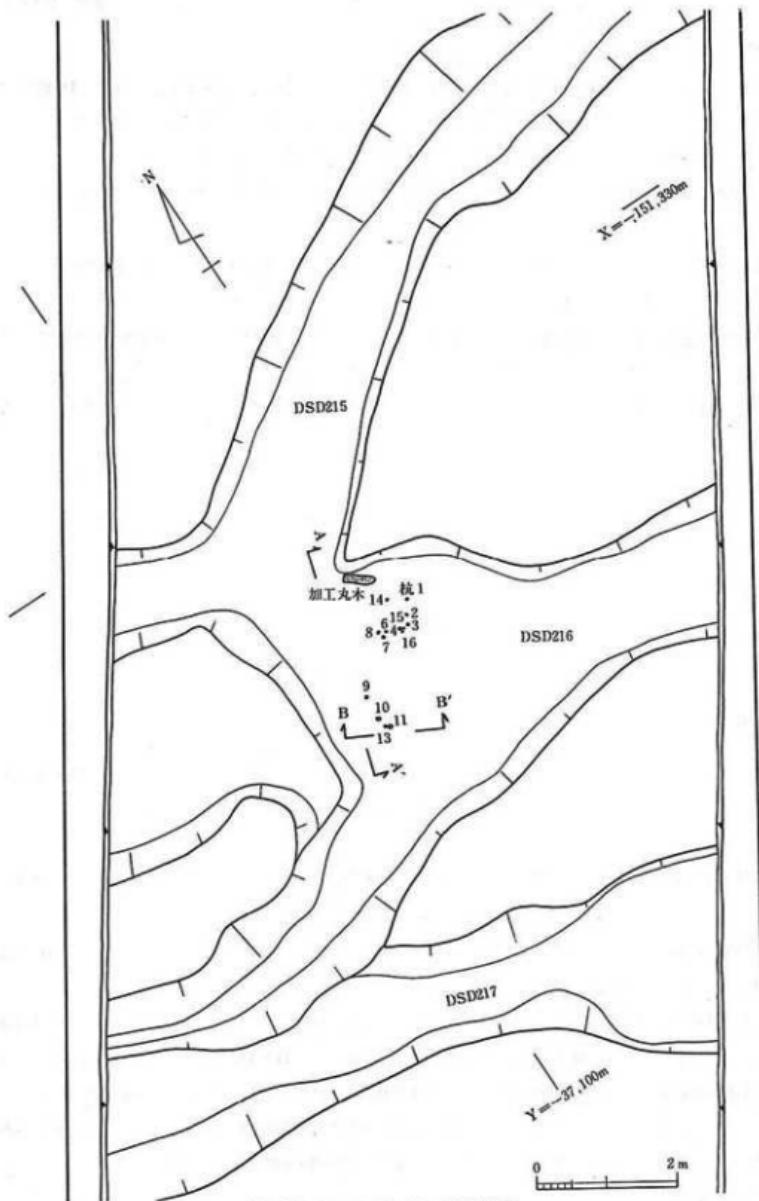
DS D214 2Dトレンチ西隅に位置する。主軸は北西一南東におき、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。遺物として甌の破片が出土した。

DS D215 D地区中央部から3Dトレンチに位置し、主軸をほぼ東西におく。幅約1.6~2.7m、深さ0.2~0.6mを測る。遺物は甌、高杯等の破片を検出した。

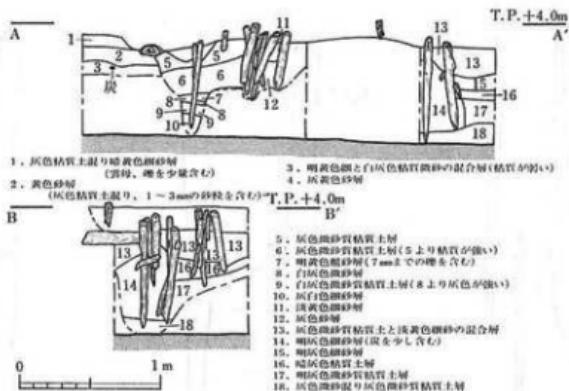
DS D216・217 (第246図) Dトレンチ中央より6Dトレンチにかけて位置する。DS D216の主軸は東西におく。DS D215の東側より北東へY字状にDS D217が伸びている。両溝とも幅約1.6~3.7m、深さ約0.1~0.3mを測る。DS D215とDS D216との間に杭を16本検出し、しがらみと考えられる。杭は、太さ約3~6cm、長さ約0.2~0.8mを測る。又、加工丸木も見られる。溝中より甌の破片を検出した。なお、錐3点(D082・083・084)が出土した。

出土遺物

〔木器〕(第247図、図版257)



第245図 D S D 215・216・217造構図



第246図 D S D 216断面図

D082とD083は着柄の鎌で、D084は身と柄が一本作りの鎌である。D082とD084は身の肩部が水平を成す、スコップ状のものである。D083は両肩部がやや下り、D082とD084よりも身幅が狭く身の先端部を水平と成すものである。いずれもカシの材を使用している。

D S E201 (第248図) D S D 214の北側に接して位置する。平面形は不整な円形で、径約1.4×1.2m、深さ約0.8mを測る。遺物として上層は木製品、中層は斧・又鎌・他木製品・炭化物・獸骨、下層は甕の破片・又鎌・貝、最下層は木製品を検出した。

出土遺物

〔木器〕 (第249図)

D085は、台部は一部欠損しているものの、握部は良好な状態である。全長0.52mを測る。断面は円形を呈する。斧の柄は台部と握部が一本で幹と枝を利用し、握部は反っている。台部と握部の末端に加工痕をとどめており、全体的に丁寧な作りである。握部の末端に焼いた痕跡が見られる。台部の状態から推測して鉄斧の柄の可能性が考えられる。材質はサカキである。

D P201 (第251図) Dトレーニチに位置し、径0.3m、深さ0.1mを測る。ピット内より柱根と、根がらみと考えられる丸木材を検出した。柱根は径0.13m、根がらみは径4~5cmを測る。本遺構の周囲には柱穴を確認していないので、性格は不明である。

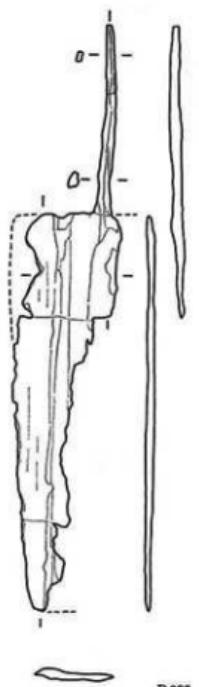
第Ⅱ・Ⅲ面

第Ⅱ面の遺構としては、溝、土坑、杭列、落ち込み等があり、第Ⅲ面の遺構としては、井戸、溝、土坑、落ち込みがある。

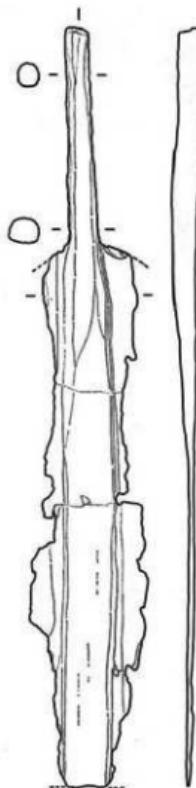
Ⅲ面

第Ⅲ面の遺構としては、溝、土坑、杭列、落ち込み等がある。

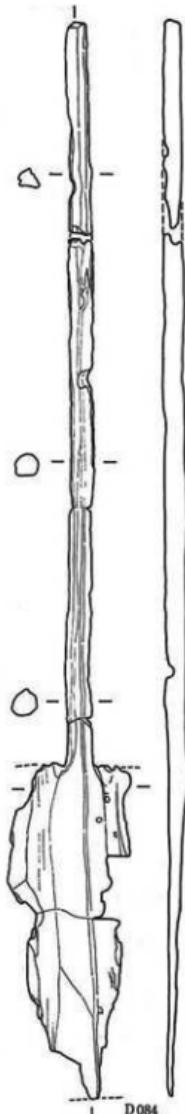
出土遺物



D 082



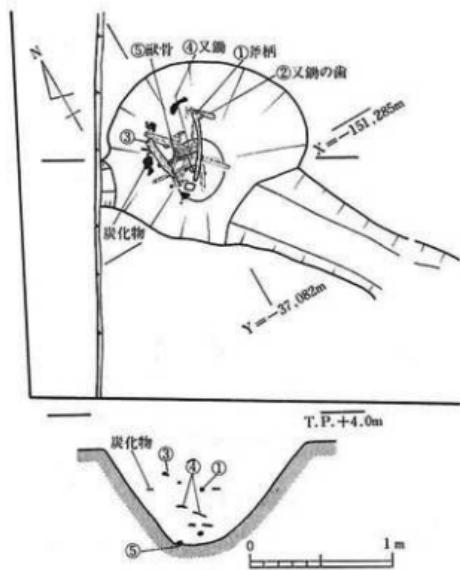
D 083



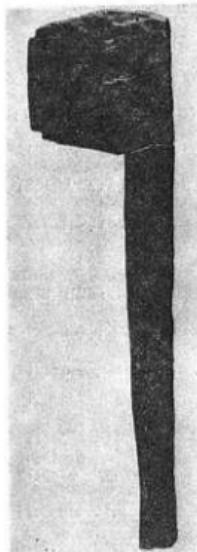
D 084



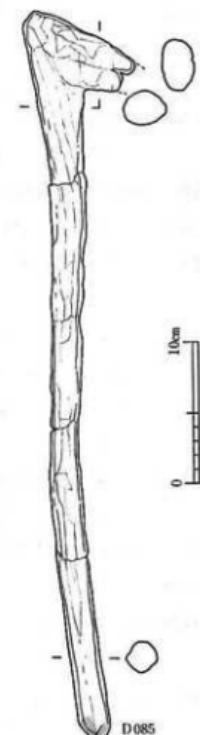
第247図 D S D 216出土木製品



第248図 DSE 201遺構図



第250図 DSE 201出土木製品



第249図 DSE 201出土木製品



第251図 庄内I面出土土器

〔土器〕(第265・266・270・271図、図版
205・206・221)

壺 D099はにぶい黄橙色を呈し、や
や粗い胎土である。

脚部 D100は生駒西麓の胎土である。灰黃褐色を呈し、範ナデを施す。D102は灰黄色を呈し、やや粗い胎土である。一部に範磨が見られる。

手彫形土器 D104は文様を施し、緻密な胎土。外面は粗い刷毛目、底部に叩目、内面に範ナデを施す。開口部に煤が付着。D133は開口部に円形浮文、D146は開口部に穿孔を施す。

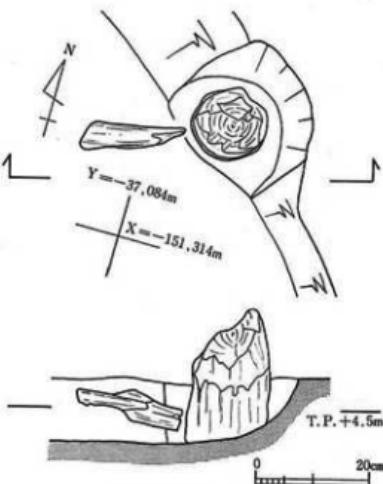
壺 D129は竹管文、竹管浮文、波状文、直線文を施した装飾壺である。にぶい褐色を呈し、緻密な胎土である。体部中位に黒斑を認める。D124はにぶい黄橙色を呈し、やや粗い胎土である。口縁端部、頸部には不規則な刻目、口縁部外面には範磨を施す。なお、口縁端部は刻目により肥厚している。D125は淡橙色を呈し、胎土はやや粗い。内外面に範磨を施す。D131はにぶい橙色を呈し、粗い胎土である。口縁端部には刻目を施す。口縁部には二個一対の竹管浮文4組見られる。また粗い刷毛目が外面に、内面には範磨を一部施す。

壺 D123は暗褐色を呈し、粗い胎土である。全体に煤が付着しており、内面には炭化物が認められる。叩目は粗い刷毛目により消されている。D126はにぶい黄橙色を呈し、やや粗い胎土である。口縁部内面には凹線を巡らす。

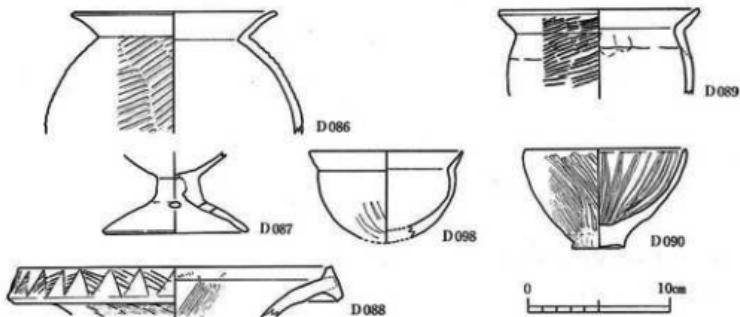
高杯 D122はにぶい黄橙色を呈し、やや粗い胎土である。

器台 D120は生駒西麓の胎土であり、橙色を呈する。透し孔は3孔である。また、黒斑を眉端部に認めた。

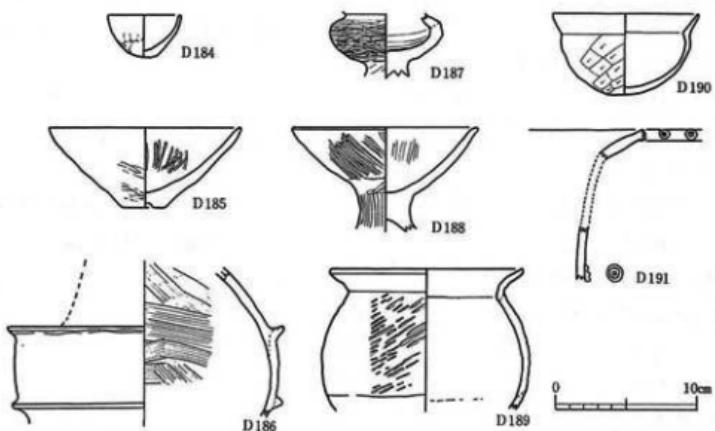
D S D 301 D地区の北端部に位置し、主軸を北西—南東方向におく。溝は一方の肩部を検出したのみであって、幅は不明である。推定ではあるが幅約2mを測ると思われる。厚さは0.5~0.8mを測る。出土遺物としては台付鉢、壺、鉢等が出土しており、布留式期の遺物も検出して



第252図 DP 201遺構図



第253図 D地区包含層出土遺物



第254図 2Dトレンチ包含層出土遺物

いることから、庄内式期から布留式期にかけて流れたようである。

出土遺物

〔土器〕(第271図)

甕 D150、D151は生駒西麓の胎土である。黄褐色を呈する。D151は口縁部を肥厚させ、端部をつまみ出す。

D S D 302 1Dトレンチ北東隅に位置する。主軸はほぼ南北に置く。北側ではD S D 301、南側ではD S D 304にそれぞれ切られている。幅約0.6m、深さ約0.1~0.3mを測る。遺物として甕、壺、高杯の破片が出土した。

D S D 303 D S D 302とほぼ平行0.2~0.4m西へ位置する。D S D 302と同様北側でD S D 301、南側ではD S D 304に切られている。幅約1m、深さ約0.2~0.5mを測る。

D S D304 1Dトレンチ、Dトレンチ北側、2Dトレンチにかけて位置し、Dトレンチ地区のはば中央で約120°北へ曲っている。主軸は1Dトレンチ—Dトレンチではば東西方向におき、Dトレンチ—2Dトレンチではば南西—北東方向に置く。幅約2~3m、深さ約0.4mである。2Dトレンチに於ては、南西—北東を軸とし、幅約0.3~1.4mの溝3本と接している。又、Dトレンチの溝の北側にピットが數個見られた。遺物は、小型鉢、壺、甕、高杯等を検出した。2Dトレンチ内では特に甕、壺、高杯等が見られる。

出土遺物

〔土器〕(第255・256・271・283図、図版207・210・214~217)

壺 D218は浅黄色を呈し、口縁端部に二個一対の円形浮文を6組貼り付ける。また、頸部から順に直線文、波状文と繰り返して施文している。条数は6条を数える。胎土は緻密である。D225も同様の色調を呈し、内面は黒褐色を呈する。頸部に突帯を貼り付け、6条の直線文、波状文を施す。更に下段の波状文の両側に竹管文を施す。体部中位に黒斑が認められる。内面には範ナデで調整を施す。その他、底部は浅く凹ませている。

短頸壺 D219は橙色を呈し、やや粗い胎土である。体部中位に黒斑が認められる。外面は粗い範ナデを施す。内面は範削り後、丁寧なナデ調整を施す。底部は小さな平底を呈し、両側から浅く凹ませている。

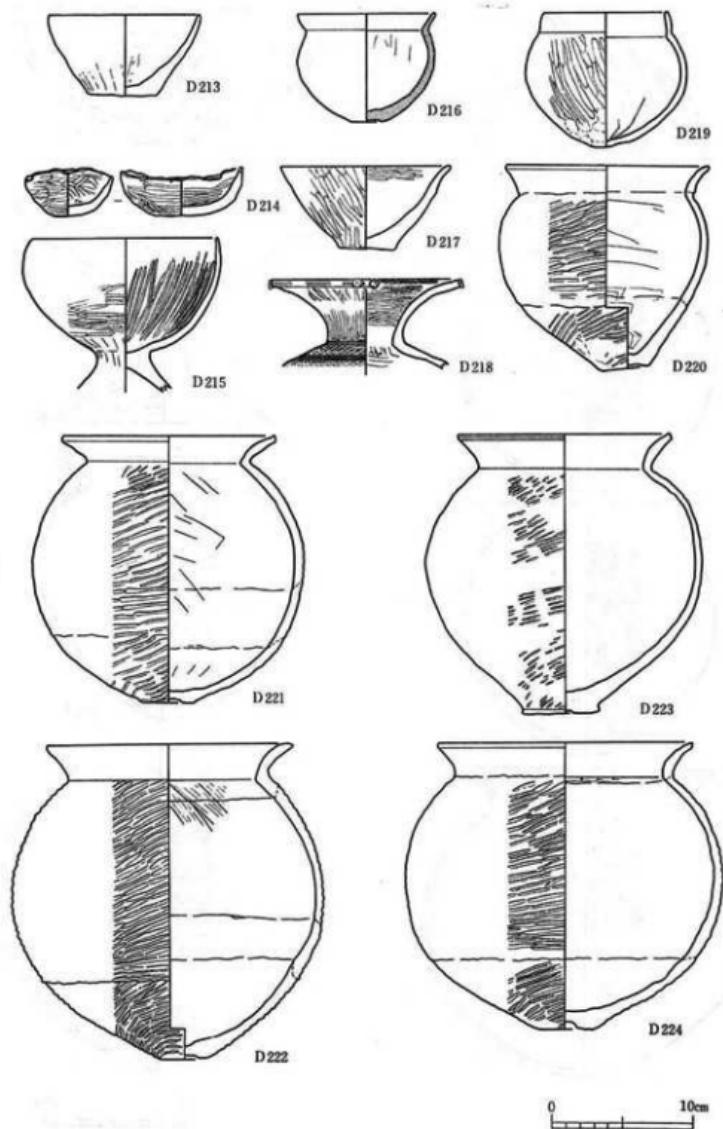
甕 いずれも胎土は粗い。生駒西麓の胎土を持つ甕は、にぶい黄橙色(D226~D228、D231)と灰白色(D232)を呈する。全体に煤が付着している。この中でD228、D232は口縁端部に浅い凹線が巡る。また、D228の口縁端部は若干肥厚している。D220~D224はにぶい橙色を呈し、D222の様に底部中央を凹ませている。更に、D222の底部には、斜格子状に沈線が引かれている。また、D220を除く他の土器は体部中位に煤の付着が認められる。

高杯 D230はにぶい黄橙色を呈し、緻密な胎土である。範磨、刷毛目調整が施され、脚部内面も丁寧なナデが施されている。

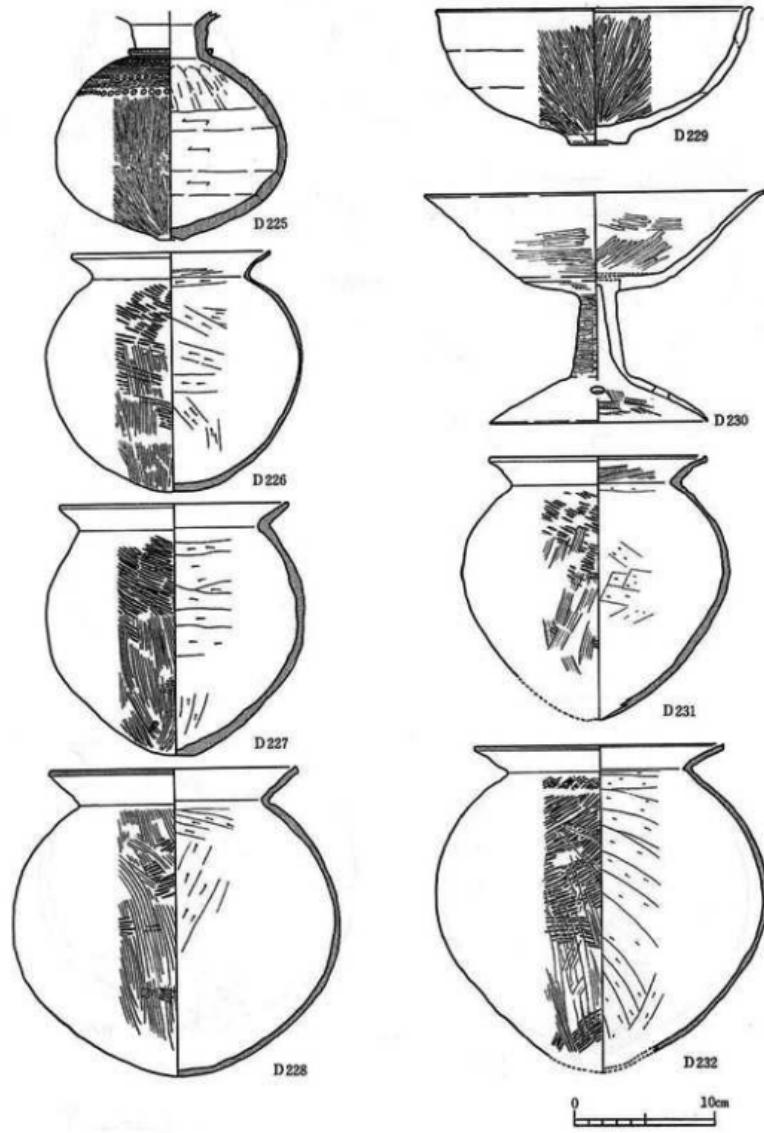
鉢 D213は灰白色を呈し、粗い胎土である。底部には指圧痕が認められる。全体にナデ調整が施される。D216はにぶい黄褐色を呈し、生駒西麓の胎土を持つ。底部を浅く凹ませている。焼成は良好であり、緻密な胎土である。内面に範ナデが施される。D217はD213と同色を呈する。器表面にはひび割れが目立つが、粗い範磨が施されている。胎土は緻密である。また底部は浅く凹ませ、ドーナツ状を呈している。D215は台付鉢で、やや粗い胎土を有する。にぶい黄橙色を呈し、施射状の範磨を施す。また脚部との接合部には範ナデを施す。D229は大型の鉢である。灰白色を呈し、粗い胎土である。体部下半に黒斑が認められる。底部の形態はD217と同じである。

土製品 D214はにぶい橙色の梢円形を呈し、やや粗い胎土である。範磨が施されるが、器表面はひび割れが目立つ。

鉢 D178は指圧痕を底部に認め、その上から丁寧な範磨を施す。にぶい褐色を呈し、胎土は



第255図 D S D304出土土器



第256図 D S D304出土土器

やや粗い。D139は灰褐色を呈し、胎土はやや粗い。口縁端部は横ナデによって整えられている。

D S D 305 D S D 304の南側に0.5~3.0m離れて位置する。主軸はDトレンチで西南西一東北東方向におき、2Dトレンチに至ってほぼ東西方向におく。幅0.9~1.4m、深さ0.23~0.28mを測る。

D S D 306 D S D 317の下層の溝で、主軸はD S D 317とはほぼ同一方向である。幅0.55~1.0m、深さ0.2mを測る。溝底より庄内式土器とともに弥生時代中期の土器も出土した。

出土遺物

〔土器〕(第183図)

D041は弥生時代中期、畿内第Ⅲ様式または第Ⅱ様式に属する壺である。形状、文様から見れば壺A形態に分類されよう。体部には柳描直線文帯、その下端には斜線文が一条巡る。体部中央および側部の2ヶ所に二次的穿孔が見られる。

D S D 307 D S D 306と接して位置する。D S D 317の下層の溝である。幅0.5~0.7m、深さ0.25mを測る。D S D 306と同様に溝部より庄内式土器とともに弥生中期の土器を検出した。

D S D 308 D地区のはば中央部に位置し、東北東一西南西方向に置く。幅0.5~0.9m、深さ0.1mを測る。

D S D 309・310 D地区の南半部に位置し、両者ともにはば東西方向に平行して走る。溝である。D S D 309は幅0.7~1m、深さ0.1mを測り、D S D 310は幅0.6~0.9m、深さ0.15mを測る。

D S K 301 D・1Dトレンチの北端に、D S D 301の南側に接して位置する。平面形は不整な長方形を呈する。大きさは上縁で1.2~1.7×4.5m、深さは約0.6mを測り、更に底部に大きさ2.0×1.7m、深さ0.1mの方形の穴を掘り凹めている。長辺の主軸は北西一南東方向におく。土坑内の埋土は上層より①暗灰色シルト層(中央部に多くの粘土がブロック状に混入)、②灰オリーブ色シルト層、③暗青灰色シルト層、④黒褐色シルト層、⑤暗オリーブ灰色シルト層である。上層(第Ⅲ面)で木棺状木製品を検出したが、土層断面等の観察により本遺構に伴わないことを確認した。出土遺物は弥生式土器片を数片検出したのみであった。

出土遺物

〔土器〕(第285図、図版217)

鉢 D233は灰黄色を呈し、やや粗い胎土である。底部は指押圧で端部をつまみ上げ、ナデ調整を施す。

高杯 D241、D242は同一個体で橙色を呈し、粗い胎土である。全体的に笠ナデ状の磨を施す。裾端部には不規則な刻目調整を施す。

D S K 302 D地区の北端部、木棺状木製品の西側に接して位置する。平面形は梢円形を呈し、大きさ1.78×0.9m、深さ約0.3mを測る。主軸はほぼ南北方向におく。土坑は段状に掘られている。遺物は甕、壺等の破片が出土した。

D S K 303 D地区的北端、D S E 301の南側に位置する。平面は不整な円形を呈する。大きさ

は径約2mを測り、深さは0.62mを測る。遺物は甕等の土器が出土している。

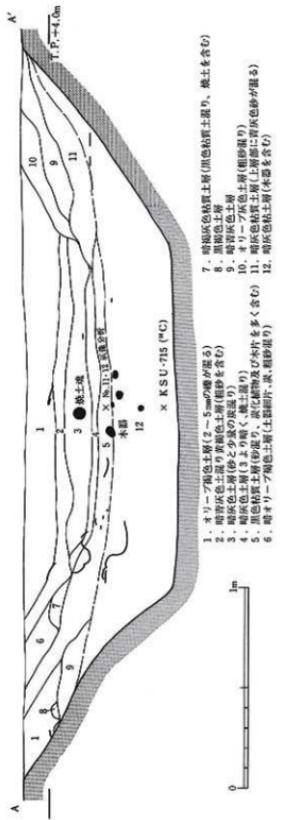
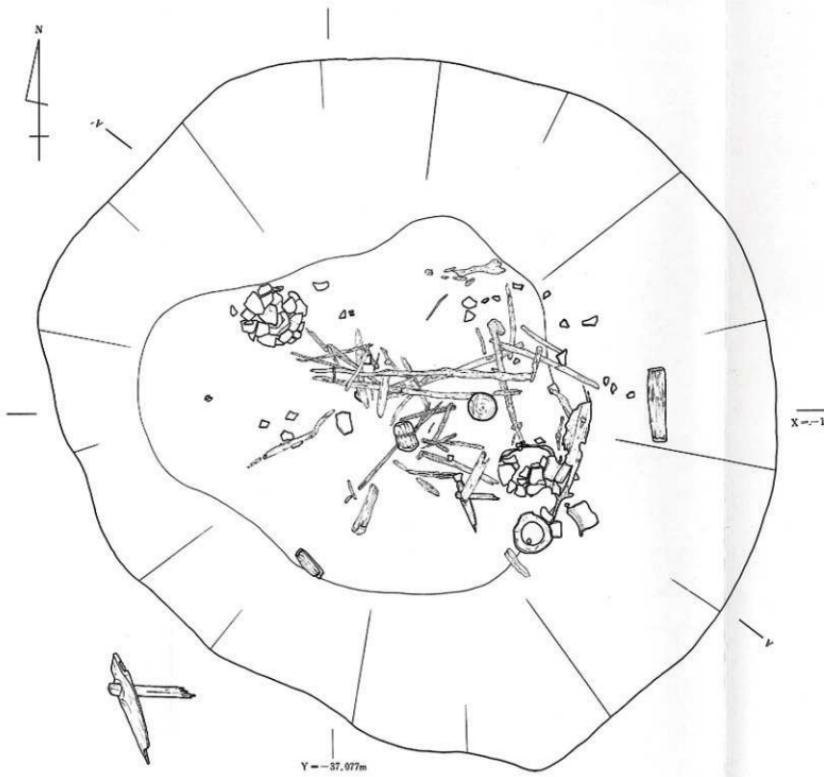
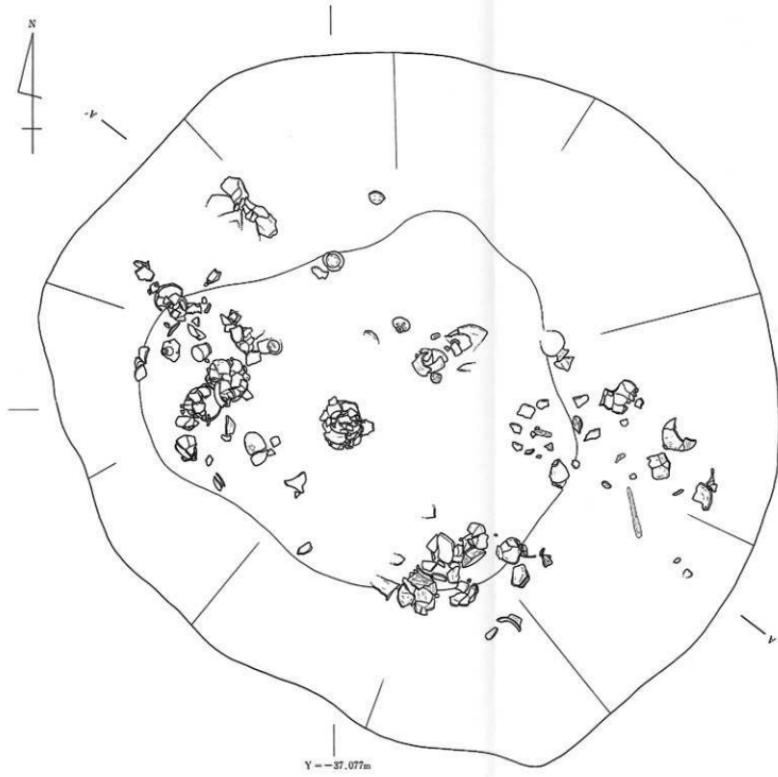
D S K 304、305 D S K 306に接して位置し、不整な円形を呈している。D S K 304は径約1.0m、深さ0.2mを測り、D S K 305は径約1.5m、深さ0.24mを測る。D S K 306に比して浅く、また出土遺物も少ない。

D S K 306 (第257図) 2Dトレンチの北端に位置し、D S K 304・305と接している。D S D 301とは約2m離れている。平面形はほぼ円形を呈し、上縁径 3.9×3.2 m、底部 2.1×1.8 m、深さ約0.8mを測る。断面はスリ鉢状を呈する。埋土は4層に分けることが出来、上層より、①オリーブ褐色土層(粗砂混る)、②暗青灰色土層(炭混る)、③暗灰色土層(焼土塊、炭混る)、④黒色シルト粘質土層(炭、炭化植物、木製品、種子類を含む)である。遺物は、土器、石器、種子、骨片、焼土塊等が出土した。特に土器と木製品は多く出土している。土器は甕、甌、鉢、高杯、器台等の器種に亘っており、山陽系の土器も見られる(D 200、D 208)。なおD 203の中には桃の種核が入っていた。木製品は鉗(D 212)、鋤(D 211)、脚付容器(D 210)、楕ノ子(あるいは浮子、D 209)、有孔板材(D 294)、丸木材が出土している。丸木材は径2~3cmを測り、丸木材と丸木材の一端が組状(ワラカツル)のもので結ばれていた。また、丸木材の中には、一端を削っているものもある。

出土遺物

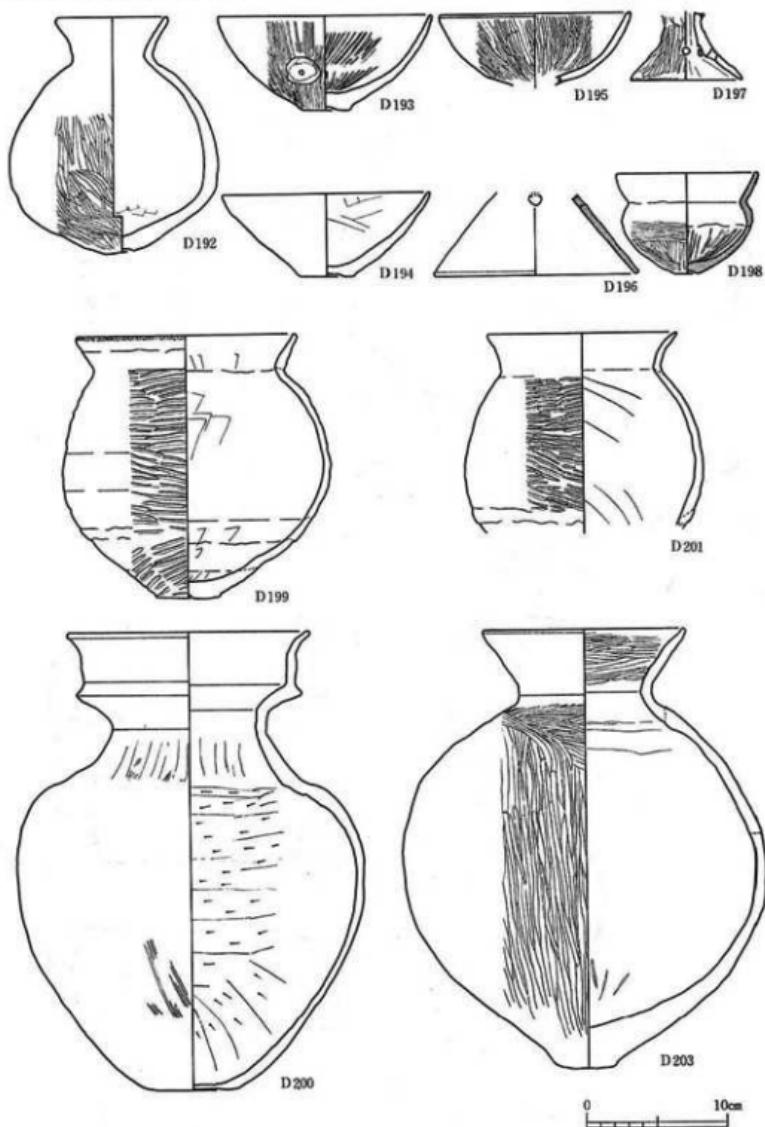
〔土器〕(第258・259図、図版212~214)

壺 D 192は灰白色を呈し、体部上半から口縁部にかけて黒斑が付く。胎土は2mm大の長石粒が比較的目立つ。焼成は良好である。底部は粘土を更に貼り付けて厚くし、小さく底を凹ませている。口縁部は横ナデ。底部内面は窓ナデを施す。D 198は、にぶい褐色を呈し、胎土はやや粗い。口縁部は剥離が激しいが、横方向の窓磨を施す。底部は尖り気味の形態を呈し、底は両側から凹ませている。また胎土中には長石粒が目立つ。D 200は浅黄橙色~灰白色を呈し、体部に径16cmの黒斑が付く。3mm大の長石が多く混入している。焼成は良好である。口縁部は横ナデ、頸部及び体部には縦の刷毛目調整が施され、ナデで消されている。内面頸部は縦のナデを施し、体部、底部は窓削りにより薄く仕上げられている。また頸部から肩部にかけて無い段が付く。D 203はにぶい黄橙色を呈し、体部から底部にかけて煤が付着する。胎土中には1mm大の石英粒が若干目立つが、精良な胎土である。焼成は良好。口縁部は横ナデ後、内外面に窓磨を施し、体部から底部にかけて縦の窓磨を施す。底部は補強粘土で厚く仕上げられている。内面は窓ナデ調整で丁寧に仕上げられている。D 204は赤橙色を呈し、5mm大の長石、石英粒が比較的目立ち、粗い胎土である。焼成は良好である。全体に摩滅しているが窓磨を施す。肩部には5条の櫛描文、9条の波状文を施し、その間に刻目調整を施した突帶を貼り付ける。内面の調整は丁寧な窓ナデを施し、また頸部にはナデを施す。外面部に黒斑を認める。D 206は外面部ににぶい黒橙色、内面は褐灰色を呈し、丁寧な窓磨を施す。内面体部中位から底部は窓削りにより均一に仕上げ、更に丁寧なナデを施す。胎土は緻密であり金雲母、長石、石英粒が混入している。焼成は良好である。



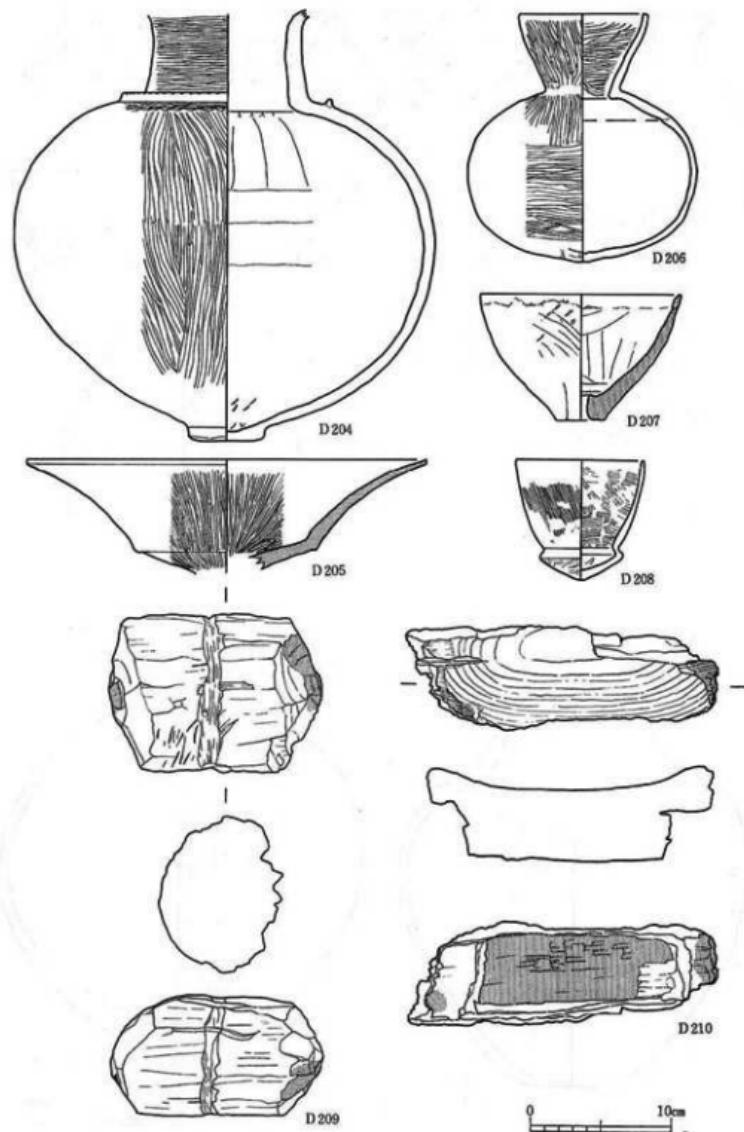
第257図 DSK306遺構図

底部に黒斑を認める。また底部には小さく突出した平底を認める。D208は褐灰色を呈し、胎土



第258図 D S K 306出土土器

中に2mm大の長石粒を認めるが緻密であり、焼成も良好である。口縁部の刷毛目は横ナデによつ



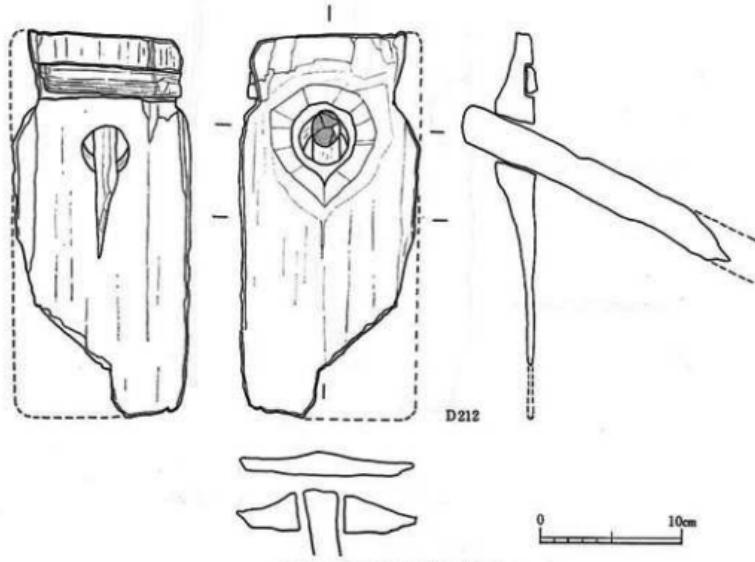
第259図 D S K 306出土遺物

て消されている。また底部は尖るが小さな平底を持つ。

壺 D199、D201は灰赤色を呈し、特にD199に灰赤色が強く認められる。D199は全体に煤が付着しているが、D201は体部下半に煤の付着が認められる。D199の口縁端部に刻目を施す。D199、D201は体部と底部との接合部に粘土紐を貼り付けて補強している。また全体的にはD199が粗い作りであり、5mm大の長石、石英粒が比較的目立つ。その他D201の口縁部は粗い横ナデを施す。

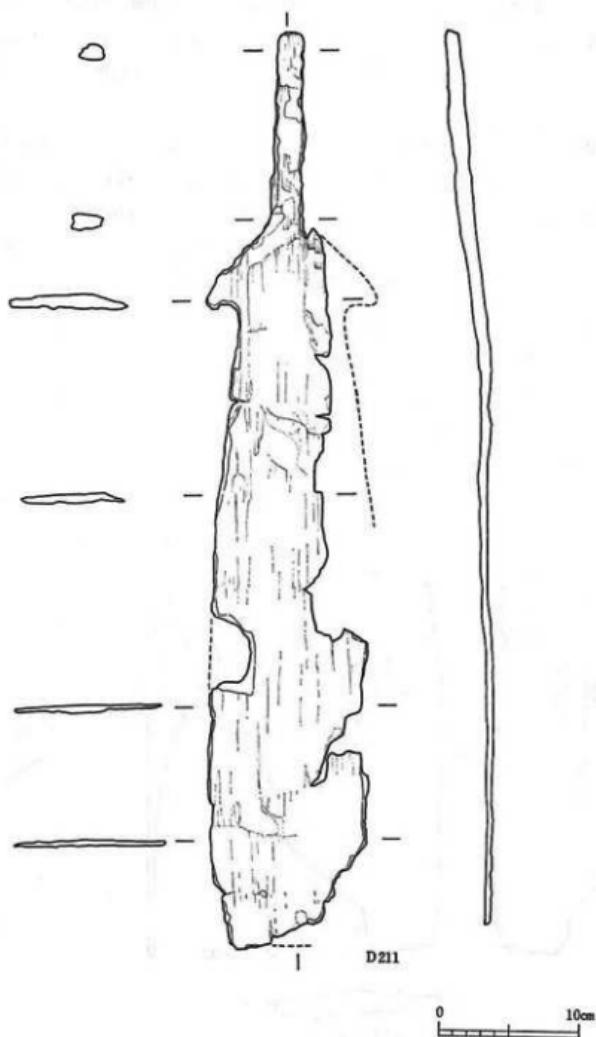
高杯 D205は杯部のみがほぼ完形で出土している。にぶい黄褐色を呈し、2mm大の長石粒が比較的目立つが、緻密な胎土である。口縁端部に黒斑が認められる。D195はにぶい黄褐色を呈し、3mm大の石英粒が少量認められる他、角閃石が微量混入している。D197は3孔の透し孔を施し、裾部は横ナデが施され煤が付着している。にぶい黄褐色を呈し、胎土は緻密であり4mm大の石英粒が少量混入している。内面には左廻りの範削り後、横ナデを施している。

鉢 D193はにぶい黄褐色を呈し、金雲母、チャート、石英、長石の細い粒を含む緻密な胎土である。焼成も良好であり、丁寧な細い範磨を施す。内面は範削りの痕跡を認める。体部には黒斑が有り、剥離痕を認めるが穿孔行為を行なおうとしたかは不明である。D194はにぶい橙色を呈し、5mm大の長石が少量混入し、金雲母も認められる。外面は丁寧なナデ調整。内面は範ナデを施す。D207はにぶい橙色を呈し、やや粗い胎土を持つ。体部外面には黒斑を認める。口縁部は粘土紐を貼り付けて形成し、指圧痕を施し、内外面全体にナデを施す。器台 D196はにぶい褐



第260図 DSK 306出土木製品

色を呈し、やや粗い胎土である。内外面ともに削離が激しく調整は不明である。



第261図 D S K 306出土木製品

出土遺物

〔木器〕(第260・261図、図版258)

鋸 D212は身と柄から成り、身と柄は破損している。身の両側と刃線は、破損しているものの、ほぼ長方形を呈すると考えられる。身の前面には、頭部下2cmの所に幅約2.5cmの浅い溝を削り込み、別木が挿入されている。後面には柄孔の周囲を削り出し、隆起させている。木取りは身が縦木取りの柾目材であるのに対し、前面の溝に挿入されている別木は横木取り柾目材を使用している。なお柄の端部には焼けた痕跡が残る。身と柄の角度は63.5°である。

鋸 D211は平面形態はナスピを縦断に切断した形を呈し、所謂「ナスピ形木製品」あるいは「ナスピ形鋸」と呼ばれている木製品である。長さ63.8cm、幅約6cmを測る。軸部の部分に厚みを持たせ、身の刃線に向かって薄くなる。材はカシを用い、柾目材の縦木取りである。

槌ノ子 D209は長さ15.1cm、幅11.2cm、厚さ8.5cmを測る。断面は梢円形を呈する。両端を上下、両側より削り、先端が尖る。中央部に幅約2cmの浅い溝を穿ち一周する。恐らく槌ノ子もしくは、浮子と考えられる。材はエノキ?を使用し、横木取りである。両端に焼いた痕跡がある。

容器 D210は容器の脚部と考えられ、厚さ1.5~3cmの身に高さ3.6cmの脚を作り出す。材はヒノキを用い、横木取りである。内外面ともに焼けた痕跡が見られるが、破損した後に焼けたと思われる。

板 D294は長方形の孔を穿った板状の木製品である。全長36.5cm、幅9.2cm、厚さ1.5cmを測り、孔は長さ7cm、幅1.5cmを測る。材質はヒノキを使用している。

DSE301(第262・263図) D地区の北端部に位置し、D SK303と接している。平面形は梢円形、断面は漏斗状を呈しており主軸を南北方向においている。径1.4×1.8m、深さ約1.85mを測る。埋土は上層より褐色微砂質粘土層、灰色微砂質粘土層、暗灰色微砂質粘土層の3層に分けられる。遺物は、褐色微砂質粘土層中と上面に多く堆積しており、底部近くに於て砂層中より甕を検出した。

出土遺物

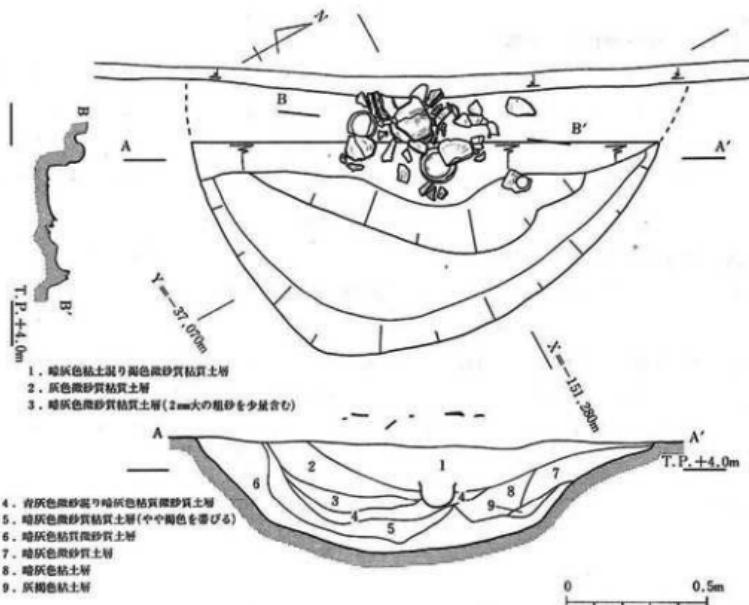
〔土器〕(第264、図版207)

鉢 D113は丸味を持つ体部から口縁部を外反させ、端部をつまみ上げ気味にする。体部下半には左上りの笠削りが明瞭である。その他はナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は緻密で、焼成も良好である。

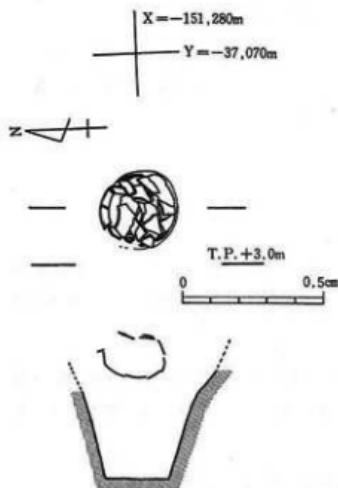
甕 D114は肥厚する口縁部に凹線を浅く入れて端部をつまみ上げる甕である。体部中位に最大腹径を持ち、底部に至る。底部は尖り底を呈する。体部には左上りの叩目の後、刷毛目調整を施す。内面は笠削り後、ナデを施す。

鉢 D111はD113とはほぼ同形態であり、調整手法、胎土等も似かよっている。

壺 D112は二重口縁を呈する裝飾壺である。口縁部内外面及び体部には10条の直線文、波状



第262図 DSE 301遺物出土状況



第263図 DSE 301遺物出土状況

文を施す。また突堤下半の波状文は13条を数えたが、一部重複が認められる。頸部は施ナデ後に横ナデが施されている。また口縁部には二個一对の竹管を押圧した円形浮文を14組み貼り付けている。突堤には施状工具による刻目を施す。

DSE 301上層出土遺物

〔土器〕(第283図)

壺 D182は生陶西麓の胎土で、にぶい黄橙色を呈する。口縁端部に浅い凹線が巡る。内面は器表面が荒れているが施削りを施す。

DSE 301下層出土遺物

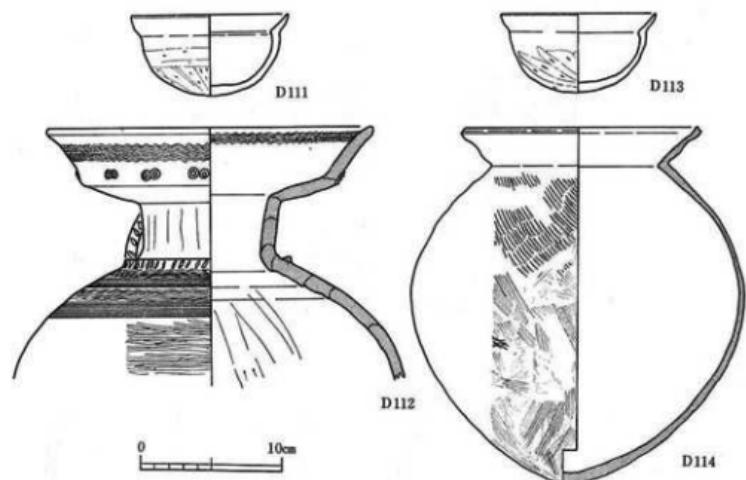
〔土器〕(第265図)

壺 D103は口縁部に浅い凹線を入れる。胎土はやや粗く、灰黄橙色を呈する。体部内面は施削りの後、丁寧なナデを加える。

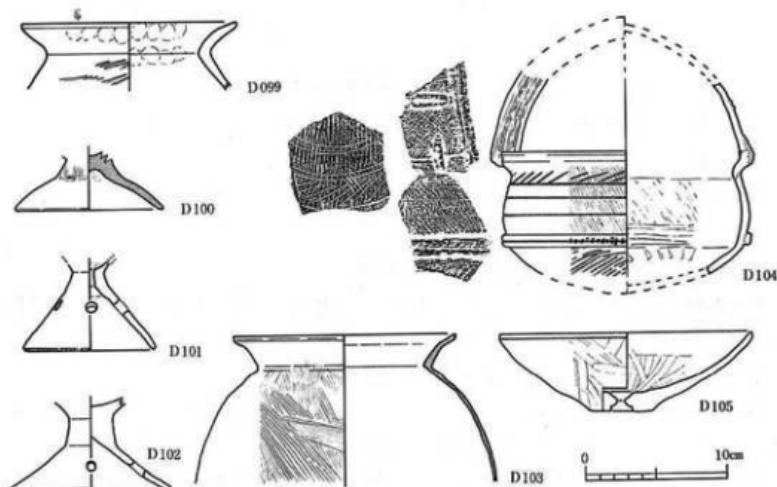
鉢 D105は黄橙色を呈し、胎土は緻密である。内外面には範ナゲが施されている。

脚 D101は唇端部に刻目を施し、にぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。

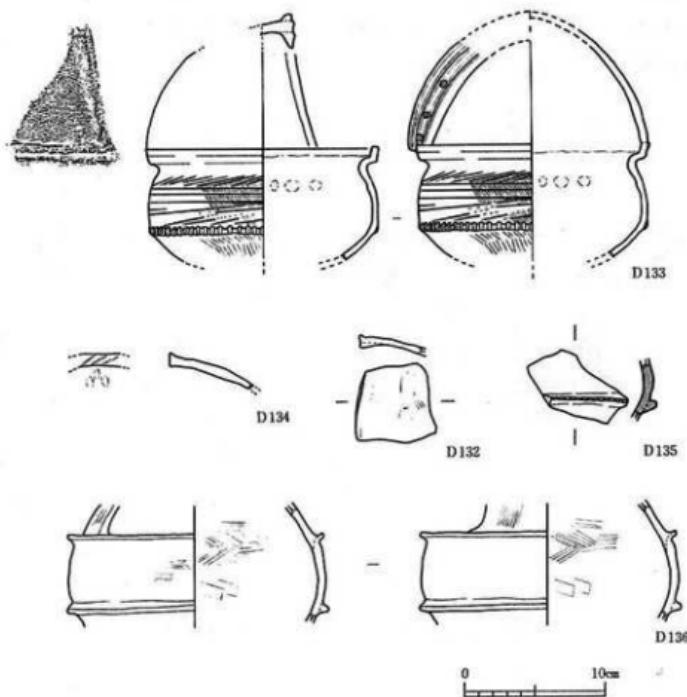
D S E 301付近出土遺物



第264図 D S E 301上層（D111・D112）・下層（D113・D114）出土土器



第265図 庄内Ⅱ、D S E 301下層出土土器



第266図 包含層、I・II面出土土器

〔土器〕(第270、図版222)

壺 D118はにぶい橙色を呈し、やや粗い胎土である。口縁部には鋸歯文を施す。

鉢 D115・116はにぶい黄褐色を呈し、やや粗い胎土である。D116の体部には縦の笠ナデを施す。

手焙形土器 D134は開口部の破片である。刷毛状工具による施文が認められる。

D S A301 D地区の北端部に位置する。DP7、DP8、DP9、DP10、DP11、DP12が、東北東—西南西方向に一直線上に並ぶ。DP9、DP10、DP11、DP12の柱間距離（中心から中心）0.7mを測る。ピットの径は0.28~0.46mを測る。

D S A302 D S A301と交差するようにして位置する。DP5、DP14、DP13、DP2、DP15がほぼ南北方向に一直線上に並んでいる。DP2、DP5には柱根が残存していた。

D S A303 D S E301とD S K303との間に、DP19、DP20、DP21が並ぶ。主軸は北東—西南西方向におく。ピットの径は0.3~0.6mを測り、柱間距離は約1.5mを測る。

D P319 D地区の北端部、D S D301と接して位置する。平面形は不整な円形を呈し、径0.5×0.6m、深さ0.2mを測る。ピット内より高杯脚部が出土している。

出土遺物

〔土器〕(第270図)

高杯 D121は生駒西麓の胎土であり、にぶい褐色を呈する。胎土はやや粗い。脚部外面は範ナデ、底部はナデを施す。

その他のピット D S A301・302・303の周辺で多くのピットを検出した。この中でD P301 303・304・306・309内には柱根が残存していた。特にD P301は杭というよりも柱根の可能性が強いものである。

D S X301 1D地区に位置し、D S D304と接している。本遺構は落ち込み状の遺構で、深さは浅く、土坑とは区別して登録した。深さは0.22mを測り、落ち込み内には更に円形のピットを有する。ピットの径0.6×0.46m、深さ0.15mを測る。

D S X302 (第268図) D地区D S D306より約5m南に位置し、平面形は不定な四角形である。この落ち込みの大きさは約4×2.5m、深さ約0.1~0.3mを測る。底面より長さ約0.8m程度の板材を検出した。その他遺物として甕、浅鉢、こしきなどがある。この落ち込みの南側に主軸を北東一南西に置く、幅約0.8~1m、深さ約0.1mの溝とつながっている。

出土遺物

〔土器〕(第270図、図版205)

壺 D117は灰黄色を呈し、やや粗い胎土である。底部は浅く凹ませた平底であり、内外面にナデを施す。

甕 D127・128は生駒西麓の胎土でにぶい橙色を呈する。D128は体部中位に媒の付着を認める。また、内面に丁寧な範削りと口縁部には粗い刷毛目調整を施す。

D S X303 D S D309より北へ1.3~2.5m

に位置する不定な四角形を呈する。大きさは推定6×5m、深さ約0.1~0.2mを測る。遺物として壺口縁、高杯等を検出した。



第267図 D S X302付近遺物出土状況

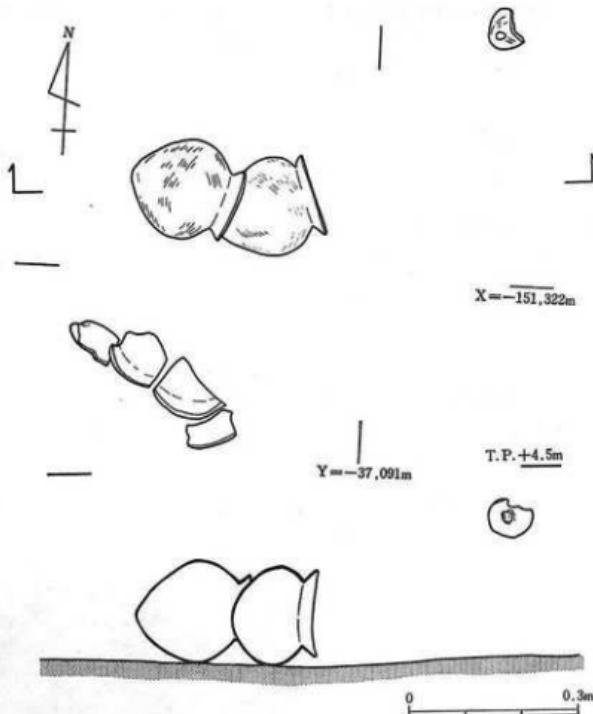
出土遺物

〔土器〕(第270図)

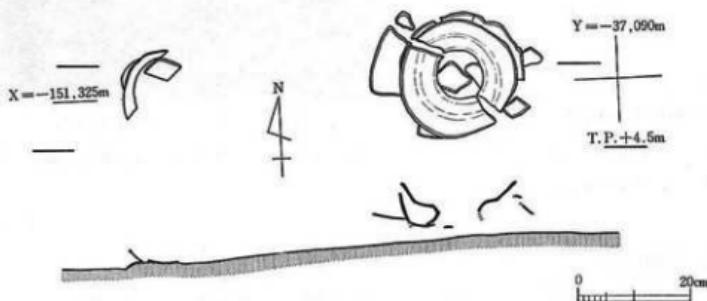
高杯 D119は淡黄色を呈し、緻密な胎土である。口縁部外面には刷毛目が見られる。

■面

木棺蓋木製品 (第274図) D地区の北端部に位置し、包含層を除去した段階で検出した。主軸を西北西一東南東方向におく。下層のD S K301(土坑)との関係で、当初木棺蓋ないし木蓋

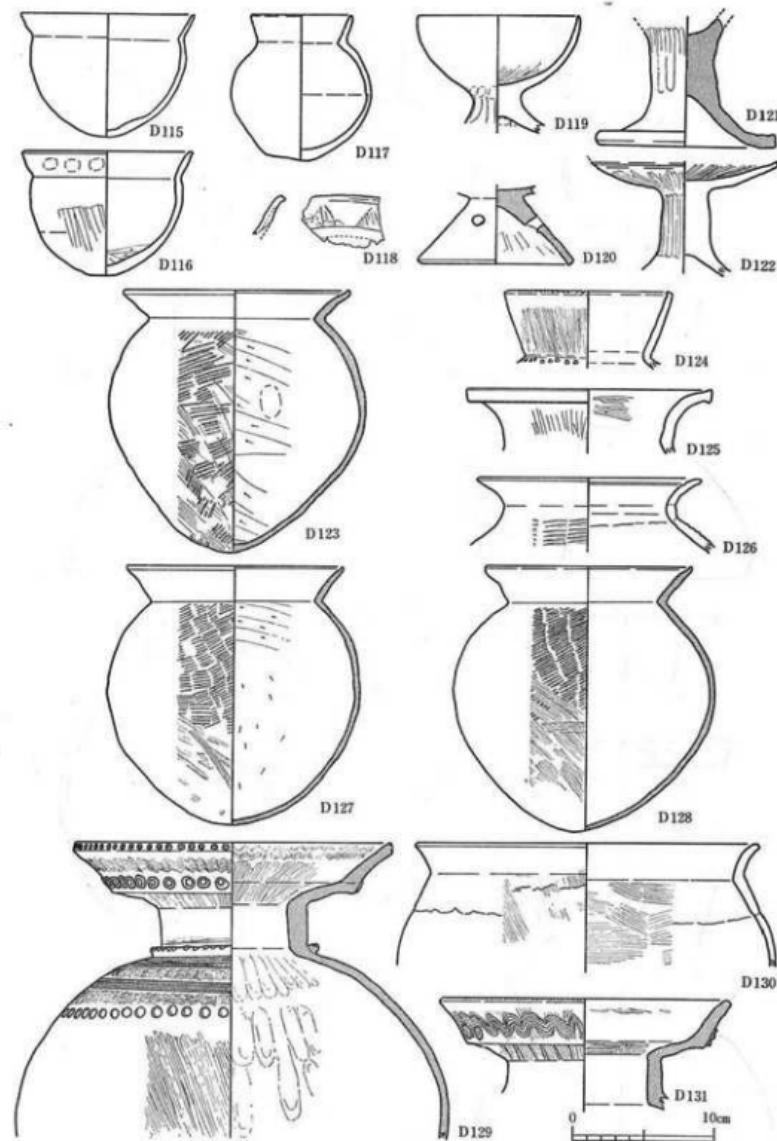


第268図 D S X 302遺物出土状況

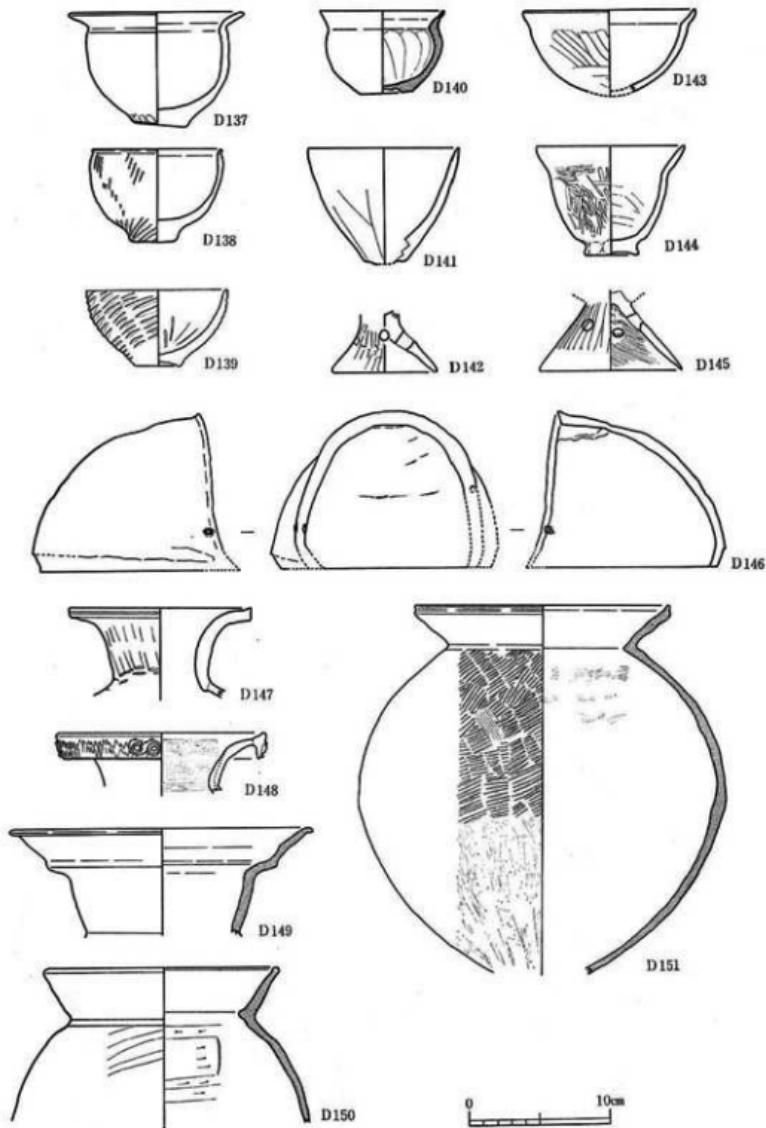


第269図 D S X 302付近遺物出土状況

土壤茎の可能性を考え特に精査を行なったが、木棺墓とするのに積極的な根拠は見出せなかつた。以下の3点の事実より木棺墓とはしなかった。



第270図 庄内I面出土土器



第271図 庄内包含層I・II・III面出土土器

- 下層土坑D SK301とは0.15~0.2m離れている。
- 木製品内および土坑内では、木棺の木口板、底板や人骨等の痕跡すら見出せなかった。
- 木製品とD SK301とは主軸を異にする。

出土遺物

〔木棺状木製品〕(第275図、図版259)

D183は全長3.2m、幅0.33~0.44m、高さ0.17mを測る。平面は長方形を呈し、一方の木口部へ向ってすばまっている。断面は馬蹄形を成し、内外面を円く丁寧に削りあげている。木口部の両端に各々2個ずつ長さ10~14.5cm、幅3.5~7cmの把手状のものを削り出し、下端面を2cm程度弧状に削り込んでいる。把手の断面はやや梯形を呈する。材はコウヤマキを使用し、丸木材の表皮の近い部分を利用している。

出土遺物

〔木棺状木製品内・付近出土土器〕(第272図、図版222)

甕 D271は木製品内より出土した。生駒西麓の胎土であり、黒褐色を呈し、緻密な胎土である。外面には煤が認められる。D272は木製品の南側約0.6m離れて出土した。胎土にはぶい褐色を呈し、緻密である。口縁部は横ナデにより肥厚している。なお、胎土中に角閃石とみられる微量の黒色粒と金雲母が混入している。

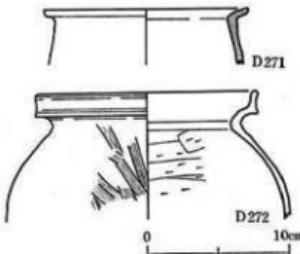
D S D311 D S D304から南へ約0.2~1mに位置し、ほとんど平行している。主軸は東西におき、幅約0.2~0.5m、深さ約0.1mである。遺物は、甕、壺の破片等がある。

D S D312 D S D311の南側に近接して位置し、主軸はほぼ東西におく。溝側面や底面は段になっており、小さな溝と重なっている。幅は約1.5~2m、深さ約0.4~0.5mを測る。遺物は甕、鉢、高杯、壺等多数検出した。

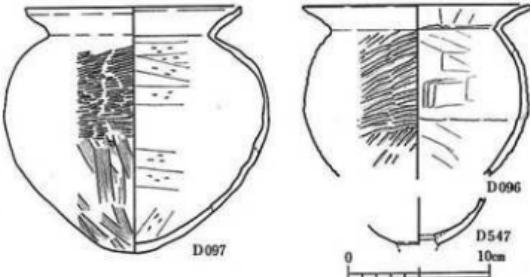
出土遺物

〔土器〕(第273図、図版204)

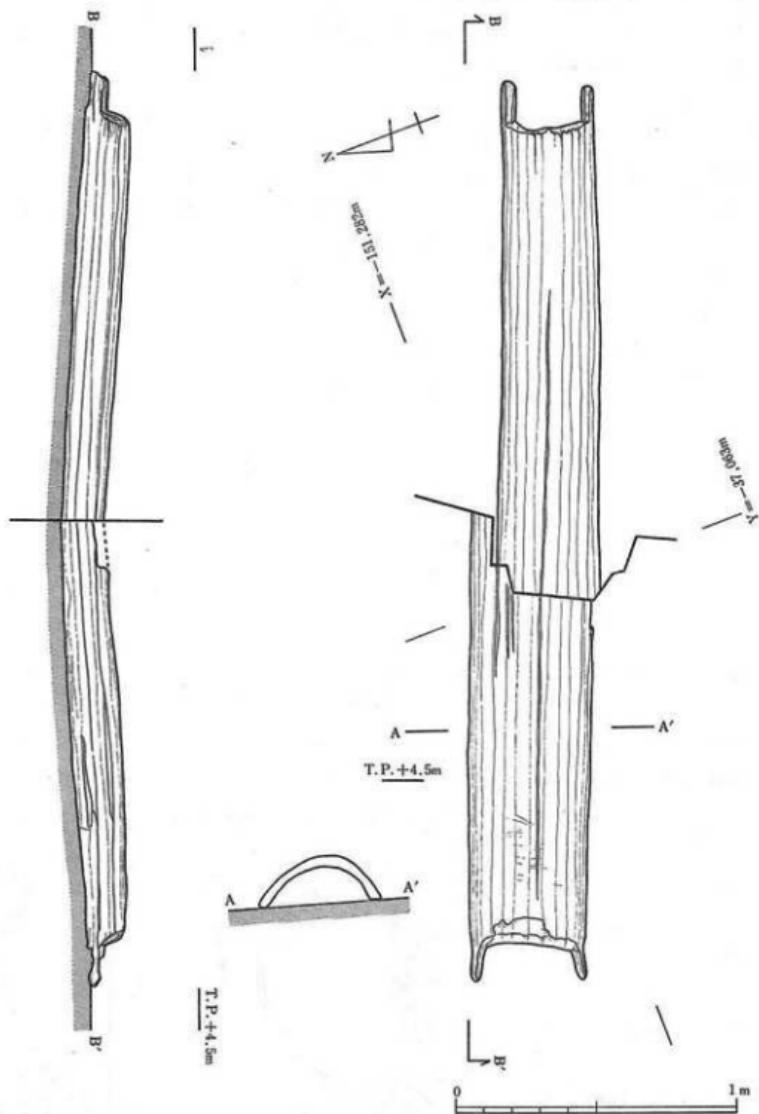
甕 D096は口縁部を外反させ、胴部と底部を別々に作る。表面は粗い叩目を施し、内面は箒ナデ調整を行なっている。D097は口縁部を「く」の字に屈曲させ、端部をつまみ上げてい



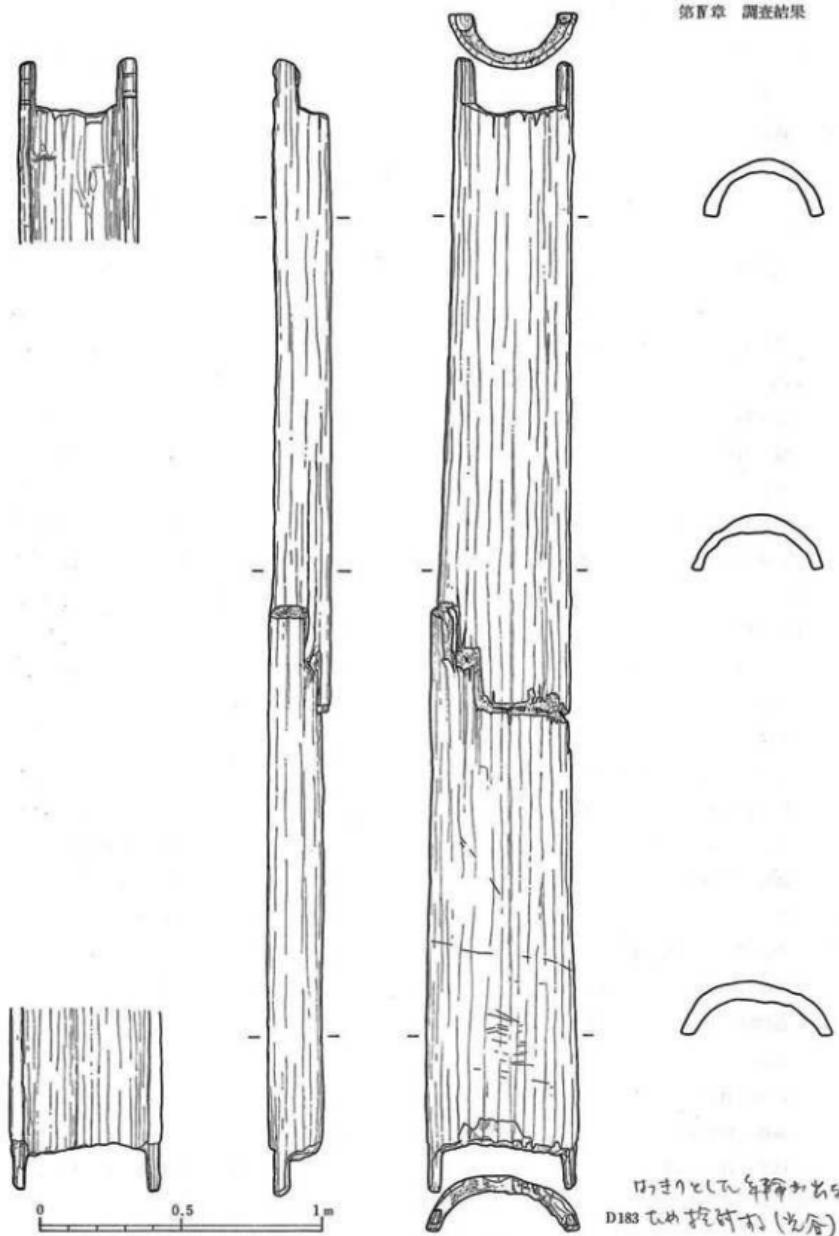
第272図 木棺状木製品内・付近
出土土器



第273図 D S D312出土土器



第274図 木棺状木製品出土状況



第275図 木棺状木製品

- 309 -

美國 — DTR 洋商木棺側板 — 2 互 — 3 件即物

日本古墳時代
木棺状木製品
D183 木棺側板 (光合)

る。体部は全体的に球形化しつつも、底部はやや尖底である。体部上半は叩目、下半を刷毛目調整を行なっている。内面は笠削りである。

高杯 D547は剥離が著しく調整は不明である。

D S D313 D地区北側に位置し、主軸を南東一北西におく。幅約2~2.5m、深さ約0.3~0.4mを測る。周りには溝らしき落ち込みが重なり、土器も検出されている。遺物として小型丸底壺等が出土した。

出土遺物

〔土器〕(第283図、図版211)

鉢 D177は灰黄色を呈し、緻密な胎土である。全体にナデを施し、口縁部は横に施す。

出土遺物

〔D S D313付近出土土器〕(第271図)

鉢 D144は赤褐色を呈し、体部外面に笠磨、内面は笠ナデを施す。底部は指圧により端部をつまみ出している。胎土はやや粗い。

D S D314 Dトレンチほぼ中央部から4Dトレンチ北端部へ流れる。主軸は東南東一西北西で、4Dトレンチにおいて北北東一南南西に約90°曲っている。幅約1.5~3m、深さ約0.3mを測る。溝の北側において、径約0.3m程度のピットが数個みられる。埋土は上層より暗灰色シルト層、黒灰色シルト層(オーリーブ灰色微砂混る)、緑灰色シルト(浅黄色砂混る)の3層に分けられ、D地区東側は、炭化材を多く検出した。出土遺物としては短頸壺、高杯、小形鉢、高杯脚部等がある。

出土遺物

〔土器〕(第283図、図版209~211)

壺 D174は外面がにぶい黄橙色、内面は黒褐色を呈し、緻密な胎土である。体部上半及び底部に黒斑が認められる。粘土紐の痕跡は明瞭であり、接合部に指圧痕を認める。更に笠磨を施す。

高杯 D181はにぶい黄橙色を呈し、緻密な胎土である。杯底部には笠削りを施し、その上に笠磨を施す。また脚部は笠ナデ、刷毛目を施した後、横方向の笠磨を施す。脚部内面も丁寧にナデを施す。透し孔は4孔。

鉢 D180はにぶい黄色を呈し、底部に笠削りを施す。胎土はやや粗い。

台付鉢 D172は浅黄橙色を呈し、胎土は粗い。刷毛目調整を施す。

出土遺物

〔D S D314付近出土土器〕(第283図、図版211)

高杯 D173は灰黄色を呈し、緻密な胎土である。全体にナデを施す。

D S D315 3Dトレンチ西側に位置し、主軸を北東一南西におく。幅推定約1.5m、深さ約0.2mを測る。出土遺物として、壺、壺等のほぼ1個体や破片を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第285図)

壺 D235は口縁部に「双頭渦文」の浮文を施す。胎土はやや粗くにぶい赤褐色を呈する。

D S D316 3Dトレンチ南側に位置し、主軸は南東—北西から東西へ緩かなカーブを描いている。幅約2m、深さ約0.1~0.2mを測る。この溝底や周辺において壺、甕、器台等を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第285図、図版217)

壺 D236は生駒西麓の胎土であり、「双頭」の浮文を施す。

鉢 D239は橙色を呈し粗い胎土である。底部には指圧痕が認められ、ドーナツ状を呈する。

器台 D237は灰白色を呈し、やや粗い胎土である。口縁部には「双頭渦文」の浮文が施されている。刷毛目調整が施される。

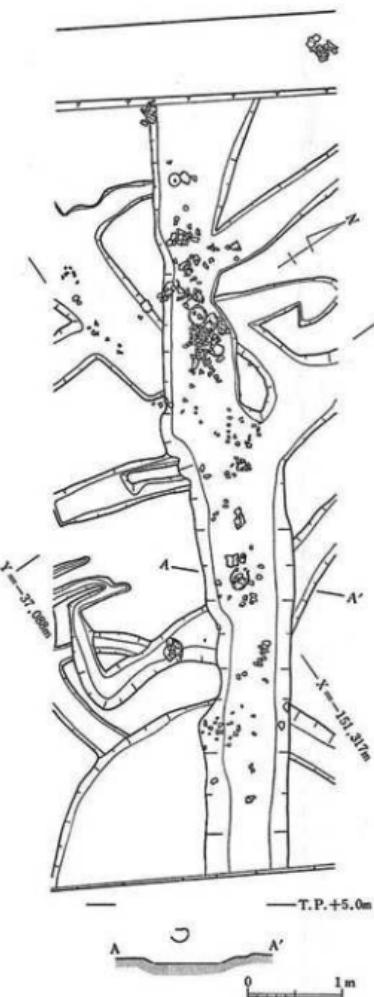
D S D317 D S D314より南へ約5mに位置し、主軸は南西—北東方向におく。幅約0.5~1m、深さ約0.2mを測る。遺物は壺、甕、小型鉢、高杯、器台など数多く出土した。

下層出土遺物

〔土器〕(第278図、図版207~210)

壺 D152はにぶい褐色を呈し、体部下半に煤が付着している。胎土中には2mm大の石英粒が目立つ。底部はやや凹む平底を持つ。内面には窓ナデ調整を施す。

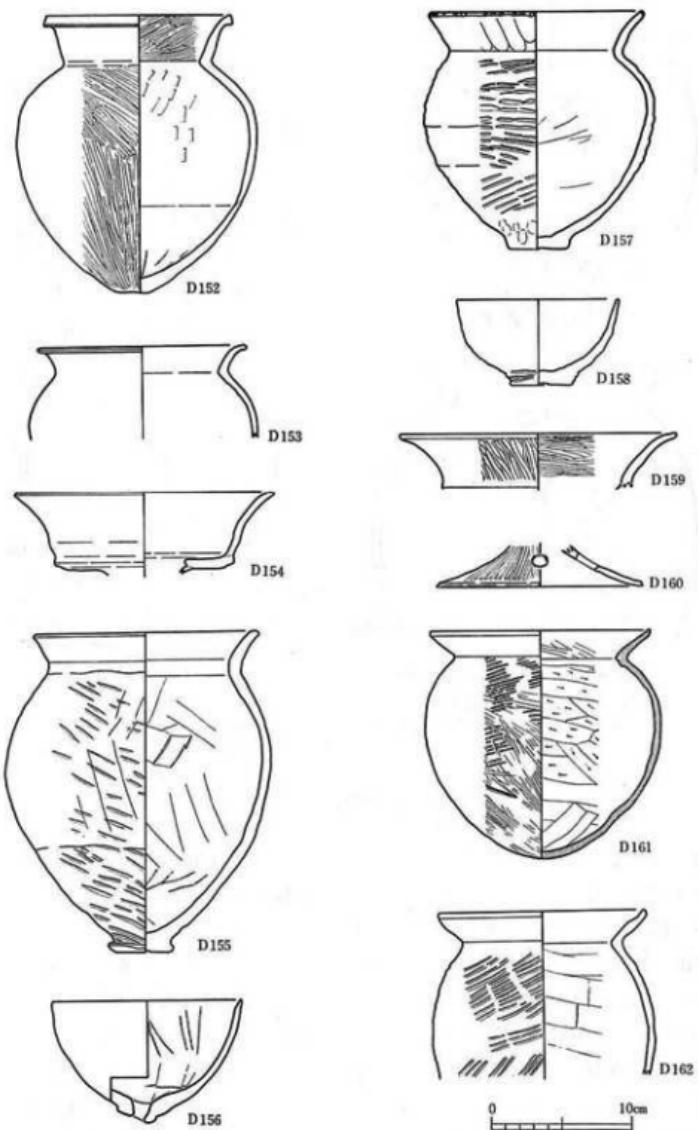
甕 D157はにぶい赤褐色を呈し、特に平底は赤橙色を呈する。粗い胎土を持つ。体部全体に煤が付着している。口縁部の接合部は、縦方向と横方向のナデが施されている。D153は外面全体に煤の付着が認められ、粗い胎土を持つ。内外面はナデが施される。D155は



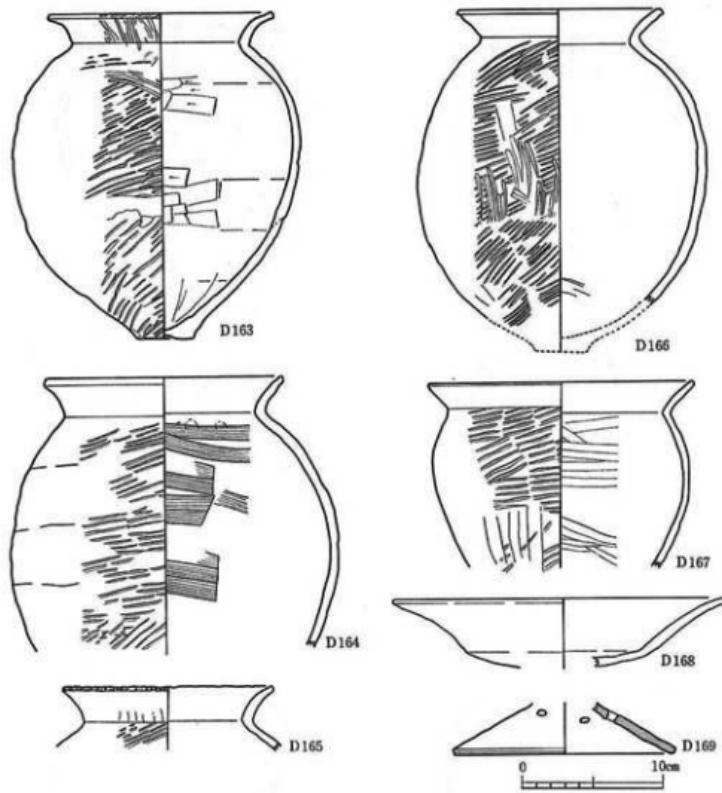
第276図 D S D317遺物出土状況（下層）



第277图 D S D317遺物出土状況（上層）



第278図 D S D317出土土器（下層）



第279図 D S D317出土土器（上層）

黒褐色を呈し、やや粗い胎土を持つ。叩目をナデ消している。D161はにぶい黄褐色を呈し、生駒西麓の胎土を持つ。体部には煤が付着している。D162に赤褐色を呈し、体部中位の叩目を一部ナデ消している。やや粗い胎土を持つ。口縁部は横ナデを施し、端部がやや立ち上がる。

高杯 D154はにぶい褐色を呈し、やや粗い胎土を持つ。焼成は良好である。全面に剥離が激しいが、鏡磨が認められる。口縁部、杯底部に黒斑が認められる。D159は灰白色を呈し、緻密な胎土を持つ。口縁端部内面に黒斑が認められる。D160はD159と同様の色調を呈し、緻密な胎土を持つ。底端部に黒斑が認められる。端部には浅い凹線が入る他、内面はナデが施される。

鉢 D158はにぶい黄橙色を呈し、内外面に指圧痕が認められる。やや粗い胎土を持ち、器表面にはひび割れが目立つ。D156は焼成前の穿孔が施され、にぶい黄橙色を呈し、やや粗い胎土を持つ。

上層出土遺物

〔土器〕(第279図、図版208・211)

甕 いずれも粗い叩目調整を施す。D163、D165の口縁端部には刻目を施す。内面には鉢削り(D163)、刷毛(D164)調整を施す。

高杯 緩やかな立ち上がりから外反させ、端部を丸く納める(D168)。また外面には煤の付着を認める。D244は橙色を呈し、粗い胎土である。杯部口縁接合部には、粘土紐の縫ぎ目が目立つ。

鉢 D248は淡橙色を呈し、やや粗い胎土である。口縁部には7条の凹線が入る。

D S D318 D S D317から約1.5~6m南へ位置し、主軸は東西から約30°南へ曲っている。幅約0.6~3m、深さ約0.1mを測る。この溝の中の南西側にD S E302・303を検出した。またD S D317との間に於てピットや土器を数多く検出した。

出土遺物

〔土器〕(第283図)

高杯 D176はにぶい橙色を呈し、やや粗い胎土である。器表面剥離の為、調整は不明である。

D S D318付近出土遺物

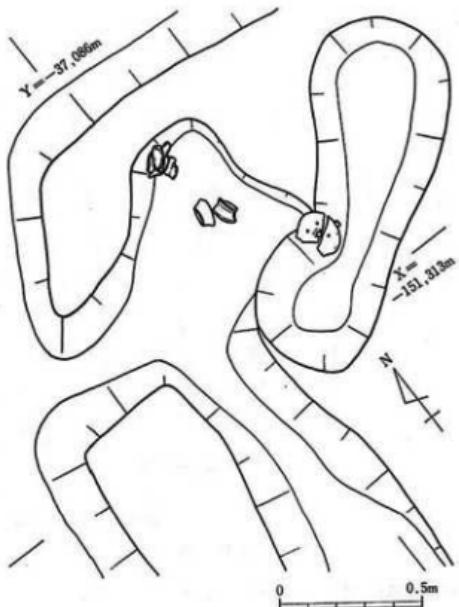
〔土器〕(第283図、図版210)

甕 D170はにぶい黄橙色を呈し、緻密な胎土で焼成も良好である。外面の叩目は体部上半が消されている。また中位に煤が付着している。D171は底部に径1.6cmの焼成後の穿孔を施す。胎土は緻密で、にぶい黄橙色を呈する。体部に薄く煤が付着している。

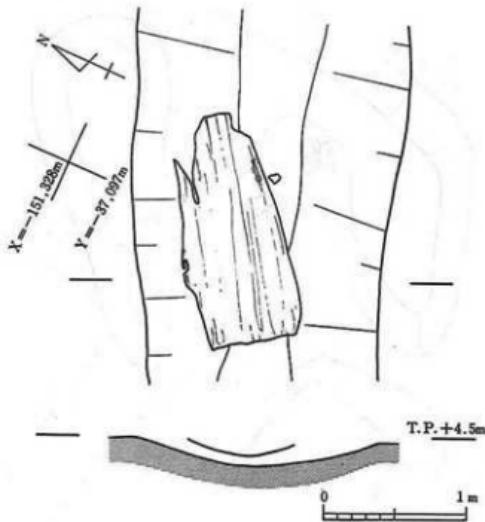
D S D319 4Dトレンチ北側に位置し、主軸をほぼ東西におく。幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。溝の周辺には約0.1~0.3mのピットや落ち込み状遺溝が見られる。遺物として鉢のはば一個体や、瓶、甕等を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第284図)



第280図 D S D318付近遺物出土状況



第281図 D S D 320遺物出土状況

D S D 321 D地区のはば中央に位置し、主軸を東西方向に置く。この溝の西側に於て、D S D 320と合流している。幅約0.5~1.5m、深さ約0.2mを測る。

D S D 322 6Dトレンチのはば中央に位置し、主軸を南東一北西方向におく。幅約1m、深さ約0.1mを測る。

D S D 323 6Dトレンチ南側からD地区にかけて位置する。主軸はほぼ東西で、6Dトレンチの西側で南方向に緩かなカーブを描いている。幅約0.4~1.2m、深さ約0.1mを測る。遺物としては甕4個体と手焙形土器を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第282図、図版220)

甕 球形化した体部を呈し、D268は指押圧により突出した平底を呈する。D269は口縁端部に刻目、内面は寛ナデの後に、刷毛目調整を施す。いずれも胎土、焼成とともに良好である。

手焙形土器 D267は鉢部と覆部との接合部に補強粘土を加え、刻目調整を施す。胎土、焼成とともに良好。

D S D 324 6DトレンチからDトレンチに位置し、Dトレンチの落ち込みに達している。6Dトレンチに於てD S D 323とはば平行であり、Dトレンチにかけて南方向に少し曲っている。主軸はほぼ東西方向におき、幅約0.5m、深さ0.1mを測る。

D S D 325 D S D 321より南へ13~16mに位置し、主軸をほぼ東西方向に置く。幅約3.5m、深さ約0.1mを測る。この溝の西側に於て支流ができるおり、D S D 324と同様に、落ち込みへと

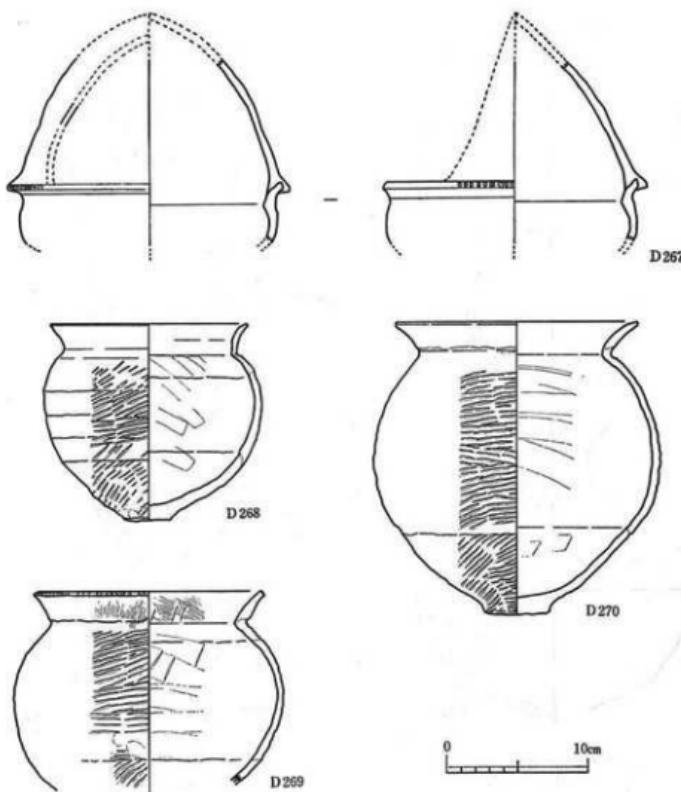
鉢 D245はにぶい赤褐色を呈し、粗い胎土である。叩目は範削により消されている。また、黒斑が口縁部から底部にかけて認められる。

D S D 320 D S D 318から約5mに位置し、主軸を北東一南西方向におく。幅約2m、深さ約0.2mを測る。この溝の中央部底面で板状の薄い木を(表皮に近いもの)を検出した。

出土遺物

〔土器〕(第271図)

鉢 D137はナデ調整を全体に施す。灰色を呈し、やや粗い胎土である。



第282図 DS D323出土土器

つながっている。

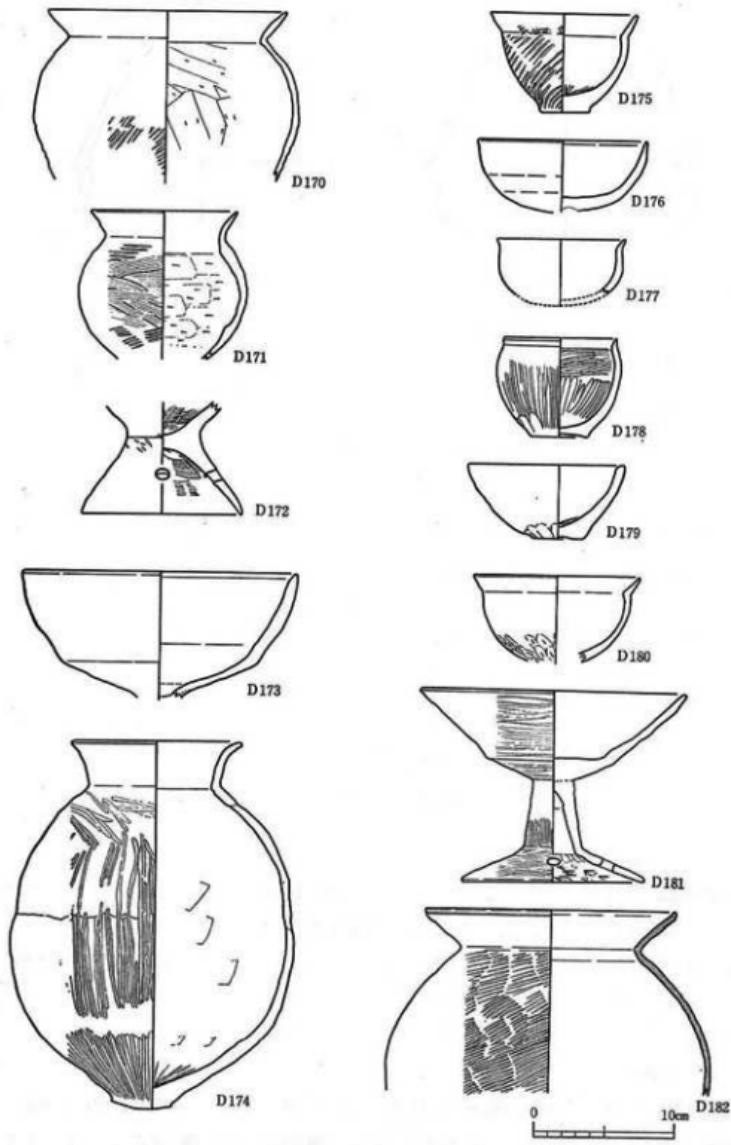
D S D326 7 D トレンチの南端に位置する。幅1.2~1.4m、深さ3~5mを測る。主軸は東北—西南西方向におく。また、本造溝の西側4m離れて2条の溝が存在する。

D S D327 D トレンチ中央部から4Dトレンチ南端部に位置する。幅約0.8m、深さ0.2mを測る。遺物としては壺、甕、高杯等が出土している。

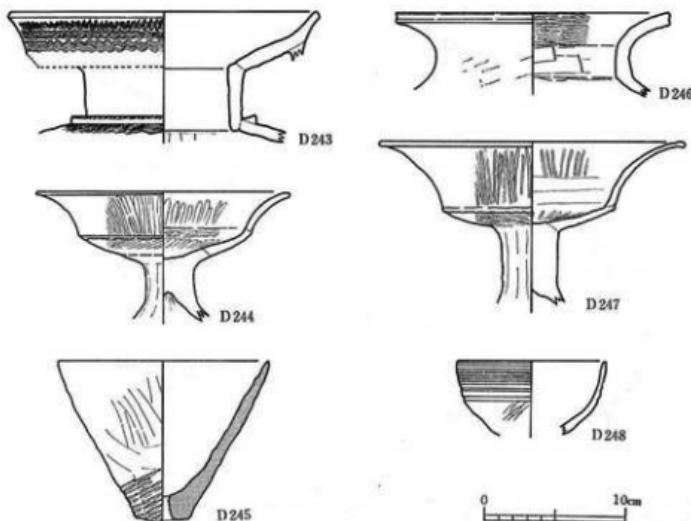
出土遺物

〔土器〕(第284図)

壺 D243は外面を淡橙色、内面を灰白色を呈し、粗い胎土である。外面には波状文を施す。D246は口縁端部に浅い凹線を入れてつまみ上げる。頸部の寬ナデは横ナデによって消される。内面に篦磨を施す。浅黄色を呈し、やや粗い胎土である。



第283图 庄内包含层Ⅱ・Ⅲ面出土土器



第284図 4Dトレンチ遺構面出土土器

高杯 D247は淡黄色を呈する。杯部口縁接合部には粘土紐の継ぎ目が目立つ。また杯部内外面に媒の付着を認める。

D S D328 6Dトレンチの北端に位置する。幅0.5~0.6m、深さ0.13mを測る。溝付近では甕等の土器が出土している。

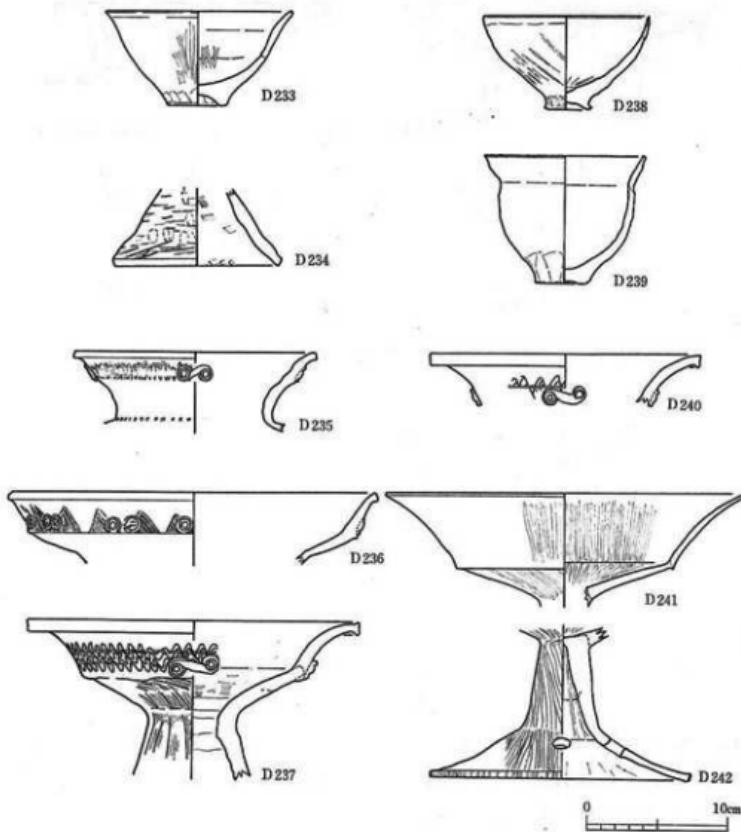
D S K307 D S D316より北へ約0.7mに位置し、平面形はほぼ梢円形を呈する。主軸は北東一南西におき、径1×0.7m、深さ約0.1mを測る。底部の西側半分は土器群であり、鉢、高杯、甕の破片や、甕のほぼ一個体など、多く検出した。

D S E302 (第286図) D S D318内の南西側に位置する。掘り方は、平面形が不整形な凹形を呈し、径約1.3~1.4m、深さ0.35mを測る。掘り方内のはば中央部に、丸木枠を割り貰いた井戸枠を検出した。井戸枠は梢円形を呈し、径約0.7×0.4m、高さ0.4m、厚さ2~3cmを測る。主軸を南北方向におく。掘り方内の埋土は上層より砂礫混り暗灰色粘土層、黄灰色砂層である。井戸枠内の埋土は、上層より砂礫混り暗灰色粘土層、黄灰色砂層、暗黄灰色粗砂層、暗灰色砂層である。井戸枠の南側に於て器台(完形)が出土した。器台は、杯部を下にした状態で検出した。また掘り方内からは、甕、壺が見られ、井戸枠内では第2層より甕、壺、高杯が出土している。

出土遺物

〔土器〕(図版211)

器台 D110は口縁部が外反する浅い杯部が付く。杯部外面には刷毛目、脚部外面には放射状



第285図 3Dトレンチ包含層・邊縁面出土土器

の範磨を施す。脚部内面は範削りの後に、刷毛目調整を施す。

D S E302付近出土遺物

〔土器〕(第271・287図、図版207・211)

鉢 D138は灰白色を呈し、口縁端部を短く外反させている。体部の叩目は部分的に消されている。胎土は粗い。D143はにぶい赤褐色を呈し、胎土は緻密である。体部外面には範削りが施される。口縁部及び内面はナダ調整が施される。

壺 D106は灰白色を呈し、粗い胎土である。口縁部には粘土紐の縫ぎ目が認められる。全体に粗い作りであり、範削りが内外面に施される。

鉢 D107は、焼成前に2孔並んで、穿孔されている。但し、底部片側のみである。灰黄褐色

を呈し、胎土はやや粗い。底部から体部にかけて黒斑が、また口縁部に指圧痕が認められる。全体にナデ調整を施す。

壺 D108 はにぶい赤褐色を呈し、粗い胎土である。口縁部外面は横ナデ、体部内面には箆ナデを施す。外面に煤が付着している。

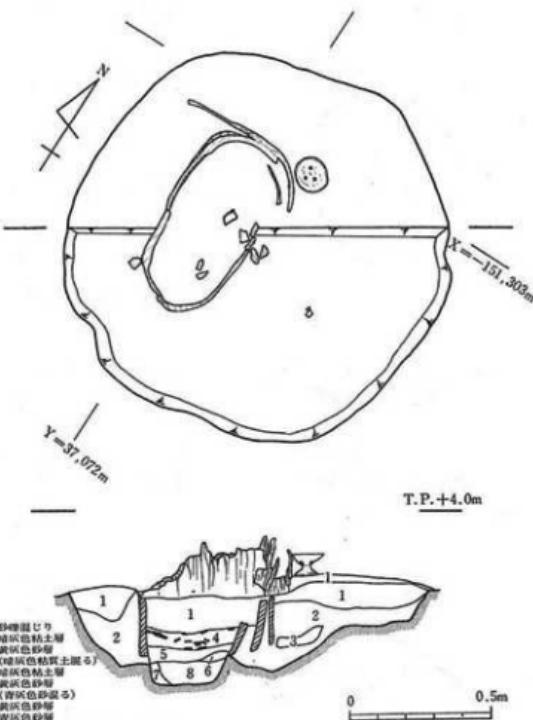
DSE303 DSE302 より南西へ 0.4m 離れて位置する。掘り方の平面形は不整な楕円形を呈し、径約 1.2×0.8 m、深さ約 0.2m を測る。なお、DSE302 の様な井戸枠は見られず、また深さも浅いので、単なる土坑であった可能性もあるが、

DSE302 に近接していることと、埋土が同じなので井戸として登録した。

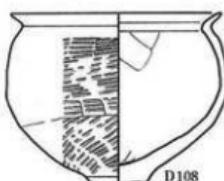
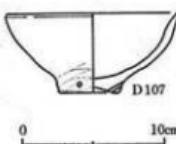
出土遺物

〔土器〕(図版211)

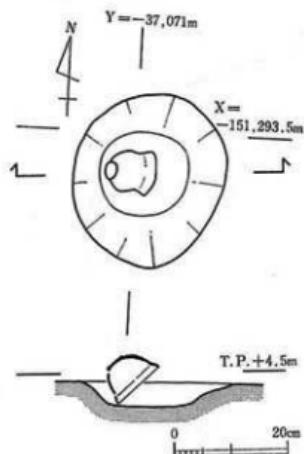
鉢 D109 は内外面箆磨を施し、橙色を呈する。



第286図 DSE302遺物出土状況



第287図 DSE302付近出土土器



第288図 DP 322土器出土状況
も土器が多く出土している。

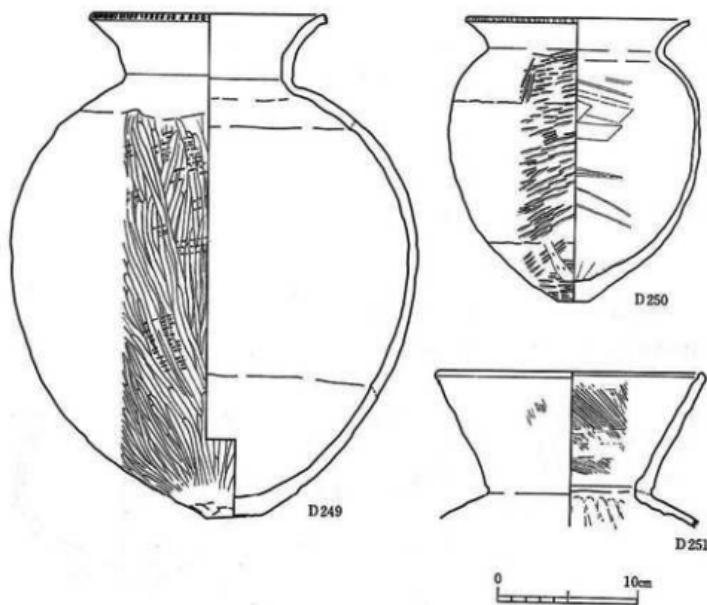
D P 322 (第288図) D S D 304・311の南側に位置する。平面は不整な円形を呈し、径約0.3m、深さ約5cmを測る。遺物は小型鉢が出土した。

出土遺物

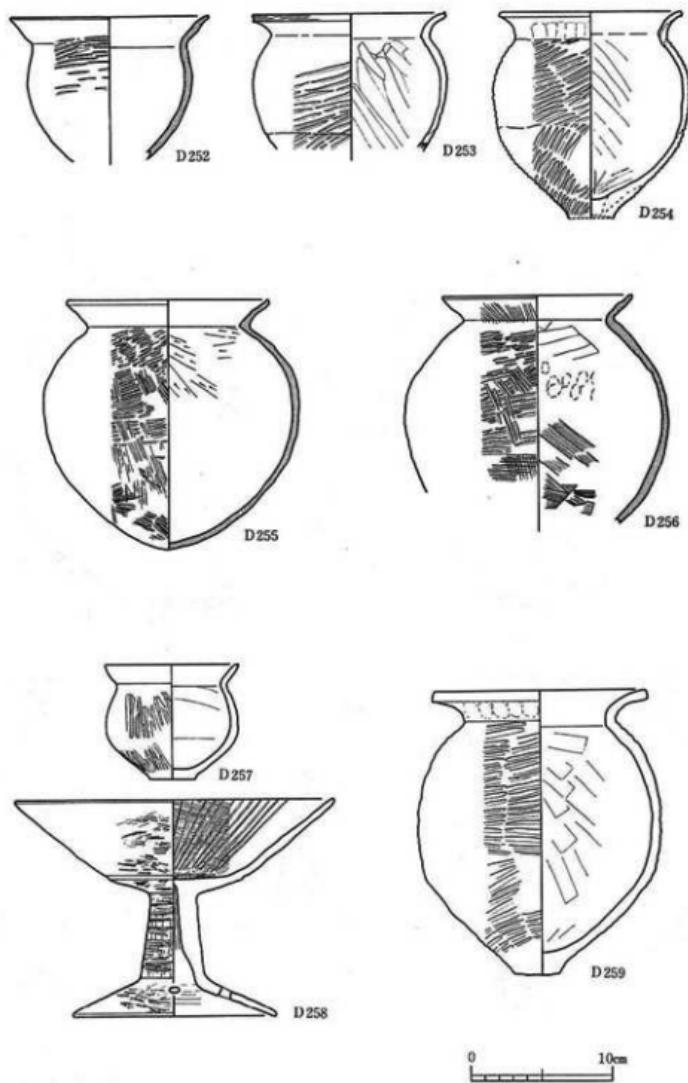
〔土器〕(第283図、図版211)

鉢 D 175 は底部に小さい凹みを持ち、体部から底部にかけて黒斑を認める。叩目は全体にナデ消されていいる。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。

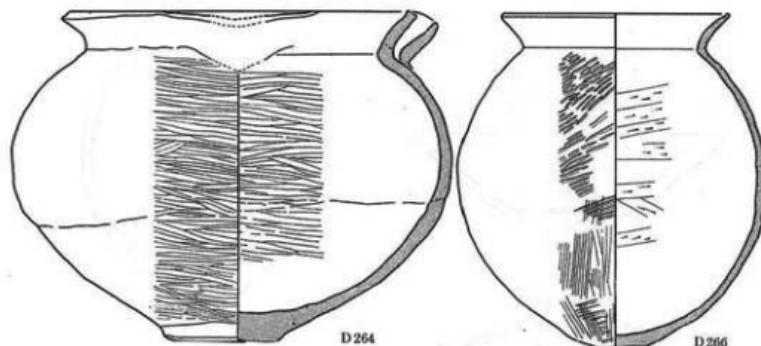
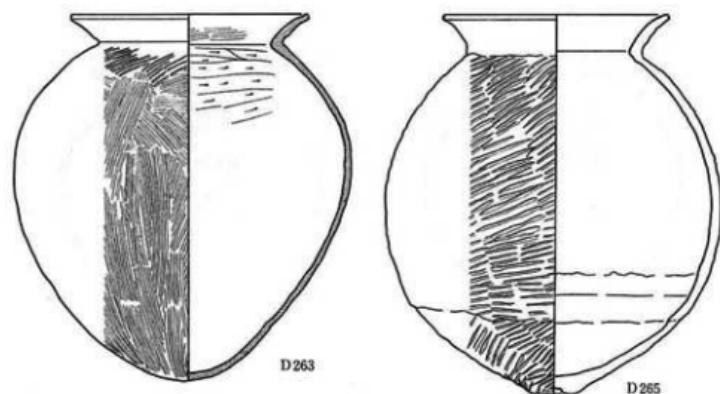
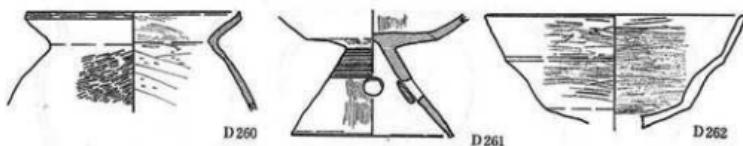
D S X 304 5 D トレンチのほぼ中央部に位置する不整な梢円形の落ち込みである。主軸は南北方向におき、幅約1.7~2.5m、長さ約6.5m、深さ0.5mを測る。埋土は上層より黒灰色粘土層、暗緑灰色粘土層である。遺物は4ヶ所に密集しており、甕、高杯の完形品や破片が数多く出土した。また、これらの下層から



第289図 D S X 304出土土器



第290図 D S X 304出土土器



第291圖 DS X 304出土土器

出土遺物

〔土器〕(第289・290・291図、図版218～220)

壺 D249は口縁端部に刻目を施す。体部の叩目は篦ナデによって消されている。胎土はやや粗く、にぶい黄橙色を呈する。また、体部中位から底部にかけて媒の付着を見る。D251は灰黄褐色を呈し、粗い胎土である。口縁端部は浅い凹線を入れてつまみ上げる。外面には赤色顔料を認める。

壺 D250はにぶい赤褐色を呈し、緻密な胎土である。体部上半と下半に黒斑を認める。叩目は一部篦削りによって消されている。また叩目は底部にも見られる。D266は生駒西龍の胎土であり、全体的に緻密である。灰黄褐色を呈する。口縁端部に浅い凹線を入れ、端部をつまみ上げている。D260は平底を残している。D255は尖底である。それ以外の壺はにぶい黄橙色を呈し、粗い胎土である。D265はドーナツ状の底部で、D259は平底である。

高杯 D258はにぶい褐色を呈し、緻密な胎土である。杯部、脚部外面に媒の付着が見られる。脚部外面には刷毛目調整が施される。また全体に丁寧な篦磨が施される。D261も同色であるが、やや粗い胎土である。脚柱部には沈線が10条、裾部には透し孔が3孔ある。杯部外面には刷毛目調整が施された後、篦磨が全体に施される。D262は赤橙色を呈し、緻密な胎土である。外面には丁寧な篦磨が施される。口縁部には横ナデによる浅い凹線が入る。

鉢 D257はにぶい赤褐色を呈し、やや粗い胎土である。体部内面は篦ナデが施されている。D264は大型の片口鉢である。にぶい黄褐色を呈し、粗い胎土である。器表面には篦磨が施される。また粘土紐の繼ぎ目が明瞭である。底部には黒斑を認める。なお、細痕が底部に見られる。

D S X305 4Dトレンチに位置する。本遺構は落ち込み状の遺構である。平面形は不整な梢円形を呈し、径4.1×1.4m、深さ約0.1mを測る。

D S X306 4D地区南西隅に位置する。大半が調査区外のために、全容は不明である。深さ約0.2mを測る。(小野・野藤・葉瀬・崎谷・山藤)

2 前期（布留式）

（1）A地区

A地区的この時期の遺構面は全面に認められるが、ほぼ弥生時代中期Ⅰ遺構面と同一面で確認された。遺構面はT.P.+4.0~4.3m前後で検出される。ベース層は第Ⅱ章第1節第2項(1)で説明した第Ⅱf層暗茶褐色粘質土であるが、北側1Aトレンチ側では黄灰色シルト、南東側は紫褐色粘土となる。この紫褐色粘土層の部分は水田になる可能性がある。また2Aトレンチの東側では上下2遺構面を検出したが、その高低差は5~10cm前後で、上層は茶褐色粘質土（整地土？）をベースとしている。

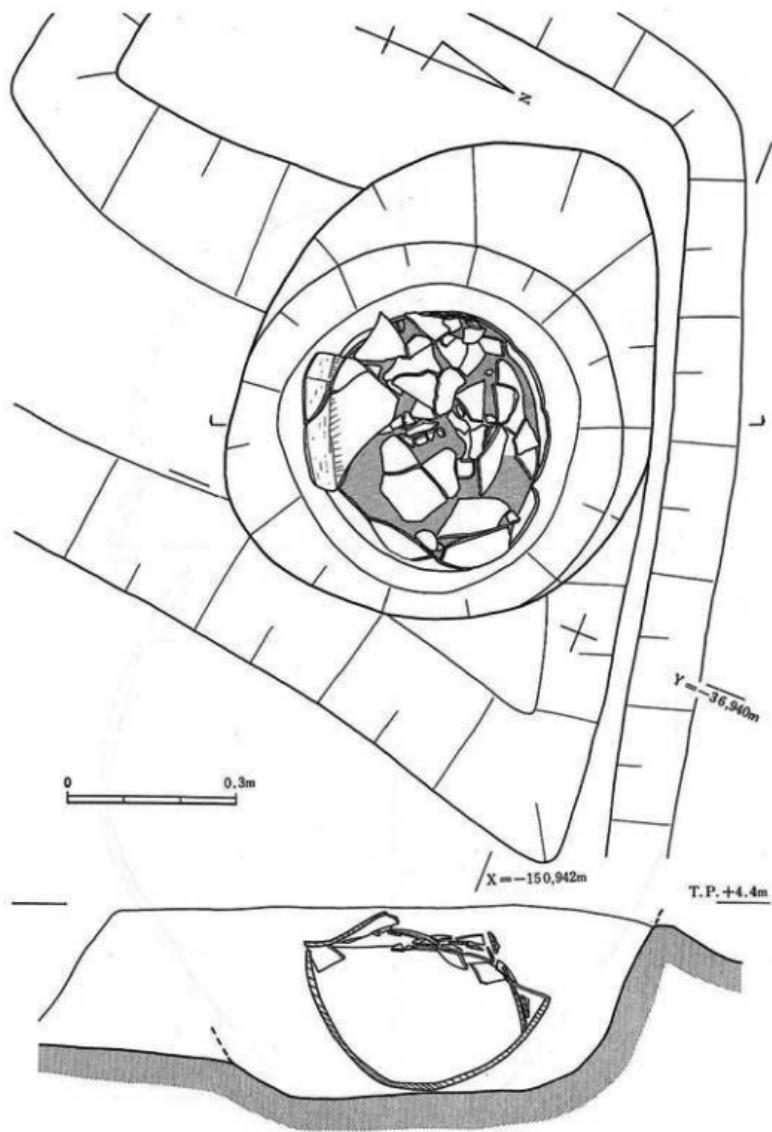
検出した遺構には土器棺、溝、土坑、小ビット、足跡等があるが、これらの遺構の中には古式須恵器が出土するものもあり、北接する友井東遺跡の古墳時代中期集落の南限の可能性がある。また、古墳時代前期にても美園遺跡全体では、南の地域のほうが古く、北へ行くほど新しくなる。この傾向はそのまま次の時代へ続き、古墳時代中期になると集落は北の友井東遺跡のほうに移動していったようである。

包含層は当地区全域に認められ、A地区層序説明の第Ⅱe層暗茶褐色粘質土が包含層となる。この包含層は20~25cmの厚さで堆積し、古式須恵器を含む4~5世代の遺物を包含している。以下遺構ごとに観察するが、しかし、ここでは前述のように古式須恵器を出土する遺構も混在していることから、これらの遺構も合わせて説明することにする。なお、これらの古式須恵器を含む遺構は、この時期の遺跡の中心と考えられる友井東側、すなわち、A地区でも北側の1Aトレンチに集中していることを指摘しておきたい。

A 墓

確実なものは、この時期としては極めて珍しい土器棺1基を検出したのみである。しかし北接する友井東遺跡の南側で同時期の古墳、もしくは方形周溝墓がいくつか検出されていることから、美園遺跡のA地区北側から友井東遺跡の南側にかけて、後述するB地区で検出した同時期の集落の墓域であった可能性がある。そのように考えるとASD305やASD307などは大きさや形状から友井東遺跡で検出されたような古墳、もしくは方形周溝墓であった可能性がある。しかし、これについては、いまだ墓と断定するにはいたらないため、これらの溝についても溝のところで説明することにする。

AS X301（第292図） 1Aトレンチ中央部やや西よりで検出した土器棺墓である。墓墳は平面卵形を呈し、長軸幅0.88m、短軸幅0.72mを測り、西側は2段に掘られている。深さは0.32mを測るが、土器棺の状態からかなり削平されているものと思われる。墓墳底部は平坦で、径0.52mのはば円形を呈し、埋土は黒灰色微砂質土である。土器棺は合口のもので約20°北側に傾けられて設置されている。蓋には鉢を利用し、身には口縁部を打欠いた甕を利用している。棺内からはなにも出土しなかったが、その大きさから小児用の土器棺と思われる。ASD308と重複し、それより新しい。

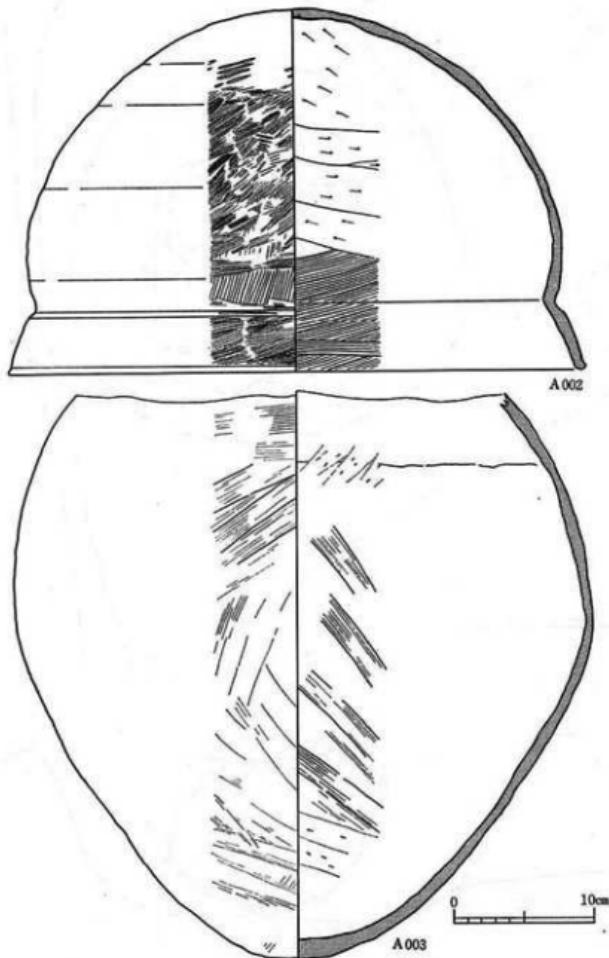


第292図 AS X 301土器棺出土状態図

出土遺物

〔土器〕(第293図)

土器棺に使用されていたものである。A002は蓋に利用されていた鉢である。口縁部は二重口縁で内縁ぎみに外上方に開き、端部は、ナデにより平坦面をもつ。体部は半球形を呈し、底部は丸底である。口縁部の内外面は刷毛目調整を施すが、内面は粗い刷毛目、外面は細かい刷毛目で



第293図 A S X 301出土土器棺

ある。体部外面上位は粗い刷毛目、下位には叩目を施し、さらにその上から細かい刷毛目を加えて調整している。体部内面上位は粗い刷毛目、中位から下位にかけて鋸削りを施す。口径41.0cm、器高25.6cm、体部最大径32.7cmを測る。色調は茶灰色、焼成は良好で、胎土から生駒西麓の土器である。

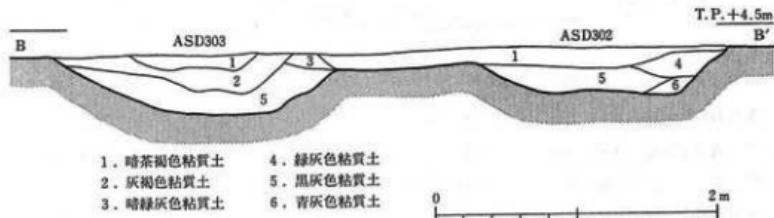
A003は身の部分に利用されていたものである。形態的に壺と思われるが、あまり例をみないものである。口縁部は打欠いられて存在せず、しかも全体に磨滅が著しい。外面は刷毛目、内面上位及び下位は鋸削り、中位には刷毛目を施す。体部最大径40.7cm、器高40.5cmを測り、内面上位には製作時の巻上げ痕が残る。色調は茶灰色、焼成良好で、胎土から生駒西麓産の土器である。

これらの土器は布留式土器の範疇にはいるものであるが、特にA002の口縁部の特徴より須恵器出現前後、もしくはすでに須恵器が出現している段階の土器と考えられる。⁽²⁾

B 溝

A地区における溝は北側、特に1Aトレンチで集中的に検出された。これらの溝は南北方向、もしくは東西方向のものが大半を占める。また、中には前述のように古墳もしくは方形周溝墓ではないかと思われるような形状をした溝も認められる。

A S D 301 (付図6) 1Aトレンチ東側下層で検出した南北方向の溝である。両端は調査区外に延びる。上幅0.6~0.9m、下幅0.2~0.4m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒茶色粘質土で、遺物は出土しない。



第294図 A S D 302・303土層断面図 (実測地点は付図6参照)

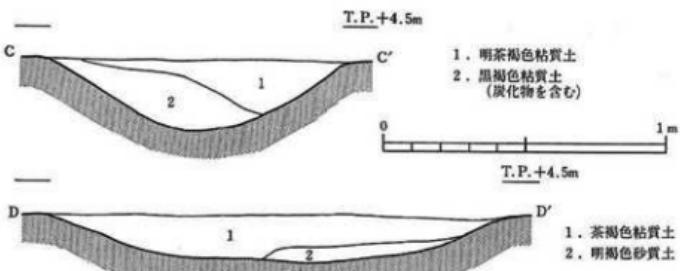
A S D 302 (第294図) 1Aトレンチ中央部やや東よりで検出した南北方向の溝である。A S D 303と同時期に掘られたものと思われるが、両側肩部は同トレンチ南側で自然に消滅する。上幅1.6~2.0m、下幅0.7~0.8m、深さ0.3mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は4層に分層でき、粘質土が堆積する。遺物は、ほとんど出土しなかったが、上層第1層暗茶褐色粘質土内から古式須恵器の細片が少量出土した。B S D 304・306と重複し、それより新しい。

A S D 303 (第294図) 1Aトレンチ中央部からAトレンチ北東側で検出した南北方向の溝である。A S D 302の西側をほぼ平行に走り、西端は調査区外に延びる。上幅2m前後、下幅0.7m前後、深さ0.4mを測り、断面U字形を呈する。埋土は4層に分層でき、粘質土が堆積する。遺物は、第1層暗茶褐色粘質土より、少量の古式須恵器と土師器の細片及び第5層黒灰色粘質土よ

り土器の体部が出土した。AS D307と重複し、それより新しい。

AS D304 (付図6) 1Aトレンチ北東側で検出した東西方向の溝である。一部は枝分れして北側に延びる。西側はBS A302に切られ、東側は調査区外に続く。幅は0.3m前後、深さ0.15mを測り、茶褐色粘質土が堆積する。遺物は長さ約6cm、幅3.5cmほどの筒状の土製品で、中心に貫通孔が施されているものが出土している。AS D302とAS D305と重複し、AS D305より新しく、AS D302より古い。

AS D305 (付図6) 1Aトレンチ東側で検出した。南北方向から東西方向にL字状に屈折した溝である。上幅1.0~1.7m、下幅0.3~0.6m、深さ0.15~0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2層に分層できるが、東側と西側では異なる。その形状及び友井東遺跡との関連から古墳もしくは方形周溝墓の南西側に当るかもしれない。遺物は全く出土しなかった。AS D304とAS D306と重複し、AS D304より古く、AS D306より新しい。



第295図 AS D305土層断面図 (実測地点は付図6参照)

AS D306 (付図6) 1Aトレンチ東側で検出した東西方向の溝である。東側は袋状に終り、西側はAS D302とAS D305によって切られている。幅0.4m、深さ0.12mを測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は出土しない。

AS D307 (付図6) 1Aトレンチ中央部で検出した溝である。南北方向に走るが、北端は東側に屈折し、AS D303によって切られている。南側は調査区外に延びるが、Aトレンチ側で検出されていないので東側か西側に屈折する可能性がある。もし東側に屈折するならば、BS D305同様、一辺9mほどの古墳もしくは方形周溝墓の可能性がある。幅0.4m前後、深さ0.2m、断面U字形を呈する。埋土は、北側が茶褐色粘質土、南側が黒灰色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

AS D308 (付図6) 1Aトレンチ中央部やや北よりで検出した西北方向から北東方向に延びる溝である。北側は調査区外に続き、南側はAS K302に接続する。またいくつかの小溝が枝分れするようであるが、これらの端部は袋状に終っている。幅0.5m前後、深さ0.2m、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色であり、遺物は出土しない。AS X301と重複し、それより古い。

AS D309~312 (付図6) 1Aトレンチ西側で検出した南北方向の小溝である。AS D309・

310の南側は袋状に終り、北側は土坑状の落込みによって切られている。幅0.2~0.3m前後、深さ0.1m前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

A S D 313 (付図6) Aトレンチ南側で検出した東西方向の落込み状の溝である。東側は調査区外に延び、西側は細くなり、最後は袋状に終る。幅は平均1m前後、深さ0.1mほどで、底部及び周辺に足跡が認められる。埋土は淡黄色砂で、遺物は出土しなかった。

A S D 314 (付図6) Aトレンチ南側で検出し、南東方向から北西方向に延びる溝である。両端は袋状に終り、約4mの長さしかなかった。幅0.35m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は淡黄褐色砂で、遺物は出土しなかった。

A S D 315 (付図6) 2Aトレンチ西側で検出した小溝である。南東方向から北西方向に弧状を呈し、南東側は現代水路構築の折に削平され、北西側は調査区外に延びる。幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は出土しない。

C 土坑

A S K 301 (付図6) 1Aトレンチ中央部南よりで検出した不定形の土坑である。長軸幅2.1m、短軸幅1.1m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土で、遺物は出土しない。ASK302と重複し、それより新しい。

A S K 302 (付図6) 1Aトレンチ西側南よりで検出した落込み状の遺構である。深さ0.15~0.2mを測る。埋土は明褐色粘質土で、土師器の破片及び古式須恵器の縫の破片が出土している。

A S K 303 (付図6) Aトレンチ北側で検出した平面楕円形の土坑である。長軸幅1.5m、短軸幅1.1m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で遺物は出土しなかった。

A S K 304 (付図6) Aトレンチ北側東よりで検出した平面ほぼ円形の土坑である。径1m前後、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で遺物は出土しない。ASK305と重複し、それより新しい。

A S K 305 (付図6) Aトレンチ北側東よりで検出した平面卵形の土坑である。南側はASK304によって切られているが、東西幅0.7m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は出土しない。

D その他の遺構

上記の遺構以外に足跡、小ピット等がある。

足跡 (付図6) 足跡群はAトレンチ南東側から2Aトレンチ南東側にかけて検出した。足跡には人間のものと牛と思われる足跡がある。これらの足跡が検出されたベース面は紫褐色もしくは黒灰色の粘土で、B地区水路跡切替トレンチ北東側にかけて水田の可能性がある。

小ピット群 (付図6) Aトレンチ北東側で小ピットを多数検出した。これらは径0.2m前後、深さ0.1~0.2m前後のものが大半であり、埋土は暗灰色粘土が堆積している。柱穴かどうかは不明である。(岡本)

註(1) 危島重則編『友井東』(その1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

(2) 藤井利章「発志院遺跡の布留式土器とその編年試案」「大和発志院」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41冊 1980年。

(2) B地区

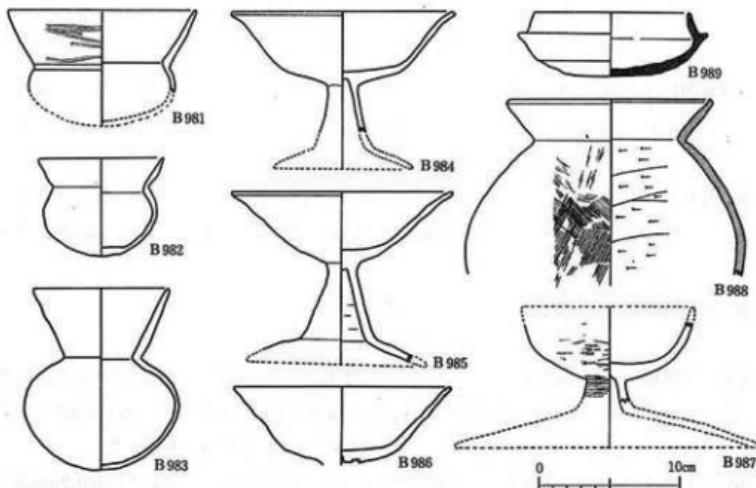
B地区では前述(第Ⅱ章 第2節 第3項 1)で説明したように古墳時代前期遺構面が、2面検出された。その内下層のみを庄内式期の遺構面ということで、第3項1のところで説明した。したがって、ここでは便宜的に上層を布留式期の遺構面ということで説明することにしたい。しかし、これはあくまでも著者の記述上の都合であり、厳密には庄内式期の新しい段階の遺構、遺物もかなりあることを御了承願いたい。

包含層

B地区的この時期の遺物包含層は全城に観察され、第Ⅱ章 第1節 第2項 (2)で説明した第Ⅳe層黒褐色粘質土がそれに当る。包含層の遺物量は中央部が最も多く、しかも包含層の厚さ0.2m前後と最も厚くなる。包含層の厚さは中央部を頂点に南北両側に徐々に薄くなり、南端ではほとんど認められなくなる。これは包含層直下の遺構密集度にも関係するものであろう。出土遺物には土器、石器があり、4~6世紀代のものを含む。

出土遺物

〔土器〕(第296図)



第296図 B地区古墳時代前期包含層出土土器

包含層出土土器には須恵器と土師器がある。出土したものは細片が多く、量のわりに実測可能

なもののが少ない。その内、9点を抽出する。

壺（B983） ほぼ完形の小型の壺である。口縁部は比較的長く直線的に外上方に開き、端部を尖りぎみにおさめる。体部は扁球形を呈する。外面は磨滅が著しいが、口縁部の内外面及び体部外面上位は横ナデ、体部内面は範削りを施す。口径9.5cm、器高13.0cm、体部最大径11.0cmを測る。色調は明褐色、焼成は良好で、胎土は比較的密であり、体部外面に黒斑が認められる。

小形丸底壺（B981・982） B981は口縁部をやや内轉ぎみに外上方に開き、端部を尖りぎみにおさめる。体部は扁球形を呈するものと思われる。口縁部外面には範磨き調整を施すが、他は不明である。復元口径13.3cmを測る。B982は小形丸底壺というより、小型壺に近いものである。口縁部は外上方に開き、端部を尖らして終る。体部は扁球形を呈するが、尖底ぎみである。口縁部の内外面は横ナデ、体部内外面は範削りを施す。口径8.9cm、器高7.0cmを測る。

甕（B988） 口縁部は外上方に開き、端部がわずかに立ち上がる。体部は胴張りである。口縁部外面は横ナデ、体部外面は刷毛目、体部内面に範削りを施す。復元口径14.5cmを測る。色調暗茶灰色、焼成良好、胎土より生駒西籠産と考えられる。

高杯（B984～987） 高杯は杯部が大きく外上方に開くもの（B984～986）と半球形で脚部が短かく一度屈折して大きく開くもの（B987）とに分けることができる。前者は口径15.5cm前後を測り、杯部の外面に横ナデを施す。B984は杯部が外反し、口縁端部に面をもつ。B985の杯部は脚部から一気に直線的に外上方に延び、端部を丸くおさめ、脚部は裾部で一度屈折して外方に開くものである。脚部内面に範削りを施す。B987は全体に範磨き調整を施す。

杯（B989） 須恵器である。口縁部は内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。受部はほぼ水平に外方に延び、底部は平底ぎみである。底部外面に回転範削りを施す。口径11.0cm、受部径13.5cm、器高4.5cmを測る。6世紀前半の土器である。

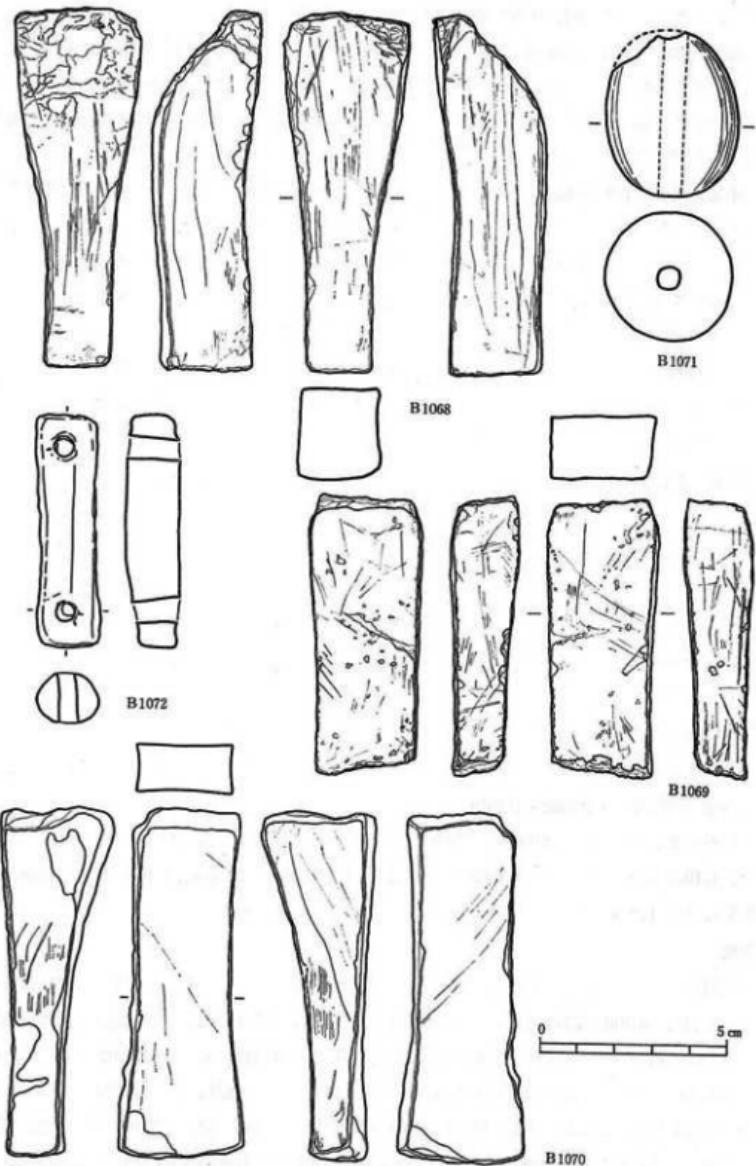
これら以外にも埴輪の破片が若干出土しており、周辺に古墳があった可能性がある。

〔石器〕（第297図・B1069・B1070）

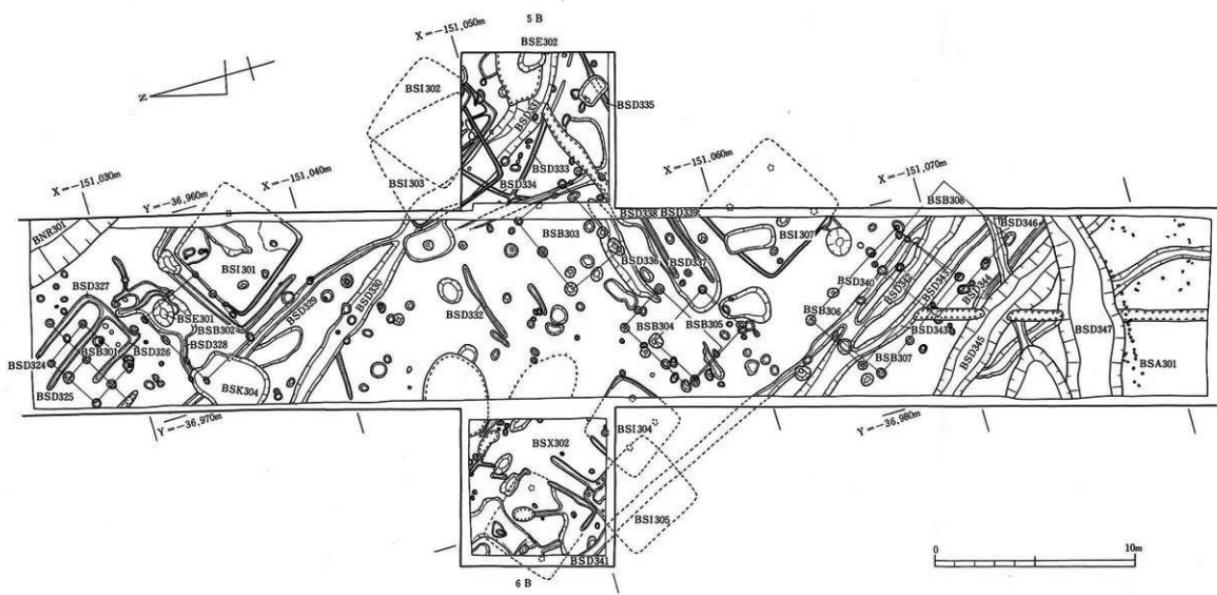
砥石が2点出土した。B1069は両端をわずかに欠く。両底石とも端部以外の全面に擦痕が残り、B1070は凹面を呈する。B1069は現長7.3cm、幅2.8cm、厚さ1.6cm、B1070は長さ9.3cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmを測る。材質は未鑑定であるが、砂岩と思われる。

遺構

検出した遺構には、堅穴住居、掘立柱建物、溝、土坑等があり、集落の一端を知り得た。遺構面はT.P.+3.8m～4.3m前後のところに位置し、中央部が最も高く、そこを頂点に南北両端にゆるやかに傾斜していく。中央部の微高地形は、下層の弥生時代中期のBNR202によって形成されたものである。この中央部の最も高い所に堅穴住居や掘立柱建物等の遺構が集中することはいうまでもないが、これは下層の弥生時代前期集落遺構とは同一地点であり、全くの偶然ではなかろう。すなわち、この地点が、元来、いくつかの河川の流れはあるものの、根本的には、それまでの旧大和川によって形成された自然堤防状の微高地形であったためであろう。



第297図 B地区古墳時代前期遺構面出土石器及び土製品



第298図 B地区中央部古墳時代前期(上層)遺構面(住居跡群)平面図

遺構面のベースを成す層は、第Ⅳ章第1節第2項(2)で説明した第Ⅳf層シルトである。しかし、中央部の住居跡群が密集する地域は、さらに約0.1mの厚さで茶褐色の整地土が盛られているようである。検出した遺構の中で最も注目されるものは、堅穴住居と掘立柱建物が、同時期に併存することである。これまでにもこのような例はいくつか発見されているが、それらの大半が、古墳時代後期の遺跡であるのに対して、今回検出したものが前期に属するところに重要性があろう。掘立柱建物の中には、後述するように倉庫かと思われるものもいくつかあるが、その規模や形態から住居と考えられるものが大半である。今回は、時間及び紙数の関係上同時に併存したという事実報告のみにとどめるが、今後堅穴住居と掘立柱建物との関係をどのように考えるかが問題となろう。また、これら検出遺構は、この時期の集落構成を考える上で良好な資料になりうるものと思われる。

検出した遺構は、重複関係及び出土遺物から3時期に分かれる。さらに各時期は時間差は認められないものの重複関係より新古に細分される。以下遺構ごとに概観する。

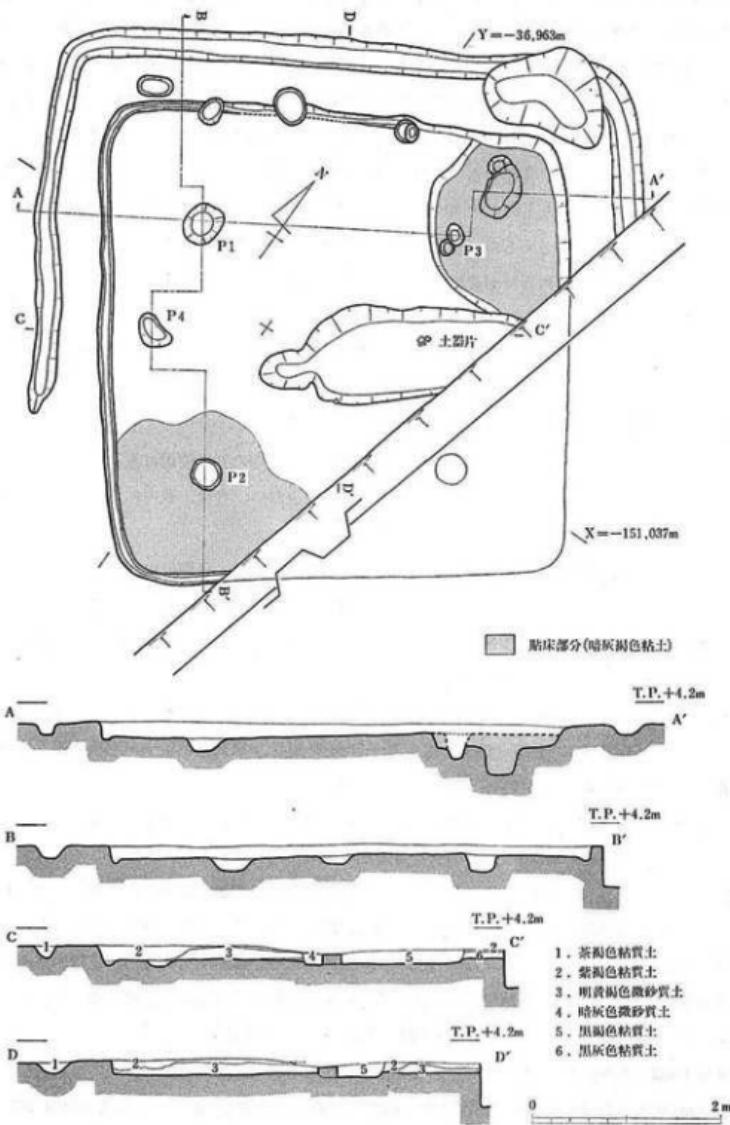
A 堅穴住居

堅穴住居は、中央部で7棟検出した。畿内におけるこの時期の堅穴住居は散発的には検出されているが、7棟もまとまって検出されている例は極めて少ない。今後、畿内におけるこの時期の堅穴住居を知る上での好資料となろう。

B S I 301 (第299図) Bトレンチ中央部北よりで検出した。平面形は、方形と考えられるが、南東角は調査区外である。主軸方向はN-36°-Wで、北辺長4.6m、東辺長5.0mを測り、推定床面積21.0m²前後と推定される。壁高10~15cmが残り、壁直下には幅10~15cm、深さ5cm、断面U字形の周溝（壁溝）が巡る。周溝は北東側では検出されなかったが、もとは全周していたものと思われる。主柱穴はP-1~P-3及び南東側調査区外にあると思われるものの計4本と考えられる。これらの柱穴は径25~40cm、深さ10~20cmを測り、黒褐色粘質土が堆積する。柱間は2.65mを測る。P-4は入口に關係する柱穴かもしれない。

覆土の状況は、基本的には紫褐色粘質土、明黄褐色微砂質土の上下2層に分けることができる。床面の北側と南側には暗灰褐色粘土による貼床部分が認められたが、転跡もしくはカマドは検出されなかった。また、この住居の特徴として、外周北側に幅20~30cm、深さ15cm、断面U字形の溝が巡らされている。埋土は茶褐色粘質土で、端部の内一方は壘状に終っている（もう一方は調査区外であるため不明）。この溝がいかなるものであるかは不明であるが、住居本体から40~50cm離れていることから雨落溝の可能性がある。遺物は極めて少ないが、覆土中より、布留式土器の細片が少量出土している。B S B 302と重複し、それより古い。

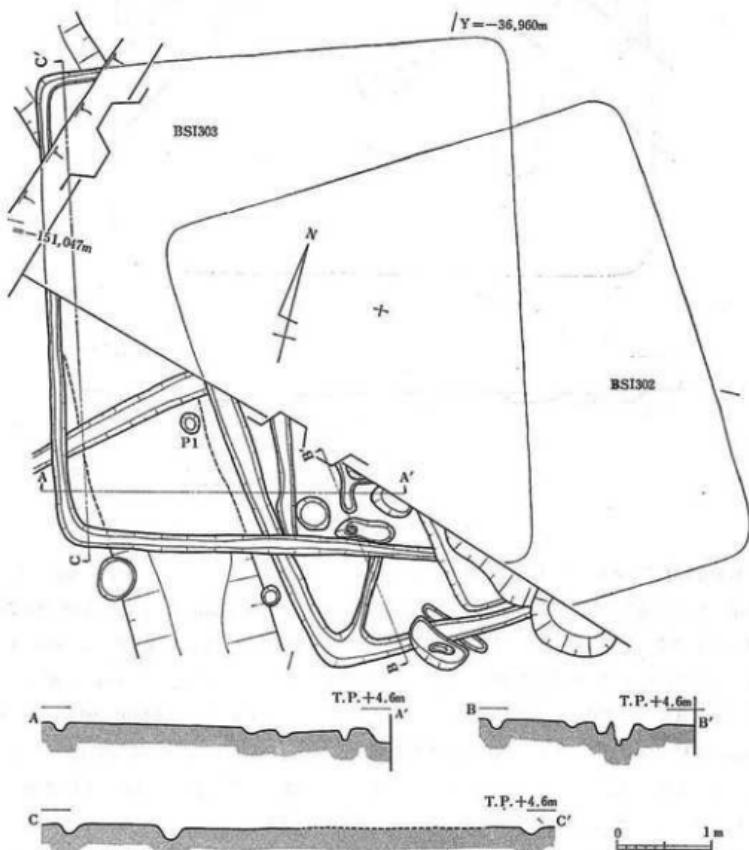
B S I 302 (第300図) 5Bトレンチ北側で検出したが、大半が調査区外である。推定規模一辺約5m、底面積21m²前後の平面方形プランの住居であったと考えられる。主軸方向はN-35°-Wである。周溝のみを検出したにすぎない。周溝幅18~25cm、深さ10cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は紫褐色粘質土である。柱穴等は不明であるが、南西角より対角線上に小溝が検出され



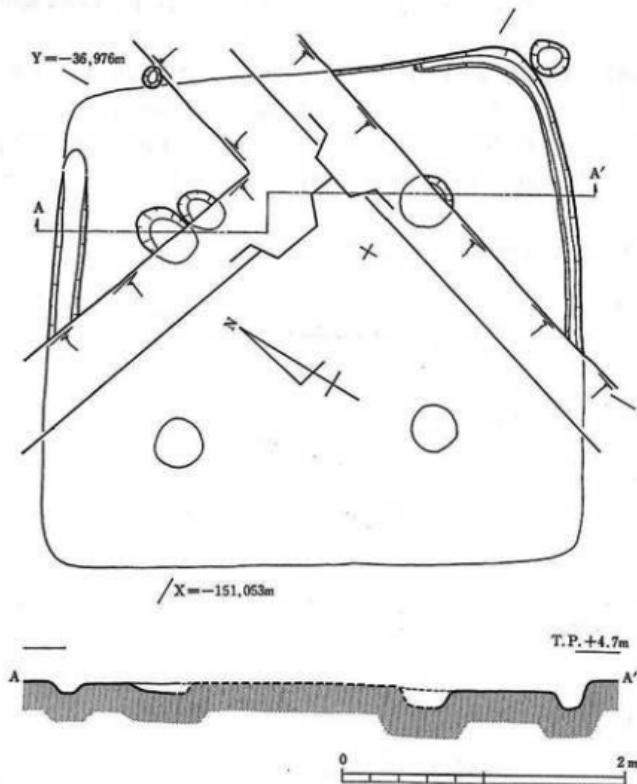
第299図 B S I 301実測図

ており、間仕切りの溝になるかもしれない。遺物は出土しなかった。BSI 303と重複し、それより古い。

BSI 303 (第300図) 5Bトレンチ北側からBトレンチにかけて検出したが、検出したのは全体の約 $\frac{1}{3}$ で残りは調査区外である。規模は一辺約5m、推定床面積23m²前後の方形プランの住居で、主軸方向はN-17°-Wである。上面は削平されており、BSI 302同様周溝のみを検出したにすぎない。周溝は幅15~20cm、深さ10cm、断面U字形を呈し、紫褐色粘質土が堆積する。柱穴は不明であるが、P-1などは規模がやや小さいが、その可能性がある。遺物は出土しなかった。BSI 302及びBSD 330・331と重複し、これらより新しい。



第300図 BSI 302・303実測図

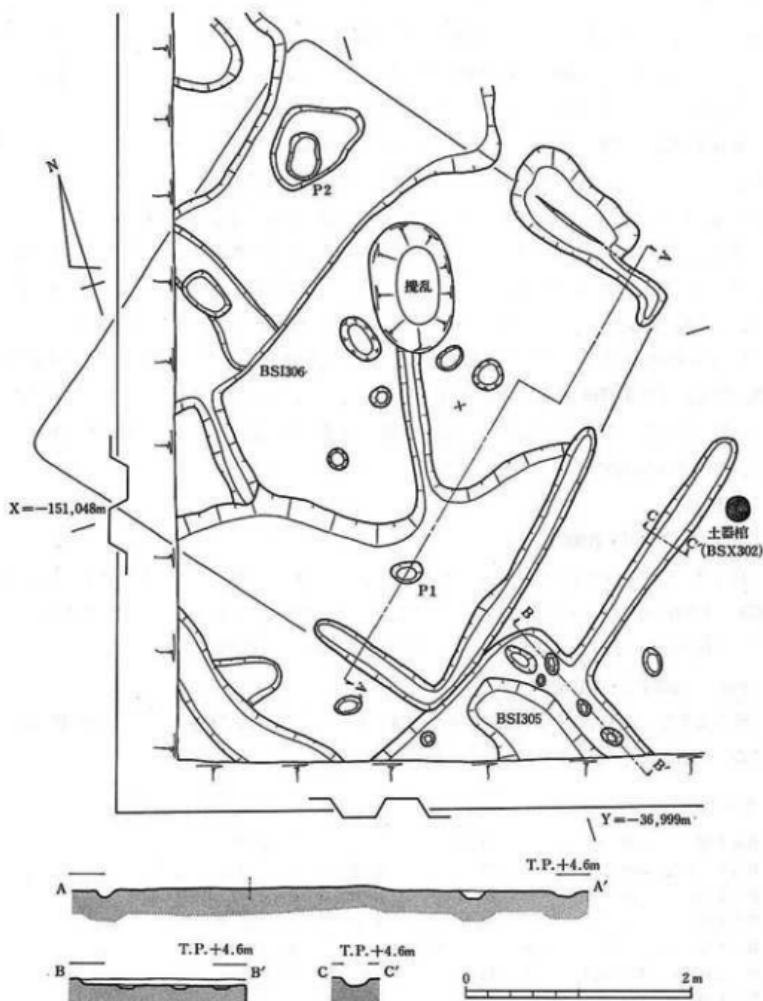


第301図 BS I 304実測図

BS I 304 (第301図) Bトレンチ中央部西よりから6Bトレンチ南東側にかけて検出した。検出したのは全体の1/3強で残りは調査区外である。規模は1辺約3.5m前後、推定床面積10.7m²前後の中規模の方形プランの住居であったと思われる。主軸方向はN-32°Wである。壁は東側で一部認められるが、大半が削平されている。壁高の最も残存しているところで10cmを測る。周溝は途切れている部分もあるが、もとは全周していたものと思われる。周溝幅10~20cm、深さ10cm、断面U字形を呈する。住居内覆土は暗灰色微砂質土で、周溝内には暗紫褐色粘質土が堆積している。主柱穴は、その一部を検出したのみであるが、径30cm、深さ15cm前後の4本柱であったと推定する。遺物は、東側覆土中より布留式土器細片が出土した。

BS I 305 (第302図) 6Bトレンチの南側で検出したが、住居の北東角を検出したのみで大部分は調査区外である。規模は不明であるが、方形プランの住居であったと思われる。主軸の方向

はN-28°-Wである。壁はかなり削平されているが、残存高約5cmを測る。他の住居と異なり、周溝は認められなかったが、壁の内側に沿って径10cm前後、深さ3cm前後の小ピットが並列した状態で検出された。防護壁用の周壁板を固定する杭痕と考えられる。北東角やや南側から、幅20~30cm、深さ10cmの溝が東側へ2.4m派出している。この溝の性格については不明である。住居の裏



第302図 B S I 305・306実測図

土は暗茶褐色粘質土で、時期不明の土師器細片が出土する。B S I 306と重複し、それより古い。

B S I 306 (第302図) 6 B トレンチで検出した方形プランの住居である。上面は削平され、南側の周溝を検出したのみである。一辺約4.3m、推定床面積15.2m²前後と考えられる。主軸の方向はN-37°-Wである。周溝は幅18~25cm、深さ7cm、断面U字形を呈し、淡茶褐色粘質土が堆積する。周溝の南東側約1mは意図的に切られているようで、入口がこの位置にあった可能性がある。主柱は4本柱と考えられ、P-1、P-2はその柱穴の一部と思われるが、他は検出できなかった。P-1は径約20cm、深さ10cm、P-2は径約30cm、深さ15cmを測り、埋土は暗茶褐色粘質土である。炉跡は検出されず、遺物も出土しなかった。B S I 305と重複し、それより新しい。

B S I 307 (第303図) B トレンチ中央部南東より検出した。平面プラン方形と考えられるが、全体の構造は調査区外である。推定規模は一辺5m、床面積24.0m²前後と考えられ、主軸方向はN-31°-Wである。壁高は12cmが現存し、幅12~20cm、深さ5cm、断面U字形を呈した周溝(壁溝)が巡っている。覆土は基本的に暗茶褐色粘質土、黄灰色微砂質土、黄灰色粘質土の3層に分層できる。主柱は4本柱と推定され、P-1はその柱穴の1つと考えられる。P-1は径35cm、深さ15cmを測り、暗褐色粘質土が堆積する。調査した範囲では炉跡は検出されなかった。

住居の南西外側にこの住居に伴うと考えられる井戸を検出した。井戸の規模は径約1.4mの平面円形で、深さ0.87mを測る。埋土は3層に分層でき、上層より暗茶褐色粘質土、黒褐色粘土、黒灰色粘土が堆積する。遺物は住居北西角より布留式土器の破片及び砥石が1点出土したが、井戸内からは遺物は出土しなかった。

出土遺物

〔土器〕(第314図・B 995)

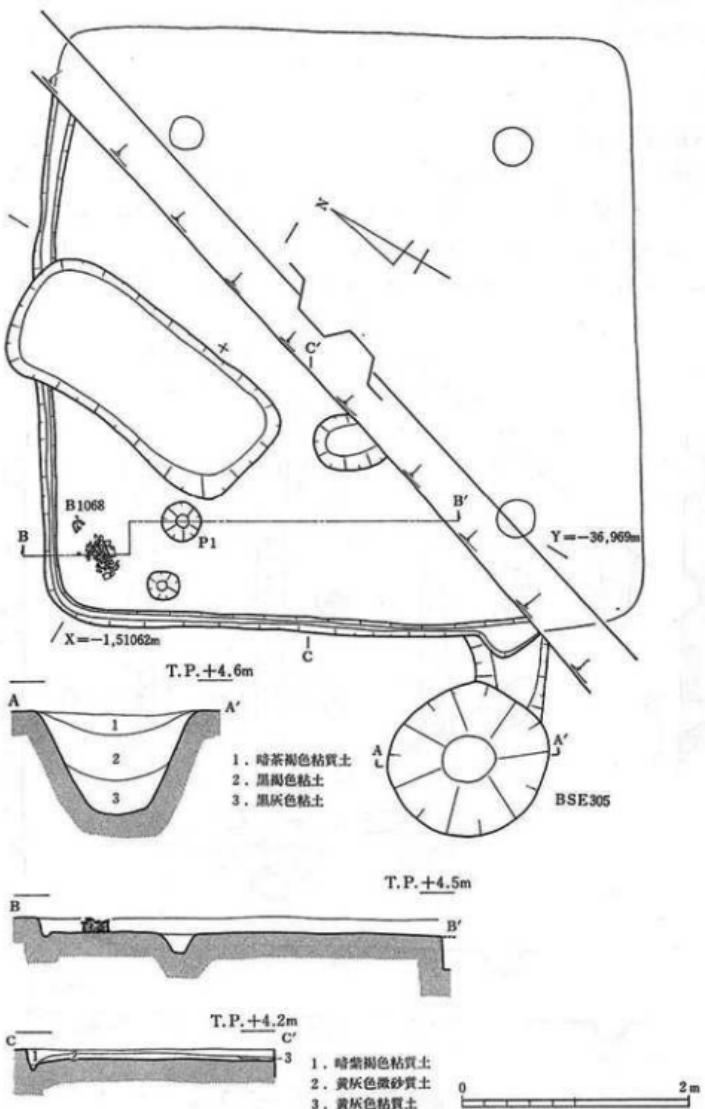
高杯及び器台等の破片が若干出土したが、その内実測可能であった器台1点を抽出する(B 995)。B 995は小型器台の受部である。口縁端部はほぼ垂直に立ち上がり、内外面を横ナデ調整により仕上げる。復元口径11.0mを測る。出土した土器はすべて布留式土器である。

〔石器〕(第297図・B 1068)

砥石である。現長9.7cm、幅2.3cm、厚さ2.4cmを測る。全面に使用痕が残り、すべて凹面を呈する。裏面上位に2次の敲打痕が認められる。

住居番号	平面形	規模(m)	壁高(m)	面積(m ²)	周溝	炉	主軸方向	重複関係	備考
B S I 301	方形	4.8×4.8	0.1~0.15	21.0	有	無	N-36°-W	B S I 302より古い	貼床が認められる
B S I 302	方形	5.0×5.0	—	21.0	有	—	N-35°-W	B S I 303より古い	同仕切溝有り?
B S I 303	方形	5.0×5.0	—	23.0	有	—	N-17°-W	B S I 302より新しい	
B S I 304	方形	3.5×3.5	0.1	10.7	有	—	N-32°-W	B S I 305より新しい?	
B S I 305	方形	—	0.05	—	無	—	N-28°-W	B S I 306より古い	小溝が派生する
B S I 306	方形	4.3×4.3	—	15.2	有	無	N-37°-W	B S I 305より新しい	入口有り 井戸が伴う 砥石出土
B S I 307	方形	5.0×5.0	0.12	24.0	有	—	N-31°-W		

第7表 B地区古墳時代前期堅穴住居一覧表 基規格については平均値であり推定を含む。

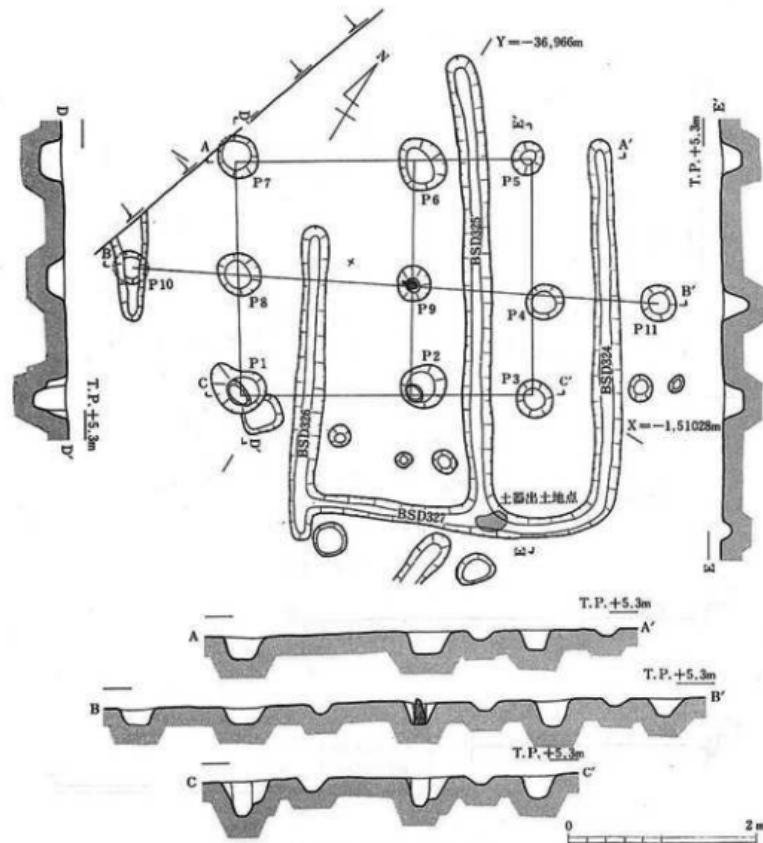


第303図 B S I 307実測図

B 挖立柱建物

掘立柱建物は、堅穴住居同様中央部で8棟を検出した。しかし、これらは確実なもので、これら以外にも柱根や礎板を伴った柱穴状のピットが多数検出されていることから、本来は、さらに多数の掘立柱建物が営まれていたものと思われる。

B S B301 (第304図) Bトレーナー中央部北西よりで検出した。棟持柱をもつ2間×2間の総柱の東西棟である。規模は桁行3.1m、梁行2.5mを測る。南北の主軸方向はN-32°-Wである。柱間距離は、桁行西側で1.8~1.9m、東側で1.2mを測り、西側が長い。梁行は1.1~1.4mを測る。面積は7.75m²である。柱の掘形は径0.4m前後の円形で、深さは0.25m前後を測る。P-9には柱根が遺存し、他の柱穴 (P-1・P-2) にも柱痕が認められるものがある。それによると柱は径



第304図 B S B301実測図

12~20cm前後のものであったと推定される。柱穴内の埋土は、それぞれ若干の差異はあるが、概して暗茶褐色粘質土である。柱穴内より布留式土器の細片が出土する。P-10、P-11はその位置から棟持柱の柱穴のと考えられる。

B S D 224~227はこの建物に伴うものと考えられる。これらの溝については断定できないが、排水溝の機能を有していたのではないかと想定する。また、当初規模が小さいということと、総柱であることから倉庫と考えたが、桁行の柱間の距離が異なり、しかも棟持柱をもっていることから神殿的性格の建物であった可能性がある。なお、総柱建物では管見では最古であることを加えておきたい。

出土遺物

〔木器〕(第339図・B1133)

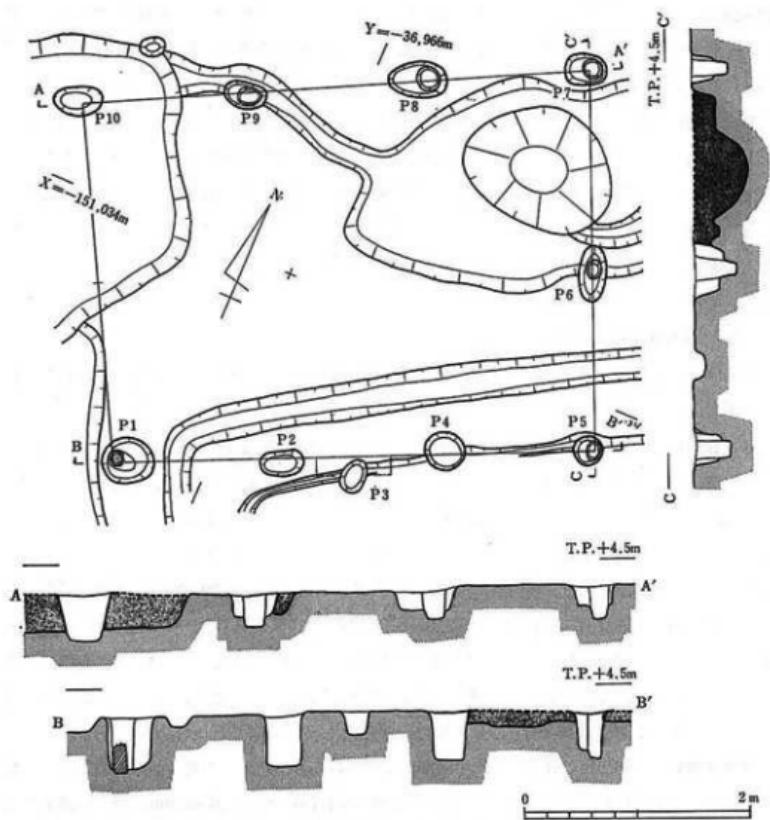
P-9から柱根が出土した。径12cm、現長45cmを測る。先端はローソク状に腐蝕し、表面は比較的丁寧に削られている。材質はヒノキである。

B S B 302 (第305図) Bトレンチ中央部北よりで検出した。2間×3間の東西棟である。しかし、梁行西側P-1とP-10の間の柱穴は検出されなかった。規模は桁行4.2~4.5m、梁行3.2~3.4mを測り、南北主軸方向はN-28°-Wである。柱間距離は桁行で1.3~1.5m、梁行で1.5~1.7mを測る。面積は14.4m²前後であろう。柱掘形は円もしくは梢円形を呈する。掘形の大きさは円形のもので径25~50cm、梢円形のものは長軸幅35~50cm、短軸幅20~30cmを測り、深さは両者とも30~40cm前後である。P-1には径10cm、現長25cmの柱根が残り、P-5~P-9には径10~15cmの柱の痕跡が認められた。柱穴内の埋土は大半が暗茶褐色粘土である。P-3は入口に関係するピットかもしれない。出土遺物は柱穴内より布留式土器の細片及びP-1から炭化米が多数出土した。B S I 301、B S E 301、B S K 304と重複し、それより新しい。

B S B 303 (第306図) Bトレンチ中央部東よりから5Bトレンチ西側にかけて検出した。2間×2間を基本とした東西棟である。規模は桁行4.6~4.7m、梁行2.6~3.0m、面積13.0m²を測る。南北主軸方向はN-26°-Wである。柱間距離は、桁行北側P-7~P-8間は2.1m、P-8~P-9間は2.5m、桁行南側P-1~P-2間は1.15m、P-2~P-3間は0.7m、P-3~P-4間は2.1m、P-4~P-5間は0.75mを測る。桁行の北側と南側の間数及び柱間の距離が異なるのは、特異な建物構造であったのかもしれない。梁行の柱間距離は東側P-1~P-10間は1.7m、P-9~P-10間は1.3m、西側P-5~P-6間は1.35m、P-6~P-7間は1.25m、桁行同様東側と西側では若干異なる。柱掘形は径40cm前後の円形のものが大半で、深さは50cm前後を測る。P-3とP-5の底部からは礎板が出土している。また、P-5、P-8からは径15cm前後の柱の痕跡が認められた。柱穴内埋土は紫褐色粘質土である。P-11は入口に関係するピットかもしれない。遺物は柱穴内から布留式土器細片が出土した。B S D 336と重複し、それより新しい。

出土遺物

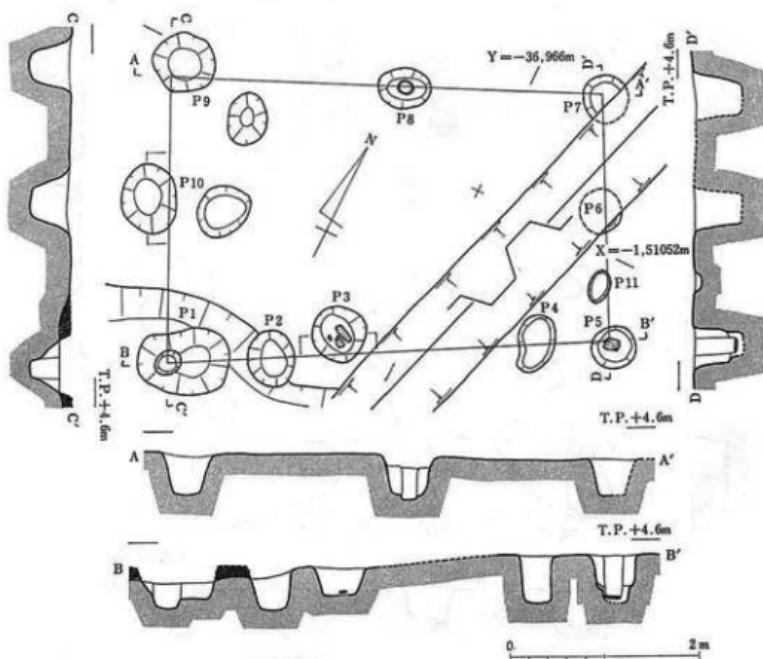
〔木器〕(第339図・B1095)



第305図 BSB 302実測図

P-3、P-5より礎板が出土した。その内P-5出土のものを抽出する。現長25.4cm、最大幅17.2cm、厚さ2.2cmを測る。上面には柱根の痕跡があり、それによると径12cm前後の柱であったと思われる。材質はスギである。

BSB 304 (第307図) Bトレンチ中央部で検出した。2間×3間の東西棟であるが、一部の柱穴（全体的に南西側に位置するもの）については検出されなかった。規模は桁行4.3m、梁行2.6mを測り、南北主軸方向はN-29°-Wである。柱間距離は桁行で1.4~1.5m、梁行で1.1~1.3mを測る。面積は11.2m²前後である。柱掘形は径40~50cm前後の円もしくは梢円形を呈し、深さ30~50cmを測るが、底面はT.P.+4.05m前後では一致している。P-1、P-3、P-5には礎板が遺存し、P-4には径17cmの柱痕が認められた。柱穴内の埋土は暗紫褐色粘質土である。P-2は埋土の状況よりBSB 304に伴うものと思われるが、他の柱穴よりも小規模であり、柱痕



第306図 BSB 303実測図

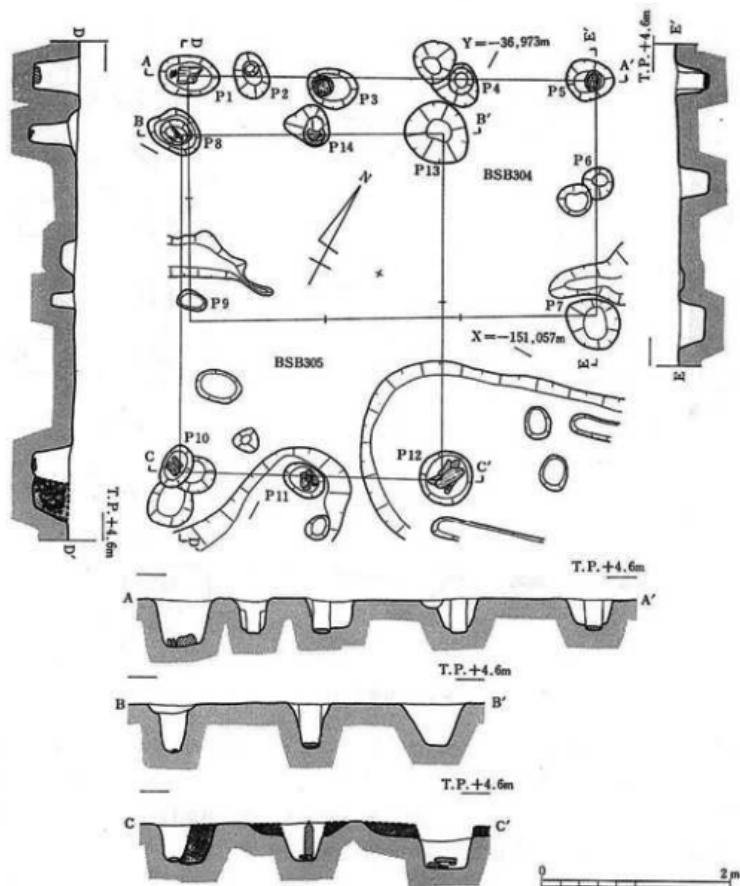
も径13cmほどである。入口に關係する柱穴かもしれない。遺物は柱穴内より布留式土器の細片が出土した。BSB 305と重複するが、直接の切合関係は認められない。しかし、BSB 305と重複している部分の柱穴が検出されていないこと、及び層位的にも BSB 304の方がやや下層(約5cm)で検出されていることから BSB 305より古いと考えられる。

出土遺物

〔木器〕(第310図・B1073・B1081)

P-1、P-3、P-5より礎板が出土した。その内 P-1(B1081)と P-3(B1073) 出土礎板のものを抽出する。B1073は長さ30.6cm、幅21.6cm、厚さ4.4cmを測る。両端は鉄斧のようなもので切断されており、比較的粗いが、両面は丁寧に削られている。B1081は長さ24.3cm、幅20.8cm、厚さ3.3cmを測り、断面がやや弧状を呈する。材質は両者ともスギである。

BSB 305 (第307図) Bトレンチ中央部で検出した。2間×2間の南北棟であるが、桁行東側中間の柱穴は検出されなかった。規模は桁行3.6m、梁行2.8m、面積10.1m²前後を測り、南北主軸方向はN-27°-Wである。柱間距離は桁行で1.8m、梁行で1.4mを測る。柱掘形は径30~50cmの円もしくは楕円形を呈し、深さ40~50cmを測るが、底面はT.P.+4.1m前後で一定してい



第307図 B S B 304・305実測図

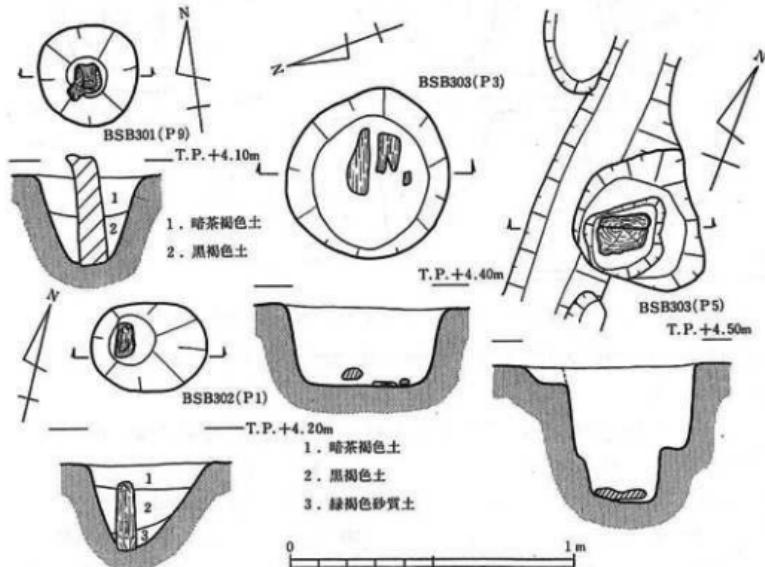
る。柱穴内埋土は基本的には、暗茶褐色土と黒灰色土の上下2層に分層できる。P-8、P-10～12、P-14には柱根及び礎板が遺存し、中でも特にP-11には柱根と礎板の両方が残っていた。これらの礎板は1枚板ではなく、小片をいくつか組合せたものが多い。P-10出土礎板には柱がすえられていたと思われる部分がその重さのためか、わずかに窪んでいるのが認められた。また、P-11出土の礎板の一部には柱掘形内より、外側にむりやりに差込まれているものがある。P-9は他の柱穴より小規模であり、且つ、桁行東側中間の柱穴が検出されなかったことから、おそらく桁行の中間柱は東柱的なものであったのであろう。遺物は柱穴内より布留式土器の細片が出土した。B S B 304と重複し、それより新しい。

出土遺物

〔木器〕(第310図・B1074～B1080)

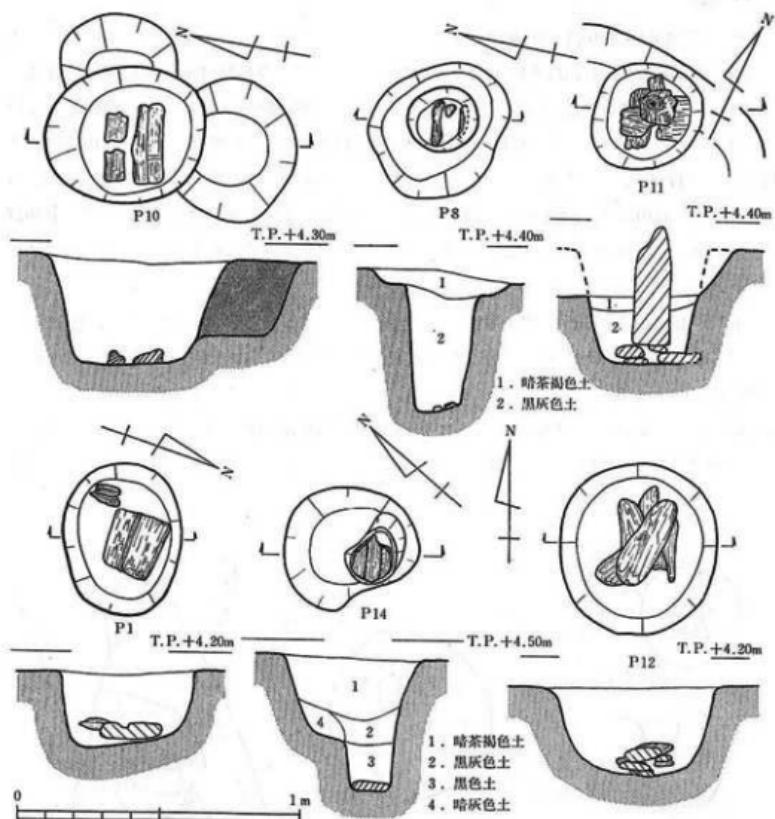
柱根と礎板がある。B1074はP-11より出土した柱根である。現長48.4cm、径14cm前後を測る。端部はローソク状に腐蝕し、節が多く残るものである。底部は鉄斧のようなもので切断されている。材質はヒノキと思われる。B1075～B1096はP-11より出土した礎板である。B1075は長さ14.0cm、幅17.8cm、厚さ2.0cmを測る。上面は丁寧に削られているが裏面はあまり加工を加えられていない。B1076は長さ20.0cm、幅15.0cm、厚さ3.4cmを測り、断面は弧状を呈する。B1077は長さ13.6cm、幅13.8cm、厚さ2.0cmを測り、両面とも比較的丁寧に削られている。材質はスギと思われる。

B1078～B1080はP-12から出土した礎板である。ここでは3点のみを抽出したが、P-12からは合計6枚の礎板が出土している。出土した礎板は全て縦長のものである。B1078は長さ30.0cm、幅16.6cm、厚さ5.6cmを測り、上面は丁寧に削られ平らにされているが、裏面は未加工である。B1079は、長さ30.0cm、幅12.5cm、厚さ3.4cmを測る。B1078同様上面は加工されているが、裏面は未加工である。B1080は長さ31.0cm、幅12.2cm、厚さ5.0cmを測り、両面ともいちおう加工されている。材質は全てスギである。



第308図 B S B 301・302・303柱根及び礎板出土状態図

B S B 306 (第311図) Bトレンチ中央部より検出した。2間×3間の南北棟と思われる

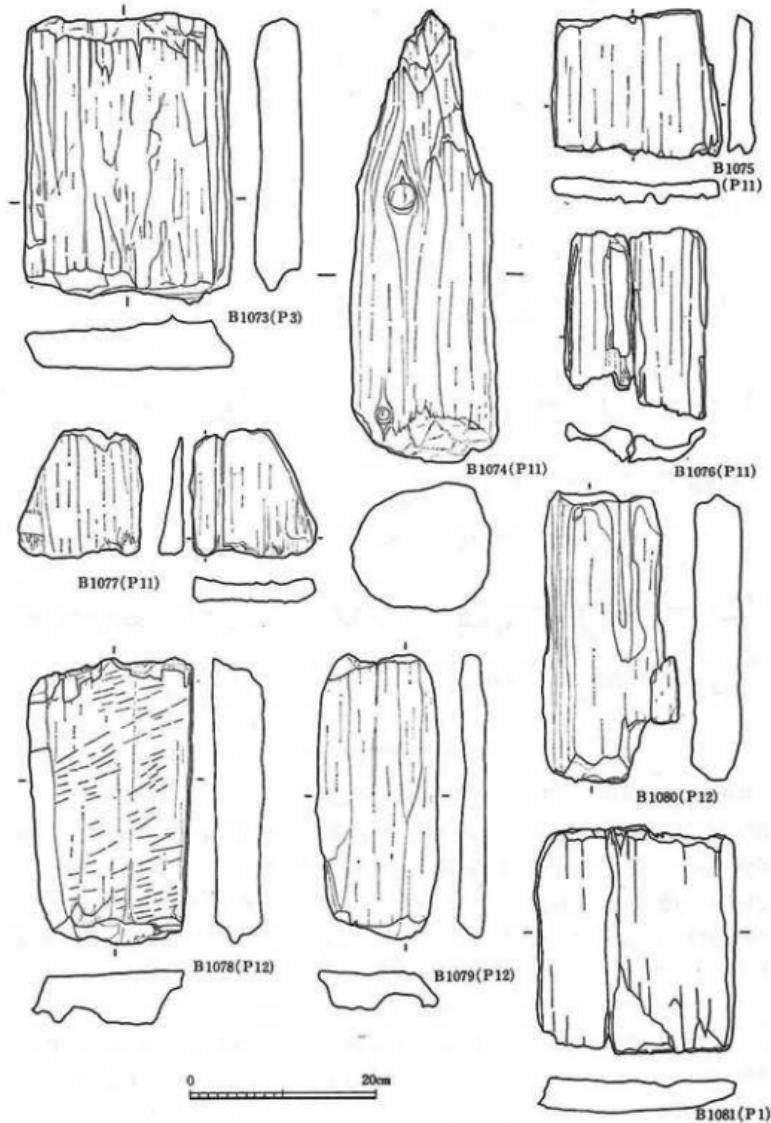


第309図 B S B 304・305柱根及び礎板出土状態図

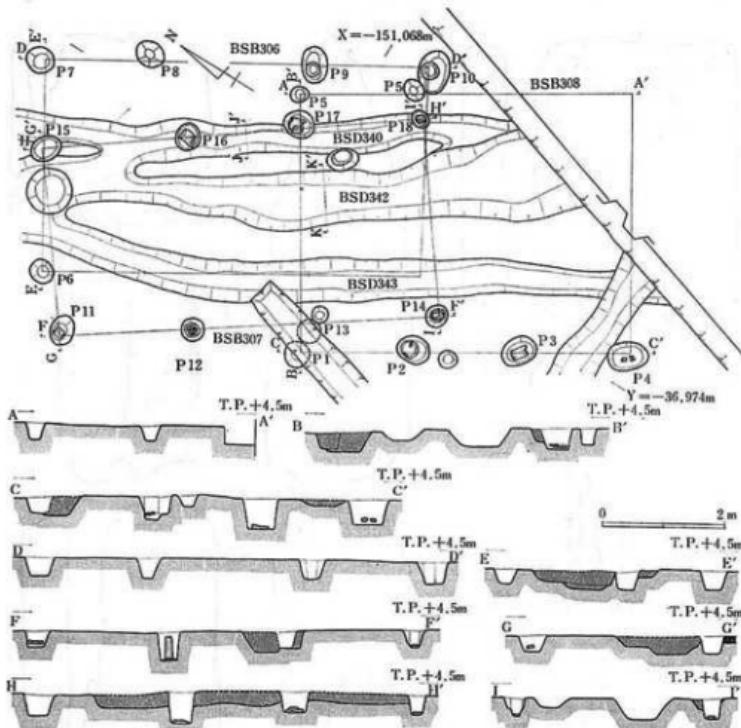
が、中央より西側の柱穴の大半は、B S D 340・342・343によって切られており、検出することができなかった。

規模は桁行6.3m、梁行3.5m、面積22.1m²前後を測り、南北主軸方向はN-30°-Wである。柱間距離は梁行及び桁行西側は不明であるが、桁行東側は1間目(P-7～P-8間)と3間目(P-9～P-10間)が1.8mとはば同数を測るが、2間目(P-8～P-9間)は2.7mと広くなる。柱掘形は径40～50cmの円もしくは梢円形を呈し、深さ30cmを測る。底部はT.P.+3.95m前後ではほぼ一定している。柱穴内埋土は黒褐色土である。P-9、P-10には径15～17cmの柱の痕跡が認められる。遺物は柱穴内より布留式土器細片が出土した。B S B 307、B S B 308と重複するが、直接の切合関係は認められない。しかし、出土遺物やB S D 340、B S D 342、B S D 343との切合

関係より、B S B 307より古く、B S B 308より新しいことがわかる。



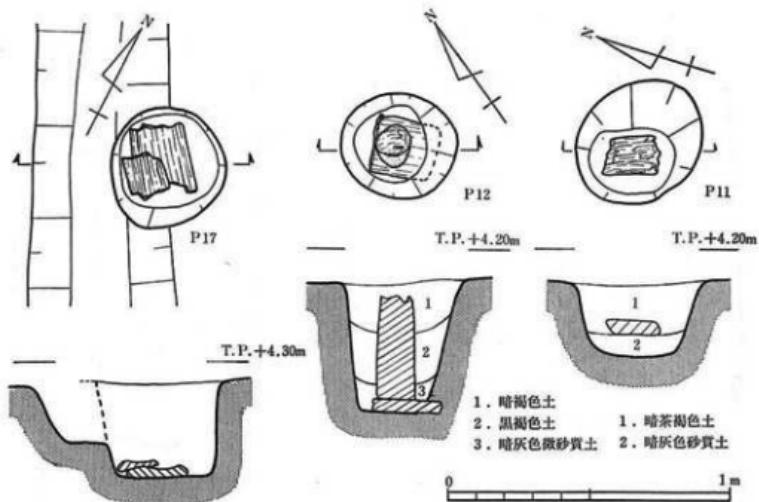
第310図 B S B 304・305出土柱根及び礎板



第311図 BSB306・307・308実測図

B S B 307 (第311図) Bトレンチ中央部南よりで検出した。1間×3間の南北棟であるが、梁行の中間には束柱的なものがあった可能性がある。規模は桁行 6.2m、梁行 3.15m、面積 19.5 m²前後を測り、南北主軸方向は N-35°-Wである。柱間距離は桁行北側で 2.20~2.35m、中央部で 1.9m、南側で 2.0~2.1mを測り、北側が若干長い。柱掘形は径 30~40cm 前後の円形で、深さは 30~50cm を測り、底面高は一定しない。柱穴内埋土は基本的に暗褐色土が堆積する。P-13、P-15以外の柱穴には柱根及び礎板が遺存し、その残りも比較的良い。特に P-12には柱根と礎板がセットで残っていた。P-11の礎板は掘形の底にすえられず、まず暗灰色砂質土を約 10cmほど埋め、その上に置かれている。また P-12の礎板は掘形外にむりやりに差込まれている。P-17の礎板は 2 枚重ねである。遺物は柱穴内より布留式土器の細片が出土している。BSB306と BSB308と重複し、それらより新しい。

出土遺物

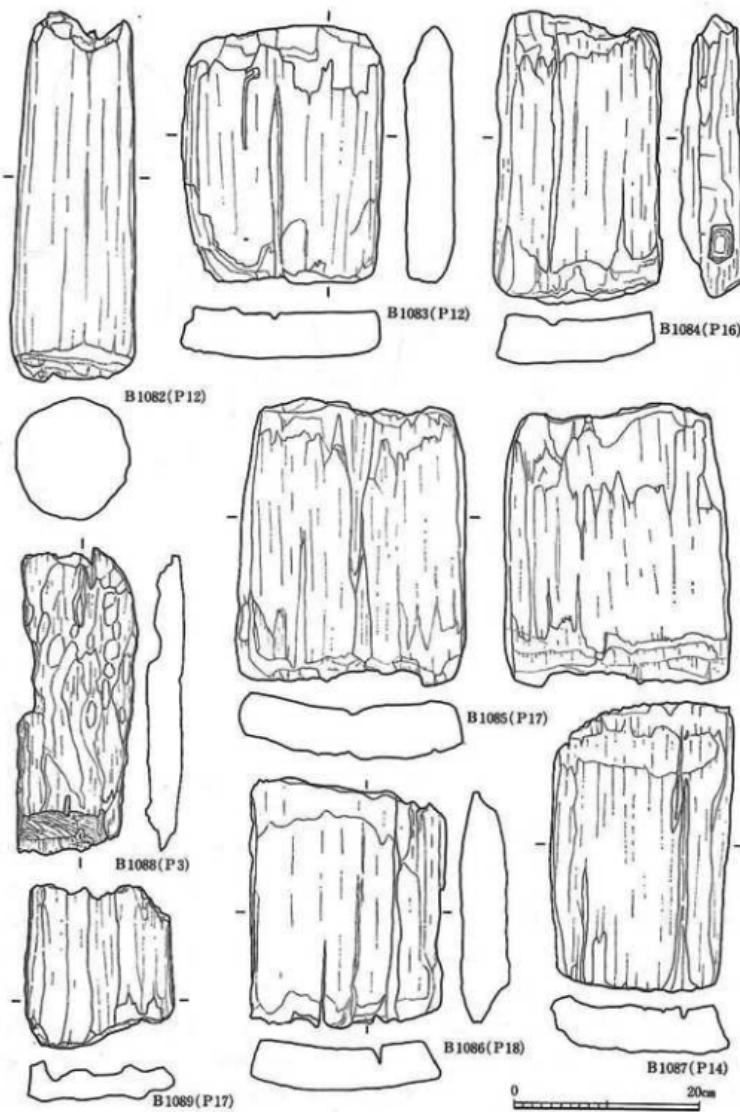


第312図 B S B 307柱根及び礎板出土状態図

〔木器〕(第313図・B 1082～B 1087・B 1089)

柱根と礎板が出土した。B 1082はP-12から出土した柱根である。現長39.0cm、径12.5cmを測り表面は丁寧に削られている。底部には切断面が明瞭に残る。材質はヒノキである。B 1083もP-12より出土した礎板である。長さ27.5cm、幅21.0cm、厚さ4.6cmを測り、断面はわずかに弧状を呈する。表面は柾目に沿って丁寧に削られている。B 1084はP-16より出土した礎板である。長さ30.2cm、幅17.0cm、厚さ4.4cmを測り、断面は弧状を呈する。両面丁寧に削られている。B 1085・1089はP-17より出土したものである。B 1085は長さ29.2cm、幅23.8cm、厚さ5.6cmを測り、断面弧状を呈する。全体に丁寧に加工されているが、両端に切断痕が残る。B 1089は長さ17.0cm、幅15.5cm、厚さ3.0cmを測る。B 1086はP-18から出土したもので、長さ26.0cm、幅20.0cm、厚さ4.5cmを測り、断面は弧状を呈する。B 1087はP-14より出土したもので、長さ30.6cm、幅18.9cm、厚さ5.0cmを測り、断面弧状を呈する。表面は柾目に沿って削られている。礎板の材質は、すべてスギである。

B S B 308(第311図) Bトレンチ中央部南よりで検出した。2間×3間の南北棟であるが、南東側は調査区外である。規模は桁行5.4m、梁行4.2m、面積22.7m²前後を測り、南北主軸方向はN-33°-Wである。柱間距離は、梁行中間の柱穴はB S D342によって切られているため検出できなかったが、桁行で1.8mを測る。柱掘形の大きさは一定しておらず、径25～60cm前後の円もしくは、梢円形を呈し、概して東側の掘形が大きい。深さは40～50cmを測り、掘形底面高は一定していない。柱穴内埋土は黒褐色土である。P-2、P-3、P-4には礎板が遺存していた。その内P-2とP-4検出の礎板は掘形の底ではなく、若干浮いた状態で検出された。出土遺物はP-1より庄内式壺の破片が出土している。B S B 306とB S B 307と重複し、それらより古い。



第313図 B S B 307・308出土柱根及び礎板

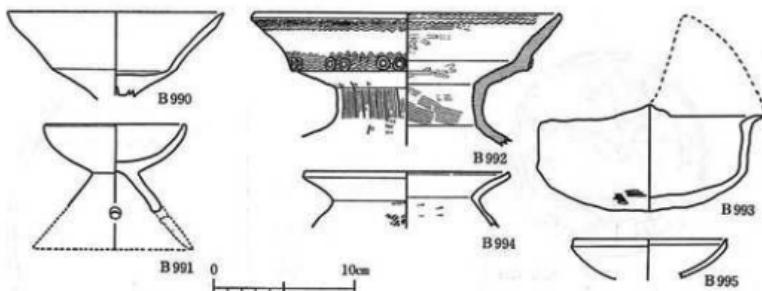
出土遺物

〔土器〕(第314図・B994)

P-1より出土したいわゆる庄内式甕の破片である。口縁部は外上方に開き、端部をわずかに立ち上がらせる。復元口径14.5cmを測る。口縁部の内外面は横ナデ、体部外面は細かい叩目、内面は施削りを施す。さらに頸部外面に刷毛目調整が施されている。

〔木器〕(第313図・B1088)

P-2、P-3、P-4から礎板が出土したが、その内P-3出土のものを抽出する。長さ32.0cm、幅11.8cm、厚さ3.5cmを測る。両端に切断痕が明瞭に残る。材質はスギと思われる。



第314図 B SK302、BSK301、BSE301、BSB308、BSI307出土土器

建物番号	規 模		面積 (m ²)	柱間寸法		主軸方位	重複関係	備考
	梁行(m)	桁行(m)		梁行(m)	桁行(m)			
B S B 301	2間(2.5) × 2間(3.1)	7.75	1.1~1.4	1.2 1.8~1.9	N-32°-W	—	—	柱で挟む柱有り
B S B 302	2間(3.2) × 3間(4.2 ~3.4) × 3間(4.2 ~4.5)	14.4	1.5~1.7	1.3~1.5	N-28°-W	B S I 301より新しい	—	—
B S B 303	2間(2.6) × 2間(4.6 ~3.0) × 3間(4.7)	13.0	1.3~1.7 1.25~1.35	2.1~2.5 0.7~2.1	N-26°-W	—	—	柱間距離が一定しない
B S B 304	2間(2.6) × 3間(4.3)	11.2	1.1~1.3	1.4~1.5	N-29°-W	B S B 305より古い	—	—
B S B 305	2間(2.8) × 2間(3.6)	10.1	—	1.8	N-27°-W	B S B 304より新しい	—	—
B S B 306	2間(3.5) × 2間(6.3)	22.1	—	— 1.8 2.7	N-30°-W	B S B 307より古く B S B 308より新しい	—	—
B S B 307	1間(3.15) × 3間(6.2)	19.5	3.15	1.9~2.35	N-35°-W	B S B 306 B S B 308 より新しい	—	—
B S B 308	2間(4.2) × 3間(5.4)	22.7	2.1?	1.8	N-33°-W	B S B 306 B S B 307 より古い	梁行の間に東柱があった可能性あり	—

第8表 B地区古墳時代前期掘立柱建物一覧表

C 墓

土器棺が1基検出された。B地区では古墳や土壙墓は検出されなかったが、包含層から埴輪が出土していることから周辺に古墳があった可能性がある。

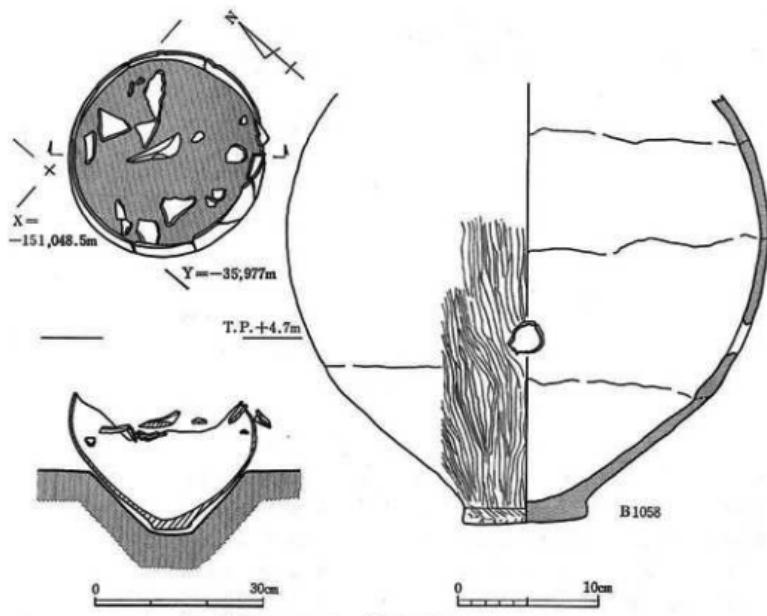
B S X 302 (第315図) 6 B地区で検出した土器棺であるが、上面はかなり削平されている。その形態から壺棺であったと思われる。掘形は壺棺の大きさにあわせて掘られているようであ

り、壺棺は北側へ約5°傾いている。棺内からの人骨等の出土はなかったが、その大きさから小児用のものであろう。

出土遺物

〔土器〕(第315図・B1058)

口縁部を欠いた棺である。体部は球形を呈し、平底である。現高31.0cm、体部最大径34.4cmを測る。体部外面は笠磨き、内面は笠削りを施し、成形時の巻上げ痕が認められる。肩部最大径の位置するところよりやや下位に約2cmの穿孔が施されている。色調は茶灰色、焼成は良好で胎土は生駒西麓産である。形態及び手法から庄内式に属するものと考えられる。



第315図 B S X 302壺棺出土状態及び出土土器棺

D 井戸

B S E 301(第316図) Bトレーンチ中央部北より、B S I 301とB S B 301の間で検出した。長軸幅1.36m、短軸幅1.13mの平面梢円形をした素掘りの井戸である。深さ1.22mを測り、底面は平坦である。埋土は4層に分層でき、上層より、茶褐色粘質土、暗灰色微砂質土、黒灰色粘質土、暗灰色粘質土が堆積する。井戸の外側は全体に1段掘り込まれた状態で、B S D 328によりB S K 304と接続する。また東側にも小溝が接続しており、排水溝的機能を有したものかもしれない。遺物は第1層茶褐色粘質土内から庄内式壺の口縁部破片及び第3層黒灰色粘質土内より壺と手縛

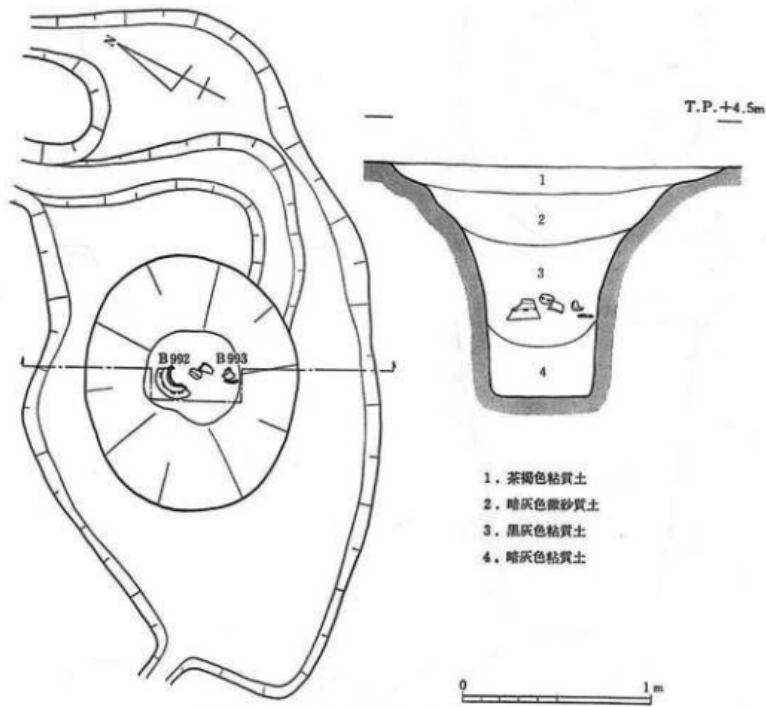
形土器の破片が出土した。

出土遺物

〔土器〕(第314図・B992・B993)

第3層黒灰色粘質土内出土土器を抽出する。B992は二重口縁の壺である。口縁部は2段に外反し、端部外側に面をもつ。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、比較的長い。2段目口縁部外面上位と下位に6本1組の波状文を施し、さらに下位の波状文の上に2個1組の円形浮文を施す。また、2段目口縁部内上面には、3本1組の波状文が施されている。口縁部外面は荒磨き、頸部内外面は刷毛目調整を施す。復元口径21.5cmを測り、暗茶灰色を呈する。焼成は良好で生駒西麓産の胎土である。口縁部内面に黒斑が認められる。

B993は手焙形土器であるが、覆部は欠失している。全体に磨滅が著しいが底部に叩目が認められる。全体にスマートさに欠ける手焙形土器である。



第316図 BSE 301遺物出土状態及び土層断面図

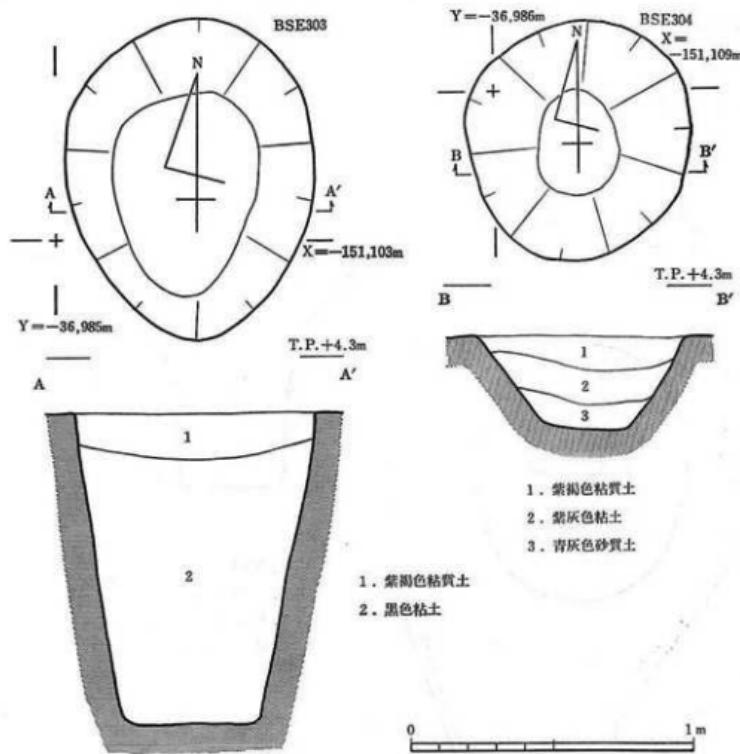
BSE 302 (第298図) 5Bトレンチ西端で検出したが、全体の約3分強は調査区外である。平面形は不定形で、南北幅1.3m、深さ0.7mを測る。埋土は暗紫褐色粘質土と黒色粘土の2層に分層

できる。遺物は出土しなかったB S D331と重複し、それより新しい。

B S E303 (第317図) Bトレンチ南側で検出した。長軸幅1.14m、短軸幅0.88mの平面卵形を呈する。深さは1.10mを測り、底部は平坦である。埋土は、紫褐色粘質土と黒色粘土の上下2層に分層できるが、大半は黒色粘土である。遺物は出土しなかった。

B S E304 (第317図) Bトレンチ南側で検出した。径0.8m前後のはば円形をした素掘の井戸である。深さは0.33mと浅いが、現在でも湧水が著しい。埋土は上から紫褐色粘質土、紫灰色粘土、青灰色砂質土の3層に分層できる。遺物は出土しなかった。

B S E305 (第303図) B S I 307参照。



第317図 B S E303・304実測図

E 溝

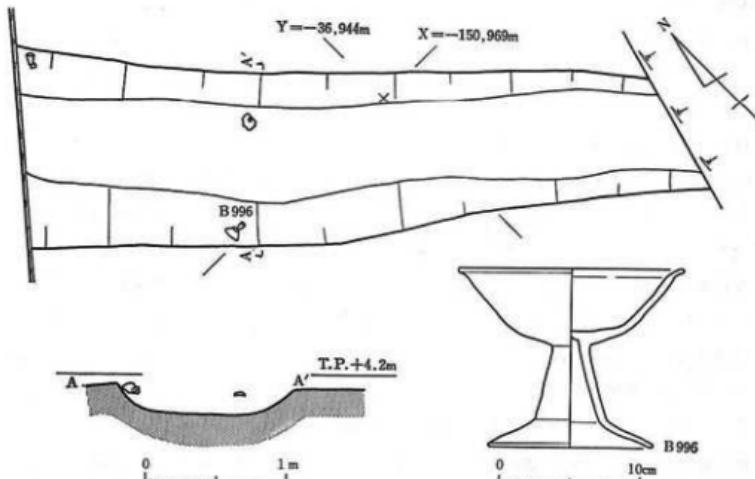
B地区で検出した溝の大半は、S E-NWの方向に延びるもののが大半であり、住居跡の方向にはほぼ一致する。また、本来の溝とは機能を異にする小溝群が北側で検出された。

B S D315 (第318・319図) Bトレンチの北端で検出した南東方向から北西方向に延びる溝である。両端は調査区外に続く。上幅0.85~1.45m、下幅0.55m、深さ0.18~0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗紫褐色粘質土である。下層のB S D301とは同一地点を走り、再掘削の可能性が考えられる。遺物は布留式土器が出土した。

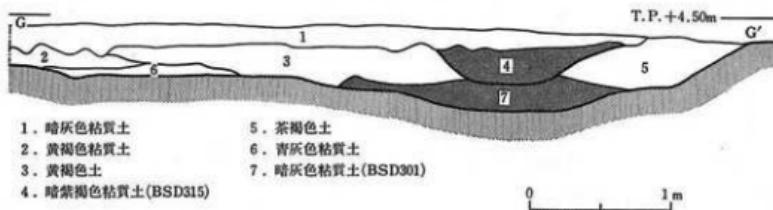
出土遺物

〔土器〕(第318図・B996)

高杯が3個体分と、その他の破片が少量出土した。その内、高杯1点を抽出する(B996)。杯部は内縁状に開き、端部をわずかに屈折させ丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施す。脚部は屈折して開き、端部を面取りする。外面はナデ、内面は挽削りとナデ調整を施す。口径16.0cm、器高12.7mを測る。色調は白褐色を呈し、焼成は良好である。布留式土器でも新しい段階のものであろう。



第318図 B S D315遺物出土状態及び出土土器



第319図 B S D301、B S D315関係断面図(実測地点は付図13参照)

B S D316 (付図13) 1 B レンチ中央部で検出した。レンチの長辺に対してほぼ平行に走る溝で、両端は調査区外に延びる。幅20~30cm、深さ5~10cmを測る。埋土は暗紫褐色粘質土である。小溝群の中に位置するが、本溝のみ方向が異なる。

B S D317 (付図13) B レンチ北側で検出したコ状に走る溝である。北西側はB S D318と接続し、南西側は自然に消滅する。幅は1.7m前後、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は布留式土器の細片が少量出土した。小溝群に重複するものと接続するものがある。

B S D318 (第196図) B レンチ北側から2 B レンチにかけて検出した。方向は南東方向から北西方向に延び、2 B レンチ側で二股に分かれる。上幅1.2~2.0m、下幅1.0~1.8m、深さ0.17~0.18mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土と淡灰褐色微砂質土の上下2層に分層できる。北側でB S D319が、南側でB S D320が南西方向に枝分れする。その内B S D320は3mほど延びたところで袋状に終る。遺物は布留式土器の破片が少量出土した。

B S D319 (付図13) 2 B レンチで検出した北東方向から南西方向に延びる溝である。北西端はB S D318に接続し、南西端は調査区外に続くがB S D322に繋がる可能性がある。幅20cm、深さ10cmを測り、断面V字形を呈する。埋土は淡茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

B S D321・322 (付図13) B レンチ北側南よりから南側にかけて検出した。南東方向から北西方向に延びるもので、その方向及び埋土の状態からB S D321とB S D322は一連の同一溝と考えられる。北西端は調査区外に続き、南東端は自然に消滅する。幅0.5~1.5mを測り、南東に徐々に広くなっていく。深さは0.1m前後で断面逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土であるがBNR301の北側に沿ってほぼ平行に走っていることから、おそらく、BNR301がオーバー・フローしたときのための排水溝的なものであろう。遺物は出土しなかった。

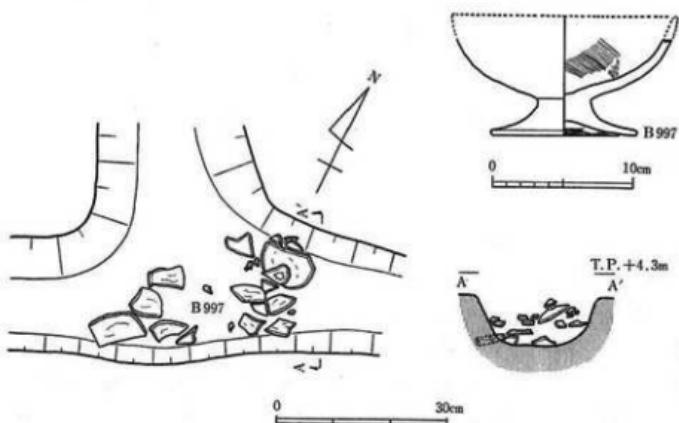
B S D323 (付図13) B レンチ北側南よりから4 B レンチ北東側で検出した。南東方向から北西方向BNR301の南側をほぼ平行に走り、両端は袋状に終る。幅25cm、深さ7cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

B S D324~327 (第304・320図) B レンチ中央部北よりで検出した。B S D324~326の方向は南東から北西方向で、しかもB S D301の南北主軸方向とはほぼ同じ方位である。これらの溝の北西端は袋状に終り、南東端はB S D327によって接続する一連の溝である。幅は20~30cm、深さ10cm前後、断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。B S D301に伴う排水溝と考えられる。遺物はB S D327から布留式の古い段階の斐の破片と高杯が1点出土した。

出土遺物

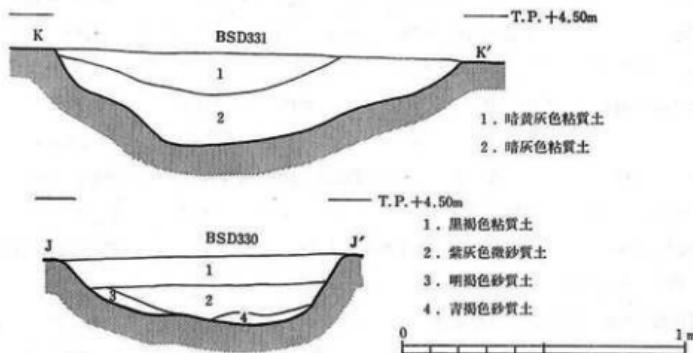
〔土器〕(第320図)

高杯1点を抽出する(B997)。半球形の杯部に短かくラッパ状に開く脚部が付く。口縁端部は欠損している。全体に磨滅が著しいが、杯部内面と脚部内面に刷毛目調整が認められる。形態及び胎土から山陰系の土器と考えられる。



第320図 B S D 327遺物出土状態及び出土土器

B S D 329 (付図13) Bトレンチ中央部北よりで検出した。B S D 330より枝分れした溝である。南東方向から北西方向に走り、南東端はB S D 330に接続し、北西端は調査区外に延びる。上幅30~40cm、下幅20~25cm、深さ25cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。B S B 302・B S K 304と重複し、それらより古い。



第321図 B S D 330・331土層断面図 (実測地点は付図13参照)

B S D 330・331 (第321図) Bトレンチ中央部北よりから5Bトレンチにかけて検出した。南東方向から北西方向に若干蛇行した溝である。溝の方向からB S D 330とB S D 331は一連の同一溝と考えられる。上幅0.8~1.5m、下幅0.5~0.8mを測り概して南側が広い。深さは0.25~0.35mで、断面U字形を呈する。埋土は北側と南側では異なるが、基本的に2層に分層できる。Bトレンチ南東側でB S D 329が枝分れする。遺物は庄内式壺の破片と高杯が出土した。B S I 303と

重複し、それより古い。

出土遺物

〔土器〕(第329図・B998)

土器の出土量は少ない。いわゆる庄内式甕の破片と高杯が出土し、その内高杯1点を抽出する。B998は半球形の杯部に脚柱部が短く、裾部が直線的に大きく開くものであるが、脚柱端部は欠損している。脚柱部中位の4方向に円孔を穿つ。杯部内外面笠磨き調整を施す。口径11.4cmを測る。

B S D 332 (付図13) Bトレンチ中央部で検出した東西方向の小溝である。総延長4.3mで両端は袋状に終る。幅20cm前後、深さ5cm、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。溝の方向及び位置から堅穴住居の周溝であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

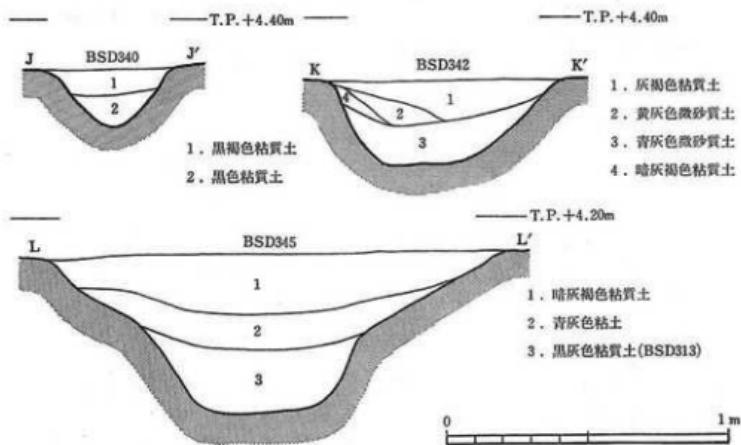
B S D 333・334 (付図13) 5Bトレンチで検出した小溝である。B S D 333は南東方向から北西方向、B S D 334は北東方向から南西方向に走る溝で、両溝は5Bトレンチ西側でクロスに交差する。幅20~30cm、深さ7cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。B S I 303と重複し、それより古い。

B S D 335 (付図13) 5Bトレンチ南東側で検出した東西方向の小溝である。幅20cm、深さ6cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土である。埋土は異なるが溝の方向からB S D 339と同一溝の可能性と、堅穴住居の周溝の可能性の2通りがある。遺物は出土しなかった。

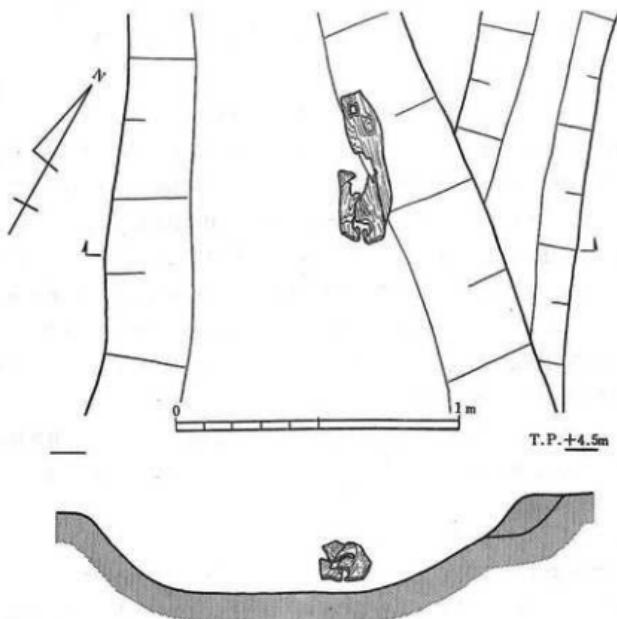
B S D 336 (付図13) Bトレンチ中央部で検出した東西方向の溝である。総延長は6.3mで、両端は袋状に終る。最大幅1.0m、深さ0.2mを測り、黒茶色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。B S D 303と重複し、それより古い。

B S D 337~339 (付図13) Bトレンチ中央部から5Bトレンチ南側にかけて検出した。東西方向の溝である。両端は袋状に終り、東側は落込み状に変化する。B S D 337は幅2.0m、深さ0.1mを測り、暗紫褐色粘質土が堆積する。B S D 338・339はB S D 337の底部で検出された。幅20cm、深さ7cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土はほぼ同じで、暗茶灰色粘質土である。遺物は布留式土器の破片が少量出土した。B S B 305と重複し、それより古い。一部は下層のB S D 310の再掘削と考えられる。

B S D 340~343 (付図13、第322・323図) Bトレンチ中央部南よりで検出した。南東方向から北西方向の溝群である。両端は調査区外に延び、6Bトレンチ南西角で検出したB S D 341は、その方向及び埋土の状況からB S D 340の延長上に位置する溝と考えられる。埋土は若干異なるがそれぞれの溝はつながっており、丁度下層にB S D 312が流れていることから、B S D 312の一部を再掘削した可能性がある。B S D 340は上幅約0.45m、下幅0.1m、深さ0.2mを測り、断面V字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土、黒色粘質土の上下2層に分層できる。B S D 342は上幅0.5~1.2m、下幅0.2~1.0m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。埋土は断面観察を行なった地点で4層に分層できた。B S D 343は上幅0.5~0.7m、下幅0.3~0.4m、深さ0.3mを測



第322図 B S D 340・342・345土層断面図（実測地点は第311図参照）



第323図 B S D 342椅子形状木製品出土状態図

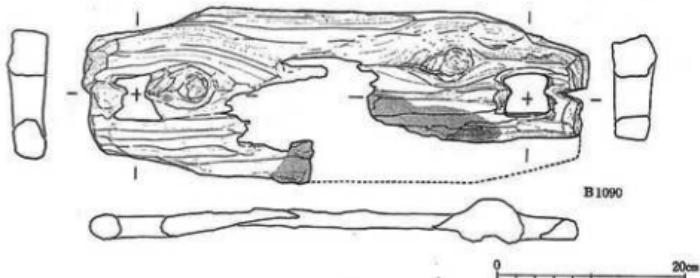
り、断面U字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土のみの単層である。出土遺物は少ないが、布留

式土器細片が少量と B S D342東より椅子状木製品が1点出土した。B S B306・307・308と重複し、B S B307より古く、B S B306・308より新しい。

出土遺物

〔木器〕(第324図)

B S D342東より出土した椅子状木製品である。長さ53.7cm、幅18.5cm、厚さ3.8cmを測るが一部を欠く。両端に一辺4cmのほぞ穴をあけているが、方形を呈さない。このほぞ穴に板を差し込んで椅子としたものと考えられるが、平面には大きな節が残る。全体に雑な作りで、欠損部には火を受けた痕跡が認められる。時代は異なるが、静岡県の登呂遺跡や山木遺跡出土遺物に類似品が認められる。材質は未鑑定である。



第324図 B S D342出土土器（椅子状木製品）

B S D344 (付図13) Bトレンチ中央部南よりで検出した南東方向から北西方向に延びる溝で、北側はB S D345に、南側はB S D347に切られている。幅0.3m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は出土しない。B S D348に接続する可能性がある。

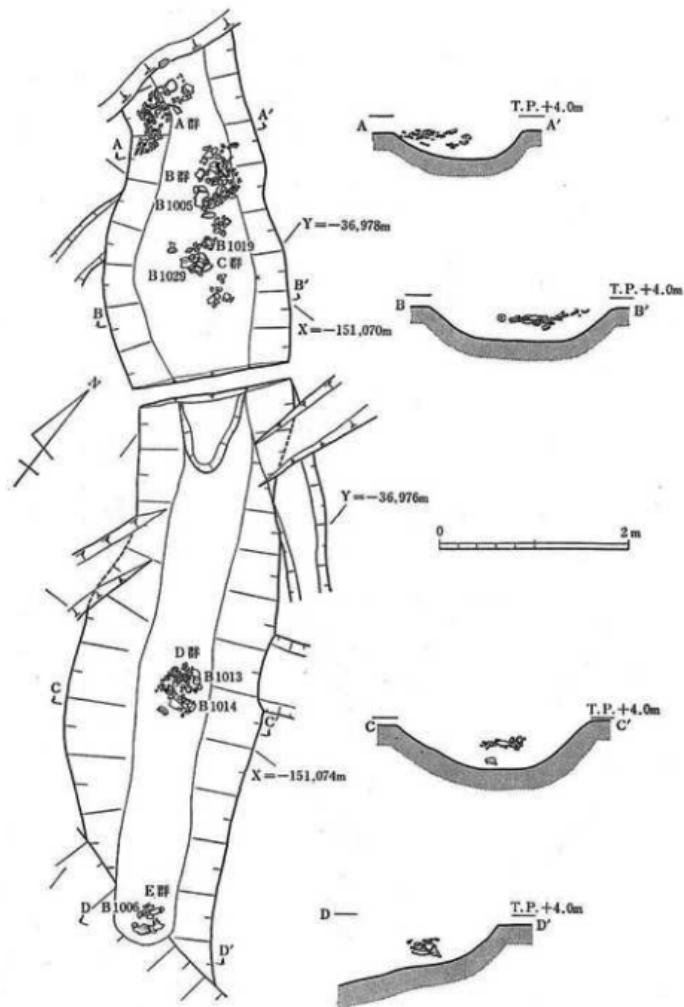
B S D345 (第322・325図) Bトレンチ中央部南よりで検出した、南東方向から北西方向に走る溝である。両端は調査区外に延びる。上幅1.3~2.0m、下幅0.4~1.1m、深さ0.35mを測り、断面U字形を呈する。埋土は、暗灰褐色粘質土、青灰色粘土の上下2層に分層できる。下層で検出したB S D313の埴輪、再掘削の可能性がある。遺物は庄内式土器と布留式土器が混在して出土するが、庄内式土器は布留式土器に比して少量である。遺物の出土地点はまとまりになって、A~Eの5群に大別できる。出土状況から祭祀的、もしくは供獻的性格が強い。B S D344、B S D346~348と重複し、B S D347より古く、他の溝より新しい。後述するB地区Ⅱ期の集落南側を画する溝と思われる。

出土遺物

〔土器〕(第326・327図)

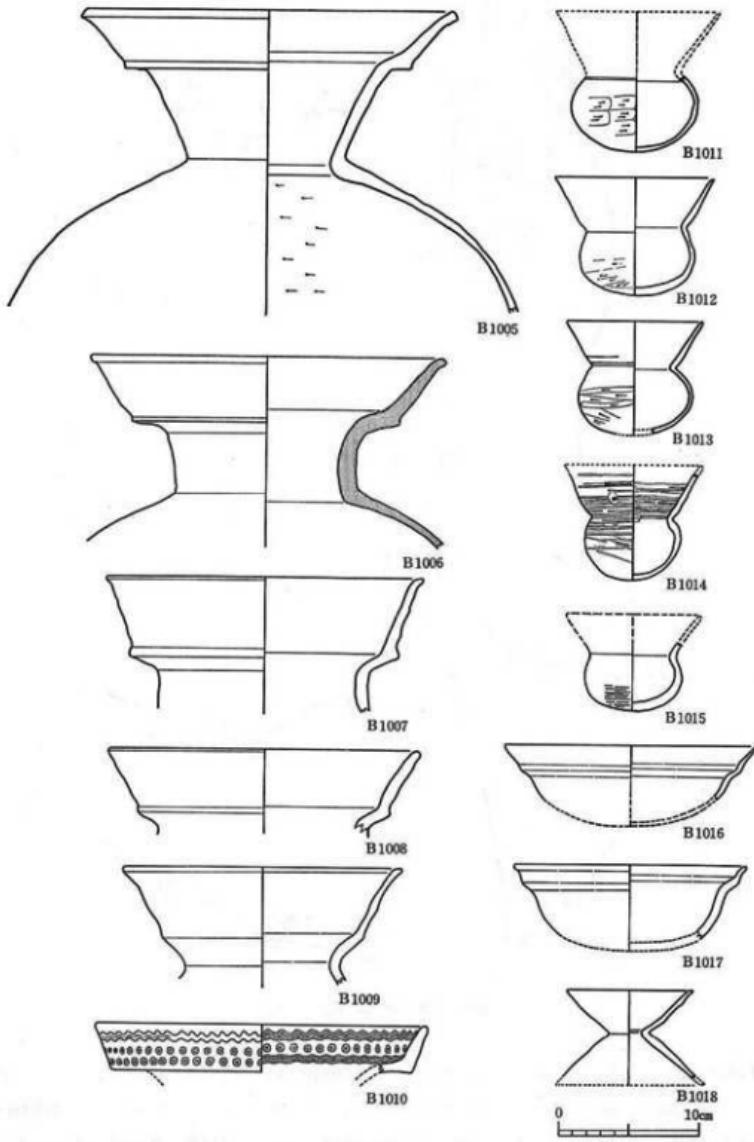
B S D345から出土した土器の量は、B地区検出古墳時代前期遺構中最も多い。出土土器には壺、小形丸底壺、甕、高杯、鉢、器台がある。

壺 (B1005~B1010) すべて二重口縁の壺である。口縁部は2段に屈曲して、外上方にのび、

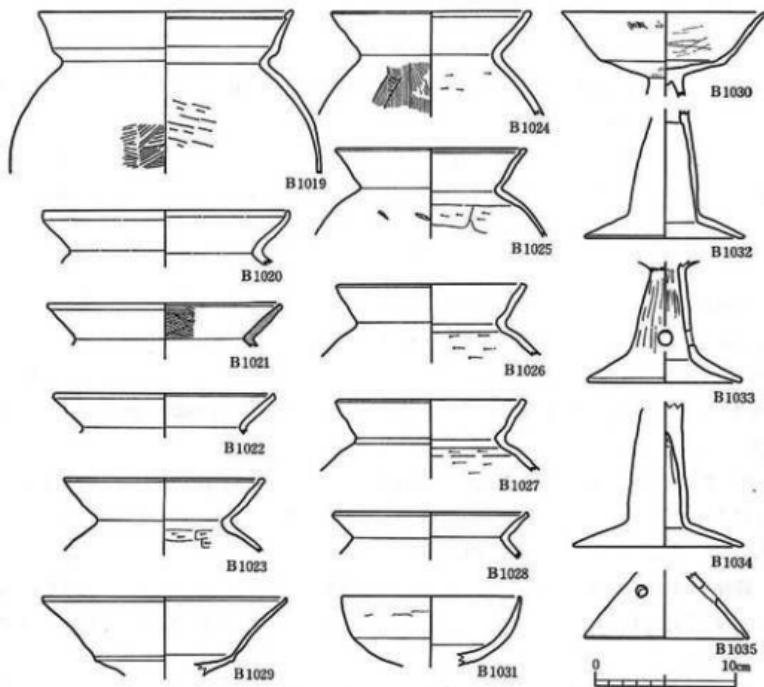


第325図 B S D 345遺物出土状況図

1段目と2段目の接合部に段もしくは稜をもつ。B1005の1段目は他のものに比して非常に長い。口縁端部は、面受りするもの（B1005）と外方にわずかに肥厚し、面をもつもの（B1006・1007・1009）、さらに丸くおさめるもの（B1008・1010）がある。B1006とB1007の頭部は、ほぼ垂直で比較的長い。B1005の肩部は球形を呈する。B1010の口縁部外面には3本1組の波状文を



第326図 B S D 345出土土器(1)



第327図 B S D 345出土土器(2)

施し、その下に竹管文を2段に巡らす。内面は中央に竹管文、その上下に5本1組の波状文を巡らしている。他の壺より古式の可能性がある。口縁部の内外面はすべて横ナデ、B1005の体部内面は鋸削りを施す。なおB1006は生駒西麓産の胎土を示し、B1005の口縁部外面には、赤色顔料が塗られていた痕跡があり、黒斑も認められる。

小形丸底壺 (B1011～B1015) 口縁部は直線的に外上方に開くもの (B1012・1013) と内轉ぎみに外上方に開くもの (B1014) があり、端部は尖りぎみにおさめる。体部は扁球形を呈するがB1014は球形に近く、他のものよりはひとまわり小さい。B1015は器肉が厚く、全体にシャープさが欠ける。口縁部の内外面は挽磨き調整を施すが、体部外面は鋸削りのもの (B1011・1013・1015) と挽磨きのもの (B1012・1014) に分かれる。体部内面はすべて鋸削りである。

甕 (B1019～B1028) 二重口縁のもの (B1019) とそうでないものに大別できる。B1019の口縁部は、2段に屈曲して外上方に開く。口縁端部は内側に巻き込むように肥厚させるもの (B1023～1025) と面取りするもの (B1026・1027) に分けることができる。口縁端部をわずかに立ち上がらせるものは、庄内式から布留式への過渡期のものであろう。口縁部の内外面は横ナデを

基調とするが、B1021の内面には刷毛目を施す。体部の内面は笠削り、B1024の外面には縦方向の刷毛目を施す。B1021は生駒西麓の胎土を示す。

高杯（B1029～B1034） 杯部が外上方に開くもの（B1029・1030）と内轉するもの（B1031）に分かれる。B1029は杯部が外反して外上方に開き、端部をわずかに立ち上がらせる。内外面横ナデ調整を施す。B1030は杯部が直線的に外上に開き、端部を尖らせぎみに終らせるもので、杯底部との境に稜が認められるものである。杯部外面は刷毛目を施し、さらにその上から横ナデ調整を加える。内面は笠削りである。脚部との接合には杯底部にヘソ状のものをつくり、凹凸を利用している。

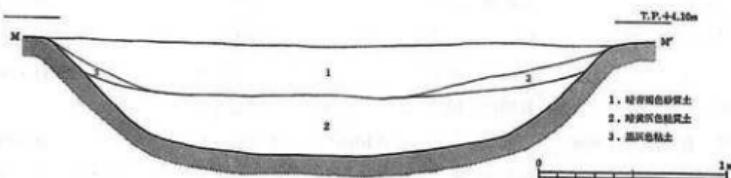
B1031は器肉が比較的厚く、口縁端部を尖らせている。内外面笠磨き調整を施し、短かく大きく屈折した脚部がつくものである。脚部（B1032～1034）はすべて、裾部が屈折して開くもので、杯部が外上方に開くものに属する。裾部外面は横ナデを施し、柱部はナデのもの（B1032・1034）と笠削りのもの（B1033）があり、内側にしづり目が残る（B1033・1034）。B1033の脚部と杯部の境には細かい刷毛目調整が施されており、柱部下位の4方向に円孔が穿たれている。

鉢（B1016・B1017） 口縁部が2段に屈折するものである。B1016の体部は浅く、B1017の体部は深い。さらに前者の口縁端部は尖りぎみに終らせ、器肉は薄いのに比べ、後者は、端部を丸くおさめ、器肉も厚い。共に内外面とも笠磨きを施す。

器台（B1018・B1035） 小型の器台である。B1018は中空で、受部、脚部とも直線的に開き、口縁端部はナデによる平坦面をもつ。全体にナデ調整を施す。B1035は脚部のみで、3方向に円孔を穿つものである。

以上のようにBS D345出土土器を概観したが、上記以外にも、多数の土器片があり、特に実測することはできなかったが、明らかに庄内式に属する甕の破片も何点か出土している。今後、整理をするにあたって、庄内式から布留式への変化を解明することが可能になるかもしれない。また出土した壺がすべて二重口縁というように、祭祀的性格の強い土器と思われる。

BS D346（付図13） Bトレンチ中央部南より検出した東西方向の溝である。上幅0.5m、下幅0.2m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で遺物は出土しない。BS D344、BS D345及びBS D348と重複し、BS D345より古く、他の溝より新しい。



第328図 BS D347土層断面図（実測地点は付図13参照）

BS D347（第328図） Bトレンチ中央部南より検出したやや弧状を呈した東西方向の溝で

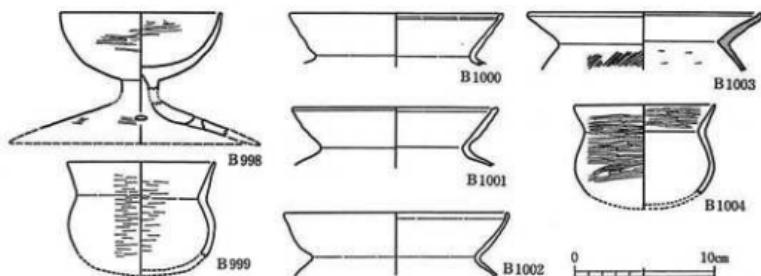
ある。上幅1.7~3.2m、下幅0.9~2.2m、深さ0.6mを探り、断面U字形を呈する。埋土は、暗青褐色粘質土、暗黃灰色粘質土、黒灰色粘質土の3層に分層できる。遺物は布留式土器の細片が少量出土する。B S D 344、B S D 345、B S D 348と重複し、これらより新しい。後述するB地区Ⅲ期の集落南側を画する溝と思われる。なお、条里復元した場合、この地点が坪境にあたるため、まったくの偶然ではないかも知れない。

B S D 348（付図13） Bトレンチ南側北よりで検出した。ゆるやかにカーブを呈した南北方向の溝である。総延長約40mを検出し、南端は袋状に終り、北端はB S D 345に切られている。幅0.5~0.9m、深さ7cm前後を測り、断面はU字形を呈する。埋土は黒灰色粘質土である。南端西側より北西方にB S D 351が派出し、B S D 352と接続する。遺物は庄内式土器片が2点出土した。

出土遺物

〔土器〕（第329図・B 1003・B 1004）

B S D 348からは2点の土器が出土したが、共に庄内式の土器である。B 1003は甕である。口縁部は外上方に開き、端部はわずかに立ち上がる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は叩目、内面は窓削りを施す。復元口径16.5cmを測る。生駒西麓産の胎土を示し、外面に煤が付着する。B 1004は鉢である。口縁部は短く外上方に開き、端部を尖りぎみに終らす。体部は扁球形を呈し、窓磨き調整を施す。復元口径10.0cmを測る。



第329図 B S D 331・348・353出土土器

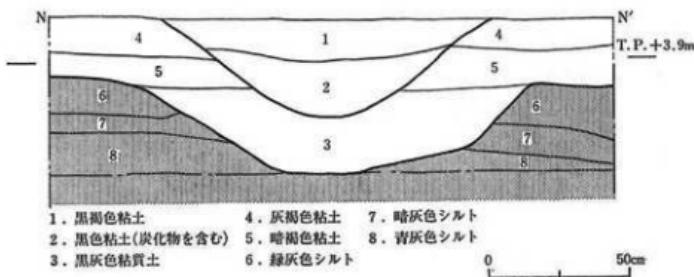
B S D 349（付図13） 7Bトレンチで検出した南西方向から北東方向に延びる溝である。南西側は調査区外に続き、北東側はしだいに細くなり、端部は袋状に終る。幅0.5m前後、深さ5cmを測る。埋土は黒灰色粘質土で遺物は出土しない。

B S D 350（付図13） 5Bトレンチ南東角で検出した東西方向の溝である。両端は調査区外に続く。幅0.4m、深さ6cmを測る。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は出土しない。

B S D 351（付図13） Bトレンチ南側で検出した、南東方向から北西方に延びる溝で、B S D 348とB S D 352をつなぐ。幅0.25m、深さ5cmを測る。埋土は黒灰色粘質土で遺物は出土しない。

B S D 352（付図13） Bトレンチ南側東よりで検出した。北東方向から南西方向の溝で、北東

端は袋状に終り、南西側は調査区外に延びる。B S D 351によってB S D 348とつながり、B S D 351の続きがそのまま北西方向に派出する。幅1.5m前後、深さ7cmを測る。埋土は黒灰色粘質土で、遺物は出土しない。



第330図 B S D 353土層断面図（実測地点は付図13参照）

B S D 353（第330図）Bトレンチ南側で検出した、北東方向から南西方向に流れる溝である。総延長約24mを検出し、北東側は調査区外に続き、南東端はB S K312に流れ込む。上幅1.3~1.8m、下幅0.6~1.0m、深さ0.35mを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘土、黒色粘土の上下2層に分層できる。遺物は布留式土器が出土した。B S K312が水田の可能性があるため、導水路であったかもしれない。下層に黒灰色粘質土が堆積した庄内期の溝が走ることから、その溝の再掘削と思われる。

出土遺物

〔土器〕（第329図・B 999~B 1002）

実測可能な甕3点と鉢1点を抽出する。甕（1000~1002）は口縁部を内縫ぎみ、もしくは直線的に外上方に開き、端部を肥厚させるものである。口縁部のみであるが、内外面とも横ナデ調整を施す。B 999は口縁部を外上方に開き、端部を尖りぎみに終らす鉢である。体部は扁球形を呈し、内外面とも窓磨き調整を施す。

B S D 354・355（付図13） Bトレンチ南側で検出した、ほぼ東西方向の溝である。西側はB S D 353に切られており、東側は自然に消滅する。幅0.2~0.4m、深さ8cmを測る。埋土は黒灰色粘質土で遺物は出土しない。

B S D 356（付図13） Bトレンチ南側から10Bトレンチ北東角にかけて検出した、ほぼ南北方向の溝である。北側は調査区外に続き、南側は自然に消滅する。幅0.5~0.7m、深さ8cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は出土しない。

小溝群（付図13） B地区北側で検出した、北東方向から南西方向に延びる小溝群である。南西端は袋状に終るものが多い。幅0.2~0.7m、深さ7cm前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物は布留式土器の細片が出土する。いわゆる中世の素掘り溝とは性格を若干異なる。この地域が水田でなく畑であった可能性がある。

F 土坑

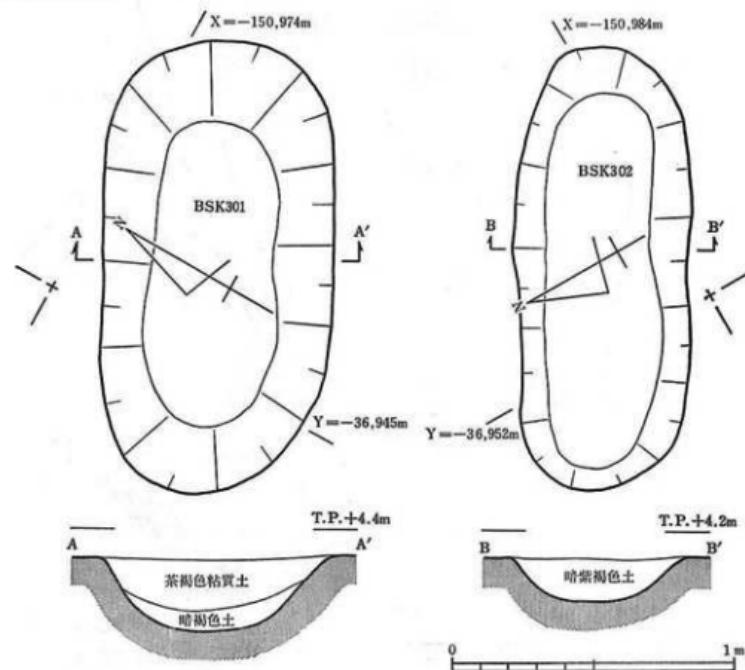
B SK301 (第331図) Bトレンチ北側東よりで検出した、平面楕円形の土坑である。長軸幅1.61m、短軸幅0.81m、深さ0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は茶褐色粘質土と暗褐色土の上下2層に分層でき、遺物は出土しない。

B SK302 (第331図) Bトレンチ北側、B SD317内で検出した、平面楕円形の土坑である。長軸幅1.58m、短軸幅0.62m、深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。埋土は暗紫褐色土で、布留式土器片が少量出土した。

出土遺物

〔土器〕 (第314図・B 990)

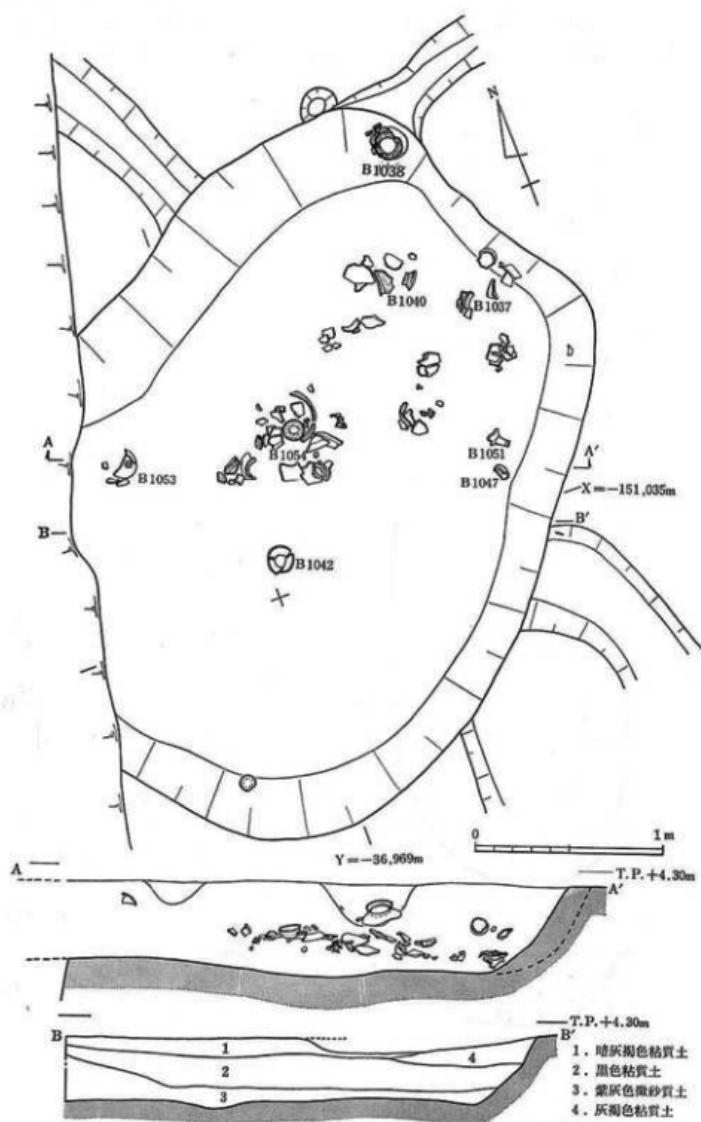
実測可能な1点を抽出する。B 990は高杯杯部の破片である。口縁部は外上方に開き、端部を尖りぎみに終らす。杯底部との境に稜線が認められる。内外面ともナデ調整を施す。復元口径15.3cmを測る。



第331図 B SK301・302実測図

B SK303 (付図13) Bトレンチ北側、B SD321の北側で検出した、平面不定円形の土坑である。長軸幅1.6m、短軸幅1.2m、深さ0.13mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質

土で、遺物は出土しない。



第332図 B S K304遺物出土状態及び土層断面図

B S K304 (第332図) Bトレンチ中央部より、B S I 301の西側で検出した、平面不定形の土坑である。南北幅3.2m、深さ0.5mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土、黒灰色粘質土、暗灰色微砂質土、灰褐色粘質土の4層に分層できた。遺物は庄内式土器が大量に出土した。B S D 328によってB S E 301と接続している。B S D 329と重複し、それより新しい。

出土遺物

〔土器〕(第333図)

出土遺物には壺、甕、高杯、鉢がある。

壺 (B1046・B1055～B1057) 壺はすべて口縁部のみである。二重口縁のもの (B1046) とそうでないもの (B1055～1057) に大別できる。B1046は、口縁部が2段に屈折して外上方に開く、小型壺の口縁部と思われる。端部を丸くおさめ、1段目と2段目の境に稜をつくる。内外面とも横ナデ調整を施す。二重口縁でないものは、直線的に外上方にのびるもの (B1057) と外反するもの (B1055・1056) に分れ、端部は共に丸くおさめる。B1055の外面には刷毛目調整が施され、他は横ナデ調整を加えている。

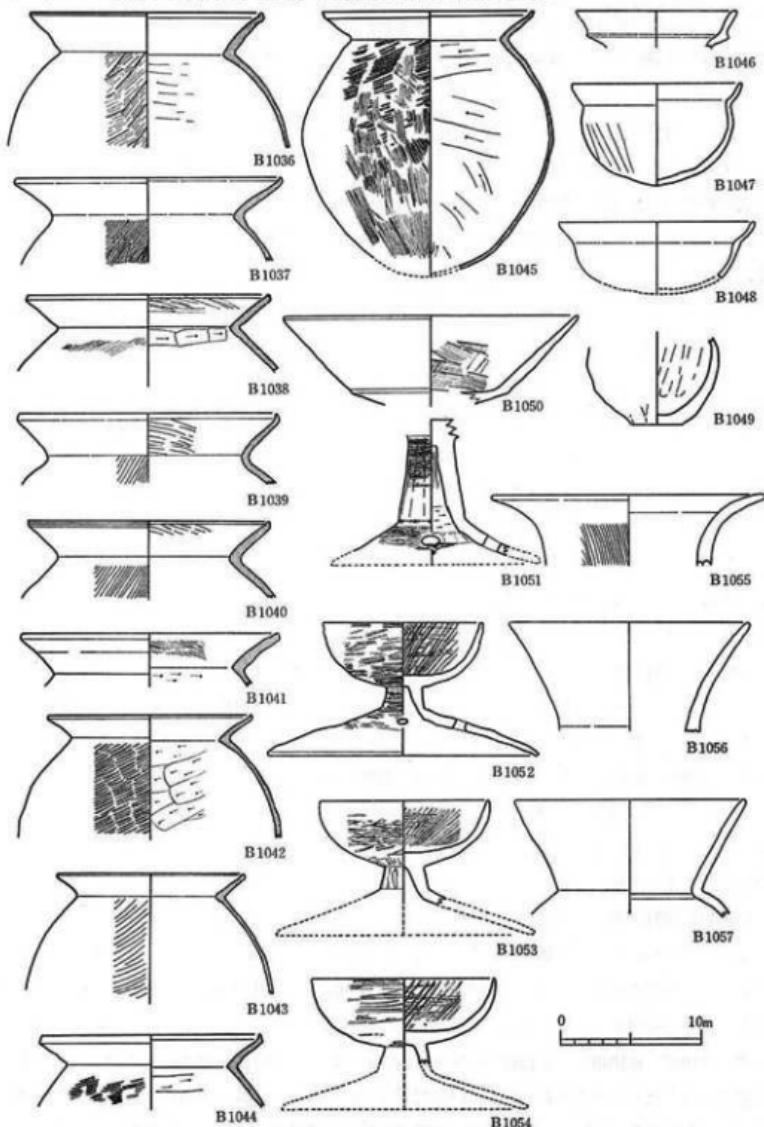
甕 (B1036～B1045) 口縁部は外上方に開き、端部をわずかに立ち上がらす。B1045の体部は胴張りである。調整は、口縁部外面が横ナデ、内面は横ナデのもの (B1036・1037・1042～1045) と刷毛目を施すもの (B1038～B1041) がある。体部外面は、刷毛目調整のもの (B1036～1040・1043) と叩目を施すもの (B1042・1044) があり、B1045は叩目を施し、さらにその上から刷毛目を施している。体部内面は、すべて窓削りを施している。B1045は口径14.8cm、体部最大径17.6cm、器高18.8cmを測り、胎土はすべて生駒西麓産を示す。

高杯 (B1050～1054) 杯部が直線的に外上方に開くもの (B1050) と、椀状の半球形のもの (B1052～1054) とに大別できる。B1050は杯底部がほぼ水平で、体部との境にわずかに段をもつ。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。外面はナデ調整、内面は刷毛目調整を施す。B1051は脚部のみであるが、その形態から、杯部が外上方に大きく開く高杯の脚部である。外面柱部は縦方向の窓削りを施し、さらにその上から窓磨き調整を加える。柱部外面は窓磨きを施し、柱部と裾部の境には細かい刷毛目調整を施す。柱部内面下位は窓削り、上位にはしづり目が認められる。柱部内面上位には指痕痕が残り、下位には刷毛目調整が施されている。なお、柱部中位の4方向には円孔が穿たれている。

B1052～1054は半球形の杯部に、脚柱部が短く裾部が大きく屈折して開く脚部をもつものであるが、脚部が残るものはB1052のみである。調整は窓磨きを基調とするが、B1053の杯部外面底部から脚柱部にかけて窓削りが施されている。B1052は口径11.2cm、器高9.4cm、柱部径19.1cmを測り、柱部の4方向には円孔が穿たれている。

鉢 (B1047～B1049) B1047の口縁部は内轉ぎみに外上方に開き端部を丸くおさめる。体部は胴張りで、底部は尖底ぎみである。口縁部は内外面横ナデ、体部外面は窓削りを施す。口径12.0cm、器高7.2cmを測る。B1048は、口縁部が内轉して外上方に開き、端部を丸くおさめる。

体部はゆるやかなカーブを呈し、全体にナデ調整を施す。B1049は口縁部を欠く。体部は、ゆるやかなカーブを呈した平底である。内外面観削り調整が認められる。

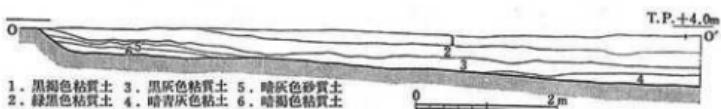


第333図 BS K304出土土器

B SK 305 (付図13) Bトレンチ南側北よりで検出した円形の土坑である。径0.8m前後を測り、2段に掘られている。埋土は黒灰色粘質土で遺物は出土しない。

B SK 306～311 (付図13) Bトレンチ南側中央部で検出した不定形の落込み状の土坑である。深さは5～10cm前後を測り、黒灰色粘質土が堆積する。遺物は出土しない。

B SK 312 (第334図) B地区南端からC地区北側にかけて検出した。土坑というよりも沼状の遺構で、南側にゆるやかに傾斜し、調査した範囲で最も深いところ0.72mを測る。埋土は6層に分層でき、遺物は出土しない。C地区での花粉分析の結果、イネ科の植物が出土していることから一時、水田であった可能性がある。

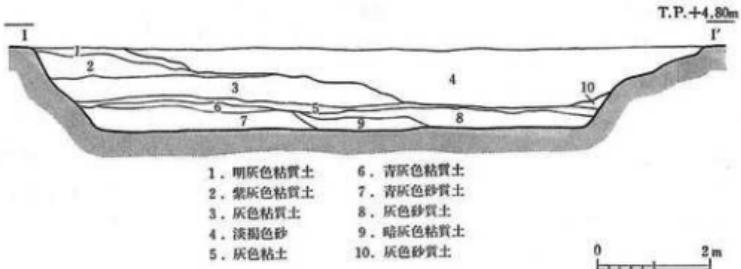


第334図 B SK 312 土層断面図 (実測地点は付図13参照)

G その他の遺構

その他の遺構として、自然河川、テクス状遺構、杭列、水田、畠等がある。

B NR 301 (第335図) B地区北側で検出した自然河川である。南東方向から北西方向に流れ。上幅11.5m前後、下幅8.0m前後、深さ1.5m前後を測り、断面逆台形を呈する。埋土は、実測地点で10層に分層できたが、大きくは2回の流れがあったようで、最終的には小流路として6世紀の中頃まで流れていたようである。遺物は布留式土器が最も多く出土したが、最上層から6世紀中頃まで須恵器の破片も出土している。また、土器以外にも若干の木製品が出土している。B地区集落の北限を画する性格がある。

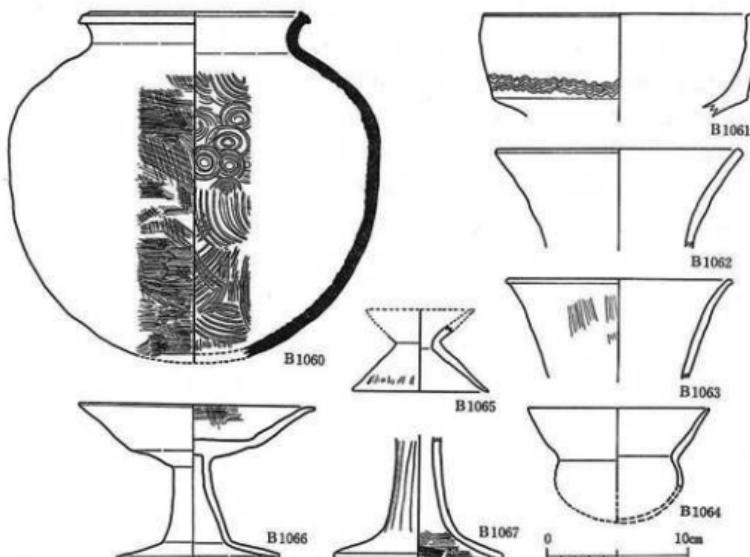


第335図 B NR 301 土層断面図 (実測地点は付図13参照)

出土遺物

〔土器〕(第336図)

B NR 301出土土器には布留式土器と少量の須恵器がある。B 1060は須恵器の甕である。口縁部は短かく外反し、端部を上下に拡張させる。体部は丸味を呈し、肩部が若干張る。口縁部の内外面は回転ナデ、体部外面はカキ目、内面は円形の叩目を施す。復元口径16.5cm、体部最大径



第336図 BN R 301出土土器

25.9cm、器高24.9cmを測る。焼成はやや軟質で、5世紀末～6世紀初頭のものであろう。B1061～B1063は壺口縁の破片である。二重口縁のもの（B1061）と大きく外反するもの（B1062・1063）に分かれる。B1061は二重口縁で内縁に立ち上がり、端部は平坦面をもつ。口縁部外面下位に5本1組の波状文を巡らし、内面には漆を塗った痕跡が認められる。内外面とも横ナデ調整を施す。口縁部が外反するものは、端部が面取りされているもの（B1062）と外方に肥厚するもの（B1063）がある。B1062の内外面は横ナデ、B1063外面には刷毛目調整を施す。

B1064は、小形丸底壺の破片である。口縁部は直線的に外上方に開き、端部を尖りぎみに終らす。体部は肩球体を呈すると思われるが大半を欠く。調整は磨滅が著しく不明である。B1065は、中空の小型器台であるが、受部の大半を欠く。脚部は直線的に開き、外面下位に刷毛目調整が認められる。B1066は高杯である。杯部は比較的浅く、口縁端部はナデによる平坦面をもつ。脚部は裾が屈折して開くもので、端部が面取りされている。杯部の内面に細かい刷毛目が施されている。外面はナデ調整である。口径16.7cm、器高11.0cmを測る。B1067は高杯の脚部で裾部がタッパ状に開くもので、柱部外面削り、裾部内面に刷毛目を施す。

〔木器〕(第339図・B1091・B1092・B1096)

3点を抽出する。B1091は、板状の木製品で2つにわれている。長さ61.2cm、幅16.2cm、厚さ2.9cmを測る。一端に径4cmほどの円形のはぞ穴状のものが穿たれている。材質は未確定である。B1092も板状の木製品で、一端をL字状に切っている。長さ54.0cm、幅18.0cm、厚さ3.0cmを測

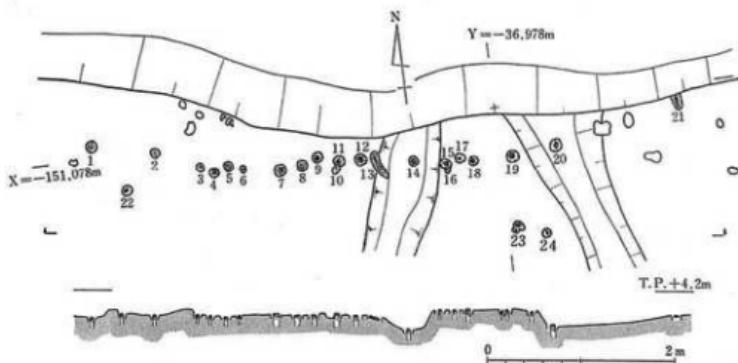
る。表面は丁寧に削られている。材質はヒノキである。B1096は、自然木の可能性もあるが、一見弥生時代の狹錐の形態に類似する。長さ16.5cm、幅3.4cm、厚さ1.5cmを測る。

B S X301 (付図13) 4Bトレンチ西側で検出したテラス状遺構である。ベース面より約20cm高く上面は平坦をなす。暗灰色粘土を盛ったもので、盛土内より布留式土器の破片が出土した。

出土遺物

〔土器〕(第314図・B991)

実測可能な小型壺台を1点抽出する。受部は内輪ぎみに外上方を開いて、端部を丸くおさめる。脚部は直線的に開くものであるが下部を欠く。脚部中位の3方向に円孔が穿たれている。内外面ナデ調整を施す。復元口径10.0cmを測る。



第337図 B S A301実測図

B S A301 (第337図) Bトレンチ中央部南より、B S D347の南側肩部に沿って検出された東西方向の杭列である。杭と杭の間隔は一定しないが、平均0.2~0.3m前後である。B S D347と共にB地区Ⅲ期集落の南限を画するものと思われる。なお、全くの偶然であるかもしれないが参考までに、条里の坪境がその地点であることを付け加わえておく。

出土遺物

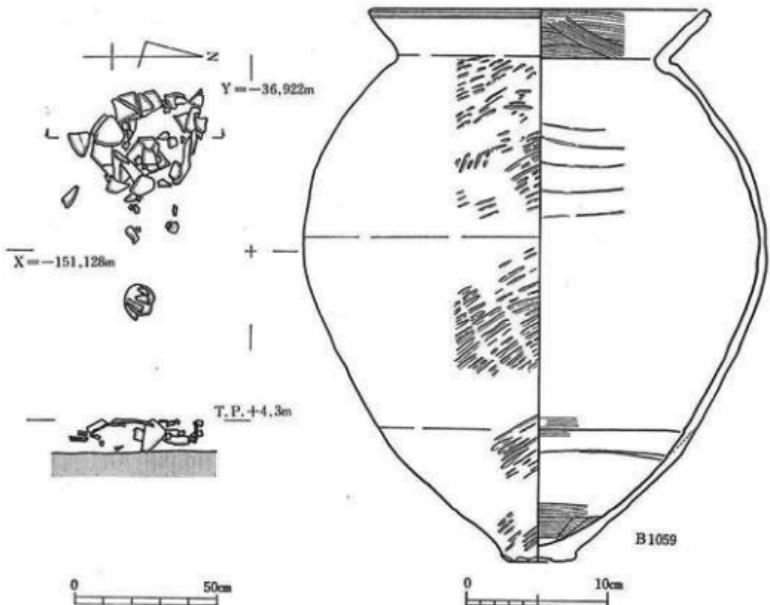
〔木器〕(第339図・B1093)

B S A301の内No.14の杭を抽出する。自然木のままで、先端を斧状のもので尖らせたものである。長さ68.6cm、径4.0cm前後を測る。材質はコナラである。

B S X303 (第338図) Bトレンチ南側、B S D354の北側で検出した。遺構面上で大型甕の1個体分が、われた状態で出土した。甕の大きさから小児用の土器館であった可能性があるが、掘形等は検出されなかった。

出土遺物

〔土器〕(第338図・B1059)



第338図 BS X 303検出状態及び出土土器

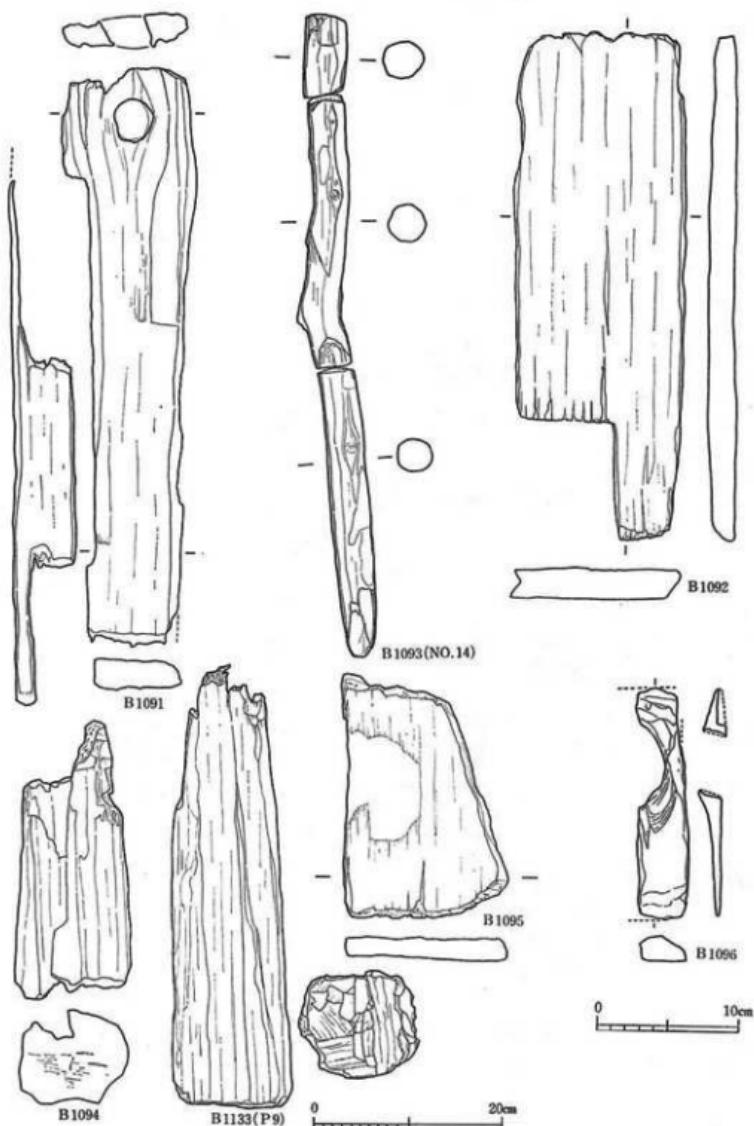
非常に大型の甕である。口縁部は外上方に開き、端部を面取りし、外面上位に沈線を巡らす。体部は外方に張り出す。底部はあげ底ぎみの平底である。成形は、いわゆる肩部と逆円錐台部（底部）を別個に製作し、接合したものである。口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛目、体部外面は叩目、内面上位は挽削り、下位から底部にかけては刷毛目を施し、底部外面には挽削りが認められる。その形態より宇木隆裕氏のいわれる、Ⅱ⁽³⁾段階に属するもので、弥生第Ⅳ様式末から庄内式の古相の時期と思われる。口径23.7cm、体部最大径33.0cm、器高39.2cmを測り、胎土が非常に粗く、白褐色を呈する。

水田（付図13） B地区北側、水路切替トレンチ東部からA地区南東側にかけての地域が水田であった可能性がある。ベース面は他と異なり暗紫褐色粘土で、多数の足跡が検出される。また一部に段を呈した、畦畔の痕跡状のものが認められる。なお、B地区南端のBS K312が、C地区にかけて前述のように水田であった可能性がある。

畑（付図13） B地区北側で検出した小溝群の地点が畑であったと思われる。

遺構の前後関係とその時期

以上、B地区検出古墳時代前期の遺構を概観したが、これらの遺構は下層をも含めて、重複関係及び出土遺物から、3時期に分けることができた。さらにⅠ・Ⅱ時期は、時間差はあまり認め



第339図 B地区古墳時代前期遺構面出土木器（B N R 301、B S A 301、
B S B 301、B S B 303、B S D 331）

られないものの重複関係より新古に細分することができる。各遺構の時期については、詳細に検討する必要があるが、今回は紙数の関係もあり、結論のみを第9表にまとめることにした。結論への過程については、後日発刊予定の本報告書に譲ることにしたい。なお、布留式の編年観については藤井利章編『大和発志院遺跡』による。

第9表によると、B地区古墳時代前期集落は庄内式（新）から布留2式の時期まで継続的に営まれていたことがわかる。しかし、布留3式の時期に属する遺構は検出されておらず、何らかの理由により、北側、A地区から友井東よりに集落が移動したものと思われる。また、すでにⅠ期（庄内式）の段階で堅穴住居と掘立柱建物が併存していることがわかり、Ⅲ期（布留2式）の時期には堅穴住居が消滅し、掘立柱建物のみに変化していることがわかる。これら集落のあり方については第7章第8節で検討を加えているのでそれに譲ることにしたい。（岡本）

時期	造構 細分 土器形式						
		堅穴住居	掘立柱建物	井戸	溝	土坑	その他
Ⅰ 庄内式 (新)	古				BSD301～314 BSD329～331 BSD354～356		
	新	BSI305	BSB308	BSE301 BSE303・304	BSD344 BSD346 BSD348 BSD351・352	BSK304 BSK305～311 BSK312	
Ⅱ 布留1式	古	BSI301 BSI302 BSI304 BSI307	BSB301	BSE302 BSE305	BSD324～327 BSD337 BSD340～343 BSD353	BSK312	BNR301
	新	BSI301 BSI303 BSI304 BSI307	BSB304 BOB306		BSD315 BSD345 BSD353	BSK302 BSK312	BNR301 小溝群
Ⅲ 布留2式			BSB302 BSB303 BSB305 BSB307		BSD317～323 BSD347	BSK303 BSK301 BSK312	BNR301 小溝群 BSA301 BNR301 BSX301

第9表 B地区古墳時代前期主要遺構の時期別動態表
※各時期にまたがる場合は当各時期にそれぞれ記述した。

註(1) 日本考古学協会編『登呂(本編)』1954年。

(2) 後藤守一編『伊豆山木遺跡』1962年。

(3) 芋本隆裕『北島池遺跡出土土器の再整理』『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』東大阪市遺跡保護調査会 1980年。

(4) 藤井利章『発志院遺跡の布留式土器とその編年試案』『大和発志院』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第41号 1980年。

(5) すでに述べたように美園遺跡A地区から北側友井東遺跡にかけてこの時期の遺構・遺物が多数検出されている。

(3) C地区

包含層

庄内式遺構面の0.2~0.5m上方で布留式遺構面を検出した。この遺構面は調査区中央から北側にかけて部分的に古墳時代中期遺構面と重複している。遺物包含層の厚さは平均0.2mあり、暗灰褐色粘質土及びシルト・微砂を中心に構成されていた。

遺物は調査区中央部より集中して検出され、北側及び南側では少なかった。北側部分は古墳時代中期まで続く水田を想定できる一画で、その関係から遺物があまり含まれていないものと思われる。南側部分は鎌倉時代前半期の水路（CSD501）によって削平期を受けているため、遺物が少ない。

出土遺物

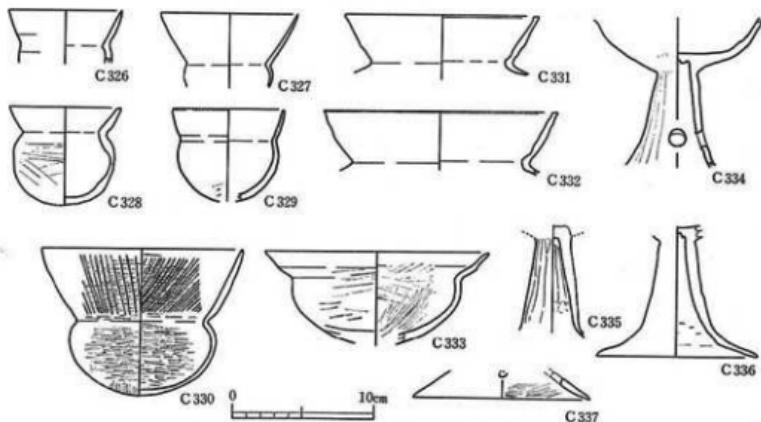
〔土器〕(第340図、図版189)

現存状態の良好な大形破片類を中心に、ここでは各期の器種について任意に12点抽出した。出土土器の総量は、庄内式に比較して少ない。

各土器の出土地区は以下のとおりである。

C326 (4Cトレンチ)、C327 (4Cトレンチ)、C328 (Cトレンチ31区)、C329 (Cトレンチ35区)、C330 (Cトレンチ22区)、C331 (4Cトレンチ)、C332 (4Cトレンチ)、C333 (5Cトレンチ)、C334 (Cトレンチ25区)、C335 (4Cトレンチ)、C336 (Cトレンチ25区)、C337 (4Cトレンチ)。

器種の分類と時期（以下器種分類、時期区分は本書第Ⅳ章第5節に従う）については第10表にまとめて提示した。



第340図 C地区古墳時代前期(布留式)包含層出土土器

C地区出土布留式土器の特徴としては、生駒西麓産の土器が前時期と比較して極端に減少する

点がまず挙げられる。胎土の特徴から見て、ほとんどの土器は在地産ないし周辺の平野部に立地する遺跡で製作されたものようである。(渡辺)

時期 \ 器種	杯	高杯C類	高杯D類	壺A類	壺C類	壺D類
V期	C333	C335	C337	C327 C330	C326 C329	
VI期		C334 C336			C328	C331 C332

第10表 C地区包含層出土布留式土器の器種別時期分類表

〔石器〕(第341図、図版246)

砥石(C338、C340) C338は、砥ぎ面を1枚残余するもので、周縁は欠損しており形態は不明である。砥ぎ面には小さい凹凸が見られ、本例がさほど使用されていなかったことを物語るものであろう。石材は粒状の斜長石を含む安山岩を用いている。現存長5.59cm、現存幅6.01cm、厚さ2.50cm、重さ107.1g。C340は小型の砥石で、上下端を除く6面を砥ぎ面として使用している。これら使用面はいずれも均一で、最終的な上砥として用いられたものであろう。横断面形はほぼ正方形を呈し、石材は軟質な砂岩を用いる。現存長4.72cm、現存幅2.37cm、厚さ2.31cm、重さ3.42g。

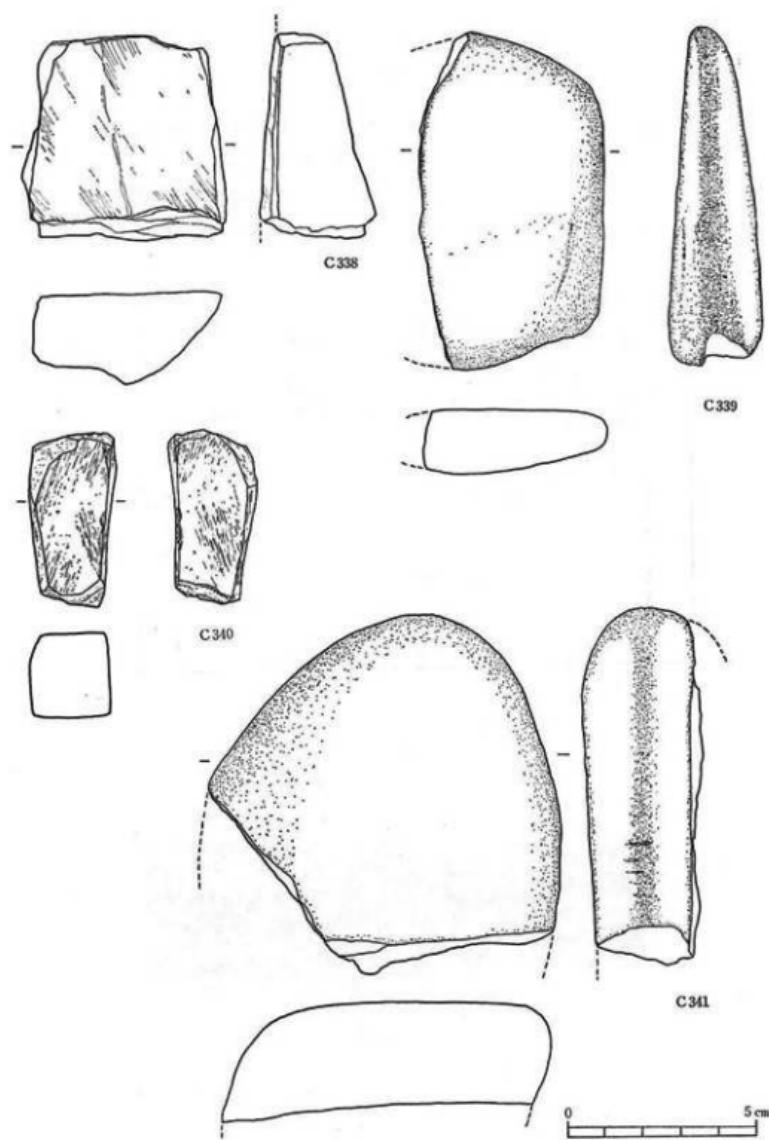
磨石(C339) ほぼ半損しており、全容は手中に収まる梢円形を呈するものであろう。水摩により顕著な使用痕は認められない。石材には砂岩を用いる。現存長9.0cm、現存幅4.99cm、厚さ1.74cm、重さ149.9g。

敲石(C341) 形態はC339に類似し、半損により磨石としての機能が破棄された後、敲石として使用したものであろう。側面部には太い線状の敲打痕が認められる。石材は砂岩を用いる。現存長9.70cm、現存幅9.38cm、厚さ3.20cm、重さ396g。(進藤)

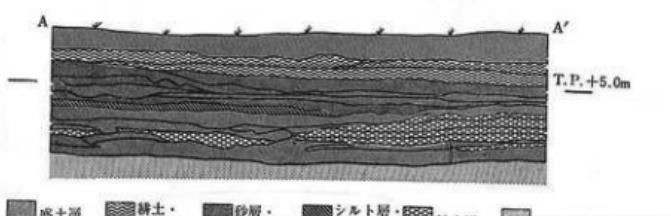
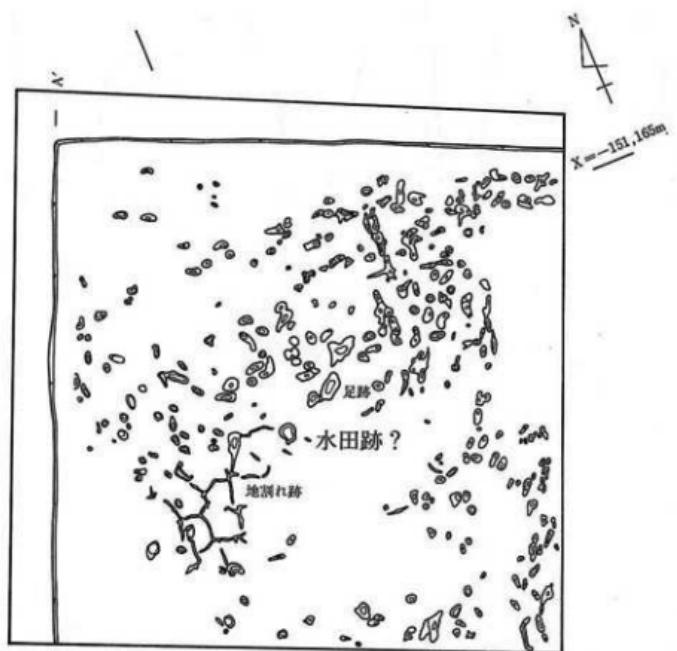
遺構

先述したように部分的に古墳時代中期遺構面と重複しているが、比較的広範囲に安定した遺構面を形成している。またこの遺構面は、北東部を粘土、中央部から南西部にかけてシルト及び細砂によって構成されていた。遺構は中央部に密集しており、北東部は足跡、地割れ跡以外に遺構が認められない。この部分は畦畔等が検出されていないため断定できないが、前時期からの関連及び花粉分析結果から総合して、水田を想定できる一帯である。調査区中央部から南西部にかけては、建物、溝、井戸、土坑等によって構成される集落の一部分が検出された。その南西側は後世の水路(CSD501)による削平も手伝って遺構が希薄である。また調査区南端部には美園古墳(CSX307)が存在する。

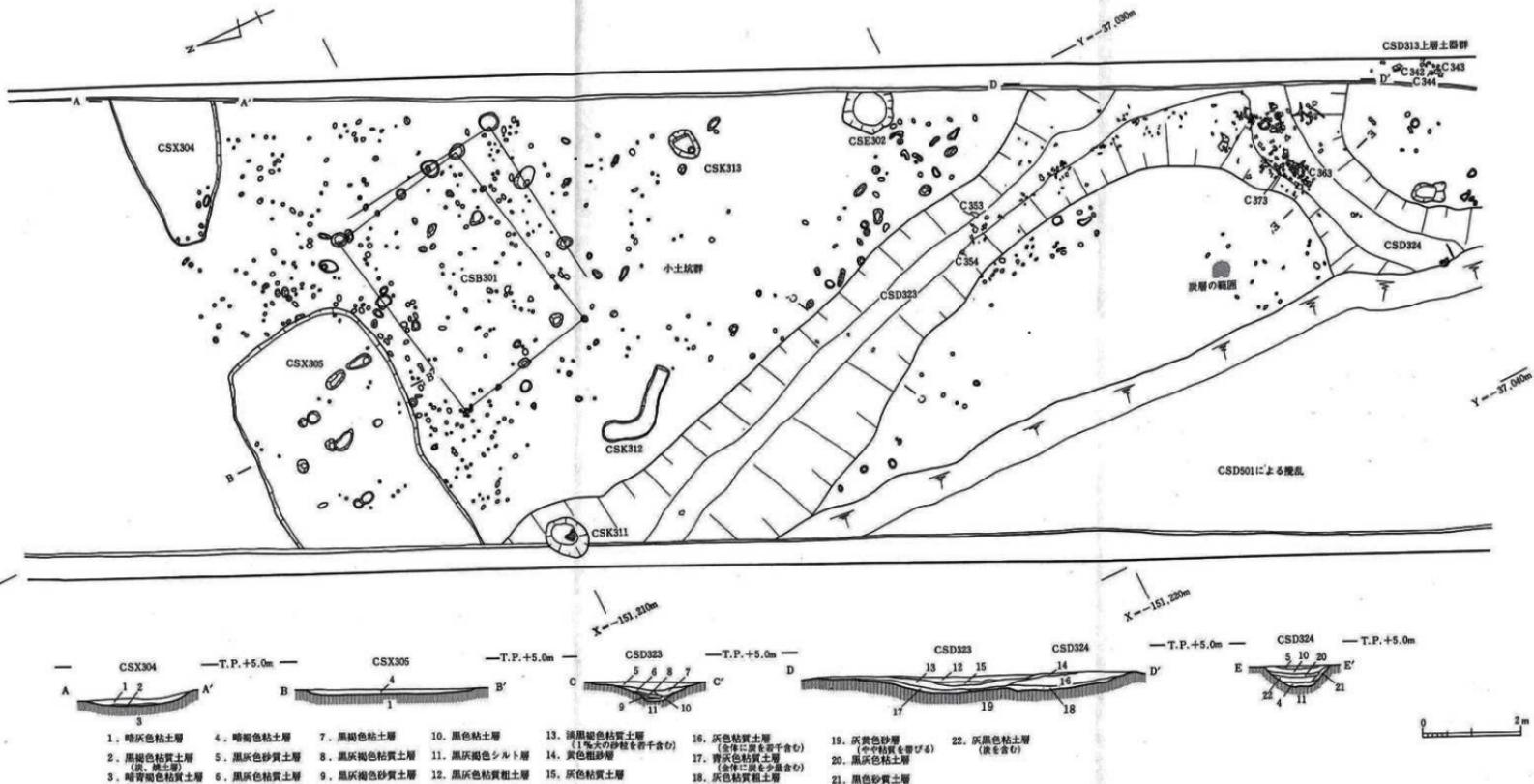
足跡・地割れ跡(第342図、付図19、図版71) 調査区中央から北東部分にかけては、足跡及び地割れ跡等が検出されるだけで遺構、遺物が極端に少なくなる。すでに述べたとおり直接的に水田を立証する遺構は認められないが、その可能性を充分考え得る一帯である。またこの部分は灰褐



第341図 C地区古墳時代前期(布留式)包含層出土土器



第342図 2 C トレンチ古墳時代前期（布留式）遺構平面図及び土層断面図



第343図 Cトレンチ中央部古墳時代前期(布留式) 造構平面図及び土層断面図

色細砂層によって覆われており、その広がりはB地区南端部に及んでいた。C地区側ではこの砂層から遺物は検出されなかったが、B地区で古墳時代中期の遺物がまとまって出土している。その点から見て、布留式後半期から古墳時代中期の間にこの部分を自然河川が流れていたようであり、水田が存在したとすればこの川によって埋没されたと思われる。

Cトレンチにおいて、多数の足跡と共に地割れ跡が一箇所検出された。これらは前述の自然河川が流れ始める以前に残されたものであり、その時点で地表がかなり乾燥していたことを物語っている。足跡が着けられた時にはぬかるんでいたと思われ、地表の状態に乾湿の差があったことを現わしている。また足跡の数から見て人々が頻繁に足を踏み込んだ場所のようであり、間接的に水田の可能性を立証できる遺構ではなかろうか。遺物がほとんど検出されていないため時期を確定するのが困難であるが、土層の連続性から見て調査区中央部の集落とはほぼ同時期であると考えられる。

C S X304 (第343図、図版72) Cトレンチ21区より検出されたのは東西方向に延びる溝状の落ち込みである。南側の肩が北側より約0.2m高くなっている。東側の3Cトレンチ部分では続かない。南北方向の幅は約2.0m、東西方向が約3.5mであり、検出面から底面までは平均0.15mを測る。覆土は暗灰色粘土と黒褐色粘質土によって構成され、下層に焼土を含む炭の層が堆積していた。

この遺構は水田を想定できる部分と集落部分との境目に存在しており、両者を画する性格をもつと思われる。出土遺物が少ないため時期の確定が難しいが、覆土の状態はC S X305と類似しており、ほぼ同様な時期に属するのではないか。

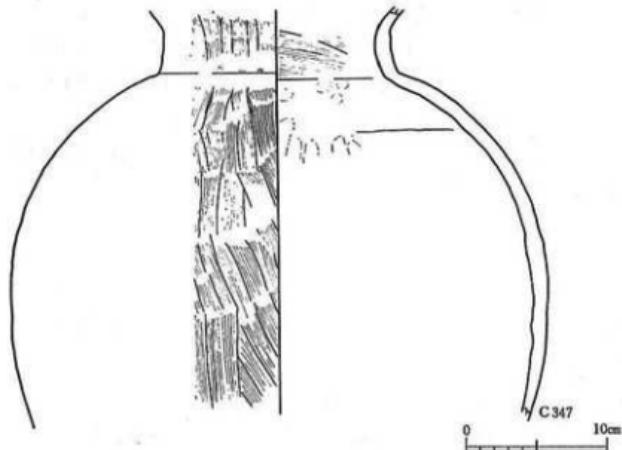
C S X305 (第343図、図版72) C S X304の西側約2.5mで確認された、ほぼ東西方向の溝状落ち込みである。東端は止まっているが、西側は調査区外へ延びるようである。幅は3.2~3.4m、検出面から底面までは約0.1mであった。断面逆台形を呈する浅めの落ち込みであり、暗褐色粘土によって覆われている。またこの遺構に先行する時期の土坑が、底面で数個確認された。遺構の性格としては、C S X304と一緒にして集落の縁辺を画するためのものではなかろうか。覆土中より、口縁部と体部下半を欠損した大形壺が一個体分まとめて出土している。この土器から判断して、土器による時期区分のⅢ期に相当する遺構と考えられる。

出土遺物

〔土器〕(第344図、図版202)

C347はⅢ期の壺F₁類になると思われるが、口縁部を欠損しており器種分類の点で疑問を残す。胎土は極めて緻密であり、明赤褐色を呈している。胎土の状態はC S D323出土のC353と類似していた。外面には縦方向の細い刷毛目を全体に施しており、内面は頸部に横方向の刷毛目、体部でナデ調整を加えている。かなり大形の土器で、器壁も厚手である。また頸部の破片がC S D324からも検出された。この遺構からは、C347以外にも土器が細片で若干出土している。

C S B301 (第343・345図、図版72) C S X305の南側約0.6mで検出された、ほぼ東西方向



第344図 C S X305出土土器

に長辺をもつ掘立柱建物である。棟行の方位は N5°30'W を指し、桁行3間(4.8m)×梁行2間(3.1m)の規模を有する。柱間の寸法は桁行約1.5m、梁行1.4~1.6m、面積は14.88m²であった。柱掘り方は南辺が不明瞭であったが、全体に小ぶりで径0.3~0.4mの円形を呈する。深さは検出面から0.1~0.15mと非常に浅く、上部が削平されているようである。各柱掘り方とも柱痕は検出できなかった。

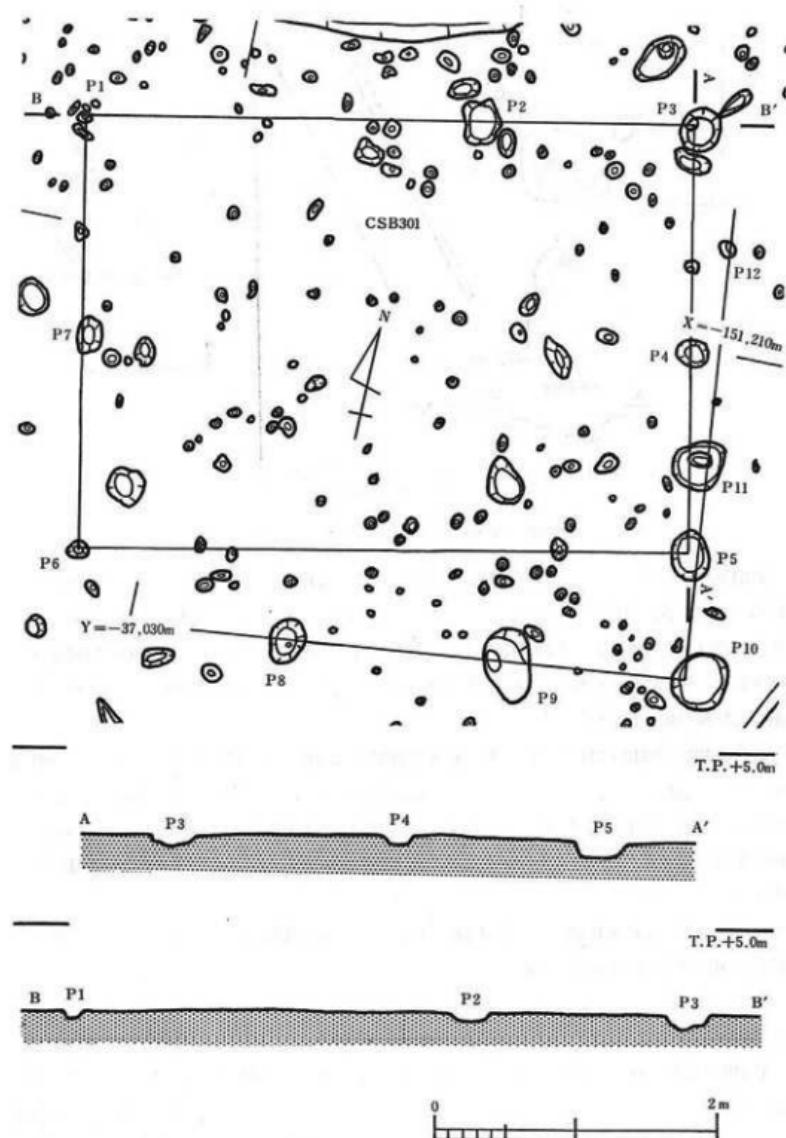
また柱掘り方からは少量の土師器細片が出土している。これらと包含層出土の土器類とを合わせて判断すれば、C S B301の時期は土器による時期区分のⅡ期に属すると考えられる。この時期前後の掘立柱建物は、B地区及び本遺跡の南西に隣接する佐堂遺跡でも検出されており、今後河内平野部の各遺跡で類例が増えるものと思われる。C S B301の位置から見て、この時期の集落は東側に広がっているようであり、美濃古墳(C S X307)との関係を考える上で重要なとなる。

C S B301とはほ重なるようにして、軸を異にする(N30'W)掘立柱建物が存在した可能性が大きい。しかし柱掘り方が東辺と南辺の一部分しか認められず、断定できなかった。

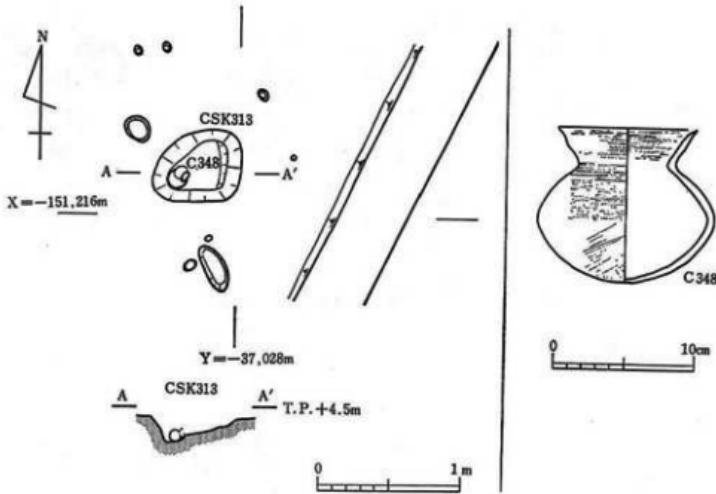
C S K313 (第343・346図、図版72・73) C S B301の南側約3.6mで確認された、ほぼ東西方向に長軸を有する不整梢円形の土坑である。長軸約0.65m、短軸約0.5mであり、検出面から土坑底面までは約0.2mを測った。土坑底部から完形の小形壺(壺F2類)が1点出土している。土坑の性格としては掘立柱建物の柱掘り方になる可能性もあるが、他に検出されておらず不明と言わざるをえない。出土した小形壺から見て、土器による時期区分のⅡ期に属する土坑と思われる。

出土遺物

〔土器〕(第346図、図版202)



第345図 CSB301平面図及C断面図



第346図 C S K313平面図・断面図及び出土土器

C348は完形の小形壺で、Ⅶ期壺F類に属すると考えられる。壺形の特徴としては、口縁部中程がやや膨らみ、口縁端部で器壁が薄くなりやや外反している。体部は中央部が強く張っており、底部は丸底であった。外面の調整は横方向の窪磨きが密に施されており、内面は口縁部横方向窪磨き、体部はナデを加えている。胎土は緻密で灰褐色を呈し、前時期の在地産と思われる土器類と類似していた。

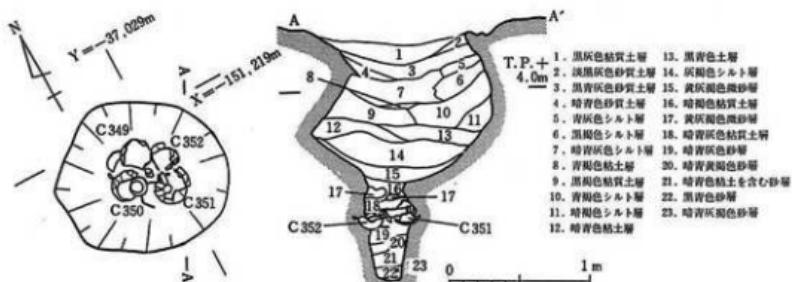
C S E302 (第343・347図、図版72) C S K313の約3m南で検出された井戸である。径約1.2mの円形を呈しており、検出面から底面までは約1.8mであった。底面から約0.4m上方で、ほぼ完形の壺1個と壺3個が置かれたような状態で出土した。出土状態から判断して、井戸の廃棄に伴う祭祀に使用されたものではなかろうか。出土遺物から見て、土器による時期区分のⅦ期に相当する。

またこの井戸はC S B301の南側約6.7mに位置し、両者は時期的にもほぼ同一と考えられる。C S B301に付随する可能性が極めて大きい。

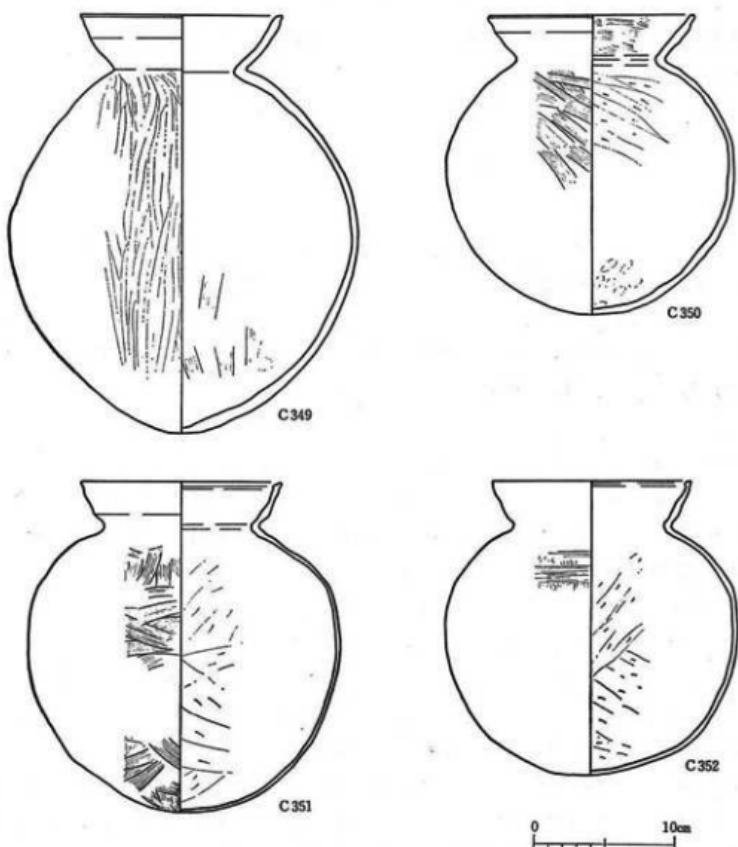
出土遺物

〔土器〕(第348図、図版203)

C349はⅦ期壺D類に属する。胎土は緻密で明灰褐色を呈し、器壁はやや厚手であった。口縁部は中央でやや膨らみながら外反しており、体部は卵形を呈する。外面の調整は口縁部で横方向のナデ、体部は縦方向の窪磨きを施している。内面は口縁部横方向のナデ、体部は縦方向の刷毛目を施した後ナデを加えていた。C350はⅦ期壺F類に属する。外面には全体的に煤が付着して



第347図 CSE 302平面図及び土層断面図



第348図 CSE 302出土土器

おり、煮炊き用としてかなり使用されたと思われる。器形の特徴としては、口縁部がやや膨らみをもって外反し、体部は球形に近い。外面調整は口縁部で横方向のナデ、体部は斜めの刷毛目を施している。内面は口縁部に横方向の刷毛目、体部で斜め方向の窪削りを加えていた。C351及びC352は口縁部の形態が類似しており、共にⅣ期壺D類に属する。C350同様、外面には煤が全体的によく付着し、煮炊きに使われていた土器であろう。器形の特徴としては、口縁部が直立ぎみに外反し、口縁端部が肥厚している。また口縁部と頸部の境目に段が見られた。体部は上半部から中央部にかけて最大径を有し、やや肩が張っている。外面の調整は、両者とも口縁部横方向のナデ、体部は刷毛目を施している。内面では、口縁部横方向のナデ、体部は斜めの窪削りを加えていた。

これらの土器類は出土状態から判断して、極めて同時性の強い一括資料と考えられる。

C S D323（第343・349図、付図19、図版72～74）5 CトレンチからCトレンチ中央部にかけて検出された、ほぼ南北方向に走る溝である。前時期のC S D313とは重なるようにして設けられており、継続的に營まれた溝と言えよう。幅は1.6～3.0mあり、検出面から溝底面までの深さは平均0.4mを測る。断面逆台形を呈し、底面の勾配から見て水は南から北へ流れていたと思われる。覆土は砂質土及び粘土の互層によって構成され、Cトレンチ側の南部分より多くの遺物が出土した。

この溝の性格としては、集落を画すための機能と灌漑用幹線水路としての機能の2つが考えられる。C S D324、C S D325と連結している点及び、前時期のC S D313から継続的に營まれてきた可能性が大きい点を考慮すれば後者の機能が中心であったと思われる。出土した土器から判断して土器による時期区分のⅢ期からⅣ期にかけて營まれた溝である。量的にはⅣ期に属する土器が多く出土した。

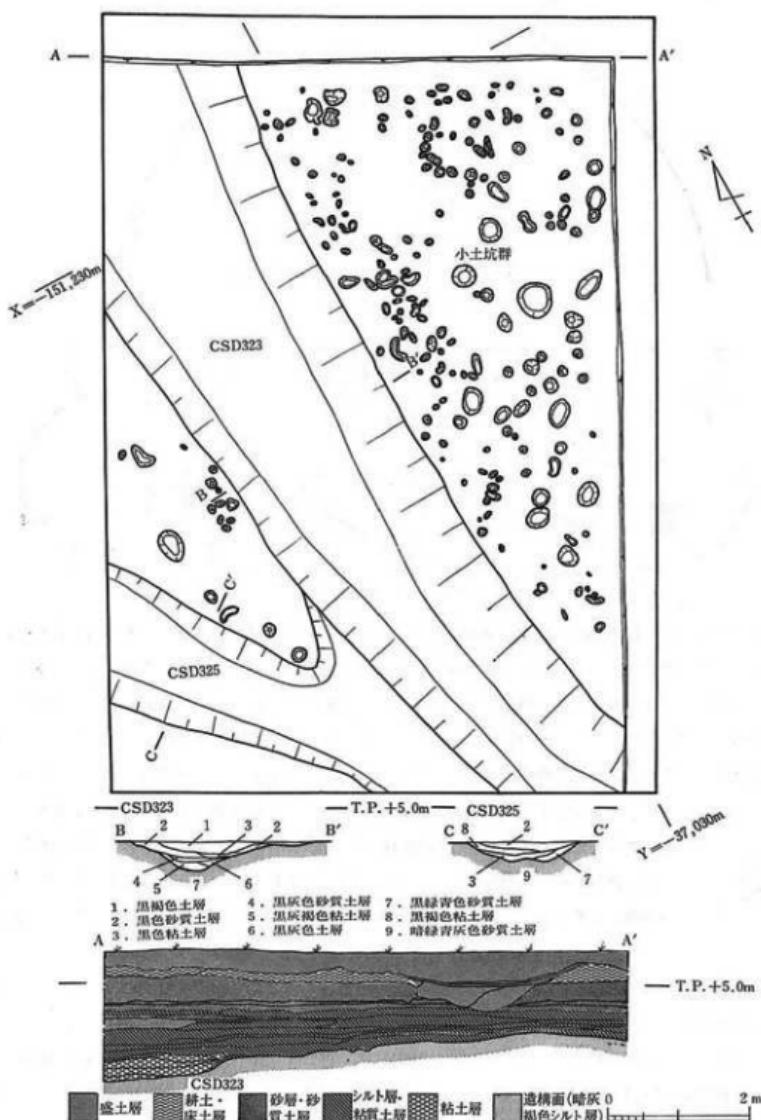
出土遺物

〔土器〕（第350図、図版190）

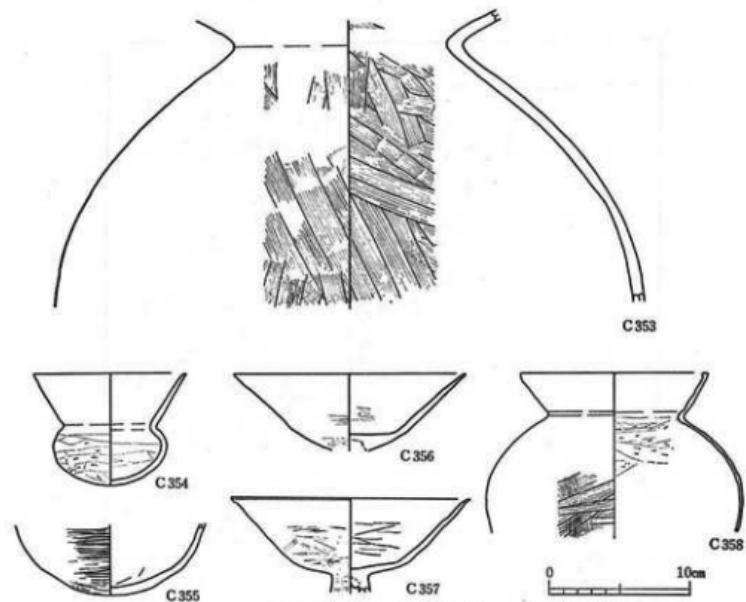
ここではⅣ期に属する残りの良好な資料を6点任意に抽出して提示する。各器種の分類は以下のとおりである。壺A類（C354）、壺B₁類（C353）、壺B₂類（C355）、高杯D類（C356・C357）、麦D類（C358）。時期的にはⅢ期とⅣ期に属する土器が出土しているが、前者の方が多い検出された。

興味深い資料としては、C353があげられる。この土器は口縁部を欠損しているために、器種分類上で問題を残す。胎土は明赤褐色を呈し極めて緻密であり、C S X305出土のC347と類似していた。内外面とも刷毛目調整が施されている。またC355は比較的下唇から出土しており、時期的にも若干古くなる可能性がある。C S D313に伴う遺物かもしれない。

C S D324（第343・351・352図、付図19、図版72・73）6 CトレンチからCトレンチ中央部にかけて検出された、C S D323の西脇に接続するほぼ東西方向の溝である。溝の中央部ではC S D325と、西側ではC S D326、C S D328と接続していた。幅1.5～2.2m、検出面から溝底面



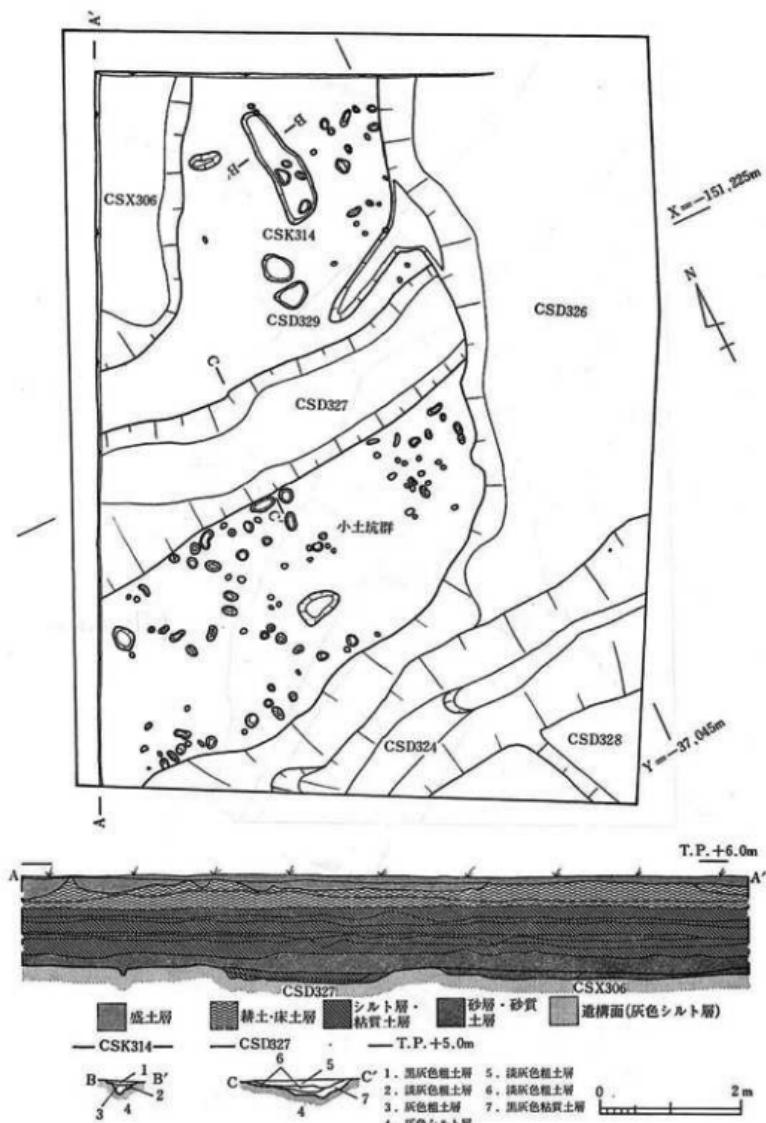
第349図 5C トレンチ古墳時代前期（布留式）造構平面図及び土層断面図



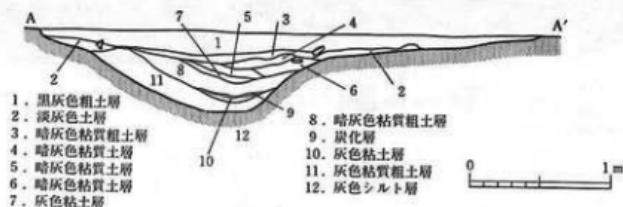
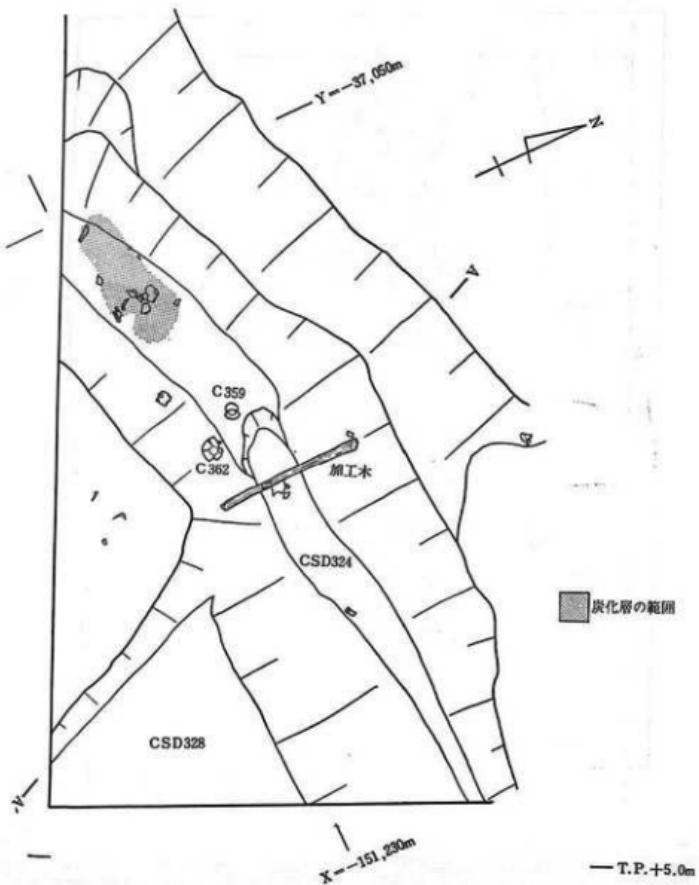
第350図 C S D323出土土器

までの深さは0.4~0.6mを測る。断面逆台形を呈し、底面の勾配から判断して水は西から東へ流れていたと考えられる。一部分C S D501による削平を受けていた。覆土は粘質土、シルト、粘土の互層によって構成され、最下層には暗褐色粘土が堆積している。遺物は東側のC S D323接続部分周辺と6Cトレンチの西側で多く認められた。東端部での出土状態は溝の下層及び北肩部分に集中しており、溝の北側から土器が流入している。また6Cトレンチ側の底面で、溝に対して直交する柱状加工木が出土した(第352図)。この加工木は断面四角形を呈しており、面取りが施されている。検出場所がC S D326及びC S D328との交差部分に近接するため、水量を調節する堰等の一部分に使用されていた可能性が大きい。同じく6Cトレンチ側の溝覆土最下層上面で、炭化層の堆積が観察された。この炭化層は西端部で、ある程度面的な広がりを示す(第352図)。

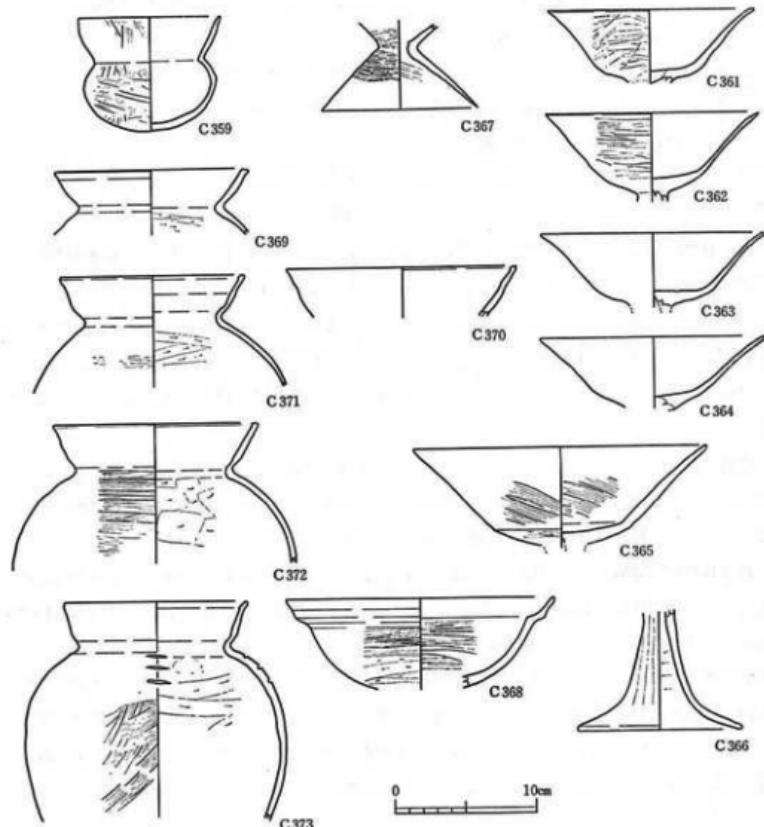
出土した土器類から見て、土器による時期区分のⅡ期からⅣ期にかけて営まれた溝である。C S D323同様、庄内式のC S D314とはほぼ重なる位置に設けられており、C S D314の布留式における姿として捉えられよう。庄内式から継続的に使用されている点及びC S D323、C S D325、C S D326、C S D328の各溝と接続していることから判断して、西側からの水をC S D323とC S D326へ流すための灌漑用水路として使用されたものではなかろうか。



第351図 6Cトレンチ古墳時代前期（布留式）遺構平面図及び土層断面図



第352図 6Cトレンチ CSD324平面図及び土層断面図



第353図 CS D324出土土器

出土遺物

〔土器〕(第353図、図版200~202)

完形品及び現存状態の良好な大型破片類を中心に、任意に14点を抽出した。器種分類と時期は以下のとおりである。杯Ⅶ期(C368)、器台D類Ⅶ期(C367)、高杯A類Ⅶ期(C365)、高杯C類Ⅶ期(C361~C364・C366)、壺A類Ⅶ期(C359)、壺D類Ⅶ期(C369~C373)。量的にはⅦ期に属する土器が多く認められた。C373は体部の肩部分に刻目を三段施しており、その点が興味深い。

CS D325 (第349図、付図19、図版74) 5CトレンチからCトレンチ中央部やや南側で検出された溝である。北西から南東方向に走り、両端はそれぞれCS D323とCS D324に接続してい

た。北西側の一部が、C S D501によって削平され検出できなかった。幅1.3~2.2m、検出面から底面までの深さは平均0.3mを測る。底面の勾配から見て、水は南東から北西側へ流れていたと思われる。断面は逆台形を呈し、覆土は砂質土及び粘土の互層によって構成されていた。最下層では黒色粘土層と黒緑灰色砂質土層が堆積しており、有機質を含んでいる。

出土遺物はC S D323及びC S D324に比べて少なかったが、それらから判断して土器による時期区分のⅢ期からⅣ期にかけて營まれた溝と考えられる。C S D323とC S D324に接続して機能している点から見て、両者と同様灌漑水路としての性格が強い。

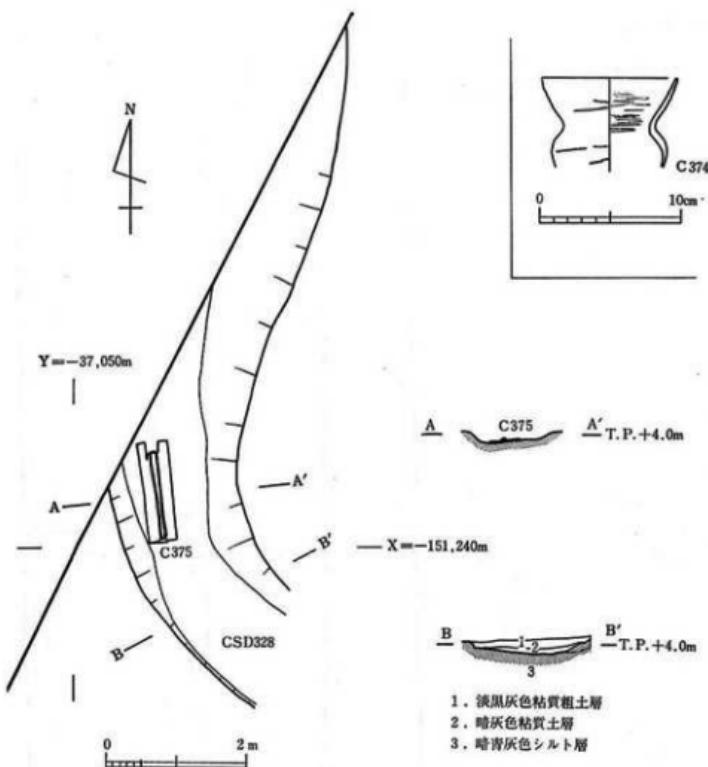
C S D326 (第351図、付図19、図版74) 6 Cトレンチの東端で検出された、C S D324の北肩に接続する南北方向の溝である。西肩のみ検出され、東肩はC S D501による削平でなくなっていた。このため溝の幅は確認できなかったが推定で2m以上あった可能性が強く、検出面から溝底面までの深さは約0.5mある。おそらく断面逆台形を呈すると思われ、底面の勾配から見て水は南から北へ向って流れていたと思われる。検出された遺物は量的には少なく、ほとんどが破片であった。

C S D324と接続して機能していたと考えられ、C S D324の水を北側へ流すために設けられた溝であろう。灌漑用水路としての性格を想定したい。覆土中から検出された土器類から判断して、土器による時期区分のⅢ期からⅣ期にかけて營まれたようである。

C S D327 (第351図、付図19、図版74) 6 Cトレンチ中央部で検出された、東西方向に走る溝である。東側はC S D326に切られており、時期的にも先行すると考えられる。幅は1.4~2.0mあり、検出面からの深さは平均0.2mであった。断面逆台形を呈し、底面の勾配から見て水は東から西へ流れているようである。覆土は粗土、粘質土によって構成され、最下層は黒灰色粘土層であった。覆土中から検出された遺物は土器の細片が多く、厳密な時期を決め難い。切り合の関係等から判断すれば、土器による時期区分のⅢ期でも古い方に属するものようである。溝の性格については不明であるが、形状から見て灌漑用水路としての機能は弱いように思われる。

C S D328 (第351・354図、付図19、図版72・74) 6 Cトレンチ南端からCトレンチ36・38区にかけて検出された、南東から北へ向って曲がりながら延びる溝である。北側でC S D324とつながっていた。また南東部は後世の溝(C S D501)によって削平され不明である。幅は1.7~2.0mあり、検出面からの深さは0.2~0.3mを測った。断面逆台形を呈し、覆土は粘質土とシルトの互層である。底面の勾配から判断して、水は南東から北へ向って流れているようである。南東から北へ曲がる部分で、溝底より幅約0.43m、長さ約1.45m、厚さ約0.03mの中央に突起をもつ板状木製品(C375)が出土した。また覆土中からは、土師器片が若干出土している。

出土した土器から判断すれば、土器による時期区分のⅢ期からⅣ期にかけて營まれた溝と思われる。溝の性格としては、C S D324へ南東側から水を送るための水路と考えられ、灌漑用水路の一部になるのではなかろうか。



第354図 C S D 328平面・土層断面図及び出土土器

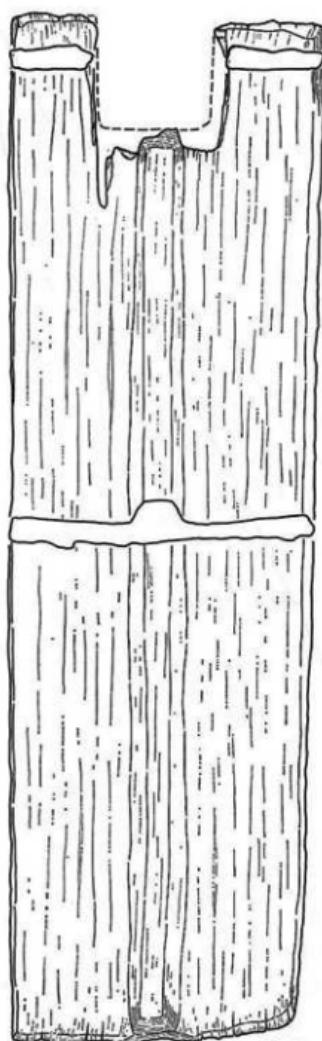
出土遺物

〔土器〕(第354図、図版202)

覆土中から破片で若干出土しており、ここでは残りの良い1点だけを提示する。C374はⅦ期壺A類に属すると思われる破片で、体部下半が欠損していた。表面の摩滅が激しいが、外縁と口縁部内面は荒磨きが密に施されていたようである。胎土は緻密であり、明赤褐色を呈していた。

〔不明木製品〕(第355図、図版256)

C375はコクヤマキの縦木取り板目材を使用している。幅約0.43m、長さ約1.45m、厚さ約0.03mの板状を呈し、片面の中央に縦方向の幅約0.08m、厚さ約0.03mの突起が作り出されていた。また一端に一辺約0.15mの四角形の切り込みが入れられている。出土状態ではこの切り込みは北側にあたり、突起をもつ面を上に向けて溝底面に置かれたような状態で出土した。下になつてい



C 375



第355図 C S D 328出土不明木製品

た面と切り込み部分は、一部腐食していた。

木製品の用途は不明であるが、出土状態等から見て C S D 328 に伴う施設として使用された可能性が大きい。構造の面で問題を残すが、水量を調整する堰の底板に使用されたものではなかろうか。溝の営まれた時期と同一時期のものと思われる。

小土坑群（第343・349・351図、図版72～74） Cトレンチ中央部及び5C、6Cトレンチ部にかけて径約0.2m前後の小土坑が多数検出された。これらは包含層の厚い部分及び遺構密集部分で多く認められる。ほとんどが浅く、遺物の出土も少ない点から見て、大部分は杭跡等になると考えられる。

C S X 307（付図19・22、図版75・76） Cトレンチ南端部及び9Cトレンチにおいて、美園古墳（⁽¹⁾ C S X 307）が検出された。C S D 328の南側約24mに存在しており、その間には遺構が認められない。この古墳は方墳になると思われるが、すでに墳丘が削平されており周濠のみ確認された。まずCトレンチ部分で北東側及び北西側の二辺と北のコーナーが検出され、その後古墳の範囲確認のため設けられた9Cトレンチにおいて南東側の周濠が検出されている。今回の調査では、三辺の周濠と一箇所のコーナーを確認するに止めた。また古墳の南東側は後世の溝（C S D 501）によって、部分的に削平されている。古墳の規模と内容は以下のとおりである。

- ・墳形——方墳の可能性が大きい。
- ・主軸方向——N 36°30' E
- ・墳丘長——北西側の墳丘裾から南東側の墳丘裾まで約7.2mであった。
- ・周濠——幅は約2.0m前後を測るが、北のコーナーで内側に広がっていた。この部分は墳丘が削平された際に、一緒に削り取られたためと思われる。深さは0.2～0.3mあり、南東側がやや浅めであった。また9Cトレンチで検出された南東側の周濠には部分的に深い所があり、周濠掘削時の施工差かもしれない。
- ・主体部——検出されなかった。墳丘が削平を受けた際に破壊された可能性が大きい。
- ・墳丘——削平を受けており、部分的にしか残存しない。削平後の墳丘上には南側で6世紀後半の遺物包含層が堆積しており、削平された時期もこれ以前と考えられる。また墳丘基底部には、暗青色粘土と灰褐色粘土がブロック状に混った整地層が0.1～0.2mの厚さで存在する。この層は古墳造営に際して、下層を整えるために敷かれたものと思われる。美園古墳が造営された部分は、下層に前時期（庄内式）の土坑（C S K 307）があり、レベル的にも低くなっていた。このため、その部分を整地する必要があったものと考えられる。南東側では周濠の下層にも整地層が観察された。この部分では整地してから周濠を掘削しており、かなり基底部が不安定な状態であったことを物語っている。
- ・埴輪及び土器の出土状態——精巧な家形埴輪2点と特異な壺形埴輪25点以上及び若干の土器類が出土した。これらは全て周濠内より検出されており、特に北側のコーナーに集中している。出土状態及び土層断面の観察から判断して、墳丘が削平された際に封土と共に墳丘上から削り

落されたものである。コーナー部以外では、壺形埴輪の破片がある程度の間隔をおいて検出された。この点から壺形埴輪が墳丘縁辺部に並べられていた可能性が大きい。家形埴輪もC379が東側、C380が西側から行方向を東西に向けて並ぶように検出された。おそらく墳丘上でも並べて置かれていたと思われる。壺形埴輪の点数及び家形埴輪の大きさから見て、墳丘上は埴輪であふれんばかりであったと想像される。土器は周濠内の各所より散発的に検出され、集中して認められない。

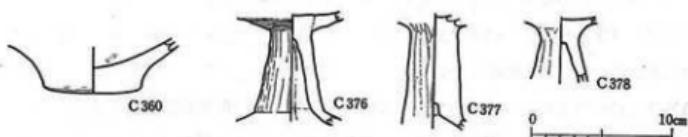
美國古墳の時期については、出土した土器類及び家形埴輪、壺形埴輪の特徴から見て土器による時期区分のⅡ期後半に属すると考えられる。その性格については第Ⅶ章第8節で詳しく触れるが、一辺約7mの極めて小規模な方墳である点及び集落に近接して立地することから見て在地的な性格の強い古墳であると思われる。小規模な方墳にもかかわらず精巧な家形埴輪と特異な壺形埴輪を持っている点も興味深い。

出土遺物

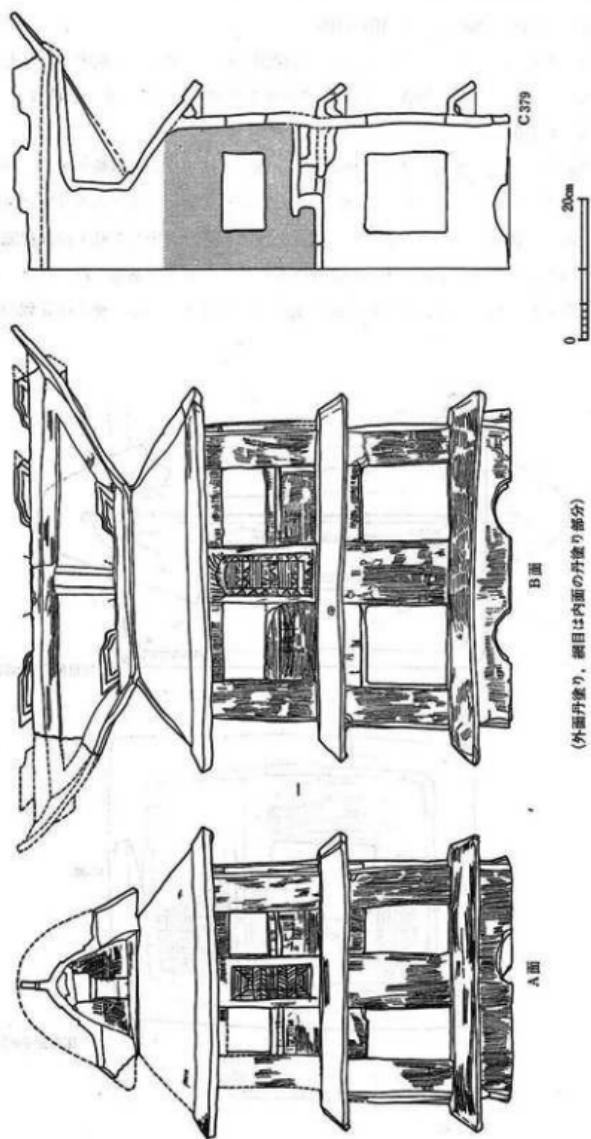
〔土器〕(第356図、図版200・202)

周濠内からは、若干の土器が検出されている。これらは全て破片であり、時期的にも幅をもっていた。周濠が下層の庄内式包含層を掘り込んで作られているため、下層から前時期の遺物が混入する可能性は高い。ここでは、時期判別可能な比較的大形破片4点を選んで提示した。C360は壺の底部になると思われる。胎土は緻密で明灰褐色を呈しており、その特徴は、壺形埴輪と類似していた。底部は外面の中央がやや膨らむ平底である。表面の摩滅が激しいため調整の観察が難しいが、底部外面はナデが施されていた。土器による時期区分のⅡ期に属すると思われる。C376は高杯の脚柱部破片である。胎土は明褐色を呈し、緻密であった。外面の調整は、杯部で横方向の笠磨き、脚柱部は縦方向の笠磨きを施している。杯部内面は笠磨き、脚柱部内面は笠削りが施されていた。時期的にはⅡ期に属する高杯であろう。C377は高杯の脚柱部で、中実になっている。外面は縦方向の笠磨きが施され、内面は笠削りが加えられていた。時期的には若干古くなり、Ⅱ期以前に属すると思われるが厳密には決め難い。C378も高杯の脚柱部上半に相当する。胎土は緻密で明赤褐色を呈していた。外面の調整は縦方向の笠磨き、内面は笠削りが施されている。Ⅲ期に相当すると考えられる。

先述したように周濠から出土した土器は少量で、時期的にも幅をもっている点から見て古墳の時期を決定する材料としては問題を残す。しかしながらC376は壺形埴輪(C385)と近接して検



第356図 CS X 307北側周濠隅部出土土器



第357図 C S X307北側圓筒形器出土形埴輪A (C 379) (1)

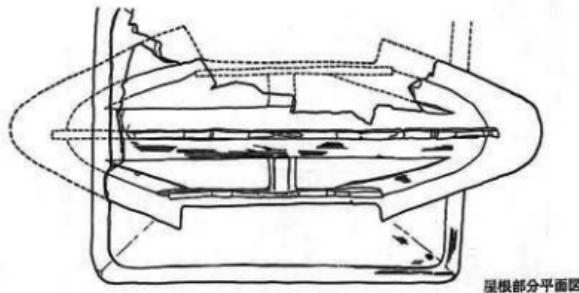
出されており、古墳に供獻されていた可能性が大きい。

〔家形埴輪〕(第357~360図、図版191~194)

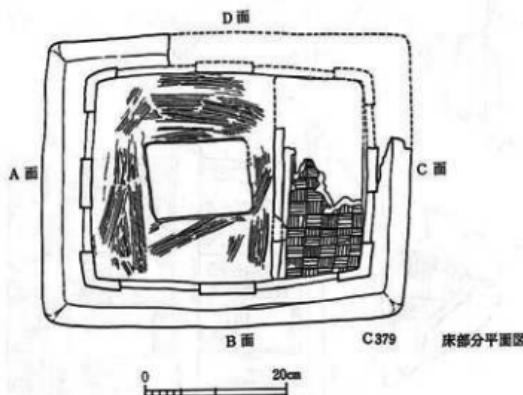
家形埴輪は北側周濠コーナー部分より、2点検出された。東側から検出されたものは、高床式住居を表現している(家形埴輪A)。西側のは倉庫を模倣していた(家形埴輪B)。

家形埴輪A(C379)

入母屋造高床式住居(2間×2間)を表現した極めて精巧な家形埴輪である。D面(第358図)側が周濠内で上になっており、摩滅が著しかった。それを除いて全体の残り方は良好である。現状での最大高は約70cm、棟の最大長は推定で約75cmであった。桁行の最大長は約55cm、梁行の最大長は約45cmを測る。外面全体と内面の床及び壁にはベンガラが塗布されていた。内外面には細い刷毛目調整が施されており、部分的にその上にナデを加えている。棟には5個の錦飾りが付け

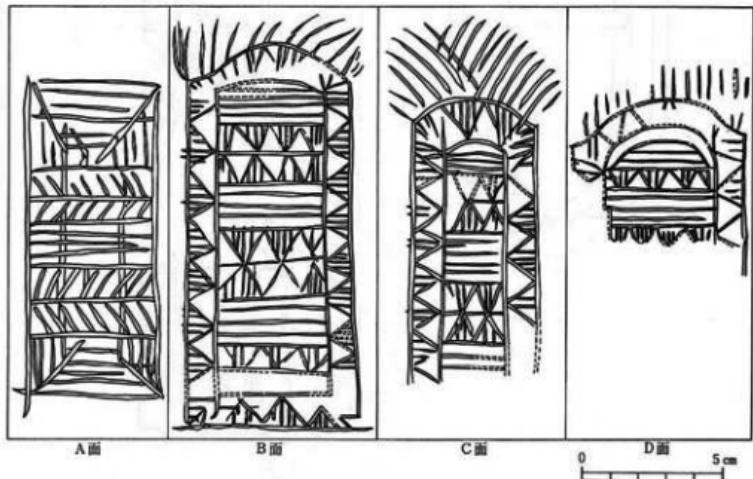


屋根部分平面図



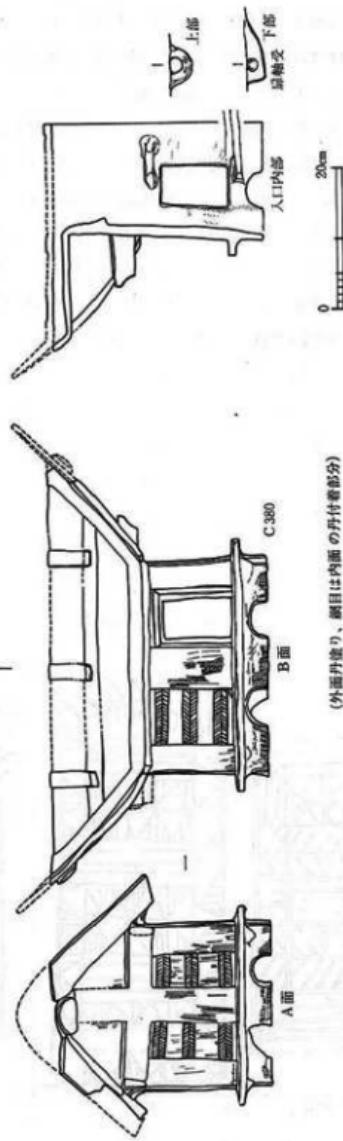
第358図 C S X 307北側周濠隅部出土家形埴輪A (C379) (2)

られていたと思われ、大棟と本屋の境目部分にも片側3個づつ、合計11個の飾りが付けられていたようである（第357図）。これらの飾りは衣蓋形埴輪に付けられるものと類似しており、家形埴輪に付けられたものとしては岡山県月の輪古墳に類例がある。この家形埴輪が最も特異である点として、床とベッド状施設を持つことがあげられよう（第358図）。床の中央には $14 \times 10.5\text{cm}$ の長方形透し孔が開けられていた。この孔は焼成時に火の通りを良くするために設けられたものか、ないしは住居構造を忠実に表現したものいざれかである。またベッド状施設は床より約3.5cm高くなっている、この下は焼成時の火の通りを考えてか中空になっていた。それを証明するかのように、ベッドの下にあたる床部分には径約2.5cmの孔が開けられている（第357図）。ベッド状施設上面には線刻による約2cm四方の市松模様が施されており、網代の表現ではなかろうか。さらに興味深い点としては、居住区外面の中央柱部分に線刻の盾が描かれていることがあげられる（第357・359図）。A面の盾は上端が直線であり、綾衫状の文様が付されていた。B、C、D面の盾は上端が弧状を呈し、飾りの毛が付けられていたようである。それぞれの盾には鋸歯文によって構成される文様が施されていた。この家形埴輪はかなり精巧に製作されており、当時の首長の家を忠実に表現している可能性が大きい。その点から見て住居の外面に盾を飾る風習があったことが考えられ、そこに取り付けられる盾にも形状の違いがあったと想像される。あるいは方位による使い別けがなされていたのかもしれない。古墳時代の盾は木枠に皮張りのものが多く、表面に漆を塗布していたようである。この埴輪に描かれた盾から、上端が弧状を呈するものには毛が付けられていた可能性が考えられる。また建築史的な観点から注目されるものとしては、大棟の妻部分に棟木ささえの斗及び束が線刻で表現されていることである。これと同様な表現をも



第359図 C S X 307北側周涼隅部出土家形埴輪A (C 379) 線刻盾

第360図 C S X 307北側陶器窯部出土家形埴輪B (C 360)



つ家形埴輪としては、三重県石山古墳出土のものがある。すでにこの時期から、このような技術が使われていたことを証明する貴重な資料と言えよう。B面の居住区下方の張り出し部分に径約0.4cmの焼成後穿孔が認められた。何らかの付属物を取り付けるために穿孔されたと思われる。

家形埴輪B (C380)

切妻造倉庫（2間×2間）を表現したと思われる精巧な埴輪である。入口が一箇所認められる他は窓が設けられておらず、倉庫を模倣していると思われる。屋根の中央部分が欠損している他は残りが極めて良好であった。棟までの高さ約31cm、棟の長さは現存長で約60cmを測る。桁行の最大長は推定で約42cm、梁行の最大長は推定で約38cmであった。外面にのみベンガラが塗布されており、内面には外面を塗布する際に飛び散ったと考えられるベンガラが入口周辺で付着していた。家形埴輪Aと同様、内外面とも細い刷毛目調整が施されており、部分的にはその上にナデを加えている。外壁には線刻による横方向の綾杉文が3列表現されており、壁材を留めるための施設を表わしているのではなかろうか。この埴輪が特に興味深い点として、入口の内側に扉を取り付けるための軸受けをもつことがあげられる。軸受けの上方は環状を呈し、下方は凹みを付けている（第360図）。扉の部分は発見されなかったが、内開きの扉が取り付けられていたと思われる。当時の扉構造を忠実に模倣したものであるとすれば、扉の軸は上方が長く、下方が短いということになる。

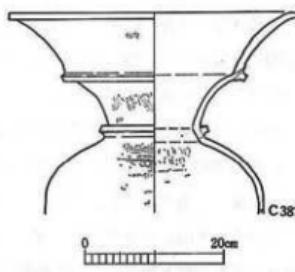
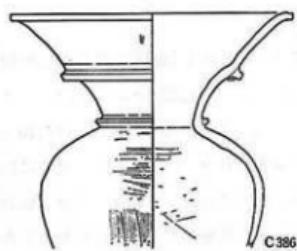
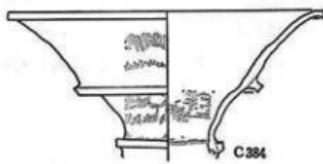
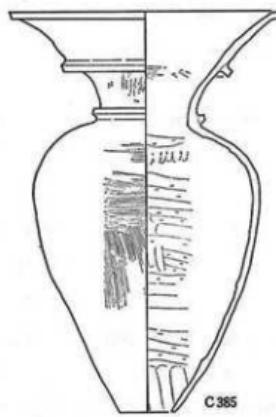
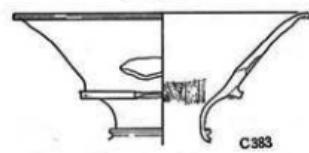
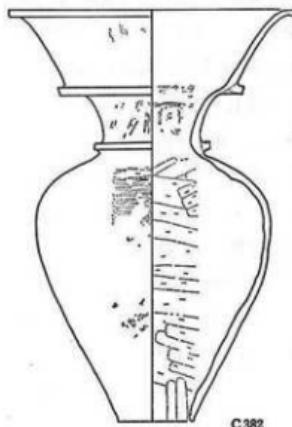
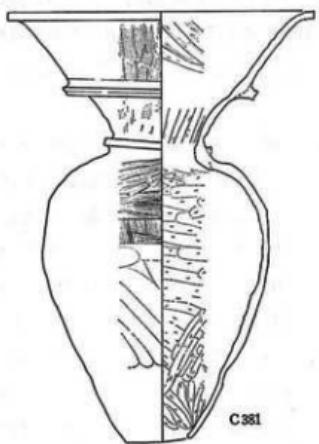
家形埴輪AとBは極めて精巧に作られた埴輪であり、同時に床及びベッド状施設をもつ点、棟木ささえの斗と束の表現、内開き扉とその取り付け方法等において建築史的にも貴重な資料であると言える。また胎土とテクニック等で類似した点が多く観察されることから、同一工人の製作による可能性も大きい。家形埴輪の時期であるが、三重県石山古墳出土資料と類似していることから判断して4世紀末ぐらいに位置付けられるものではなかろうか。家形埴輪自体の詳細な編年が確立していない現状では、家形埴輪のみから時期を決めることが難しい。

【壺形埴輪】(第361～363図、図版195～199)

ここでは美濃古墳から出土した壺形埴輪25点を提示した。この点数は今回出土した資料の大部分に相当している。壺形埴輪は形態の面で、A、B、Cの三類に分類できた。

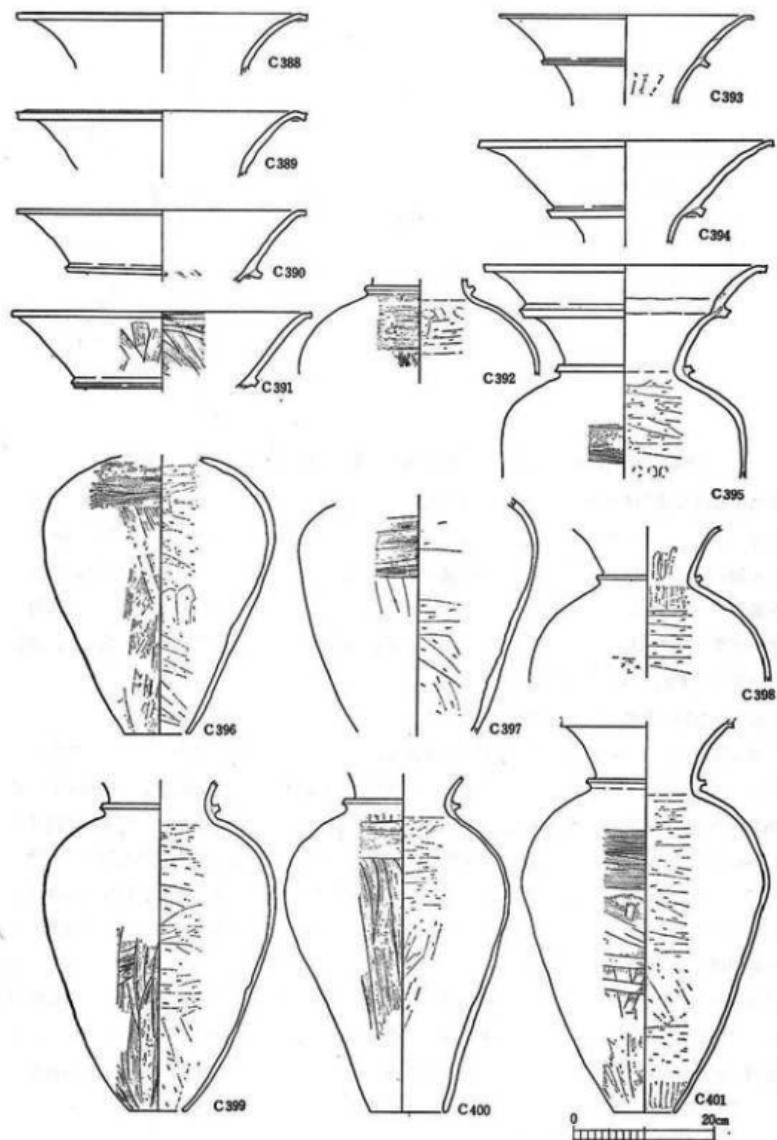
壺形埴輪A類 (第361・362図、図版195～199)

量的には最も多く、21点以上出土している。形態の特徴は、口縁部が朝顔形円筒埴輪と類似しており肩部から体部上半部にかけて最も膨んでいた。体部下半から底部にかけては急にすぼまり、不安定な埴輪である。底部を土中に埋め込んで立てたものと考えられる。底部には約10cmぐらいの孔が焼成前にあけられており、当初から埴輪として製作されたものであろう。突帯は口縁下方と頭部に一条ずつ巡り、それぞれの突帯周辺に擬口縁が観察された。この部分で粘土紐を接合している。外面には全体にベンガラが塗布されていた。胎土は明褐色を呈し、砂粒を若干含んでおり、家形埴輪と比較するとやや荒い。内外面の調整はほとんど類似しており、外面では口縁部から頭部にかけて縦方向の刷毛目を加え、肩部から体部上半部までは縦方向の刷毛目を施した

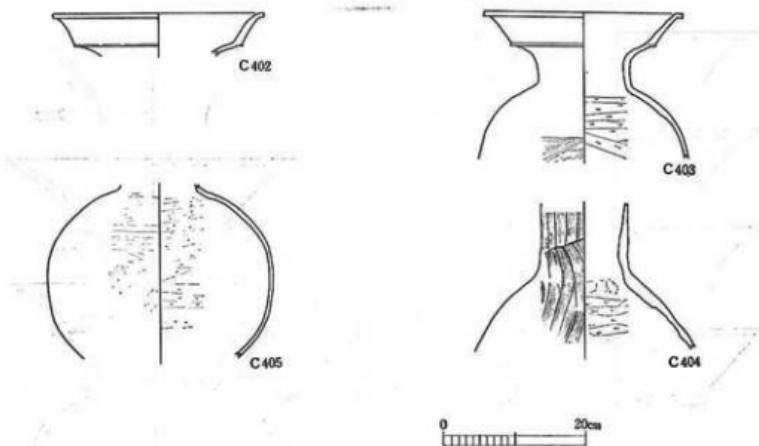


0 20cm

第361図 C S X 307周漢出土漆形埴輪 A類(1)



第362図 CS X 307周辺出土壺形埴輪A類(2)



第363図 C S X 307周濠出土壺形埴輪B・C類 (B類C402・C403・C405、C類C404)

後に横方向の刷毛目を加えていた。体部下半から底部にかけては、縦方向の刷毛目を加えその上にナデを施している。内面の調整は、口縁部から頸部において縦方向の刷毛目を施しその後でナデを加えていた。体部は横方向の荒い窓削りを行ない、底部では斜めないし縦方向の荒い窓削りを施している。体部内面に窓削りが加えられている点は、壺の調整と類似していた。また外面の体部下半に黒斑が付いているものが多い。円筒埴輪と直接比較するのは若干問題があるが、調整の特徴は「Ⅱ期の埴輪」と類似している。

壺形埴輪B類 (第363図、図版199)

3点確認されている。口縁部と体部のみ残存しており、底部の形態が不明である。底部の形態によっては、壺形土器と呼んだ方が良いかもしれない。C402は南東側の周濠より検出され、C403は北西側の周濠から、C405は北東側からそれぞれ出土した。これら3点は、周濠内で約4～4.5m離れて認められる(付図22)。出土状態から推定して埴丘上で、ある程度の間隔ごとに置かれていた可能性が大きい。胎土は明赤褐色を呈し、緻密である。形態の特徴は、口縁部が強く外反しており頸部との境に下方に張り出す細い突帯が巡らされた二重口縁である。口縁端部と突帯との間隔は、壺形埴輪A類に比べて狭くなっていた。突帯部分に粘土組の接合部が存在する。頸部はやや細くなり長めである。体部は中央部に最大径をもち球形を呈していた。外面の調整は口縁部で横方向のナデが加えられ、体部は横方向の細い刷毛目を加えた後その上に同じ原体で斜め方向の刷毛目を施している。内面は口縁部横方向のナデ、体部で横方向の窓削りが加えられていた。器形の特徴から見て、土器による時期区分のⅡ期に属すると思われる。

壺形埴輪C類 (第363図、図版199)

北のコーナー部分より出土したC404がこの類に相当し、1点のみ認められた。胎土は壺形埴

輪A類と類似している。形態の特徴としては、まず直立する口縁をあげることができる。口縁端部は薄くなり、わずかに欠損していた。肩部は張りを持たず、緩やかに開き体部へ向う。体部中央より下方は欠損しており、不明である。外面の調整は縦方向の刷毛目であり、内面は頸部に指押さえが認められ、体部で横方向の強い範削りを施していた。口縁部の直立した状態から判断して、上部に別の埴輪が組み合わされる可能性もある。

まとめ

庄内式に比べて遺構の数はやや減少するが、調査区中央より南側にかけて密集していた。庄内式から継続的に使われてきた溝（C S D 323・324）の周辺に集落が営まれるようであり、特にC S D 323の東側へかなり広がりそうである。集落の北東側には水田が想定され、居住域と生産域との関係が把握できる。また集落と美園古墳との間も遺構が希薄であった。このようにC地区では布留式の水田、集落、古墳が有機的な関係を示している。出土遺物、遺構の切り合い関係から見た各遺構の時期は第11表のとおりである。（渡辺）

- 註(1) 以前に「美園1号墳」と呼んだ古墳と同一のものである。調査途中にあっては、複数の古墳が検出される可能性がありこのような名称を用いたが、最終的には1基のみであったため「美園古墳」と名付けた。渡辺昌宏「大阪府美園遺跡1号墳出土の埴輪」『考古学雑誌』第67巻第4号 1982年。
- (2) 近藤義郎編「月の輪古墳」1960年。
- (3) 小林行雄氏の御教示による。
- (4) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年。

土器による 遺構	Ⅷ期	Ⅸ期
C S X 304	—	—
C S X 305	—	—
C S B 301	—	—
C S K 313	—	—
C S E 302	—	—
C S D 323	—	—
C S D 324	—	—
C S D 325	—	—
C S D 326	—	—
C S D 327	—	—
C S D 328	—	—
C S D 329	—	—
C S K 314	—	—
C S X 306	—	—
C S K 315	—	—
C S X 307	—	—

第11表 C地区布留式遺構存続期間

(4) D・G地区

この時期の遺構は全体的に希薄であるが、D地区の北端で溝、G地区で土坑、溝、自然流路を検出した。

3工区の布留式期の遺構は、D地区の北端部に溝が見られるのみで、その大半がG地区に集中している。G地区的遺構は恐らく佐堂遺跡の続きとも考えられる。遺構はG S D329とG S D330の溝にはさまれてG S K308～319の土坑が存在する。これらの土坑の中で特にG S K311～G S K316は整然と並ぶものである。G S K311、G S K312とG S K315、G S K316の主軸方向はほぼ同一で、G S K312、G S K313、G S K314、G S K315もほぼ一直線上に並ぶ。これを南東に線を延ばすと、若干ずれはあるがG S K309に達する。これらの土坑は調査当初、G S K316より径0.18m、長さ0.65mの柱根を検出したことから掘立柱建物を想定した。しかし、土坑の大きさ、埋土の堆積状況により柱穴とは考えがたく、他の性格を考えたほうがよさそうである。なお、G S D330より南部、1Gトレンチ南半は水田であった可能性が高い。

G S D329 Gトレンチのはば中央を南東一北西に走る流路である。幅約0.5～1.2m、深さ6～15cmを測る。

G S D330 2Gトレンチのはば中央を南東一北西に走る流路である。幅約3.6～5.5m、深さ約0.1～0.2mを測る。遺物は土師器；甕、壺、鉢、高杯等の破片が多くみられる。

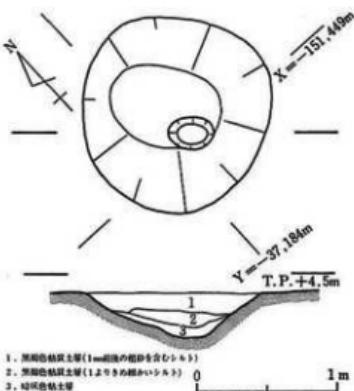
G S K308 Gトレンチのはば中央に位置する。平面形は円形で径約0.7m、深さ約0.15mである。壁は緩やかな傾斜をもつ。

G S K309 (第364図) G S K308より約2.4m南西側に位置する。平面形はほぼ円形で径約1.4m、深さ約0.2mを測る。壁は緩やかな傾斜をもつ。底面もやや円形で径約0.6～0.8mである。底面南側部に径0.4×0.2m、深さ0.15mの小穴がある。遺物として甕口縁の破片が出土した。

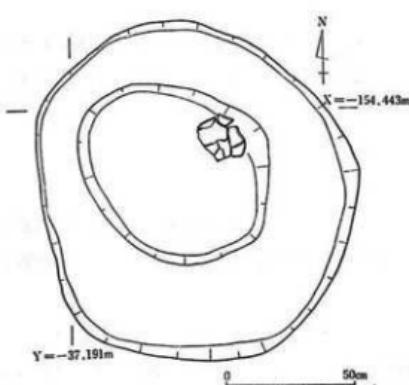
G S K310 2Gトレンチ北東隅に位置する。平面形は梢円形で主軸は東北東一西南西である。上縁部長軸は推定1.1m、短軸は推定0.75m、深さ約0.14mを測る。壁面はほぼ垂直に近い。遺物は土師器、高杯脚柱部の破片が出土した。

G S K311 G S K310から約0.6m北西側に位置する。平面形はほぼ梢円形で主軸は北東一南西である。上縁部長軸は推定1.8m、短軸は約1m、深さ約0.1mを測る。壁面はほぼ垂直で、さらに底面中央部に径約1×0.7m、深さ約0.1mの円形ピットを有する。遺物は甕の破片が出土した。

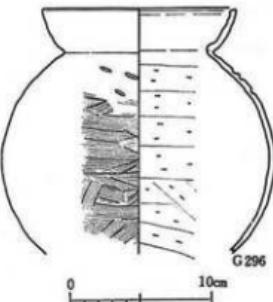
G S K312 (第365図) G S K311から約0.4m南東側に位置する。平面形は主軸が南東一北西



第364図 G S K309遺構図及び断面図



第365図 G SK312遺物出土状態



第366図 G SK312出土土器

の梢円形である。径約 1.8×1.4 m、深さ約0.15mである。底部中央は径約 0.7×0.6 m、深さ約0.1mのピットを有し段状に掘り込んでいる。遺物はほぼ一個体の甕が出土した。

出土遺物

〔土器〕(第366図)

甕 G 296は肩部に刺突が施されている。胎土は粗く、淡橙色を呈す。体部中位に煤の付着が認められる。

G SK313 G SK312から約1m北西側に位置する。平面は円形で径約 0.5×0.5 m、深さ約0.1mを測る。底面中央部には径約 0.4×0.3 m、深さ約0.1mのピットを有する。

G SK314 G SK313とは接し、北北西側に位置する。平面は円形で径約 1×1 m、深さ約0.1mを測る。底面中央部には径約 0.6×0.6 m、深さ0.1~0.2mのピットを有する。遺物は甕の破片が出土した。

G SK315 G SK316の南西には接する。平面は梢円形を呈し、主軸を北東一南西方向に向ける。径約 1.2×0.9 m、深さ約0.1mを測る。G SK311・312・313・314・316と同様、底部中央に円形のピットを有する。ピットは径約 0.6×0.5 m、深さ約8cmを測る。

G SK316 G SK314から約0.8m北側に位置する。ピットが2つ重複した形で、主軸は北東一南西軸である。柱根は径約0.18m、長さ約0.65mである。柱根を検出したピットは、径推定 0.8×0.5 m、深さ約0.1mを測る。片方のピットは径推定 0.8×0.5 m、深さ約0.1mを測る。

G SK317 G SK316の北西に接する。径推定 0.4×0.4 m、深さ約0.1mを測る。

G SK318 G地区の北側に位置する。平面形は梢円形で主軸は北東一南西である。上縁部長軸は約1.4m、短軸は約1m、深さ約0.4mを測る。壁面は南西側が垂直に近いが、北東側は緩やかな傾斜をもつ。底面はほぼ平坦で柱穴等の痕跡は無い。

G SK319 G SK318から1m北西側に位置し、G SD330と接する。径推定 0.8×0.7 m、深

さ約0.1mを測る。

G S K320 G地区の北端に位置する。平面形は不整な円形を呈し、土坑は段状に掘られている。径 1.4×0.9 m、深さ0.4mを測る。出土遺物として土器片が出土した。(小野・野藤・山藤)

3 中期

(1) A地区

A地区では中期の遺構面は検出されなかった。ただ、前期の布留式の遺構面で古式の須恵器が供伴して出土する遺構が若干あったが、これについてはすでに説明しているので、ここでは省略することにする。(岡本)

(2) B地区

B地区における中期遺構面は南端部のみで検出した。遺構の上層には、約30cmの厚さで砂が堆積しており、この砂の堆積が認められるところのみに、中期の遺構面を検出することができた。

包含層

純粋の包含層は認められない。ただ遺構面の上層を覆う淡茶色砂内から古墳時代後期の遺物が若干出土する。この淡茶色砂は、B地区南端から北へ約21m、さらに南接するC地区的北端から南へ約35mの範囲で検出される。堆積の状態は、最も厚いところで40cmを測り、多少の起伏はあるものの、レンズ状に堆積していることから、古墳時代の自然流路であった可能性がある(付図2参照)。

出土遺物

〔土器〕(第367図・B1097・B1098)

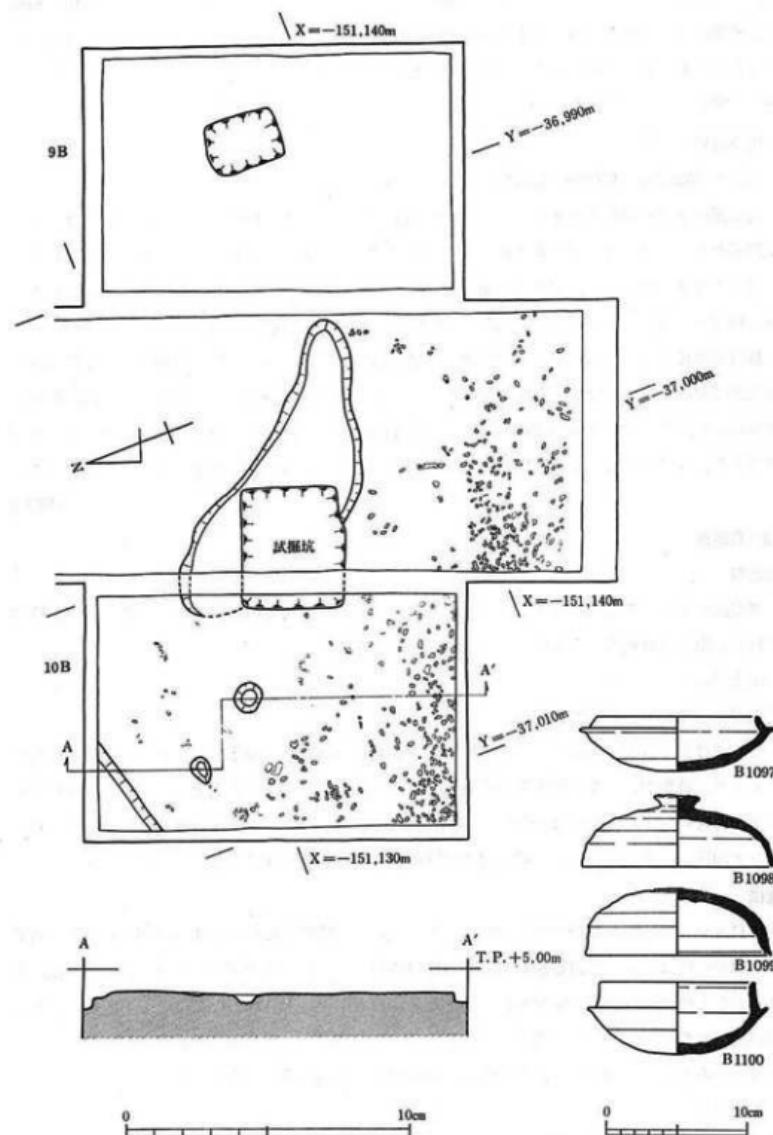
淡茶色砂内から出土した須恵器2点を抽出する。B1097は杯である。口縁部は短く内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。受部は短くほほ水平に伸び、底部は浅い。口縁部内外は回転ナデ、底部外面は回転窓削りを施す。口径11.2cm、器高4.0cm、受部径14.0cmを測る。色調は淡灰色、焼成は良好、胎土は密である。6世紀後半のものであろう。

B1098は、つまみのついた有蓋高杯の蓋である。口縁部はわずかに外傾して端部を丸くおさめる。天井部は比較的低く、口縁部と天井部の境は認められない。つまみは中くぼみのものである。口縁部外面は回転ナデ、天井部外面は回転窓削りを施し、内面には水引き痕が残る。口径13.6cm、器高5.0cmを測る。色調は暗青灰色、焼成やや軟質で胎土は密である。6世紀中頃のものである。

遺構

遺構面はT.P.+4.2m前後のところで検出された。ベース層はこのあたりのみに堆積する紫灰色粘土である。検出した遺構は、水田と落込み状の土坑、ピットである。

水田(第367図) 検出した遺構面の大半が水田である。畦畔は検出されなかったが、地形や周辺の状況及び花粉、珪藻分析の結果から、そのように断定した。水田面Bトレンチの南端から10Bトレンチにかけて、多数の足跡が検出された。また、水田面とは直接関係ないと思われる



第367図 B地区南側古墳時代中期遺構面及び出土土器

が、淡茶色砂が堆積した土坑がいくつか検出されている。これらの土坑の深さは概して10~30mと比較的浅い。遺構面直上よりⅠ型式の須恵器が出土していることから、この面を古墳時代中期と想定したが、C地区や下層の状況を考慮するならば、厳密には、古墳時代前期末~中期初頭と考えた方が良いかも知れない。

出土遺物

〔土器〕(第367図・B1099・B1100)

遺構面直上より須恵器が2点出土した。B1099は杯蓋である。口縁部は外傾し、端部は内傾して凹面をもつ。天井部は高く丸味を呈する。口縁部と天井部の境にわずかに稜線が認められる。口縁部外面は回転ナデ、天井部外面には回転挽削りを施し、内面には水引き痕が認められる。口径13.2cm、器高4.8cmを測る。色調は淡紫灰色、焼成はやや軟質で、胎土は密である。

B1100は杯である。口縁部は内傾気味には垂直に立ち上がり、端部は内傾する。受部は鋭く外上方に伸びる。底部は深く丸味を呈する。口縁部の外面は回転ナデ、底部外面は回転挽削りを施し、内面には水引き痕が認められる。口径11.0cm、器高5.0cm、受部径12.9cmを測る。色調は青灰色、焼成は良好、胎土は密である。両方ともⅠ型式に属する。所謂、古式須恵器である。

(岡本)

(3) C地区

包含層

調査区中央から南側にかけて、布留式包含層の上層及び包含層中に混入する状態で遺物が検出された。出土量は極めて少ない。

出土遺物

〔土器〕(第368図、図版224・225)

ここでは復原実測可能な大きめの破片2点(C411・C412)を図示した。共に須恵器の杯身破片であり、時期的には5世紀末葉に位置づけられるものであろう。出土地点は両者とも4Cトレシチであった。また図版225に写真のみ提示したC406は、須恵器大甕の口縁部破片であり、Cトレシチ34区より出土している。前述の2点同様、5世紀末葉に属すると考えられる。

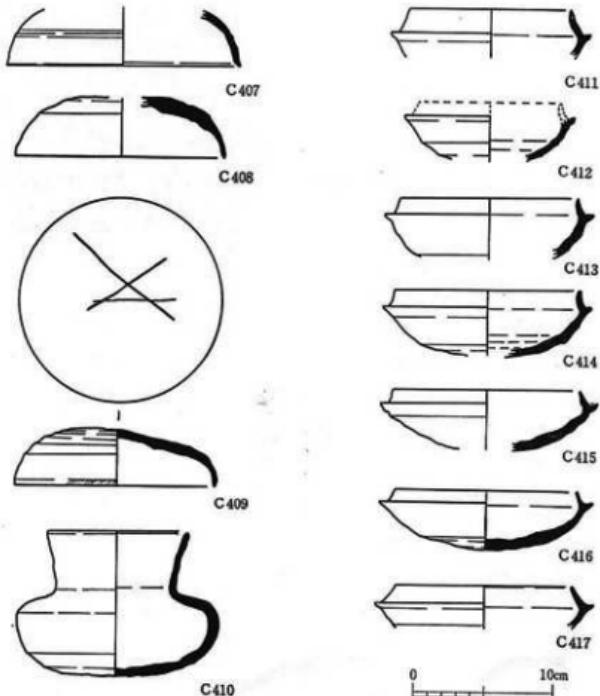
遺構

5CトレシチでCSD323の最終堆積部分より、この時期の須恵器が4点検出されてた。古墳時代中期の段階で前時期のCSD323及びCSD324のような比較的大きめの溝が、かなり浅くなりながらも機能していた可能性が高い。また北側の水田推定部分については、この時期に自然河川が流れて埋没する。先述の溝がまだ機能している段階では、北側部分の水田が営まれていたのではないかろうか。その他には、古墳時代中期に属する明確な遺構は認められなかった。

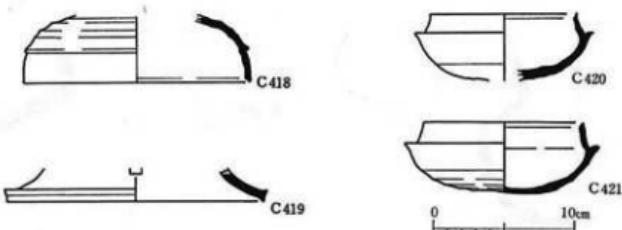
出土遺物

〔土器〕(第369図、図版203)

5CトレシチのCSD323覆土最上層(黒褐色土層)より、4点の須恵器が出土した(第349図)



第368図 C地区古墳時代中後期包含層出土土器



第369図 5CトレンチCSD323上層出土土器

参照)。C418は杯蓋の破片であり、C420とC421は杯身になる。C421は完形品で、正位置で溝の中央部から出土した。C419は高杯の脚部破片で、長方形透しが観察される。時期は、5世紀後葉から末葉にかけてのものであろう。(渡辺)

(4) D・G地区

古墳時代中期の面は灰色粘土層を基層としており、造構としては溝、畦畔、落ち込み、足跡を

検出した。溝はD地区の北端部、中央部に於て見られる。北端部の溝は、溝というよりも自然流路と考えられるが、ここでは一応SDの記号を与え、溝としておく。畦畔、落ち込みはG地区で見られる。足跡は、1DトレンチからDS D331・332と2Dトレンチ、8DトレンチからDトレンチ、GトレンチGSA304～307と南部に集中している。

出土遺物

〔土器〕(第371図、図版232)

杯蓋 須恵器。D297は水平にのびる鈍い稜を持つ。天井部は平坦で回転鋸削りを施す。口縁端部は丸味を持って内傾する。D298は不整形な天井部を持ち、天井部下半に一条の沈線が入る。口縁端部は丸味を持ち、内に段がつく。天井部は回転鋸削り、口縁部は横ナデ調整。

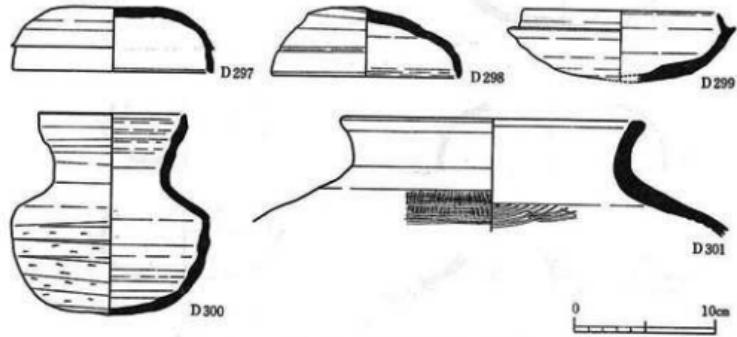
杯身 須恵器。D299は内傾する立ち上がりを持ち、受け部はやや上方にのびる。回転鋸削り、回転横ナデが施される。

壺 須恵器。D300は頸部から外反したのち口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸味を持つ。体部下半には右廻りの回転鋸削りが顕著であり、その他は回転横ナデ調整を行なっている。

壺 須恵器。D301は口縁部が頸部からゆるやかに外反したのち、端部を肥厚させ、丸くおさめる。外面には平行叩きの後にカキ目、内面には同心円の叩き目が施されている。



第370図 D地区出土石器



第371図 D地区出土土器

DS D331・332 D地区的北端に位置する。两者ともに主軸を北東一南西方向におき、幅・深さもほぼ同じで、幅0.5～1m、深さ0.03～0.1mを測る。足跡はこの溝との間と、溝の南側に於て検出した。

DS D333 5D・D・6Dトレンチに位置し、主軸を北西一南東方向におく。幅約3～4m、深さ0.97～0.2mを測る。6Dトレンチに於ては北側の肩部は不明瞭になる。

G S D 334 Gトレーナの北端に位置し、主軸を北西—南東方向におく。溝の一部が調査区外のため幅は不明であるが、約3mと推定される。深さは0.4~0.5mを測る。

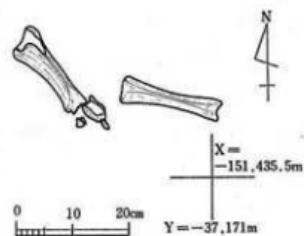
D S A 308 7Dトレーナに位置する。本遺構は杭列で主軸は北西—南東方向におく杭は径3~4cmを測り、先端を削っている。その杭の一部に樹皮の付いたものがある。本遺構の周囲には多くの足跡が残っていた。

G S A 304・305・306 G地区の北半部に位置する畦畔状遺構である。G S A 304は主軸を北西—南東方向におき、幅約1.2m、高さは約5mとG S A 305やG S A 306に比して幅が狭く、また低い畦畔である。

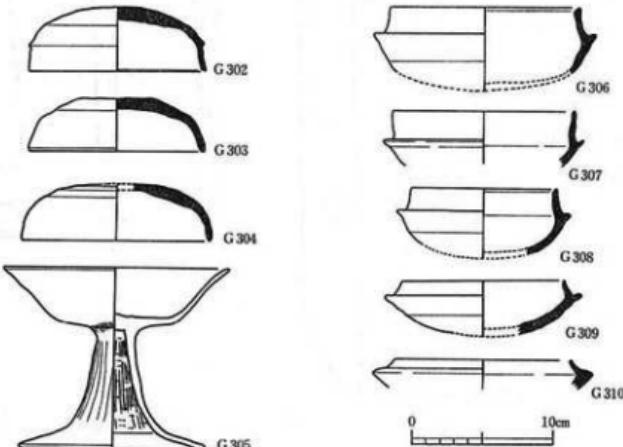
G S A 305はくの字形に走り、G S A 306側では高く成し、G S A 334側へ徐々に低く成る。高い所の主軸を北東—南西方向におき、低い所は北北東—南南西方向に主軸をおいている。幅は0.7~1.9m、高さ0.05~0.27mを測る。畦畔の高い部分より須恵器（第373図、図版231）と獸骨（第372図）が出土している。

G S A 306は主軸をほぼ北西—南東方向におき、南南東隅はテラス状を成している。幅は2.2m（テラス状の部分を含めると4.9m）、高さは約0.3mを測る。畦畔は灰色粘土を盛り上げている。畦畔内にはG S A 305と同様に須恵器と獸骨が出土している。

G S A 305とG S A 306の間に畦畔が途切れる所があり、この箇所は水口と考えられる。この水口付近に於て足跡が集中している。



第372図 G S A 305獸骨出土状況



第373図 G S A 305・306・307出土器

出土遺物

〔土器〕(第373図、図版231)

杯身 須恵器 (G 307・309・310)。G 307は口縁部立ち上がりが高いもので端部は丸味を持つ。また、内傾する短い立ち上がりであり、胎土中に長石粒が比較的目立つ。

G S A 307 G 地区の中央に位置し、G S A 306とは約 2~5 m 離れている。主軸は、G S A 306 とはほぼ同一方向で、北西—南東方向においている。本畦畔は他の畦畔に比べ幅広く、高く土を盛り上げており、更に北側を若干傾斜しながら段上を成している。盛土は上層より暗オリーブ灰色シルト層（鉄分含む）、灰色シルト層（砂礫含む）、青灰色シルト層（砂礫含む）の 3 層である。足跡は畦畔の段上裾部より G S X 305 に向けて集中している。畦畔内の出土遺物は須恵器杯身、杯蓋、土師器高杯があり、G S A 305・306 と同様に畦畔の中に埋納していた。この様な事実は、巨摩庵寺遺跡に於ても見られ、恐らく、農耕儀礼に伴う行為であろう。

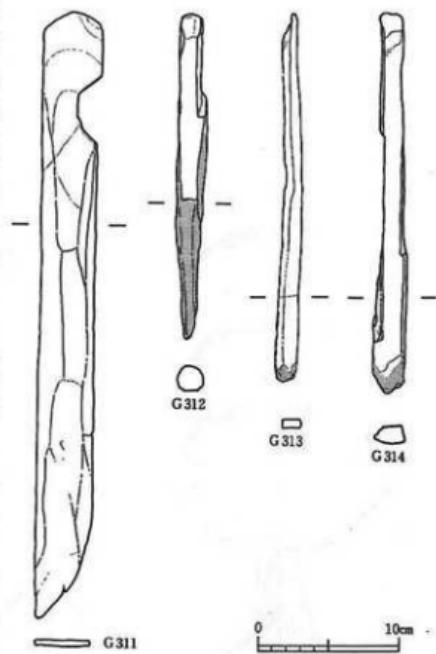
出土遺物

〔土器〕(第373図、図版231)

杯蓋 須恵器 (G 302~G 304)。G 302 は丸味を持つ天井部と口縁部との境いに鈍い稜線を持ち、内傾する端部を呈する。天井部ほどまで回転窓削りを施す。G 303 は天井部ほど程度に回転窓削りを施し、平坦気味に仕上げる。端部は丸味を持つ。G 304 の口縁部は直立気味を呈し、ほど程度に回転窓削りを施す。杯身、G 306、G 308 は口縁部立ち上がりが高く内傾する段を持つ。また、G 308 は内傾する短い立ち上がりであり、胎土中に長石粒が比較的目立つ。

土師器 高杯、G 305 は杯部と脚部との接合部に刷毛目、脚部には窓ナデ調整。内部は窓削りを施す。胎土はやや粗く、赤褐色を呈する。

G S X 307 G 地区のはば中央、G S A 307 の北西側に接して位置する。平面形は不整な梢円形を呈する。径 3.5 × 2.5 m、深さ 0.25 m を測る。この落ち込み内及び周辺など広域にわたって 0.1~0.3 m 程度の足跡状のビットが数多く見られる。遺物として形代と焼けた木片を検出した。



第374図 G S X 307出土木製品

出土遺物

〔木器〕(第374図、図版260)

形代 G311長さ43.2cm、幅4.2cmを測り、厚さ0.5cmの薄い板材で、ヒノキを用いている。一見刀状を呈している。上端部を山形に削り、その端部から約4cm下の所で側面より梯形に削り込む。

焼いた木片 G312、G313、G314の3点は角材の小木片で、いずれも一端に焼けた痕跡が見られるものである。

足跡 足跡はD・G地区の流路や畦畔付近に於て顯著に見られる。D地区では、DS D331・332と南半部で、G地区ではGSA307付近と南端部に見られる。1Gトレンチ、2Gトレンチでは畦畔は見られないが、多くの足跡が残っており、特に2Gトレンチに於ては北西—南東方向に歩いている状況が確認できた。方向はGSA307と同一方向である。G地区の水田面はGSD334より南へ徐々に高くなり高低差は約0.3mを測る。また1Gから2G側へも若干傾斜しており高低差は0.1~0.3mを測る。(小野)

4 後期

(1) A地区

A地区では古墳時代後期の遺構面及び遺構・遺物は検出されなかった。(岡本)

(2) B地区

遺構面はT.P.+4.5m前後に位置し、飛鳥時代遺構面とは同一面で検出された。ベースを成す層も飛鳥時代遺構面と同様、第Ⅳ章第1節第2項(2)で説明した第Ye層黒褐色粘質土である。検出した遺構は土坑2基(BSK314・315)のみであるが、古墳時代中期のところで説明したように、南端部に自然流路が流れている可能性がある(第Ⅳ章第2節第3項3(2)参照)。

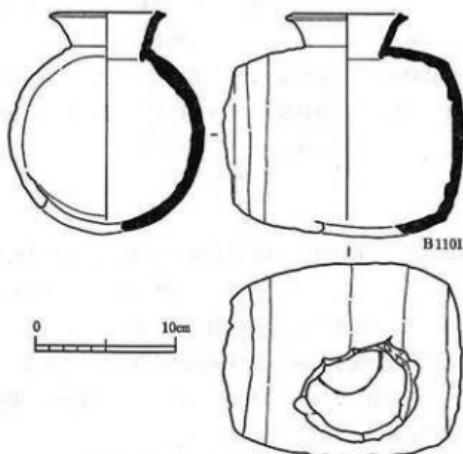
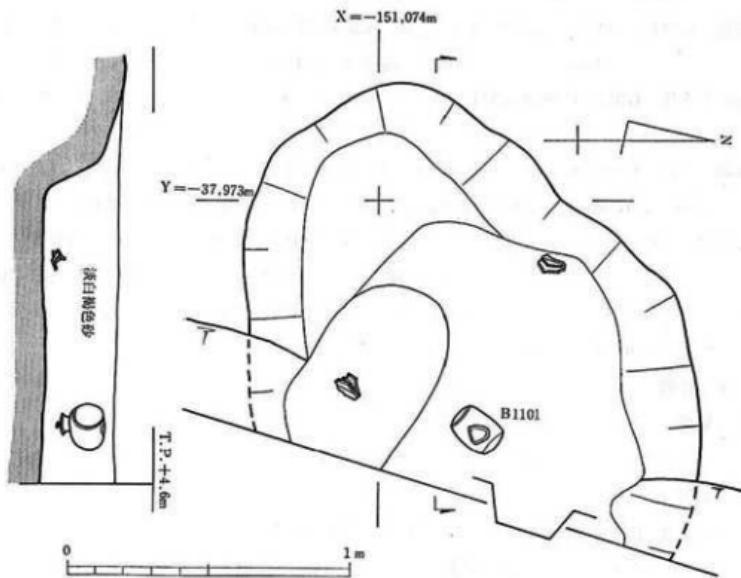
BSK314(第375図) Bトレンチ中央部南東より検出した不定形の土坑である。東側は調査区外であるが、南北幅1.63m、深さ0.27mを測り、底部は平坦面を成す。埋土は淡白褐色砂である。出土遺物には、須恵器の横瓶(B1101)があり、口縁部を下にして出土した。また、土師器の羽釜の破片が出土している。ともに6世紀後半のものである。

出土遺物

〔土器〕(第375図)

須恵器の横瓶1点を抽出する(B1101)。口縁部は短かく外反し、端部は凹面を成す。体部は樽型を呈し、側面は円形の平坦面をもつ。実測図向って右側の側面径のはうが、左側より若干長く、しかも丁寧に調整されている底部には意識的に打欠いた穿孔が認められる。口縁部の内外面は回転ナデ、体部外面には回転窓削りを施すが、左側面は窓削りのみである。これは明らかに成形時の最終段階で、この部分で閉られたことを物語っている。口径7.0cm、器高16.0cmを測る。色調は白灰色、焼成は良好、胎土は密である。

BSK315(付図14) Bトレンチ中央部南東より、BSK314の南側で検出したピット状の土坑である。径0.2m前後の円形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土には淡茶褐色砂質土である。遺物



第375図 B S K314遺物出土状態及び出土土器

は土師器の羽釜の破片が出土している。6世紀後半から7世紀初頭のものと考えられる。(岡本)

(3) C地区

包含層

調査区南側で比較的多くの遺物が検出されている。ほとんどは鎌倉時代前半期の遺物包含層に混在して認められたが、美園古墳（C S X307）の南側に明確な包含層があった。この層は暗茶褐色粘質土であり、美園古墳が削平されてから堆積している。

出土遺物

〔土器〕(第368・385図、図版224)

ここでは残りの良好な大形破片及び完形品を11点図化した。各土器の出土地区は以下のとおりである。

C407 (Cトレンチ49区)、C408 (Cトレンチ43区)、C409 (Cトレンチ42区)、C410 (Cトレンチ51区)、C413 (4Cトレンチ)、C414 (Cトレンチ5~8区)、C415 (4Cトレンチ)、C416 (5Cトレンチ)、C417 (Cトレンチ21区)、C450 (Cトレンチ32区CSD501覆土中)、C451 (Cトレンチ37区CSD501覆土中)。

C407~C409、C450の4点は須恵器の杯蓋であり、C409は天井部外面に梵記号が付いていた。C407が6世紀前半に属する以外は、6世紀後半のものである。C413~C417、C451は須恵器の杯身であり、時期的には6世紀後半に属していた。C410は須恵器の直口壺である。あまり類例がない器形で、体部が短かく横に張っている点が特徴的であった。6世紀後半ぐらいに位置づけられるのではなかろうか。

遺構

明確な遺構としてはCトレンチ26区より土坑が1基検出されている。

C SK311 (第343図、図版72) CSD323が埋没して、その機能を失った後に掘り込まれた土坑である。東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.7mを測る。検出面から底面までの深さは約1.0mあり、比較的深い土坑であった。覆土は黒褐色砂質土を主として構成されている。底面からは横瓶の大形破片が出土した。この須恵器から見て6世紀前半に属する土坑と考えられる。土坑の性格は不明であるが、横瓶が出土している点から貯蔵穴ないし井戸として使用されたものではなかろうか。

出土遺物

〔土器〕

6世紀前半に相当する須恵器の横瓶体部破片が出土している。ほぼ半分ほどの大形破片であるが、今回は資料の提示をしていない。(渡辺)

5 小結

弥生時代前期に次いで多数の遺構が検出されており、美園遺跡を代表する時代の一つである。

(1) 庄内式

庄内式の遺構はB、C、D、E、Gの各地区で検出されている。前半期はC、D地区に集中しているが、後半期になるとB地区でも遺構が認められ北側への広がりを示した。

前半期の集落中心部分（C地区南半からD地区北半にかけて）は、弥生時代中期後半に集落が営まれた部分に重なるような状態で出現する。この時期C地区中央部分では南北方向に走る灌漑用水路と思われる溝が設けられ、その北側に水田が営まれていたようである。堅穴住居跡等の集落を直接物語る遺構は認められなかったが、多量の土器を含む土坑（C SK301、DSK306）や溝（C SD310）の存在から集落の一部分がC地区南側からD地区北側にかけて展開していた。またD地区北東部では木棺の蓋と思われる、コクヤマキで作られた木製品が検出されている。この木棺蓋状木製品は割竹形木棺を彷彿されるもので木口両端には2個の把手が付けられていた。おそらくこの周辺が墓域になるものと考えられる。

後期になるとA地区とF地区を除いて広範囲に遺構が認められる。時間的な累積の結果を考慮しても、北側へ集落が拡大することは確かである。B地区では中央部から南側にかけて溝が多数検出されており、庄内式終末の段階になると溝と並行する掘立柱建物跡（2間×3間？）が1棟確認された。この時期の掘立柱建物としては貴重な資料と言えよう。C地区でも中央よりやや北側で堅穴住居跡が1棟検出された。このように直接的に集落を証明する遺構が認められ、その他、多量の遺物を含む溝、土坑も多数確認されている。前半期に溝の集中したC地区中央部についても、堰等の施設を付属させた比較的大きめの溝が東西及び南北方向に走っていた。灌漑用水路としての機能を充分考え得るもので、この北側には前時期から引き続き水田が営まれていたようである。また最南端のG地区でも、この時期水田になっていた可能性が高く、佐堂遺跡側へ続いていると思われる。

②布留式

A～D及びG地区において遺構が検出されている。この時期は調査区全体で3箇所の集落と3箇所の耕作地、2箇所の墓域が確認された。

集落については、B地区中央部分に堅穴住居跡8棟と掘立柱建物跡5棟から成る集落中心部分が確認されている。B地区集落から南へ約140m離れてC地区的集落が存在する。C地区では前時期から継続的に営まれる溝の東側に、井戸を伴うと考えられる2間×3間の東西方向の掘立柱建物跡が1棟検出された。この集落は東側へ広がりをもつと思われる。C地区的集落からさらに南側へ約260m離れたG地区にも集落が存在するようである。D地区では柱掘り方が約0.5mもある掘立柱建物跡が1棟認められており、周辺部に集落が広がっている可能性が大きい。

耕作地は、A地区からB地区北側にかけてとB地区南端からC地区北半にかけて、それにG地区南側から佐堂遺跡側にかけてそれぞれ確認された。A地区からB地区北側にかけての耕作地は、水田と畠から構成されるようでありB地区集落との関係が考えられる。B地区南端からC地区北半の耕作地は、水田と断定することが難しいがその可能性は極めて大きい。C地区集落に伴うものではなかろうか。G地区南側の水田は佐堂遺跡側へもかなり広がっており、佐堂遺跡A地

区側の集落と美國遺跡G地区で検出された集落の両者に挟まれた状態で存在している。それぞれの耕作地は、集落に近接して認められた。⁽¹⁾

墓域であるが、美國遺跡の北側に位置する友井東遺跡の南端部から美國遺跡A地区にかけて1箇所存在する。この部分は布留式前半期の墓域と思われ、土器棺墓及び方形周溝墓の可能性があるL字形の溝が検出された。友井東遺跡南端部では方形周溝墓が確認されている。この墓域は友井東遺跡側の集落と美國遺跡B地区集落の間に位置しており、両者に伴うものではなかろうか。あと1箇所の墓域としては、美國古墳が検出されたC地区南端部をあげることができる。美國古墳周辺では遺構が希薄になり、墓域としての意識が強く働いていたと思われる。この古墳は一辺約7mの方墳になると考えられ、極めて小規模であった。しかしながら精巧な家形埴輪2点及び特異な壺形埴輪が25点以上出土しており、規模と埴輪の関係が対照的な古墳と言える。その性格については本書第Ⅶ章第8節で詳しく述べるが、おそらく複数の集落を統轄する在地首長の墓であろう。B、C、G地区の集落、あるいはもう少し広範囲の集落を包括すると思われる。

この時期の本遺跡では、集落、耕作地、墓域の関係が有機的に結びついた姿で検出された。河内平野における布留式の集落景観を知るうえで貴重な資料である。

(3) 古墳時代中期から後期

この時期になると前時期と比較して極端に遺構が減少する。それとは逆に本遺跡北側の友井東遺跡では、この時期の明確な集落が検出された。⁽⁴⁾ 美國遺跡では、わずかの溝、土坑を除いて水田等の耕作地に変化すると思われる。それを物語る資料として、G地区において5世紀末の水田畦畔が確認された。この畦畔は東西方向に走っており、幅約1.5mと大規模である。また美國古墳の削平される時期も6世紀後半以前であり、水田造成等による可能性があるのではなかろうか。B地区南端からC地区北半にかけ広がっていた水田想定地は、古墳時代中期に自然河川がこの部分を流れることによって埋没してしまう。C地区中央部の溝も水田の埋没と共に機能を失い、古墳時代後期には存在しなくなる。(渡辺)

註(1) 三宅正浩編「佐堂(その1)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

(2) 亀島重則編「友井東(その1)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

(3) 調査区内では明確な集落は検出されなかったが、出土遺物等から見て近くに集落が存在する可能性が大きい。北西側に集落があるのではなかろうか。註(2)文献参照。

(4) 註(2)文献参照。

第4項 古代

美國遺跡では、飛鳥時代から平安時代にかけては、主に水田や畑などの耕作地として利用されていたようである。検出された遺構には、条里制に関係するもので坪境の畦畔や溝がある。また水田面には多数の足跡が遺存していた。以下、時代ごとにまとめることにする。

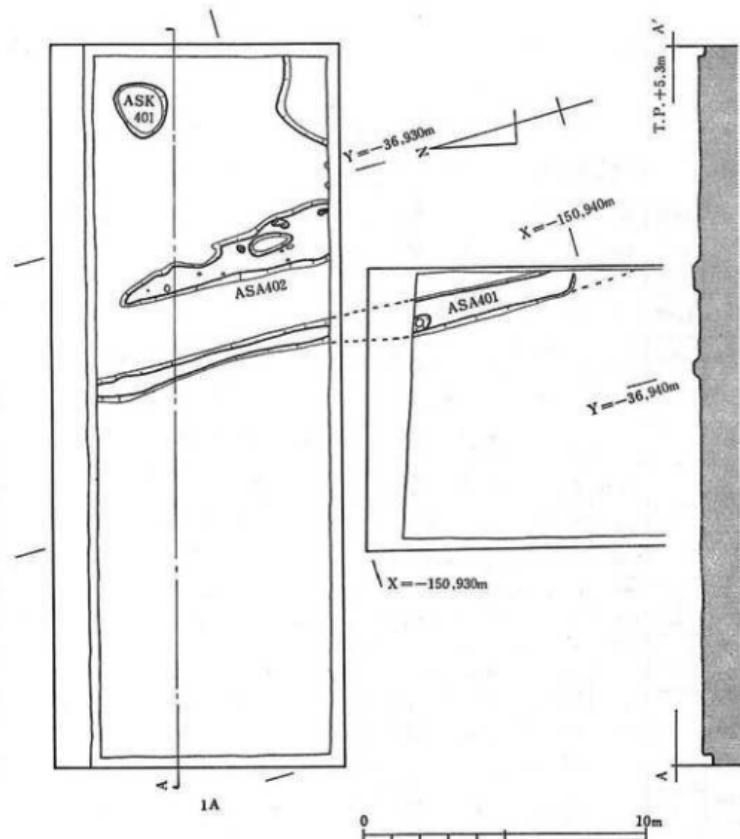
飛鳥時代（第376図、付図14・30）

この時期はA・B地区及びE～G地区の一部でしか検出されなかった。検出した面は、A・B地区では水田及び畑であり、特にA地区では南北方向の畦畔、B地区では東西方向の畦畔が検出されている。共に7世紀後半のもので、これらの畦畔は条里復元した場合、現在の条里に合致することから、最古の条里遺構の1つと考えられる。今後、大化改新等と合わせて条里制の施行起源を再検討する必要があろう。E～G地区では、この時期の長瀬川と思われる自然河川を検出した。この河川の影響で周辺では遺構を検出することはできなかったが、旧大和川の変遷を知る上で重要な資料となろう。（岡本）

第12表 飛鳥時代遺構一覧表

遺構名	種類	位置	方向	規模	備考	図
ASK401	不定円形土坑	1 Aトレ東側		長軸幅2.0m、短軸幅1.7m、深さ0.5m	埋土-黄灰色粘質土(茶褐色粘質土ブロック含)断面-両台形。遺物なし。	376
ASA401	畦畔	1 Aトレ中央部からAトレ東北部	南北	底延幅約6.1～2.2m、頂部幅約3.0m～0.9m、高さ0.3m	盛土-南側黒色粘土、北側暗緑灰色粘土。坪境合致。両端調査区付。断面台形。	376 449
ASA402	畦畔	1 Aトレ中央部東寄 ASA401に平行	南北	南側底延幅2.2m、頂部幅1.8m、高さ0.3m	盛土-暗緑灰色粘土、南側幅広い。頂部に小ビット。南端調査区付。断面台形。	376
BSD401	溝	Bトレ中央部北寄	南北	深さ0.25m	埋土-淡茶灰色微砂質土。	付図14
BSD402	溝	Bトレ中央部北寄	南北	深さ0.2m	埋土-淡茶灰色粘質土。小溝群合致。遺物少。	付図14
BSD403	溝	6 Bトレ東側	南北	幅0.3～0.5m、深さ0.15m、(両端外に統く)	埋土-淡茶灰色粘質土。南側はBSD404に接続の可能性。断面U字形。遺物なし。	付図14
BSD404	溝	Bトレ中央部から5 Bトレ	ほぼ東西	上幅0.7m、下幅0.3～0.4m、深さ0.3m(東端袋状)	埋土-上:淡茶灰色粘質土、下:淡茶灰色微砂質土への導水溝。断面U字形。遺物-杯(B1104)。	付図14 遺物-377
BSD405	落ち込み状跡	7 Bトレ東側	南北	上幅1.8m、下幅1m、深さ0.3m(両端外に統く)	埋土-上:淡茶灰色微砂質土、下:淡茶灰色微砂質土。断面U字形。遺物-土師器(B1105～07)	付図14 遺物-377
小溝群		Bトレ中央部 BSA401北側	南北多い	幅0.2～0.3m 深さ0.1～0.2m	埋土-淡茶灰色粘質土。条里方向にはば合致。両端袋状、壠の底溝の可能性。断面U字形。	付図14
BSA401	畦畔	B地区中央部	東西	底延幅1.2～1.9m、頂部幅0.4～0.7m、高さ0.2m	盛土-褐色混り灰色粘質土。坪境時に合致。断面台形。	付図14-449
BSA402	畦畔	7 Bトレ南側	東西	總延長10m	盛土-暗褐色粘土。	付図14
DSD401	溝	6 Dトレ	南北	幅0.7m、深さ0.06～0.1m		付図30
DSD402	溝	6 Dトレ DSD401に平行	南北	幅1.4～2.2m、深さ0.1～0.2m	埋土-上:淡茶灰色細砂、下:オリーブ灰色シルト。遺物-須恵器(D315～317)、土師器(D318)。	付図30 遺物-378
FNR401	自然河川	8 Dトレ南端からGトレ北端	南北	幅70m、深さ2.5m (最高深部3.5m)	埋土-砂、粗砂。E南端川底に足跡。砂層上面に土砂。川底変化大。遺物-甕生、須恵器多數。	380～382 付図234
GSE401	井戸	2 G中央部		直径1.5m 深さ0.9m	埋土-上:黄緑灰色粘質微砂、下:暗青灰色粘土。平面ほぼ円形。	D～G地区 付図30
GSE402	井戸	GSE401の南		長径0.9m、短径0.7m 深さ0.64m	埋土-上層より暗褐灰色粘質微砂、黒灰色粘質砂。暗青灰色粘質砂。平面梢円形。	*
DSA401	杭列	7 Dトレ	南北	直径3～4cm	遺存状態悪い。	*

(小野・岡本)



第376図 A地区北側飛鳥時代遺構面実測図

第13表 飛鳥時代遺物一覧表

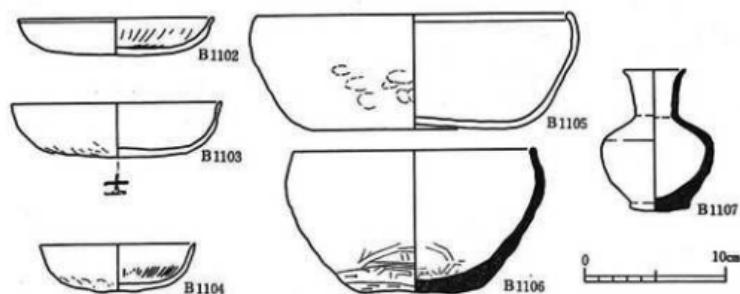
遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・図版
B1102	土師器	皿	口縁端部を丸くおさめ、外面はナデ、内面は暗文状のヘラ削きを2段に施す。7C第4半期。	包含層	377
B1103	*	杯	口縁端部を丸くおさめ、内外面ナデ、底部外面にヘラ削り。底部外面には「字」の墨書きが認められる。7C第4半期。	*	* 223
B1104	*	*	口縁端部を尖り気味。体部外面ナデ、内面には暗文。底部外面に指頭圧痕。7C第4半期。	BSD404	* *
B1105	*	鉢	体部内窓立ち上り、口縁端部を丸く肥厚。底部上底気味。内外面ナデ。体部外面の一部に指圧痕。底部外面へラ削り。7C第4半期。	BSD405	* *
B1106	須恵器	鉄鉢	体部内窓立ち上り、口縁端部を丸くおさめる。底部平底。体部中上位の内外面は圓転ナデ。体部下位から底部へラ削り。秋實。7C第4半期。	*	* *
B1107	*	小型 長頸壺	肩部張り、口縁端部少し外反し丸い。底部肥厚し平底気味。口縁部内外面・体部外面上位圓転ナデ。体部下面下位圓転ヘラ削り。底部へラ削り。7C第4半期。	*	* *

(図本)

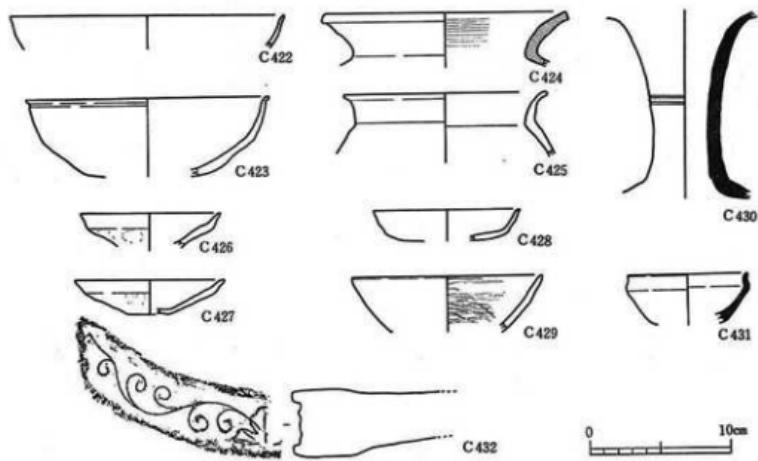
第13表 飛鳥時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・図版
C422	土師器	杯	口縁端部の内側に緩やかな面をもつ。内外面ともナデ調整。胎土緻密で明褐色。	包含層	378-226
C423	*	*	口縁端部を外へつまみだす。外面はナデが施され、体部下方に指おき痕。やや深めの杯。胎土緻密で明褐色。	*	*
C424	*	瓈ないし羽釜	口縁部強く外反し、頭部から肩部は張るように聞く。外面は横方向のナデ。口縁部内面は横方向の刷毛目。胎土は生卵黄褐色。	包含層	*
D315	須恵器	杯蓋	扁平なつまみを持ち、内面のかえりは縁部を肥厚させて形成。回転ヘラ削り、回転ナデ調整。胎土・焼成とも良好。	DSD402	379-232
D316	*	杯身	回転ヘラ削り、回転ナデ調整。胎土・焼成とも良好。	*	*
D317	*	*	*	*	*
D318	土師器	皿	やや丸味をもつ底部。外反する口縁部。口縁端部は丸味を持ち内面に一束の沈線。内外面横ナデ。内面へラ磨き。胎土緻密。焼成良好。赤褐色。	*	*
F326	須恵器	杯蓋	天井部平坦気味で口縁部との境に短く鋸い棱を持つ。端部肥厚し、端面に浅い凹線が強る。天井部は左方向の回転ヘラ削り、内面に回転ナデ。	FNR401	381
F328-331	*	*	天井部が丸味を持つ。天井部外面は回転ヘラ削りの後、回転ナデ。F328-331は口縁端部が肥厚。	*	234
F333	*	*	宝珠つまみと棱のやや鋸いかえりを持つ。器壁は厚く内外面横ナデ。表面には自然釉付着。	*	*
E334 348	*	杯身	受け部の形態は、F335は端部が垂直ぎみに立ち上り、F338は内傾し、F344は立ち上がりが無い。底部回転ヘラ削りの後、回転ナデ。	*	234
F349	*	短頭瓶	体部中位に最大径をもち、二条の沈線が走る。口縁部は緩やかに外反。底部外面は素調整。完形品。	*	235
F350	*	皿	体部のみが遺存。内外面回転ナデ。	*	234
F351	*	平盤	口縁部が変形。底部左方向の回転ヘラ削り。	*	233
F356	土師器	長頭瓶	口縁の端部欠損。底部平底。体部は扁平。全体に鉄分付着し、調査不明。	*	234
F384	*	甕	体部のタキ目はハケ目によって消されている。古式土師器。	*	382
E381	*	*	体部にヘラ記号が施される。	*	*
F391	*	*	外面は横ハケの後に緩ハケ目。内面に指圧痕。頭部に横方向のハケ目。	*	233
F378	*	高杯	外面へラ磨き。内面ナデ。古式土師器。	*	*
F380	*	*	筒形の脚部に短い棱が付く。内外面ヘラナデ。円盤充填法が用いられる等弥生中期から後期の可能性。	*	*
F359 F373	*	*	浅い杯身に指圧痕やしばり目を残す手づくねの高杯。F368は小型。	*	233 235
E374 E379	*	*	丁寧なヘラナデ。	*	*
F420	*	*	内面にヘラ磨き。	*	380
F364	*	器台	杯部内外面横ナデ。杯部と脚部との接合部からヘラナデ。	*	382
F393 401	*	皿	F393-398・401は内外面横ナデ主体。F393は底部四ませ、F394-401は丸味持つ。F399-400はハケ、へラ磨き。口径10cm。胎土精良。	*	380-235
F402-406 407	*	椀	内外面へラ磨き。口径13cm前後。F406等は口縁端部を短く外反させる。	*	*
F416 419	*	*	内外面へラ磨き。口径13cm前後。F417は螺旋状ヘラ磨き。	*	*
F409 E415	*	*	F412は端部内面に一束の沈線。F413等は右上りの略文の後に左下りの略文。口径17cm前後。胎土精良。薄い緑色。	*	*
F408	*	鉢	突出した平底を持つ。底に深い凹。外面指圧、内面へラナデ。胎土に長石粒多い。内面に煤付着し、黒褐色。	*	*
E357	*	片口鉢	外面丁寧な横ナデ。内面へラ削りの後丁寧なナデ。	*	381-233
F355	*	鉢	小型のもの。F358も同類。	*	*

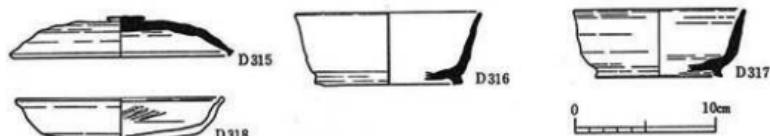
尚 F N R 401出土土器は E、F 地区にまたがっているので、地区を無視して番号で照合されたい。(波辺・小野)



第377図 B地区飛鳥時代包含層及び造構面出土土器



第378図 C地区飛鳥～平安時代包含層出土遺物

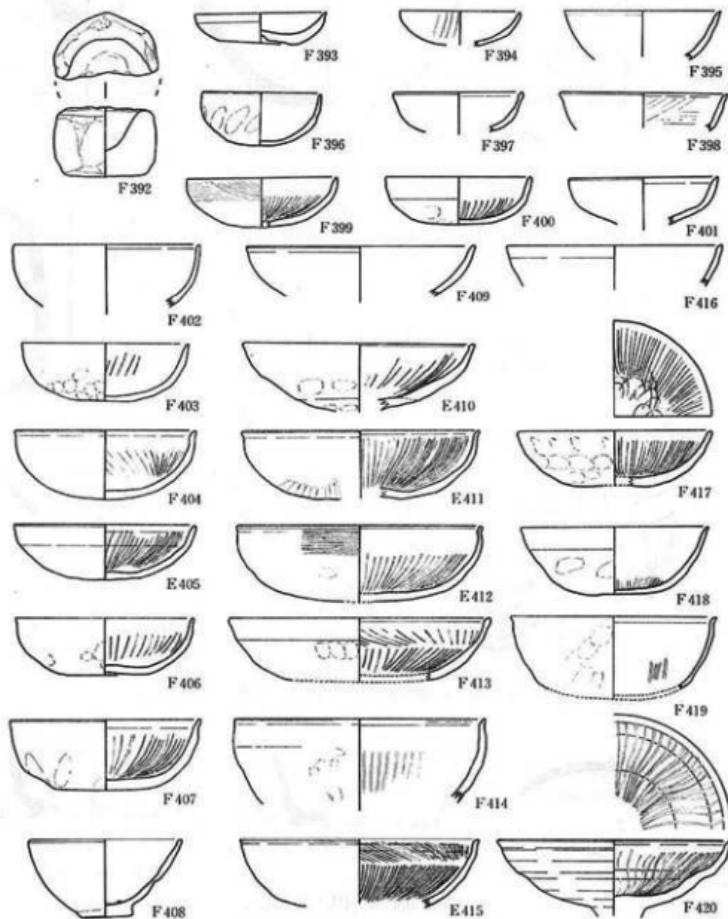


第379図 DSD402出土土器

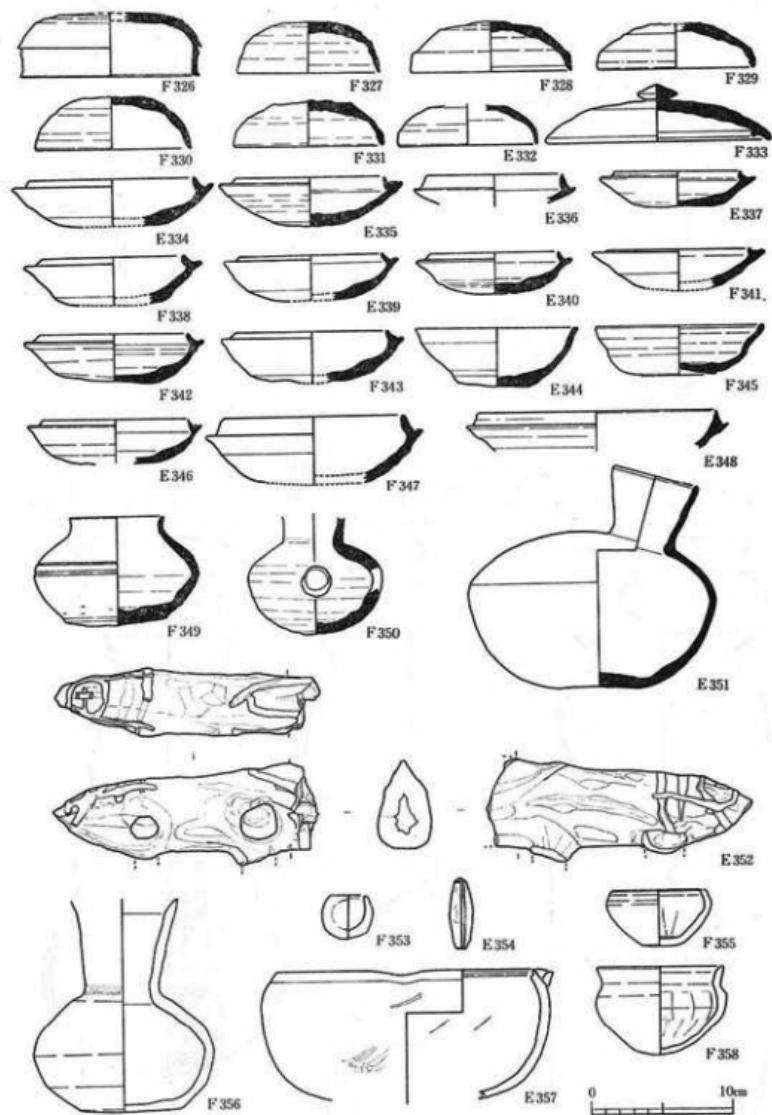
第13表 飛鳥時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態 - 調整	出土地点	図・図版
E 352	土製品	土馬	内部中空になることから、粘土帶を大きく丸め指圧で成形し体部を作る。脚部は体部に穿った穴に差し込む。粘土縁で輪表現。焼成良好。赤褐色。	FNR401	381-233
F 353	*	土器	鉢形模倣。内外面ともナデ。胎土・焼成良好。	*	*
E 354	*	土器	器面に螺旋状の粘土縁痕。胎土石英粒少し含み精良。焼成良好。灰白色。長さ5.1cm。最大径1.7cm。重さ11.5g。	*	*
F 392	石製品		砂岩質の材質で鉢形呈す。内面丸くえぐる。外面はカットされた面を持ち、六角形を呈するものと考える。内面使用痕なし。復元口径5.5cm。器高5cm。	*	382

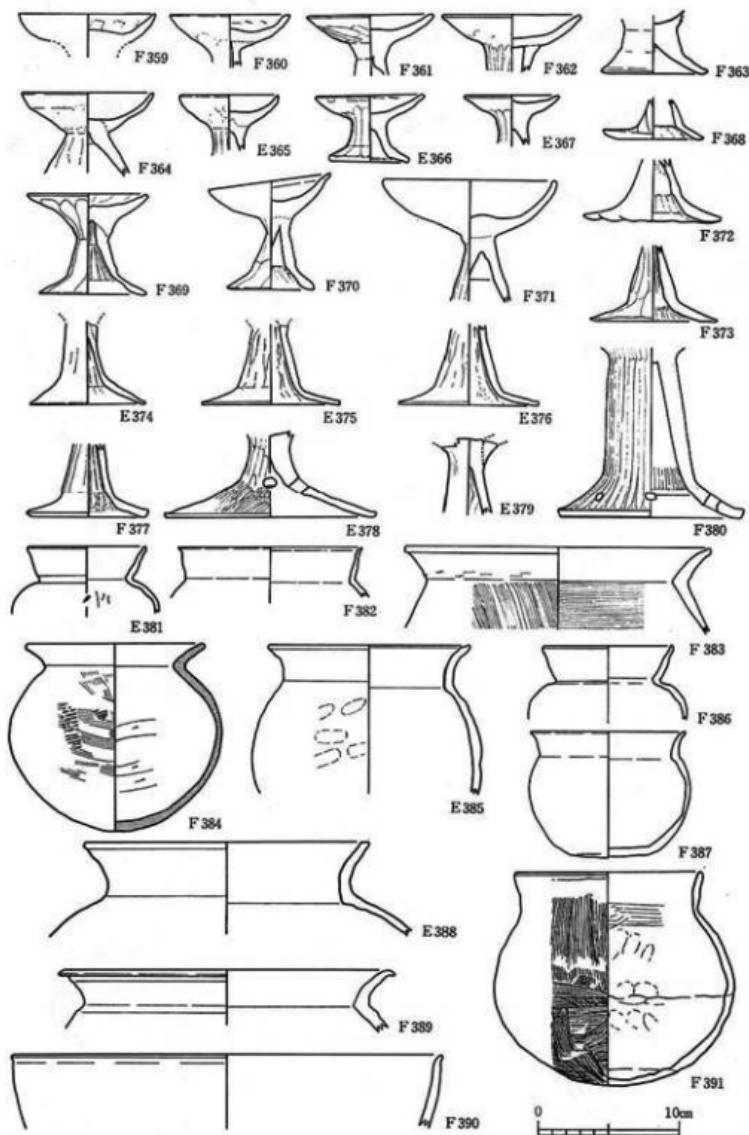
(小野)



第380図 F N R 401出土遺物



第381図 FN R 401出土遺物



第382図 FN R 401出土遺物

奈良時代（付図7・15）

各地区とも奈良時代单一の遺構面は検出されていない。平安時代以降の遺構面と重複し、かなり削平されているよう、明確に遺構が検出されたものは少ない。しかし、遺構の在り方から大半が水田面であったことは確実のようである。

第14表 奈良時代遺構一覧表

遺構名	種類	位置	方向	規模	備考
BSK401	不定形土坑	Bトレ中央部北東		長軸幅3.5m、短軸幅2.5m、深さ0.15m	埋土-茶褐色鐵砂質土。底部に長さ1.7m、幅0.2m、深さ5cmの流状穴。遺物-須恵器、土器、奈良時代末。
BSK402	土坑	Bトレ中央部	ほぼ南北	長軸幅2.2m、短軸幅1.3m、深さ0.7m	埋土-淡黃灰色粘質土(暗褐色粘土が斑点状に入る)。ほぼ垂直に掘る。遺物-奈良時代須恵器。
BSK407	不定形土坑	Bトレ中央部		長軸幅3.0m、短軸幅2.6m、深さ0.1m	埋土-茶褐色粘土。BSD414と重複するが古い。断面直壁。遺物-奈良時代須恵器。
BSK408	不定形土坑	Bトレ中央部		長軸幅2.2m、短軸幅1.1m、深さ0.6m	埋土-淡黃灰色粘質土(暗褐色粘土が斑点状に入る)。ほぼ垂直に掘る。遺物-奈良時代須恵器。
BSK409	隅丸長方形土坑	Bトレ中央部 BSK408の南	ほぼ南北	長軸幅2.3m、短軸幅1.1m、深さ0.7m	埋土-BSK402、408と同じで同時期の可能性。BSK410と重複するが新しい。ほぼ垂直に掘る。遺物なし。
BSK410	長方形土坑	Bトレ中央部 BSK409の南	ほぼ南北	長軸幅2.3m、短軸幅1.0m、深さ0.7m	埋土-BSK402、408、409と同じで同時期の可能性。ほぼ垂直に掘る。遺物なし。

(岡本)

第15表 奈良時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・版面
C430	須恵器	長頭器	口縁部破片。8世紀前半。	包含層	378-226
C452	*	杯	8世紀後半。	CSD501	385-227
C468	*	杯蓋	*	*	225
C469	*	不明	底部破片。おそらく獸足がつく。8世紀。	*	*
C471	土師器	鍋把手?	外面横方向のナデ。内面縦方向のハラ削り。胎土緻密。明褐色。	*	*
C472	*	高杯 脚柱部	破片。7面の面取り。摩滅激しい。8世紀後半の新しい時期。	*	*

(波辺)

平安時代（付図7・15）

奈良時代以降の遺構面と重複しているところが多い。大半が水田面で、条里遺構が、頗著に残る。特にA・B地区では、飛鳥時代の坪境畦畔の上層、ほぼ同一地点で同様の坪境畦畔や溝が検出されているのに注目されよう。しかし、これら整然とした条里遺構もE地区より南側では、長瀬川の影響の為か条里方向はかなり乱れており、検出した遺構の方向もまちまちであった。また、B地区中央部では、耕作面とは異なり掘立柱建物や溝、土坑などの居住区的な生活面を検出している。これは、集落というよりも水田と水田の間に存在する散発的な住居地と考えられる。

第16表 平安時代遺構一覧表

遺構名	種類	位 置	方 向	規 模	備 考	図
ASA403	大畦畔	1 Aトレ中央部、やや東寄り	南北	底辺幅2.1~2.3m、頂部幅1.7~1.9m、高さ0.2m 断面台形。	盛土-明褐色粘質土。中央部は意図的に切られ水口の可能性。2度の造り直し痕。奈良時代より難縫。ASA401と同位置。坪境合致。	付図7
ASA404	畦畔	Aトレ	南北	底辺幅1.6~2.3m、頂部幅1.3~2.0m、高さ0.1m	盛土-紫褐色粘土。断面台形。	付図7
小溝群		1 Aトレ	南北 多い	幅0.2~0.3m、深さ0.1m (端部剥離)	埋土-淡褐色粘質土。中世素掘り溝に類似する。条里方向に合致。断面U字形。	付図7
足跡群		Aトレ			埋土-砂。全面に人・牛の足跡多数。	付図7
BSB401	建物	Bトレ中央部	東西	幅4.5~4.9m、奥行3.3m、面積15.5m ² 、2間×3間	南北主軸方向N~S~W。柱穴間0.7~1.7m。面積0.25~0.3の円形。削除の可能性。遺物-土師器類。	付図15

(岡本)

第16表 平安時代遺構一覧表

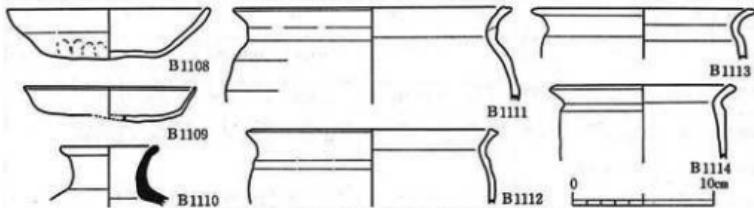
遺構名	種類	位置	方向	規 模	備 考	図
BSD406 411	小溝	B地区北側	南北 ^{406 410 東西411}	幅0.2~0.5m、深さ0.1m前後。断面U字形。	埋土-淡灰色粘質土。中後者掘り溝に類似。条里方向に合致。遺物-土師器細片。	付図15
BSD412	溝	Bトレ中央部北寄り	東西	幅0.3m、深さ0.15m、延長3.7m。(西端貴状)	埋土-暗褐色粘質土。東側調査区外に続く。遺物なし。断面U字形。	*
BSD413	溝	Bトレ中央部	南北	幅0.3~0.5m、深さ0.2m、延長8.2m。(西端貴状)	埋土-茶褐色粘質土。溝の位置、方向からBSB401と関係の可能性。遺物なし。断面U字形。	*
BSD414	溝	Bトレ中央部	南北	幅0.2m、深さ0.1m、延長7.2m。(西端貴状)	埋土-灰色粘質土。BSK408と重複するが新しい。遺物なし。断面U字形。	*
BSD415	溝	5Bトレ	東西	幅0.2m、深さ0.1m、延長5.8m。(西端貴状)	埋土-暗褐色粘質土。遺物なし。断面U字形。	*
BSD416	溝	5Bトレ	東西	最大幅0.6m、深さ0.2m。	埋土-暗褐色粘質土。東端幅広で貴状。断面逆台形。遺物-土師器細片。	*
BSD417	溝	6Bトレ南西側	南北	幅0.4m、深さ0.1m(蛇行)	埋土-茶褐色粘質土。遺物なし。断面U字形。	*
BSD418	溝	Bトレ中央部西寄り	南北	幅0.4m、深さ0.15m、延長4.3m。(西端貴状)	埋土-茶褐色粘質土。BSD419と重複するが新しい。断面U字形。遺物-土師器(B1112)。	付図15 遺物-383
BSD419	溝	Bトレ中央部西寄り	東西	幅0.4m、深さ0.1m、東端貴状。西端調査区外。	埋土-茶褐色粘質土。BSD418と重複するが古い。遺物なし。断面U字形。	付図15
BSD420	落ち込み状溝	Bトレ中北部西寄り。BSD418の西		深さ0.2m、大半は調査区外。	埋土-黄褐色粘質土。遺物-土師器(B1113-1114)。	付図15 遺物-383
BSD421	落ち込み状溝	Bトレ南側	東西	幅7~8m、深さ0.2~0.25m。	埋土-黄灰色砂。両端調査区外。遺物なし。	付図15
BSD426 427	溝	Bトレ南側	南北	幅0.2m、深さ0.1m前後。	埋土-暗茶褐色砂質土。中後者掘り溝に類似。条里方向に合致。遺物なし。断面U字形。	*
BSK403	円形土坑	Bトレ中央部-6Bトレ東北寄り		直径3.5~4.0m、深さ0.6m。	埋土-暗茶褐色砂質土(茶褐色粘質土斑点状合)ほぼ垂直に掘る。遺物-鉢(B1110)、土(1111)。	付図15 遺物-383
BSK404 405	不定形土坑	6Bトレ		深さ0.4m前後。	埋土-淡茶灰色砂質土(茶褐色粘質土斑点状)BSK403と同時期可能性。遺物なし。	付図15
BSK411	不定形土坑	Bトレ中央部南		深さ0.2m。	埋土-黄灰色粘質土。遺物なし。	*
BSK412	方形土坑	9Bトレ		長軸幅2.8m、短軸幅2.3m、深さ0.4m。	埋土-黄茶色砂質土。ほぼ垂直に掘る。遺物なし。	*
BSK413	落ち込み状土坑	Bトレ南端		深さ0.25m、南側は調査区外。	埋土-茶褐色粘質土。遺物なし。	*
BNR401	自然河川	4Bトレ西側	南北	深さ0.42m。	埋土-赤・茶・黒の褐色系砂が3層。東側河部のみ検出。CSD501と同一可能性。遺物なし。	*
BSA403	畦畔	Bトレ南側	東西	底邊幅0.8~1.7m、頂部幅0.5~1.1m、高さ0.2m。	3度の造り直し痕。西側調査区外。東側自然消滅。	*
水田		B地区北・南側			全面に人・牛の足跡多数。畦畔BSA403。	*
DSD403	溝	2Dトレ中央部		幅5m、深さ0.25~0.3m。	蛇行する。	付図31
DSD404	溝	D地区北端 DSA402に平行	東西	幅7~7.5m、深さ0.4m、1Dトレでやや北東に限る。	埋土-砂。底でDSA402に続く足跡。周辺に落ち込み、小穴、足跡。遺物-骨生、須恵、土師。	*
DSD405	溝	Dトレ DSA403の北端	南北	幅0.8m、深さ0.1m。	埋土-上: 淡黃灰色細砂、下: 灰色粘土。北西端に不整形な深い落込み。	*
DSD406	(流路)	DSA403の南側	南北	幅0.7m、深さ0.3m。	埋土-淡黃褐色細砂、青灰色粘質土。	*
ESD407	溝(流路)	Eトレ	南北	幅3m、浅い。	埋土-淡褐色土。	*
GSD408	溝	G地区北西部 GSA404の南側	東南北 西北西	幅0.65~0.9m、深さ0.2m。	埋土-黄褐色砂礫。周囲、底、肩部にGSA404からの足跡。南側5m付近で東西方向に群集。	*
DSA402	畦畔	DSA404に平行	東西	底邊幅1.7~3.5m、高さ0.2m。	上面に足跡。本畦畔より南へ伸びる南北の畦畔あり、途切れる所にも足跡。	*
DSA403	畦畔	DSA405-406に平行	南北 東西	底邊幅0.8~1.8m、高さ0.2m。	上面に足跡多い。	*
GSA404	畦畔	GSD408に接する。	東西 西北西	底邊幅0.5~1.3m、高さ0.1m。	上面(東西)からGSD408に足跡。	*

(小野・岡本)

第17表 平安時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・図版
B1108	土師器	杯	口縁端部丸い。体部上位から口縁部横ナデ。体部下位から底部に指頭圧痕。口径14.3cm。器高3.5cm。	包含層	383
B1109	*	皿	口縁端部がわざかに肥厚し立ち上る。内外面ナデ。底部外面に指頭圧痕。口径12.3cm。	*	*
B1112	*	甕	口縁部外反。端部肥厚し面取りするが、わずかに凹面をもつ。体部網張り。口縁部内外面横ナデ。体部内外面ヘラ削り。復元口径16.8cm。9世紀。	BSD418	*
B1113	*	*	口縁部は外反し、端部はナデによる平坦面。肩部ヘラ削りによる段。口縁部内面横ナデ。体部内外面ヘラ削り。復元口径15cm。	BSD420	*
B1114	*	*	口縁部外反し、端部はナデによる面取り。頸部と体部の境は角度をもち、体部はぼ素直。口縁部内外面横ナデ。体部内外面ヘラ削り。復元口径12.3cm。	*	*
B1110	須恵器	盃	口縁部破片。口縁部外反。端部は肥厚し丸い。内外面回転ナデ。復元口径6.8cm。9世紀代。	BSK403	*
B1111	土師器	甕	口縁部外反。端部外方に肥厚し平坦面をもつ。体部は丸味をもつ網張り。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。復元口径19.7cm。9世紀代。	*	*
C431	須恵器	小形碗	類別少なく、時期の点で問題が残る。	包含層	378-226
C453	*	瓶子	体部破片。C470も同種(包含層出土)。	CSD501	385-227
C429-461	黒色土器	椀	A類の体部破片。他にB類の底部破片(C475)も出土している。共に10世紀後半相当する。	C40-C500W C49-522W	378-226 385-227
C428-459-460	土師器	小皿	ほとんどが10世紀後半以前のもの。 他に「て」字状口縁をもつC460がある。	C49-522W C49-40-C500W	378-226 385-227
C426-427-454-458	*	杯	分類の点で小皿に含まれるものであるが器形・調整の共通点より杯に分類。口縁部横方向のナデ。体部外面に指頭圧痕。平安時代後半期。C427も同種。	C49-47-522W C49-58-C500W	378-226 385-227
C425	*	甕	口縁部直立ぎみに外反。端部丸味もつ。外面は横ナデ。体部指頭圧痕。口縁部内面横ナデ。体部ヘラ削りの後ナデ。平安時代前半期。	包含層	378-226
C462	*	*	口縁部外反。体部下平欠損するも球形の可能性。口縁部内外面横ナデ。体部外面指おさえ後、荒い横方向のヘラ磨き。体部内面ナデ。10世紀後半以前。	CSD501	385-227
C473-474	*	羽釜	共に鉢部分の破片。胎土は生駒西麓産。 C473が平安時代前半期、C474が後半期。	C473-C500W C49-522W	225
C481	*	高台付皿	9世紀から10世紀のもので、10世紀に相当するものが多い。	包含層	230
C432	瓦	軒平瓦	均整唐草文。半分残存。平安時代後期。周辺寺院で使用された可能性あり。	包含層	378-225

(波辺・岡本)



第383図 B地区奈良~平安時代遺構面出土土器

以上のように美濃遺跡では、飛鳥時代から平安時代にかけては、散発的に遺構は検出されているが、大半が水田等の耕作地であった。遺構では、条里遺構にみるべきものがあり、今後条里施行の時期を考える上で重要な資料となろう。また、飛鳥時代以降の坪境の変遷を層位的に知ることができたことは特筆すべきことである。ところで、この時期の集落は調査した範囲では確認することはできなかったが、東側に位置する萱振遺跡で奈良時代の建物や井戸が検出されており、(3)また、平安時代には南東方向に位置する穴太神社周辺が集落の中心であったことがわかる。今後(4)

さらに周辺の遺跡との関係をも考え合わせて、この時期の美園遺跡の在り方を検討する必要がある。(岡本)

註(1) 北接する友井東遺跡や山賀遺跡で奈良時代と考えられる坪境の溝が検出されている。

亀島重則編「友井東」(その1)大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年。

森井貞雄編「山 賀」(その2) " " 1983年。

(2) 地形図から朱里復元した場合でもこの周辺がかなり乱れていることがわかる。

(3) 大阪府教育委員会「萱振遺跡現地説明会資料」1983年。

(4) 八尾市教育委員会調査。

第5項 中世

1. 錬金時代 (付図8・16・20・32)

鍊金時代遺構としては、A・C地区に於て畦畔と水田面の遺構が、D地区からE地区にかけて曲げ物井戸、畦畔遺構、樋跡と思われる杭列が、F・G地区では堀掘り井戸と思われる土坑や、土器が集積していた土坑等を検出することができた。遺物の出土量もC地区からG地区にかけて多く、特にF・G地区が多い。南に隣接する佐堂遺跡では、建物跡・羽釜井戸・溝等の多くの遺構が確認されており、本遺跡の鍊金時代にあっては、佐堂遺跡(その1)の集落に含まれ、F・G地区はその北限にあたり、A～D地区北半部は水田ないし畑作の耕作地として利用されていたようである。この事が平安時代に於てもまた同様で、A～G地区は水田面、集落自身は佐堂遺跡にあったようである。

周辺には同時期の遺跡として他に、弥刀遺跡や宮町遺跡(穴太神社)があり、とくに宮町遺跡では遺構としては礎石や瓦留が確認され、また出土遺物として、瓦等が多く出土しており、寺院跡と推定されている。本遺跡のF地区から出土している軒平瓦と同種のものもあるので、宮町遺跡と美園遺跡や佐堂遺跡と何らかの形で関係があるものと推察される。(小野)

第18表 錬金時代 遺構一覧表

遺構名	種類	位位置	方向	規模	備考	図
堀掘り溝		Bトレ中央及び北側	東西及び南北	幅0.2m、深さ0.1m、断面U字形。	埋土-淡灰色土色。朱里方向に合致。元は全面にあった可能性。BSD501以南は東西、北は南北。	付図16 遺物-384
BSD501	溝	Bトレ中央部南寄り	東西	上幅1.1～1.8m、下幅0.8～1.4m、深さ0.25m。	埋土-暗茶褐色微砂質土。BSD421上面に位置し、坪規溝と合致。遺物なし。断面逆台形。	付図16
BSD503	溝	Bトレ南端中央部	東西	幅5.3m、深さ0.2m。	埋土-淡灰色微砂質土。朱里方向に合致。播上田と播上田の谷部分の可能性。遺物-瓦器・土師。	*
足跡群		Bトレ中央南部			牛の足跡群。	*
CSX501	島状高まり	1Cトレ東側	北東 南北	長さ約6m、幅2.5m、高さ0.3m。南へ伸びる。	周辺に足跡多數。南東部は後後に削平。上部平坦。遺物なし。同時代前期。	付図101
CS0501	坪境に沿う大溝	2Cから9CトレDトレ	-南北 -東西	幅約9m、深さ約1.25m。	埋土-茶灰色シルト、褐色粗砂。朱里坪境交点で南北から東西へ曲る可能性。長瀬川からの灌漑用水路。佐堂Aトレ北側溝と同一の可能性大。遺物は6世紀後半から13世紀後半を含む。	付図101-102 遺物-385 付図-228
CS0503	溝	Cトレ19～20区	東西	幅約0.8m。	朱里坪境部分を走る。途中で切れているが、本来は続くもの。	
CS0504 507 CS0518	溝	Cトレ中央部から9Cトレ	南北	幅約1m前後。	CS0501の埋没途中のもので小規模化。朱里坪境にあり朱里地割り存在。東側足跡存在より東側は水田、西側は水田、西側島になる可能性。鍊金後半期。	付図103 付図220
CSK502	土坑	Cトレ29区	南北	長軸約1.2、短軸約0.9m、深さ0.38m。	畠地等に掘り込まれた耕作用土坑。遺物-土器細片。	

(渡辺・岡本)

第18表 錦倉時代遺構一覧表

遺構名	種類	位 置	方 向	規 模	備 考	図
CSK503	隅丸長方形土坑	Cトレ46区	南北	長辺約2.3m、短辺約1.6m、深さ0.3m。	耕作用に設けられた水溜め等の可能性。遺物少量。	図版-103
CSK504	長方形土坑	Cトレ47・48区	東西	長辺約3.8m、短辺約2m、深さ0.8m。	Bトレでも検出された畠地に付随する施設。遺物-14世紀前半土器。	図版-103
DSD501 506	溝	4Dトレ北端 DSA501の南側	ほぼ東西	501-幅1.2~1.3m、深さ0.2m, 506-幅0.8~1m、深さ0.1m。	501埋土-暗緑灰色シルト、暗灰色粘土。漆桶(D-541)回収275件出土。歯骨も出土。遺物-土師器・須恵器・瓦器。	
DSD502	溝	Dトレ南部から8D北端		幅0.8m, 深さ0.1m。 8Dで二条に分岐。	埋土-明褐色微砂、灰色粘土微砂、中央部で深さ0.1~0.3mの落ち込みあり。遺物-土師器・須恵器・瓦器。	
DSD503 507	溝	Dトレ南端, 507は南で503と接す。		幅0.2~0.7m, 深さ0.1m。	瓦器碗はDSD507から出土(D531-532-536)。ゆるやかに蛇行。	遺物-390
ESD504	溝	Eトレ北端部1東端	北東-西北	幅1.5m、深さ0.1m。	埋土-褐灰色土。	
FSD505	溝	1Eトレ、Fトレ、2Fトレ 北東-南北、東西		幅約4.4m、深さ0.1~0.4m。	埋土-暗緑灰色シルト。所々に不整な落ちあり。遺物-土師器・須恵器・白磁。	
FSK501	土坑	Fトレ北端		円形、推定径3~4m、深さ0.3m。	炭が厚く堆積し、焼けた竹・木片・燒土塊(径2~10cm)、瓦器、土師器を多量に検出。土坑底部・壁面では焼瓶を検出できず。	386 387 388 DSE-236
FSK502	土坑	2Fトレ		ほぼ円形。径約5.1m、深さ0.55m。	埋土-上層暗灰色シルト、下層青灰色粘土と淡青灰色シルトの互層。軒平瓦出土。	
GSK503	土坑	2Gトレ中央部		不整な楕円形。長径2.1m、短径1.6m、深さ0.3m。	埋土-暗褐色シルト・青灰色土。井戸と考えられるが曲げ物なし。遺物-瓦器破片。	
DSE501	井戸	4Dトレ		掘り方径約0.9m、井筒径0.8m。	残存状態悪い。一部DSD501を切る。掘り方底で井筒の痕跡を認める。	
DSE502	井戸	8Dトレ南端		不整な楕円形。長径1.1m、短径0.9m(推定)、深さ0.42m。	掘り方内に径40cm、深さ40cmの3~4段の曲げ物を井戸幹とし、西側に径4cm、長さ40cmの竹をさし、東側に約10×30cmの板を3~4枚立てて。	
ESE503	井戸	水路部2北東		ほぼ円形。径約1.2m、深さ約0.5m。	掘り方内に径37cm、深さ42cmの3段の曲げ物を井戸幹とし、西側に径4cm、長さ40cmの竹をさし、東側に約10×30cmの板を3~4枚立てて。	
GSE504	井戸	Gトレ北東隅		不整な円形。径約1.2×1.4m、深さ0.2m。	掘り方内に幅0.6×0.6mをとどめるのみ。502-503-504は下層・粟島時代自然河川直上に位置。	
DSA501	畦畔	D・4Dトレ	東西	幅約0.1~1.3m、溝底からの高さ約0.7m。	畦畔上に杭や足跡検出。両側にDSD501とDSD506が接する。	
DSA502	杭列	7Dトレ		杭(痕跡も含めて)33本。	杭間規則だが南側で頗著。杭径2~4cm。DSD503の南側に平行。	
GSA606	ピット群	Gトレ北側	ほぼ東西		ほぼ一直線に並び径約12~24cm、深さ2~10cm。	
GSA607	ピット群	Gトレ北側	南北-南北		ほぼ一直線に並び径約20cm、深さ約15cm。	
GP501	ピット及び小穴	2Gトレ GSK504より南西		不整な方形。1×0.9m、深さ8cm。小穴は円形で径0.2m、深さ0.25m。	柱根もしくは杭がみられ、杭は径5cm、残存長0.5m。遺物-瓦器細片。	
素掘り溝 (唐跡跡)		1Gトレ	南北及び東西	幅0.2~0.4m、深さ3~5cm。	数条の状態のよい農耕具(唐跡)の痕跡(半月状)を一定の間隔で検出。	

(波辺・小野)

第19表 錦倉時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・図版
B1112	瓦器	小瓶	内面ヘラ磨き、外表面部に指頭压痕。復元口径8cm、器高1.3cm。	5B下層断面	384
B1115	唐鉢	圓光進宝		BSA501土盛	+
C433	土師器	皿	12世紀から13世紀にかけてのもので、13世紀が最も多い。434も同種。	包含層	+-225
C435	*	小皿	*	436・437も同種。	*
C480	*	羽釜	*	482も同種。	230
C438	瓦器	小皿	ほとんどは13世紀後半。	439・440も同種。	384-228
C441	*	椀	*	442・443も同種。	*

(波辺・岡本)

第19表 錄 収 時 代 遺 物 一 覧 表

遺物番号	種類	器種	形態・測定	出土地点	図・図版
C446	石器	砥石	錐状の小形品。側面部に特徴的な捺状底面。刀子等の研削用か? 現存長7.85cm、現存幅4.29cm、厚さ1.78mm、重さ79.4g。雲母片岩製。	包含層	246
C447	*	*	下端欠損。錐形面・表面・側面。表面は多少の凹凸有り。側面は齊一な面から、主とした錐形面と考える。現存長6.68cm、現存幅4.13cm、厚さ1.74cm、重さ136.9g。流紋岩製。	*	*
C448 449	*	*	C448は細長板状砥石。表面と側面が錐形面。現存長13.27cm、現存幅4.13cm、厚さ1.74cm、重さ136.9g。粘板岩製。C449は一部残る扁平砥石。浅い溝状凹み。現存長9.02cm、現存幅3.04cm、厚さ3.02cm、重さ90.9g。粗い砂岩製。	表採品	*
C463 464	瓦器	椀	C463は13世紀前半、C464は13世紀後半。C464の見込み部分に環状の膨らみがあり、暗文をその上に施す(製作時の痕跡)。	CSD501	385-229
C465	*	小皿	13世紀後半。	*	***
C444	*	椀	14世紀前半。C445も同類。	録収時代 後半吉備	384-228
C478	白磁	碗	南北形の楕円省窓になるとと思われ、13-14世紀に相当。 476・477も白磁。(西山要一氏の碑教示による。)	*	230
D509 510	須恵器	臺	貼付高台を持ち、体部中位まで左回り回転ヘラ削りを施す。 D510は裏面に回転ナデを加える。	録収時代 造構面	390
G524	*	甕	口縁部内外面回転ナデ。体部外面はタタキの後構ナデ。内面タタキ。	*	238
D508	*	杯	貼付高台。底部外面回転ヘラ削り後横ナデ。	*	*
D521	*	台付甕	貼付高台を持ち横ナデ。	*	*
D511 512-518	土師器	杯	D513・514は内面に沈線。D514は暗文。 D517の外縁ヘラ削き。	*	*
D512	*	碗	小型。内面に暗文。520・523も同種。	*	*
D522	*	甕	口縁部短く外反。胎土、焼成とも良好。	*	*
D519	*	甕	端部を丸くおきめた口縁部に丸い鉢部を持つ。胎土、焼成とも良。	*	*
D507	青磁	碗	色調・明緑灰色。	*	390
D526	土師器	*	底部外面ヘラ削り、その他横ナデ。胎土、焼成良好。灰褐色。	*	*
D525	*	皿	内外面横ナデ。胎土、焼成良好。淡灰白色。	*	*
G501 502	瓦器	碗	深みがあり器壁が厚い。口径15~19cm、高さ5~6cm。 495~497も同種。	中世造構面	389
G499	*	*	粗雑なつくり。やや粗いヘラ磨き。高台形態化。500も同種。	*	*
G494	黒色土器	*	A類。口縁端部は短く外反。高台貼付の痕跡なし。	*	*
G505	瓦質土器	脚付土器	脚部外面は指ナデ調整。口径18cm、現存高17cm。	*	*
G491	土師器	碗	口縁部が立ち上がる。他に492・493があり493の内面には暗文。	*	*
G503	*	小皿	内外面ともナデ調整。他に504があり底部外面上に指頭圧痕。	*	*
G506	手づくね	直形土器	小型で胎土は生卵殻質。	*	*
D540	木製品	被帯	イス或いはユスの材を使用。株部分やや弯曲し全体に直線的と描調。峰の部分強く曲を削り出す。邊の所に装飾施す。褐色を帯び光沢あり。	*	260
D541	*	漆桶	全体をロクロで削り出す。外表面に黒漆を塗布。表面口縁部に朱漆。高台部分は低いと思われる。現存高4.5cm。口径15.5cm。	DSD501	*
D531	瓦器	椀	532・536も同種。	DSD507	239
F452 472 474 476 482-547	瓦器	*	細いヘラ磨き-452・456~458・462・468~470・482・547 太いヘラ磨き-453・459・464~467・471・472・474に分類できるが、 高台は形態化。口縁端部は丸味をもつ53、短く外反する454、内傾 気味の465等がある。455・474・476は未完成。 口径15cm前後、高さ4~5cm。	FSK501	387-236 · · 388-237
F429 451	*	小皿	底部外面に指頭圧痕。内面ヘラ磨き。451の底部は丸味を持つ。 他に437・441・445・447・450・477・480も同種。	*	237
F473	瓦質	片口鉢	形態化した高台。内面に細いヘラ磨き。	*	388-236
F483	土師器	鉢	内面はナデ。外表面に墨が付着。	*	***

(波辺・小野・進藤)

第19表 鎌倉時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調整	出土地点	図・図版
F484	土師質	羽釜	内面ヘラナデ。外面ナデ。復元口径32cm、現存高7cm。	FSK501	388-236
F448 F449	土師器	中皿	F448は口縁端をつまみあげナデを施す。胎土緻密で金雲母、褐色粒含む。橙色。F449は口縁構ナデ、底部内外面に指痕瓦底。胎土緻密で褐色の粒含む。浅黄色。	*	387-237
F430 446 (437-441) 448 478-479 481	*	小皿	底部に2形態ある。A形態-底部が丸味をもち、底部、全体の境が不明瞭なもの-430、446。B形態-底部が平底のもの。うちB、形態-器高1.2~1.5cm-431、434~436、438、440、442~444、478、479、481。B _a 形態-平底風であるが全体と底部境の屈曲部分にやや丸味をもち、器高が1.7~2cm-432、433、439。	*	387- 388-

(小野)

2. 室町時代(付図8・16・21)

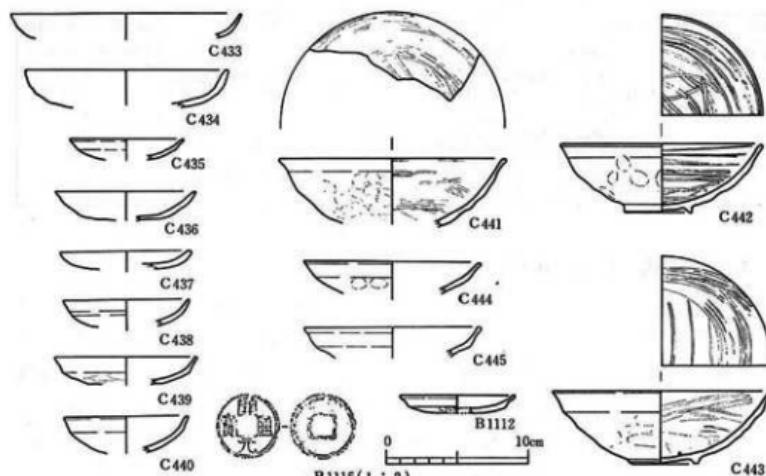
室町時代の遺構は畦畔と溝がある。この時代にあってはA地区からG地区にかけて全体的に水田として利用されていた。溝は水路として使用され、畦畔に沿って造られているのが幾つかある。畦畔と水路の主軸はほぼ国土座標軸と合致し、東西一南北方向においている。畦畔は、C地区の中央部で東西の畦畔と南北の畦畔が交差する所があり、これを基点にしてみると、B地区の南半部に東西の畦畔があり、この距離は約110mである。更にD地区では地区の北半部に東西の畦畔がある。この距離もやはり約110mである。これらの畦畔と水路はほぼ一町四方に区画されたもので条里制遺構である。

室町時代の畦畔と溝(水路)は、下層の平安時代と鎌倉時代の畦畔と溝(水路)とが重複しており、A地区の北端部で検出した南北方向の畦畔は、奈良時代から現代にまで至っている坪境である。畦畔の位置は鎌倉時代から室町時代にかけて同じ位置にあり、これ以降もほぼ変わらないようである。(小野)

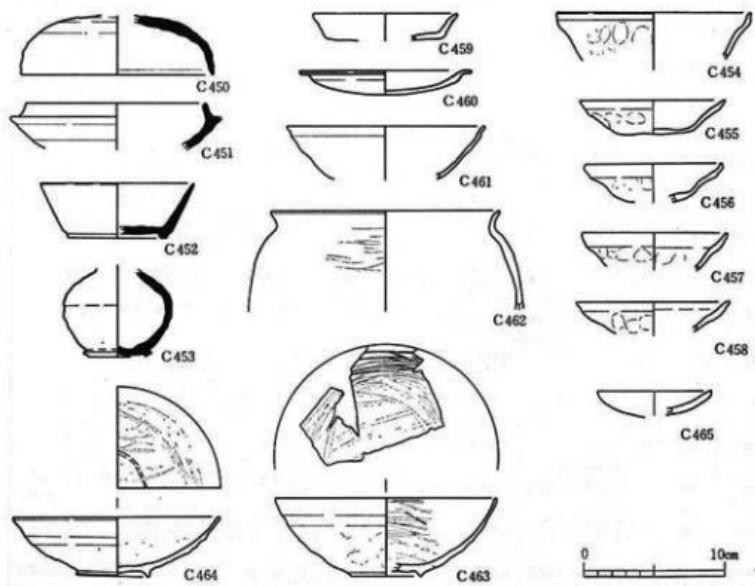
第20表 室町時代遺構一覧表

遺構名	種類	位置	方向	規模	備考	図
BSA501	道路状遺構	B地区中央部より北側	南北	長さ8.5m、幅3m前後、高さ0.5m前後、断面台形。	盛土-京奈-平安時代包含層。条里方向に一致するが坪境ではない。江戸時代BSA601に跡続。	付図16
BSD501	坪境の溝	Bトレス中央部南寄り	東西		鎌倉時代より継続的に營まれている坪境の溝。詳細は鎌倉時代BSD501参照。	*
BSD502	溝	B地区南側北寄り	東西	上幅4.6~5.0m、下幅3.8~4.2m、深さ0.3m。	埋土-暗茶褐色粘質土。条里方向に合致。播上田と播上田の間の溝。遺物なし。	*
素振り溝群		B地区南側北寄り	東西	幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後。断面U字形。	埋土-淡灰色土。条里方向に合致。BSD502下段で発見。	*
BSK501	方形土坑	7Bトレ		長軸幅2.1m、短軸幅1.4m、深さ0.9m。断面逆台形。	埋土-淡白褐色砂質土。主軸は条里方向にほぼ一致。水溜施設の可能性。遺物なし。	*
BSK502	方形土坑	9Bトレ中央部		長軸幅3.5m、短軸幅2.5m、深さ0.7m。断面逆台形。	埋土-淡白褐色砂質土。主軸は条里方向にほぼ一致。遺物なし。BSK501と同性格の可能性。	*
BSK503	不定形落込状土坑	Bトレ南端		深さ0.15~0.2m。	埋土-淡白褐色砂。遺物なし。	*
CSD501	溝	Cトレ17-18区から4Cトレ	東西	幅約1.0m前後。	条里の坪境部分にあたる場所に設定。溝底の一部に足跡。	開断-102 付図21
CSD503	溝	Cトレ中央部より南側	南北	幅約0.7m。	条里の坪境部分にあたる場所に設定。鎌倉前期に利用されたCSD501の室町時代の姿。	付図21
CSA501	高まり	8Cトレ中央	南北	幅約3.2m、高さ0.2m。	上面の足跡より、島畠等の不可能性。CSA503より周期的にやや後の可能性。	付図21

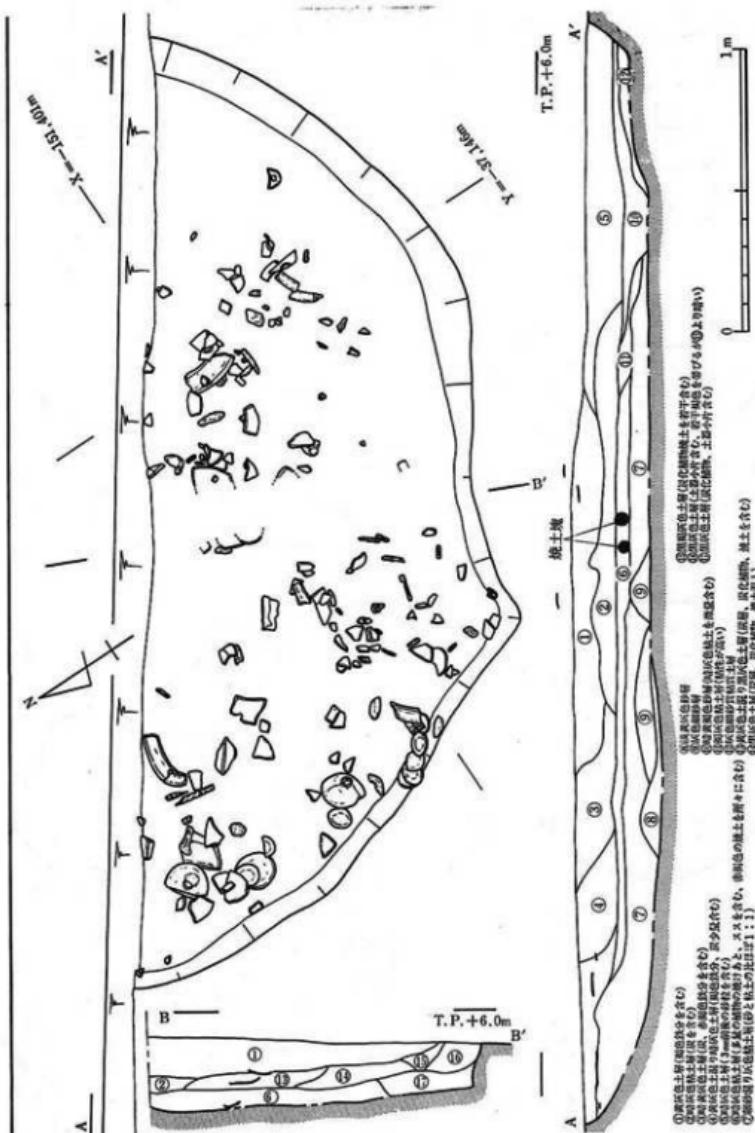
(渡辺・岡本)



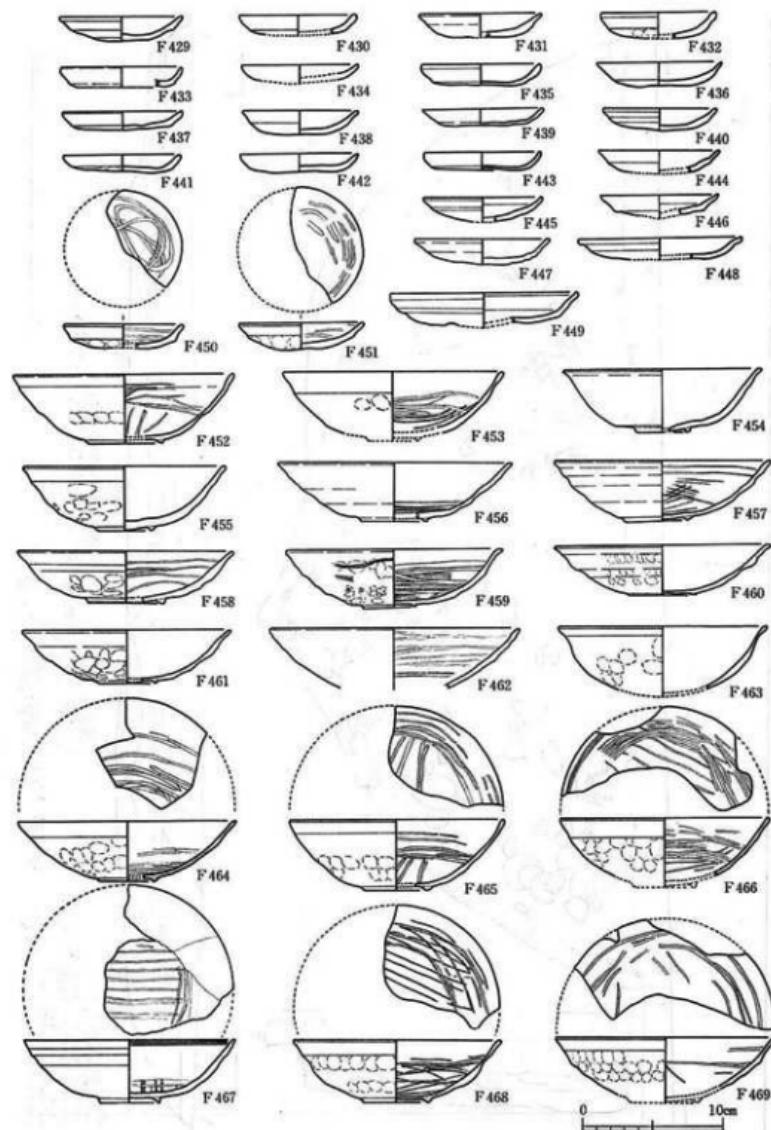
第384図
B地区中世造構面出土遺物(B1112・1115)
C地区鎌倉時代包含層出土土器(C433~C455)



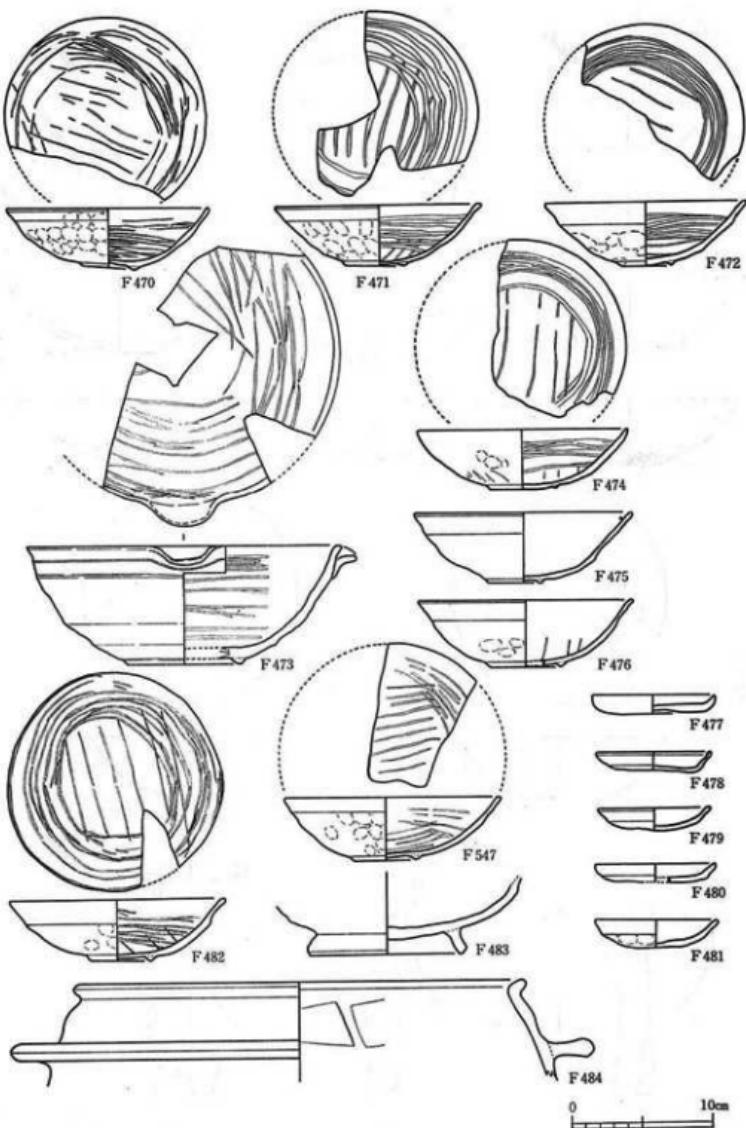
第385図 C S D 501出土土器



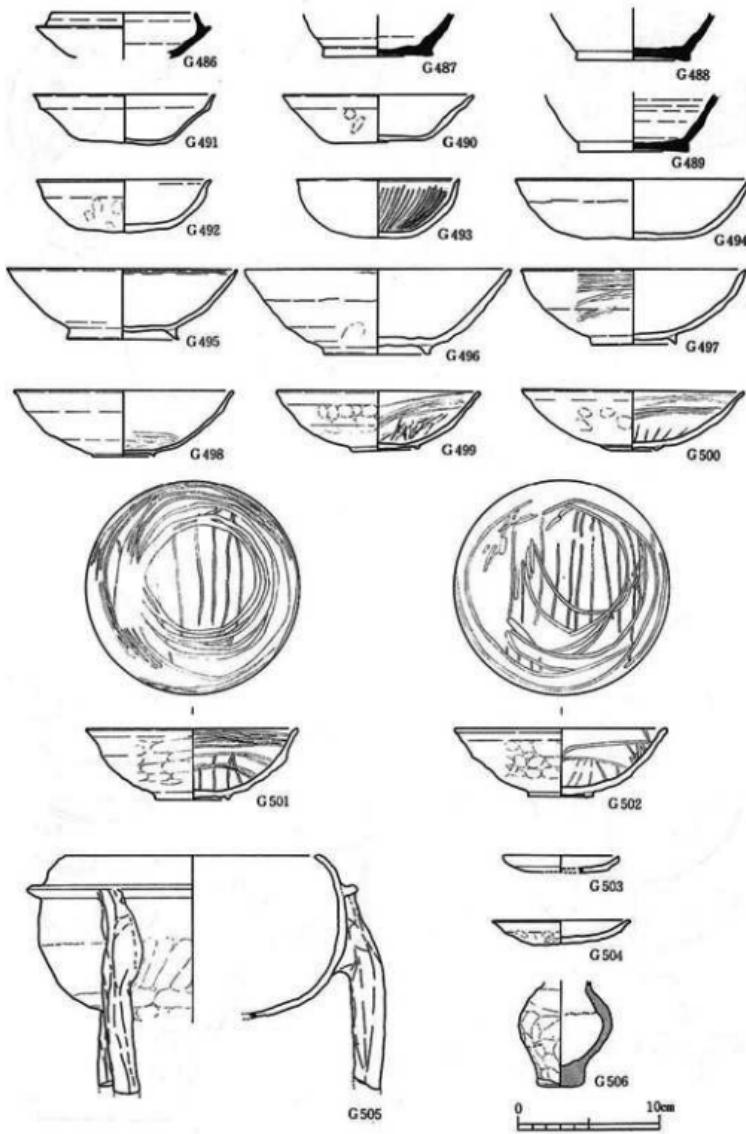
第386図 FSK501遺物出土状態図



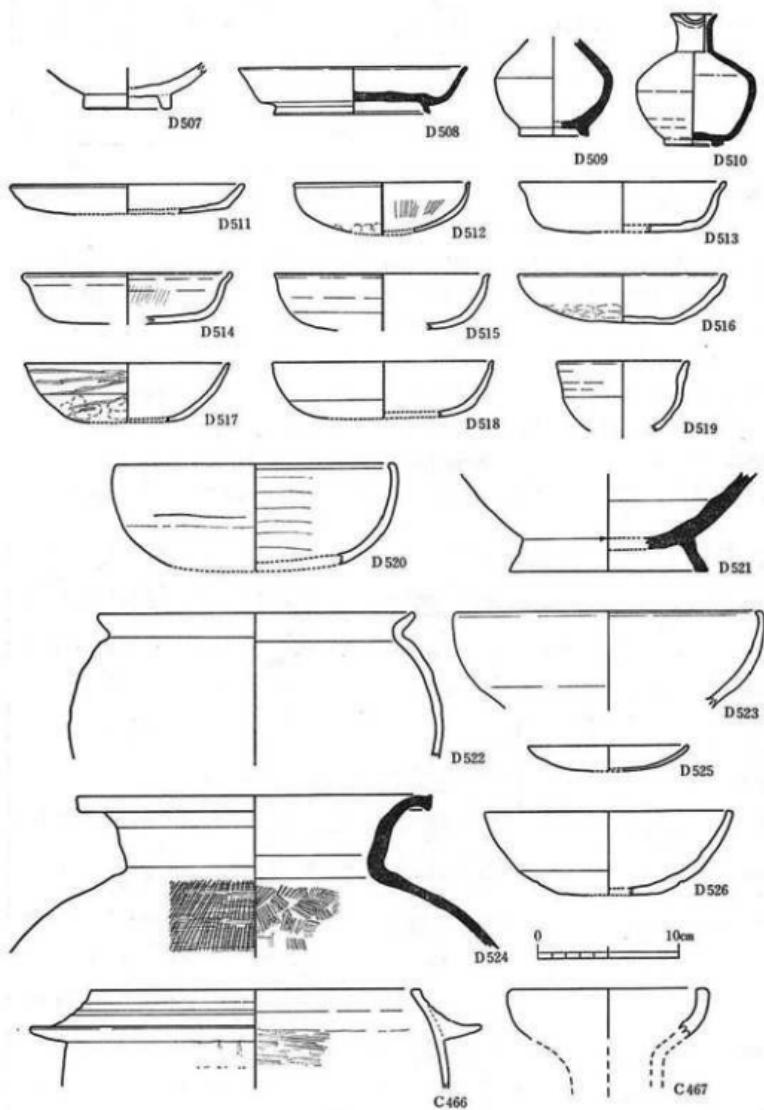
第387図 FSK501出土土器



第388図 F S K501出土土器



第389图 G地区中世遗構面出土土器



第390図 C地区室町時代包含層出土遺物、D・G地区中世遺跡出土土器

第21表 室町時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調査	出土地点	図・図版
C466	瓦器	羽釜	C485も同様。15世紀後半のものが多い。	包含層	390-229
C483	*	摺鉢	C484も同様。	*	230
C467	瓦質	土管	15世紀後半頃。	*	390-229
C486	陶器	摺鉢	C487も同様。口縁部。	*	230
C479	青磁	瓶	同安窯系で描手文が施される。室町時代前半に属する。	*	230

(渡辺)

第6項 近世

1. 江戸時代(付図8・16・21・33)

美園遺跡A地区からG地区までの一带が、水田、畠等から構成される耕作地として使用されており、それを証明する溝、畦畔、里道、素掘り溝等が見つかっている。現在の美園遺跡周辺部で見られる方画地割りは、確実な上限が平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけての時期であった。この時期は、長瀬川がほぼ現在の位置に固定される時期である。古代末から中世初頭において確立した水利関係及び地割りが、江戸時代まで面々と引き継がれていた(第391図)。

またC地区では、巴文の軒丸瓦及び丸・平瓦が出土しており、周辺部の寺院から持たらされた可能性が大きい。近世の集落は、明治時代作成の仮製地図に残る旧村落と重なるようである。本遺跡は古代以降、近世まで一部を除いてほとんど耕作地として利用されていた。(渡辺)

第22表 江戸時代遺構一覧表

遺構名	種類	位置	方向	規模	備考
ASD601	丹波の溝	1Aトレ東側	南北	上幅1.0m、下幅0.5m、深さ0.5m。断面U字形。	埋土-黒灰色粘質土。一部に濁岸用杭。現水路と同位置。里道ASA601の東側。若江郡七条と八条の境。遺物-陶器細片。
ASA601	里道	1Aトレ中央東からAトレ北東	南北	幅4.7m、高さ0.25m。	盛土-暗褐色砂。飛鳥時代以降の坪境畦畔とはほぼ同一位置。傾度か平坦。
素掘り溝		A地区全域	南北	幅0.2~0.3m、深さ0.1m。	埋土-灰黑色粘質土。断面U字形。
足跡群		1Aトレ東側			人や牛のもの。
鍋跡		2Aトレ北西側	南北		
BSA602	畦畔	4Bトレ北西寄り		底逆幅1.3m、頂部幅0.6m、高さ0.3m。断面台形。	BSA601より西側に派出。
BSA603	道路状遺構	B地区中央部南寄り	東西	底逆幅6m、頂部幅5.5m、高さ0.4m。断面台形。	盛土-淡褐色土。条里坪境の里道に合致。2回以上の挖掘(不明瞭)。
BSD601	溝	B地区北側	南北	上幅5.7m、下幅5.0m、深さ0.3m、總延長56m。断面逆台形。	埋土-暗灰色土・淡紫灰色土。BSA601の東を平行にし条里方向に一致。両端調査区外。遺物-陶器細片。
BSD602	溝	2Bトレ、BSA601東テラス部	南北	幅0.4~0.6m、深さ0.1m、延長約12m。断面U字形。	埋土-淡灰色土。北端調査区外、南端袋状。条里方向に一致。遺物なし。
BSD603	溝	4Bトレ、BSA601西側斜面	南北	幅0.2~0.5m、深さ7cm。断面U字形。	埋土-灰褐色粘質土。南端調査区外、北端袋状。条里方向に一致。遺物なし。
BSD604	溝	Bトレ中央部北BSA601東側斜面	南北		埋土-灰褐色土。2BトレのBSD602・5BトレのBSD606と同一の可能性。条里方向に一致。遺物なし。
BSD605	溝	Bトレ中央部北BSA601南側斜面	南北	幅0.6m、深さ0.1m。両端調査区外。断面U字形。	両端部に濁岸用杭列。北端は4Bトレで袋状に終わる可能性。条里方向に一致。遺物なし。
BSD606	溝	5BトレBSA601底部斜面	南北	幅0.5m、深さ0.23m。断面U字形。	埋土-暗灰色土。BSA601と同一の可能性。条里方向に一致。遺物なし。
BSD607	溝	5Bトレ	南北	幅0.5~0.7m、深さ0.15m。断面U字形。	埋土-灰褐色粘土。BSA601の東を平行。両端調査区外。条里方向に一致。遺物なし。

(岡本)

第22表 江戸時代遺構一覧表

遺構名	種類	位置	方向	規模	備考
BSD608	溝	Bトレ南側	東西	幅約4m、深さ0.25m。	埋土-茶灰色微砂質土。搔上田間の谷部分。条里方向に一致。遺物なし。
BSD609	溝	Bトレ南側から9Bトレ	東西	幅約5.5m、深さ0.3m。	埋土-茶灰色微砂質土。搔上田間の谷部分。BSD608の南側で平行。遺物なし。
素掘り溝		B, BSA603より北 BSA603より南	南北 東西	幅約29~30cm、深さ5~10cm。断面U字形。	条里方向に合致。中央環状線建設までの水田方向と同じ。遺物なし。
BSA604	欄列	2Bトレ BSA601東側上	南北	柱穴は梢円形。長径40~50cm、短径30cm。	埋土-暗灰色土。柱穴内に一辺約7cmの方形の柱根残存。柱間距離1.2~1.5m。BSA606-612と一連の可能性。
BSA605	欄列	4Bトレ BSA601西側上	南北	BSA604と同規模。	BSA604と対になる。BSA607に統く可能性。
BSA606	欄列	Bトレ中央北東 BSA601東側	南北	柱穴円形。幅約40cm。	埋土-暗灰色微砂質土。柱間距離はBSA604とはほぼ同じ。BSA604と一連の可能性。遺物-陶器片。
BSA607	欄列	Bトレ中央 BSA601西側上	南北	BSA604と同規模。	一部柱穴内に約7cmの円形柱根残存。
BSA608	杭列	BSA601中央部上	南北	総延長約11m (南端調査区外)。	杭間距離約50cm。
BSA609	杭列	BSA608の東側	南北	総延長約18m (南端調査区外)。	杭間距離50cm前後(北側で部分的に確認のため不明)。
BSA610	杭列	5Bトレ	南北		杭間距離は一定でない。
BSA611	杭列	BSD606東側部	南北		杭間距離約80cm。一部BSD604西側部で検出。
BSA612	欄列	BSA601東側部	南北	BSA604-606より不明確	柱間距離約80cm。BSA604-606に統く可能性。
BSA613	杭列	BSA601西側	南北	総延長6~7m。	杭は方形。約0.8~1m間隔でBSA614と平行。
BSA614	杭列	BSA601西側	南北	総延長6~7m。	杭は方型。約0.8~1m間隔でBSA614と平行。
BSK601	不整形遺跡 込状土塁	Bトレ北側東寄り		深さ0.15m。	埋土-灰褐色微砂質土。遺物なし。
BSX601	チラス 状遺構	6Bトレ	南北	高さ0.45m。	盛土-褐色土。上面に根株痕と思われるビット無数。条里方向に一致。
CSA601	大柱跡	4Cトレ-Cトレ	南北	幅約2m。	埋堤。
CSA602	大柱跡	4Cトレ-Cトレ	東西	幅約1m。	坪境。
CSD601	溝	4Cトレ-Cトレ	南北	幅約0.5m。	CSA601の両側に掘られた溝。
DSD601	溝	Dトレから4Dトレ	ほぼ東西	幅0.3~1m、深さ約0.2m。	溝内には径10cmの丸太材が置かれ、水平に保つために数ヶ所に小板を設く。遺物-古代~近世遺物。
DSD602	溝	Dトレから4Dトレ	ほぼ東西	幅0.5~0.8m、深さ約0.2m。	溝内には径10cmの丸太材が置かれ、水平に保つために数ヶ所に小板を設く。遺物-古代~近世遺物。
DSD603	溝	7Dトレから8Dトレ	東西	幅0.8~1.5m、深さ約0.3m。	溝内にDSA603あり。本溝北側に北東30度方向に走る溝多数。蛇行。遺物-古代~中世遺物。
DSD604	溝	DSD603の南側	東西	幅0.5~0.9m、深さ約12cm。	溝内にDSA602の一部。蛇行。遺物-土師器・瓦器。
DSD605	溝	DSD603の南側	東西	幅0.2~1m、深さ約18cm。	溝内にDSA602の一部。蛇行。遺物-須恵器・瓦器。
ESD606	溝	2Eトレと水路部2	北西-南東	幅1.5~2.2m、深さ0.1m。	埋土-オリーブ灰色粘質土。周囲にも平行する数条の溝を検出。
GSD607	溝	Gトレ中央		幅1.3~2.7m、深さ5~11cm。	埋土-黄褐色土。
FSD608	溝	Fトレ北部		幅約0.35m、深さ3~10cm。	埋土-灰褐色粘土。FSD609と交わる。遺物-土器片。
FSD609	溝	Fトレ北部	東西	幅約0.35m、深さ3~10cm。	埋土-灰褐色粘土。FSD608と交わる。遺物-土器片。
DSA601	柱跡	D+4Dトレ	東西	幅約0.8~1m 高さ約0.2m。	両側にDSD601-602が走る。4Dトレの柱跡南側で溝に対して平行に柱4~6cmの杭や足跡あり。
DSA602	杭列	7Dトレ	ほぼ南北	幅6径5~10cm。	遺存状態悪く痕跡のみ。DSD604にほぼ平行。
DSA603	杭列 柱跡	8Dトレ	ほぼ東西	杭18本、長さ25~40cm。 幅4~6cm、杭間40cm。	DSD603より平行に検出。杭は表皮がついたまま先端を削る。断面で柱跡状遺構。
FSD604	ピット群	Fトレ北側	南北	径約0.3~0.4m、深さ5~10cm。	FSD608に平行。ほぼ一直線上に4個並ぶ。
FSA605	杭群	Fトレ北部		幅0.2~0.4m、深さ0.1~0.2m。ESD609に平行。	約6cmの杭も残存。P1-P2、P3-P4、P5-P6、P6-P7、P7-P8間は約2.3m、P9-P11、P11-P12、P12-P8、P13-P14間は約1.5mで溝の交差点に集中する。

(渡辺・小野・岡本)

第23表 江戸時代遺物一覧表

遺物番号	種類	器種	形態・調査	出土地点	図版
C489	陶器	摺鉢	近世前半。他に490も同種で片口がつく。	包含層	230
C491	磁器	茶碗	492、493も同種。	*	*
C494	瓦	軒丸瓦	近世前半。巴文がつく。	*	*
C495	*	丸瓦	近世前半。	*	*

(後辺)



第391図 美國遺跡周辺の条里 (番号は坪に残る字名) 字名は市路市史(1962)より引用